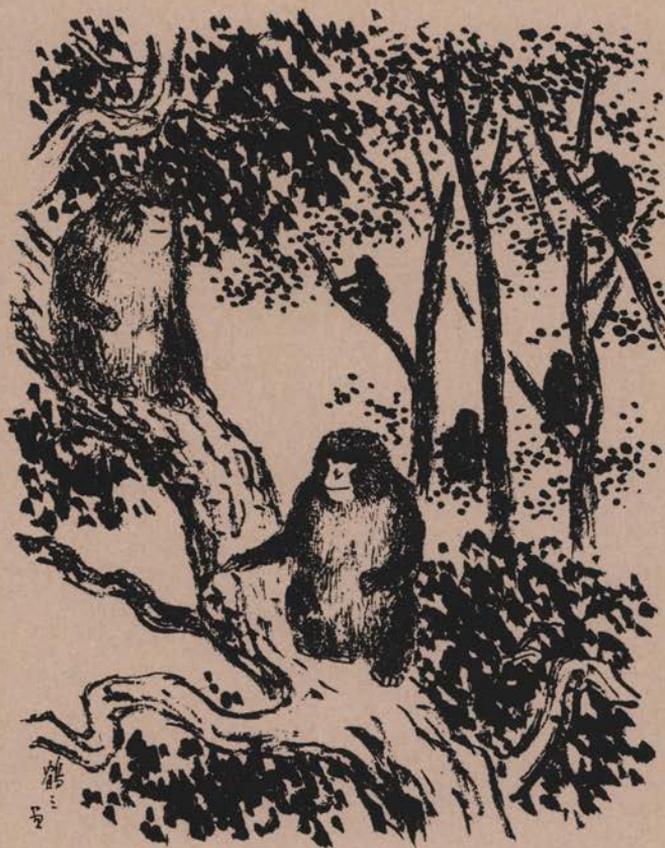


岳 山

號 二 第 年 五 十 二 第



山岳

第二十五年
第二號

目次

本欄

春、頂稜を追ひて	會員小池文雄	一
五月の飯豊山	會員佐々保雄	一五
秋の黒部川	會員別宮貞俊	四一
峠	大島亮吉	五六

雑録

大深澤遡行記	加藤壽章	六九
飯豊山の登路に就て	高山岳會	八二
晩秋の小金澤谷	會員吉田喜久治	九九
日肥國境を越えて	會員北田正三	一〇九

雑報

- 山岳氣象雜考○映畫「死の銀嶺」に就て○一九三〇年のカンチエンチユンガ登攀に就て
- 一九二九年の獨逸探檢隊のカンチエンチユンガ登攀○西部チベット探檢○天山、アルタイ探檢○イタリー、カラコラム探檢隊○フイッサー探檢隊○Mont Maudit ○Aletschhorn
- Scheidegg Wetterhorn ○エヴェレストの高さ○北米合衆國の最高峰○北アルプス地形圖の發行○登山案内人の資格に對する希望條件及案内人心得○劍澤遭難記念出版○山岳圖書の出版○四高旅行部醫王山に於ける遭難真相につきて○片貝川南方に於ける三高山岳部員の遭難○各學校通信
- 山岳圖書紹介
- 會員登山報

會 報

- 第四十六回小集會記事○新入會員紹介○退會者○會務報告○雨潤會寄附金に據る購入圖書○英國山岳會誌の寄贈○交換及寄贈圖書○既刊書及バックナンバーの寄贈○「山日記」發刊に就て

圖 版

- 別山澤下手の深淀(コロタイプ)……………

○五龍岳より望める雪の鹿島槍ヶ岳○小日向の尾根より鑓、杓子を仰ぐ	八
○玉川溪谷より地紙連峯を望む	二〇
○梅花皮ノ瀑○蒜場山	二八
○餓鬼谷○岩小屋尾根上より奥鐘山を望む	四〇
○作郎越下の渦流(コロタイブ)	四四
○作郎越の下(上流を望む)○作郎越の下(下流を望む)(コロタイブ)	四八
○神潭の上手○劔澤落口の瀑布	五二
○廣河原附近○神潭附近より上流(コロタイブ)	五六
○白龍溪	六〇
○地紙山より杓差岳を望む○大尾根より西南の方を望む	九二

附 録 地 圖

○飯豊山地概念圖



春、頂稜を追ひて

小池 文雄

山に依つて生きて居る者の常として、雪を求めて歩いてゐる者の心として、春、平原を訪れて、雪、冬、人里より驅り立てられて山頂に立籠もる時、雪の觸感山の味を慕うて、否應なしに其の後を追ふ。雪の悲哀と、冬から春への轉移の明るい愉快との交錯した沈み勝の氣持で又今年も八方から五龍、唐松、不歸、鑢、杓子、白馬と頂稜を追ふて春の氷雪に、キンキンと鳴るツアツケを踏んで徨ひました、昨年は人數の不整、用意其他の不備のため、唐松、白馬間冬期縦走は果す事が出来なかつた。今度は曾遊の地でもあり、前年迄夏冬、二期に夫々、見ておいたので割合に氣易く旅する事が出来た。

三月卅日。昨夜からの嵐で峰は未だ吹いてゐるらしく午前三時頃眼を醒ましたら、此の谷間の底の四家でさへも雨戸がかたかたと鳴り、枯木が小さく「ヒューヒュー」かまけてゐた。未だ暗くて山は見えぬ。どうせ今日は駄目と思つて寝たら、五時頃、人夫が來たらしく、宿の者が起しに來た。戸を開けて見ると風は納まつたらしく、四邊は靜かになり、雲の切目から物凄しい灰青色の空に、八方、五龍岳がちぎれ浮んでゐる。折角人夫も來たのだし。明日は東京からY・Kの二人が來て勢揃ひだが、一日も早く山には入り度いので、人夫（横川文藏）と二人きりで出發。午前六時半。

細野を過ぐる頃より山の雲は晴れたが空は鈍い灰色で、天氣は一向に映えぬ。細野より直ちに八方の尾根に取り付く。雪は當分出て來ないので、細野の神社の裏手に續く小さい谷と云はんよりは小流れに傍うた柴刈道に行く。

○春、頂稜を追ひて 小池

○春、頂稜を追ひて 小池

二

九三七米の獨立標高點の北側の小狹谷で、標高一〇〇〇米附近になつたら、雪が出たのでアイゼンを履き、左側の小さい支谷を登りつめ一一〇〇米附近の割合に平な所に出で、炭焼小屋の跡で少憩。

スキーは一四〇種位の夏スキーを携行したが、此の春は降雪が少いのと去る三月廿一日から廿七日迄奇蹟的好天氣が連続したため、雪は殆んど五、六月の夫れの様であつたため、履かずに擔ぎ通し。アイゼンの爪が利いて氣持よい。間も無く、黒ブシ（一五〇〇米の小峰）に到着、一五八〇米の階段状の出張つた尾根の上まで來たら少し風が出て來た、握り飯を食ふ。先が長いので、何も考へずに無心に登る。無心に登ると、苦しさも飽きも忘れて不知不知に登つてしまふ。一八〇〇米近くに來たら鹿島槍、五龍、遠見が見え出した。空が灰白色に曇つて鱗狀雲がサーツと出て來た。風は相當強い、時々足を拂はれる。白馬、杓子、鑪がスクスク立つてゐるが尾根筋は寒さう。午前十時半八方中繼の小屋着、外は風が強いので中に入つて中食をやる。五六人はは入れるが、雪が吹き込んで居て泊る事は出來ぬ。十一時又荷を負つて出掛ける。一二五〇米邊の尾根筋に來た時分より風は一段と猛威を振ひ出した。併し眞面目な着實な努力が積まれて、歩みは二四八〇米邊まで續けられたが、山はつむじを曲げたものか嵐と氷粒のつぶてとを驅つて我々を攻め虐んだ。

目指す八方頂上の小屋は眼前七八百の彼方唐松と八方との尾根裏にあるのに、距離は實に咫尺の間、時間とても更に一時間の餘裕を見たらば大丈夫行き得べきに、我々は此處に於て前後を考へた。之より先は路は僅ながら氷稜と岩の小さな連続。併しこの烈風では、而かも主稜を超越して來る風は信州側の陥波帯に落ちて渦を卷いて、東西に走る八方尾根を縦に吹き卷くる爲め、僅かな尾根の屈曲に應じて或は南より不歸谷側に吹き、又所に由りては不歸谷側より南側に越す定めなき突風に威嚇され乍ら、しつかとビツケルで身を保持して風に耐えた。スキー、兩杖はあほりを食ふ毎に身體を飛ばされる様に背の上で躍る。兩杖の握りの紐の穴がピーピー、哀しき樂音を奏でて

ゐる。スキーと杖は荷厄介なので深く氷雪の中に突きさして尙も五十歩許り進んだが、荷を氷雪の尾根に置き去りにでもしなければ行けぬ。身體だけで小屋まで行き着ければよいが、それも怪しい。後には四家まで五里の降りが控えて居り、前は僅かに千米に満たず。此頃の山の災厄の事が頭の中に往來したり、二ツの考へが頭の中でこね合つてゐる。

進退兩難に陥つて二人で相談したが、ザイルで結び合つて行つても一人が吹き落とされた時、一人で確保出来たとしても其れは寧ろ探るべきみちでは無い様な氣がする。危難は薄紙一枚の裏に存する。成功も亦紙一枚の表にある。如何なる程度迄安全で、如何なる限界からが災厄に導くものか、其の限界が人間に見當がつかぬ。行つてよいかも知れぬが悪いことも無いとは限らぬ。ピツケルにすがり乍ら風に耐えて考へたが遂ひに引き返す事に決す。唐松、八方は鈍青の灰白色の空近く、呼べば答へんす距離にある。平常なら實に平凡な所がと思ひ乍ら、後を振り返り振り返り舌打ち鳴らして遙か下の地獄の底の様な四家まで降るのかと思ふと今日の勞作が遂ひに無に歸した事を考へると残念でならぬ。こんな時中繼小屋が利用出来ればこんな苦勞をせずと濟むものと覺えず愚痴が出る。踵を返した時午後一時十五分。

追手を受けてどんどん降る。二時八方中繼小屋着、荷物をみんな置き、スキー丈け持つて降る。池の下方二〇〇〇米邊りの所より履く。波状のスカブラで、がりがりしてゐて條痕さへ付かぬ、スキーは短くて不安定だが極端にステムし乍ら降る。それでも凍雪なので矢の様に疾い。雜木帯に入り今朝休んだ炭小屋跡を通過する頃より雪はベトベトになり間もなく、雪が切れ切れになつたが、殘雪を拾ひ乍ら朝の路より外れて尾根通りに降つたが直ぐ雪が絶えてしまつた。四時細野、四時半四家歸着、今日到着したYとKが畔路を散歩したのに出遭ふ。見返れば苦闘の峯は夕陽に氷面をテラテラ光らしてゐる。過ぎにし困苦は忘れられて意氣地が無かつた様な贅澤な氣が今になつて

○春、頂稜を追ひて 小池

○春、頂稜を追ひて 小池

起つて来る。暖き平原に降り立てば人の心まで變つて来る。明日こそはと意気込み乍ら、YとKと自分と三人で眠る。も一人人夫を頼まうと思つたが明日は誰も都合が悪くて出る者が無いさうだ。自分と横川は空身なので。荷を節約して横川一人を連れる事にする。

三月卅一日。大體昨日と似た天候、西の空は昨日より明るく幾分はよくなりさう。氣持よい朝風に吹かれ乍ら、火打、焼、を遙か右手の下流に見乍ら行く。田の土が氣持よく濕つて、細野の鎮守の森の影が濃い。間もなく昨日の小澤の下流に面して右岸に取り付き、朝の硬雪にアイゼンの爪を氣持よく食ひ込ませ乍ら登る、自分丈け空身なのでややもすれば、不知不知の間に歩度が早くなつて不可ぬ。段々登ると昨日のスキー滑降痕は雪が硬いため、見えない。黒ブシの肩に來たら八時十五分、菓子を食べ小憩する。四邊は薄い霧、白馬三山が隠見する。かすかな粉雪がちらついたが、天候が急變したわけでもなく、霧の故爲なので寧ろ風の無いのを喜び乍ら登る。九時半、中繼の小屋着、昨日より一時間早い、四家より四時間、春の硬雪の時は、夏秋冬の何れの時よりも面白い様に行程が捗る。藪に苦しめられる事もなく、羊腸たる路をもどかしがり乍ら歩くう、さ、さも無く、陽光に映ゆる雪上を氣儘にさまよひあるくことは春にばかり與へられた恩典だ。風がないので小屋の屋根の上で食事をする。K君の一本のテルモスを大切さうに四人で廻し飲みにする。昨日の荷を引張り出して之れから先は人並に荷を背負つて出掛ける。十時過ぎ、出發す。昨日追ひ返された地點の二三百米手前の廣いテラスなどでは暖かな登山日和を、満喫しながら、日を浴びて雪の上に寝轉がつて休んだり、雷鳥を撮したり道草を食ひ乍ら行く。やがて短い、氷と岩のアレートに掛る。今年は暖かで雪が濕つて粘質多かつた爲か昨年の今頃より稜頂は却つて雪がよく付いてゐて、岩は却つて隠れてゐた二十歩許りの短いステツプカッティングを一個所して更に二百米許り進んだら愈々最後の頂稜下の岩場へ來た。岩に登るか、又は急傾斜の雪面をトラバースして上に出るかであつたが、カットして横に出るべく靜かに、

ピッケルを振ひ始めた。

サリンサリンと氷雪の音が冴えて、ヒューヒュー下に飛んで行く、背後には三人が岩の所で足場の出来るのを待つてゐる。遂には雪庇の下まで来た、五六尺の小雪庇だが凍つたので壊すに手間がとれる。リュックサックが右側につかえて、身體が云ふことを利かぬ。背後では、「今踏んだ左足のカンジキは利かぬ」とか踏み直せとか眞に籠つた助言を與へて呉れる、漸く切り崩して、ピッケルが上の臺地に届く様になつたので、發矢とばかり硬雪に打ち込んで其れを便りに上に出た。第一の雪面より長く時間も要した。距離は短いがアンザイレンする方が萬全かも知れぬ。安心してカットする丈でも効果がある。Kのリュックサックが矢張り右がつかえて不安なので上からザイルを下して確保してやつた。Kは友人Kが今冬劍澤小屋でやられてゐるので、極端に慎重に構へてゐる。十二時三十分全部上つた。KもYも始めてなので劍の景觀に今更乍ら見惚れてゐる。

小屋は雪も吹き込んで居ず、暖かだ。備へ付がよい上に部屋は幾割かになつてゐる。外から來たら眞暗で何も見えぬ。約三十分程して大分馴れて來た。日電の薪炭を焚いたが濕つて付かぬので焚付として三高山岳部所有の木炭を一貫匁許り貰つて漸く火を燃やした。木炭代は下山後白馬館に時價、運賃相當價を支拂つて置きました。止むない時のこととて無斷使用致しましたが三高山岳部に深く謝意を表する次第です。暫くは煙くて眼もあけられぬ。内部を片付け藁を敷いて、各自のリュックサックの中からはらはら、わたが擴げられた。あまり雑然と多いので、山の道具、食料品、と夫々區別けして、机の上に積み上げた。晩はレモンを入れる者、紅茶を沸かす者、葛湯を立てるもの、山上での豪修を極めた御馳走や飲物で腹が一杯になつて皆アア口を開いて仰向けに寝そべつてゐる。Kは「人間は巢さへあれば元氣なもんだなあ」と高根にある小屋の有難さを述懐する。Yは時々天氣を見たり景色を見に小屋よりはひ出る。夕陽は毛勝の山の端を紅に染めて雲の海に沈んで行つた、雲は谷間をこめて劍、立山、黒部

源流の薬師、黒岳……：近くは五龍が其の上に、ヨキニ、ヨキと嶋の様に突立つてゐる。寒い風が吹いてゐるが空は紺青と逕行かぬが灰青色にはれて、北の方白馬、火打方面にも別に氣掛りになるわだかまりも見えぬ。明日は天氣らしい。八時就寝。

四月一日。昨日一氣に二〇〇〇米の登高をしたため、皆疲れたらしく誰もうつらうつら、眼は醒めてゐる様だが誰も先に起きぬ。一様にするを極めたのが災して六時になつてしまつた。四人とも一度宛外に出て見て皆八分の好天氣を豫想してゐる様な氣配が見える。口には「今日は大丈夫」だと云ひ乍ら後の二分は心の中で自問自答するらしさが顔や言葉に期せずして現はれる。Kは又自稱氣象學者らしく「昨日は寒く、昨夜少雪があつたから天候は午後になれば却つてよくなり明日は更に無風の日本晴となるだらうから今日は大丈夫だ」なんて云ひ出す。時間は遅いが兎に角、天候は急變しさうもないので、用意して出發す。九時十分。

牛首(小屋のスグ後のピーク)のポロポロした岩稜を南に下る。夏道が越中側をからむ最初の小キレットにぶつか。右を巻くか尾根通しを行くかに就て考へたが、昨夜の粉雪が硬い舊雪の上に四五寸積つて居り、巻くは却つて手間だと考へたので一つの岩をビンとして、小さな懸垂をしてキレットに降り立つた。岩がもろく悪かつたので、四人全部通過し終へたら十時半だつた。あとは大黒まで難なく通る。大黒の北の鞍部で少憩。果汁を吸つたり紅茶を飲んだりする。天氣はあがつて無風となり暖い。皆たあゝらたあゝになつて、白岳への登りに懸る。道は無類やさしく、唐檜の樹氷がきらめいて、樂園にでも遊ぶ様な氣持だ、先を急ぐので身體はあまり樂では無い。十二時十五分白岳南側のザツテル着、時間が無いのでパンとテルモスと菓子で晝食にして、リュックサックを置き寫眞機とピッケルと繩とだけ持つて十二時三十分五龍にかかる。五龍頂下第二のコブ附近の夏路で越中側を巻く所は、あの氷に一マステップを切つて進むは時間がかかるので、尾根通し行く、五龍の北の第一のコブのあたりで太陽に笠がか

かつた。明日は天氣が變るらしい。頂下第一のゴブを越す間は、或はステップを切り或は岩のよい所は岩稜をたどり、一時半直下の肩に付く、首に相當する岩場では緊張して登り手袋を取つて岩にかぢり付く、手が冷い。岩を越すとあとは急斜の氷のアレート、カットし乍ら登ると稜線は急に樂になつて、ステップを切らずに、アイゼンの爪をサクサクと立て乍ら一時四十五分、五龍の最高點に到着した、三角點の標石は軽く雪の上に出て春の日を受けてゐる、風は南側より北に向ふらしく南は石が出て居り雪庇は北に延びて居る、鹿島槍は相變らずよい。此方五龍に始まつた稜線は蜿々として鹿島槍まで續いてゐる。師走の十七日に登つた立大山岳部と一緒に來た南アルプスの竹澤長衛の名刺があつた。紀念の撮影をして、二時歸途に就く。アイゼンの爪が短い六本爪なので他人が樂さうに歩く所でも不安を感じる。頂上直下の降りは却つて登りの時より手間取る。第一第二の二つのゴブの悪場も無事に通過して正三時、白岳の南のザツテルに歸り付いた、腹をこしらへてゐたら霧が澎湃として鞍部を越えて西側に流込んで四邊を包んでしまつた。先刻のハローが今祟つて來たのだ。

これまで來れば今日の仕事は七分通り済んだも同然だが未だ唐松までの登りがある。今日の道は終始尾根通しなので吹かれたら最後だ、特に岩場の通過や狭いグラートを歩くときは風が一番禁物だ。霧は濛々とあたりを立ち籠めたが割合に暖かなので安心だ。何時も午前中は太陽の照射のため信州側が温度上昇するため風は越中側より信州に向ひ、午後は越中側が温まり東側が冷えるので反對に風は信州側より越中側に吹く様だ。勿論荒れる日は例外だが靜穩の日は、前記の様な事がある。

大黒は左側を巻いて愈々牛首の頭まで三百米の登高だ。爲し終へた安易の感が手傳つて急に疲労を覺えた。今朝は岩や氷の上に、薄く積つた新雪のため大いに苦勞したが、一日の強烈な陽を受けて岩やガレの所の新雪は融けたので、歸りは大分助かつた。百五十米許り登つた頃、生理的に不愉快な疲労を感じたので、三人に待つて貰つて小

○春、頂稜を追ひて 小池

し休んで夏みかんを食ひ、味噌をなめて漸く元氣を快復す。往路に手間取つた岩場を登りは却つて樂に通過す。五時四十分小屋歸着。休んだ頃は霧もはれ唐松がはつきりし出し對岸の猫又、毛勝も見え、明日は好天氣らしく思はれた。全く恵まれたと云ふべきであつた。あの霧が二時間早く來たら我々はコブの岩場で不安に襲はれつつ登りを躊躇しなければならぬし、頂上でのあの大觀を恣にすることも出来なかつたであらう。毎日好天氣に幸されたので明日も大丈夫天氣ときめ込んで、荷を始末し明日の晩は白馬頂上泊りか猿倉か、なんぞと熱をあげてゐた、明日天氣ならばKも白馬に拔けられるが荒れて日數が延びると役所の關係上行かれぬと。明日は天氣だと云つてKを白馬行きに、誘惑す。夜は星空すつかり氣をよくして九時就寢。

四月二日。午前二時頃起きて見る氣温が割合高い。星はこぼれる様、安心して寝る、午前五時頃起きて見る。横川が先づ小屋の外に出たが、黙つてゐる。浮かぬ顔では入つて來て今日は駄目らしいと云つてゐる。自分も出て見た、第一劍が暗い雲が動いてゐるわけでは無いが、何となく落ち着かぬ。空の色が氣に食はぬ。何とも判断の付かぬ自信の持てぬ天候だ。少くとも好いとは云はれぬ、小屋に歸つて、「どうもわからぬ」と皆に云つたらKもYも、出て見た。感じは皆同一らしい。何處がどうだからと云ふわけではないが、山を歩いてゐる者の、誰しもが長い間の經驗で押して行く奴である。所謂「かん」と云ふものだ。四人共誰一人好天候を豫期しないので今日は出發を見合はせることにした。今日の行程は長い尾根縦走で、おまけに不歸の難關を控えてゐるため天候はよほどよく觀なければならぬ。Kは白馬行きの日數は無いから今日四家に降ると云つてゐる、四谷に下る丈なら午後出發しても餘裕あるのでゆつくりする。七時頃になつたら果して大荒れとなつた。

唐松も見えぬドラフトがゴーゴー鳴つてゐる。四家を發つ時、後から一人人夫を上げて貰ふ筈の所、昨日は遂ひに來なかつた。不歸縦走に荷厄介なものは凡て下げて貰ふ心算でゐたのだが、今日の荒天では下からは昇つて來ぬ



五龍岳より望める雪の鹿島槍ヶ岳



小田向の巨根より鐘杓子を仰ぐ

かも知れぬ。若し来なければKを綱で下して見送つて一人で歸る事にしなければならぬ。天候のおだみの間を利用すれば八方尾根の頂下の僅かの所だけ綱で確保してやれば後は一人でも樂に下れる所許りだ。外は荒れてゐるので歌でも唱つて時をすごす。小屋の中は暗いので、晝でも蠟燭を燈してゐるので、滞在と定まると、急に色々な材料を吝にしだした。火を消してゐる所が暗くて陰氣だ。暇なので遂ひ口に運ぶことが多くなる。晝食をやつて後、腹へらしに唐松まで散歩する心算で(散歩でもアイゼンを穿き、ピッケルを持つんだからおかしい) 一步先きに小屋を出たら、吹く風に身を斜にしながらガラガラの八方の頂から此方へやつて来る一人がある。よく見たら下から上つて来た人夫だ。小屋の入口に頭を突込んで中ノ三人に、下から人が来た事を告げる。Kは大喜び、横川も、Yも明日の不歸通過の荷が省けるので大喜び。急に賑かになつて、丸山に先づ晝を呉れる。彼は自分のスキーとKのスキーを負つて、米三升を擔いで今日の荒天に下からやつて来たのだ。六尺近い如何にも精悍さうな男だ。装身具は完全でアイゼンを付け防風帽を被り、スキーも可成やるらしく、寧ろ我々は最初から都合が付けば此の案内を運れたかつたが、併し前の行掛り上さうも出来ぬ。丸山は過ぐる日明大山岳部が白馬より唐松まで縦走した時一緒に通過したらしく、よく事情に通じてゐたので途中の様を彼から仔細に聞いた。吹雪も大分穩かになつたのでKは四家まで降ると云ふので、丸山には氣の毒であつたが、不用の荷を持つてKと共に又四家まで降りて貰ふ事にする。山案内同志お互の間の情誼を重んじて、嫌な顔一つせぬ所は成程、冬山にでも入らうとする案内は又違つたものだなあと感心した。二時四十分二人は、九千尺の此の尾根に別れを告げて又元の人煙繁き里に降り行くのである。吾等三人は未だ前途に仕事を残し乍ら、互に健康を祝し合つて此の二人を見送るために出た。頂上直下の急雪面の悪場は三人で確保してやつて、一人づつ綱で下してやる。下の岩に降り立つた後、互に言葉を交はし乍ら、吹雪の中に離れ行く。寒風に頬を打たれ乍ら、小さくなり行く友の影を見送る。しばしの時のちぎりも、こよなく長かりし

哉に感ぜられて感慨つのるものがあつた。尖つた雪稜の下に影が消えると、吾々も漸く己れを取り戻してYと二人で、唐松に行く。今日一日飽食、惰眠を採つたので、身體のネチが又逆戻りして僅かの登りに、精が切れる。吹き募つてゐた寒風もやんで、二人で唐松の頭で黒部源流の彼方に眼をやつて、あれは黒岳よ、赤牛よ鷲羽と、指呼して景観に酔ふ。三時過ぎ小屋に歸着。一行四人が一度は五人となり僅かの間に三人となつた。一人減つただけが大變淋しく感ぜられた。明日は恐らく動けるだらうと思つて又其の用意をして寢に就いた。

四月三日。今日は神武天皇祭の日なり。朝外に出て見たYが先づ大聲で叫んでゐる。次いで横川も出て喜んで居る。一天拭ふが如く晴れ渡つて雲は谷間をうづめ、西よりの微風で天候は全く快復に向つた。昨日は北微東よりの風で空が灰色で何となく氣に入らなかつたが、今日の好晴を見ては心勇躍せざるを得ぬ。昨日丸山の言によれば里は昨日は暖かで一昨日の山上が好天氣の日に里は風が吹いて寒かつたさうだ。又之れは下山後聞いた話だが吾々が此の三日に縦走を決行した日に、里は曇つて風があつたさうだ。して見ると少くとも吾々が登山してゐた頃は里の天候の夫れは山上の天候より一日づつ丁度遅れて其の跡を追つてゐた様だ。

大丈夫と見當を付けたので早速朝食をすまし何かと跡片付をして、部屋を掃除したが、案外跡片付は時間がかか。小屋に嚴重に封をして出發したのは午前八時二十分であつた。

唐松以北は小さな氷と岩場の連続なので、大した所では無いが何れも絶えざる緊張を要する所だ。唐松より三番目のピークの下りは、越中側を巻いて降りる。不歸の峯は上が平で南と北とに兩端、小さいコブを付けたピークをなしてゐるが、其の南の奴を降るとき二三十米の僅かな下りだが雪がグズグズになつて居り、アイゼンの爪が短くて、非常に不安を感じた。却つて横川の草鞋用のアイゼンが軟いザラメ雪に有効であつた様だ。午前十時不歸の岩場にかかる。上で少し休んで氣を落ち付ける。岩に付いた氷は少く、針金が所々出て居り比較的容易であつた。寧

る悪場は、それから先の夏路なら信州側をからむ所が、冬は通れず、尾根を行くので一つのオーバーハンクに衝き當つたので下をのぞくと繩が届きさうなので、這松の根にザイルを通して、二重にして一人づつ降りた。其の直ぐ先の所も亦、ザイルをハイ松の根にかけて其れでビレイングし乍ら立板の様な急雪面をトラバースして最後に引き抜いてしまつたので捨繩もせずに済んだ。漸く今日の難路を通過し終へたのでほつとする。最低鞍部を過ぎ十二時天狗の大下りを少し上つた所で晝食にする。吾々が晝の用意をしてゐる間に、信州側が日光に由て温度上昇し其のために今迄黒部の谷に屯ろして居た密雲が油然と動き始め、此の鞍部を越して東へと流れ始めた。其の爲め又も四邊は咫尺を辨ぜざる濃霧となつてしまつた。今日の霧は一昨日のよりも二時間許り早い。それでも後は高が知れて居るし地の理もわかつてゐるので、度胸を極め込んで晝飯をやる。今迄の暖かさに引き換へ、日の眼を仰がぬと斯うも寒くなるものかと陽の有難さがわかる。十二時三十分、登りにかかる天狗の大下りは南斜面の事とて雪は融けて夏道が露出し夏山を歩く様な気分だつた。恐らく此處は嚴冬でも強風のため雪が積らぬであらう。登り切るに十分を要す。二七〇〇米の高原臺地に出たら、霧の上層に出て春の陽に映ゆる山々の景觀は、吾々の四周に躍り立つてゐる。之れから先は實にアルプスの所謂、銀座、坦々たる高原の樂園を、カランカランと鳴るストツクの響さわやかに、氷雪の上にアイゼンの爪を食ひ込ませ乍ら、陶然として幽明の界をさまよふ様な氣持で、或ひは怪異なコルニスの上を散策したり、氷雪に飽きると、ガレ道に土や岩の感觸を味ひつつ、遠く走る銀の山濤を指呼して、何處迄も續く此のなだらかな起伏のベネプレーンをよるばひあるいた。一きは高き、槍穂高はもとより、笠、黒岳薬師、いつも應酬する立山の一群、西は白山にまで。乗鞍、御嶽は霧のため定かならず。赤石、白峯の連脈かすかに、八ヶ岳はややきは立ち、奥秩父の金峰の連嶺、其の東に糺糊として横はり、東境の淺間、四阿、御飯、横手岩管の、さては谷川岳、仙ノ倉の遙かにけふるあたり、曾遊の感懐自ら新たなるものあり。頸城の盟主火打、これ又

純白の山膚をさらして、一隊の山群を指揮して起つ。妙高も西側よりは思ひの外やさしく見ゆ。高妻のピラミッド型も善光寺平より眺むる時を除き、西側よりしたる時は只グロテスクに見ゆるのみ。いつも心ひかるゝは火打の眞白き尖頂。景に馴れ、大觀を恣にしつゝも尙、見飽きぬもの、驚き足らぬものは次々に吾等をして應接にいとまなからしむる雪庇の怪奇、廣大な圈谷、莫大な雪量、此の世乍らの至純至高なる樂園に遊ぶ感を味ひ行く内、鏈ヶ岳の直下に達した。

之れから約二百米の登行だ。鏈獨特の白いザク石の道を黙つて昇る。大儀になつた時は凡て頂上を仰がずに押し黙つて、休まずにネチ／＼登ることは苦勞を忘れる一ツの方法でもあるのだ。空は紺青に晴れ渡つてゐるが流石は日本海の風を一手に受ける高根の事とて相當強く吹く。太陽の照射にあつて融ける暇もあらばこそ、西の寒風が薙ぎ拂ふのでガレ路の上に積つた僅かの雪が、地面から浮き上つてバリ／＼に凍つてゐる。午後二時四十五分鏈ヶ岳頂上に着く。北望した杓子、白馬、旭の雄姿。午後の斜光線を受けて、銀の峯は彌やが上にも輝く。後を振り返れば、何時の間にやら雲表に現はれ出た、秀峯八采の富士、煙る春空の彼方に萬嶽の鎮として端坐してゐる。秀麗にして單調の美は亦他に見られざる處である。時間の餘裕もなければ盡きぬ名残を最後の一瞥に止めて、三時、頂上を辭し稜線を北に降る。小鏈の北壁にかゝつたら時刻が夕方近くだったので、氷がガンガンに凍つて、草鞋用の爪の長い三本のカンジギが不安で、横川は一方ならず弱つた様だつたが、ステップを切りつゝ下りる事に由て、難を免れた。

それから後は無心に只杓子の西側をトラバースして間もなく立壁タテツツ(杓子と白馬との間の杓子寄りの最低鞍部二六二〇米)のザツテルに到着、雪庇を少し切り崩して下に下り立ち、ふら／＼と好い氣持になつて廣いカールの眞中に上より下に一本筋のツアツケの跡を印してどん／＼降る。ネブカ平も間も無く過ぎた頃三百米位下方の大雪溪の

底の雪崩のデブリーの中に四五人の人がかたまつてゐる。てつきりこれは埋没者があつて掘出し中かと思つて近づいて見たら小谷コタの獵師が五六人熊狩りのため、乗鞍から山通し來て大雪溪を昇つて來たものとわかつた。背負子せおこ一つに一切の露營道具をまとめて簡単にやつて來る彼等に比しては、吾々の業々しいでたちが何となく子供ばい感をまぬかれなかつた。悪場を通るのでこそなければ彼等は眞に山に馴れてゐるのだ。山を生活してゐるのだ。縣營小屋を根據として越中側に下りて熊を驅るとの事、二ツ三ツ言葉を交はして別れて彼等は上に、吾等は下に降る。此の大雪溪に來て始めて物凄い雪崩のデブリーを見た、六七尺の大達磨の様な硬いデブリー其等が算を亂して白馬の南東面の大小の谷々から押し出してゐる。二日許り前に出たらしい。暴威を振ふ時の自然の力の大きさは、人間の努力の凡てはインフイニテシマルだ。大河の激浪の如き雪崩の流に傍ひ乍ら降る。やがて一九〇〇米附近から濃霧の層に入つた。もやは此の薄黄色のデブリーの谷を包んで、四邊はまるで秋の夕暮の黄昏時の様な氣分だ。これをこそ黄泉の旅とでも云ふのであらうか。霧の中なので、雪は濕つて、軟くもぐる。四時半頃白馬尻の岩に到着。今日細野の丸山に下から揚げて貰つたスキーが二人分岩陰に立つてゐる。毎日岩と氷のリツデ許り歩いてゐたので四日振りですキーを履くと又新しい感が湧く。今日は相當のアルバイトだつたのだが、徒歩の時とは又別な筋肉を使用するので、疲労の轉換とでも云ふか、結構やつて行けるのが妙だ。十間先も見えぬ濃霧なので、互に離れぬ様にして時々待合はせる。白馬尻から猿倉迄の冬道は始めてなので横川にきゝながら今日丸山が上つたあとを辿つて行く。右を巻いて闊葉樹のまばらな大樹の間を縫ひつゝ長走澤を越し、又一つの尾根上の平地に出てやゝ降ると今宵の安息所が見付かつた。煙突からは煙が出てゐる、誰か居るのかと呼ばゝりつゝは入つて見たが誰も居らぬ。今日上つた丸山が氣を利かしてストーヴに點火して置いて呉れたのだ。スキー専用につつた丈あつて設備が完全して居る。小屋は中山澤に面した一の鬘尾根の南側の樹林中にある。中は明るい。梯子で二階から入つて戸を開けた。

○春、頂稜を追ひて 小池

薪は山と積まれ、炊事具は一切整ひ、且つ毛布寝具もある。一切から解放された安息の氣持でもう里に下りた心算になつてゐる。思へば今日は種々な所をほつき歩いたものだ、一日が馬鹿に長く感ぜられた。今日は岩場や氷や廣尾根やコルニスやを遍歴して歩いた。それらの泥濘した感興が尙更今日の日を楽しくさせたものだ。焚火はどん／＼燃し、山の御馳走をうんと作つて、炬燵に火を入れたが、爐のストーブの傍の方が景氣がよいので、誰も炬燵にあたらず、そだをストーヴに投げ込んで顔を赤くしながら、火を見つめて、數日前の又は遠い過去の山歩きの一つ一つを心に畫いてゐる。理屈ぢや無いのだ。只何となく好いんだ。山へ来れば總てがほぐけてゆく。考へる程、山は今の自分に取つて新しいものではないが山に浸る時は其れが自分が會て訪れた事の有無に不關何時も新しい。

四月四日、今日は里に降るの日。午前中小日向山に遊ぶべく出掛けた。八時頃まだカチ／＼の雪の上を尾根に出て少し行くと樹林が地上六七尺の所でへし折られた澤山の枯株の原に出た、雪の多かりし冬に雪崩に衝かれての事か。火事か。風の仕業でも無いらしい。凍雪に軽く被つた銀鱗のフィルムクラスト。漸く陽光にゆるめられ、きらめく結晶の光を放つてゐる。小日向と杓子の支脈とに抱かれたカールの底を南に渡つて小澤を双子岩の鞍部まで登る。嚴冬の頃活躍したスキーのシュプールが、其の後幾回かの降雪、融解を繰り返した今尙残つてゐる。コンプレッスされた雪の粒々は斯くも永く山人の魂を傳へるものか。双子岩の上で、あたりをカメラに納めて、杓子鑊が嚴めしく瞰下してゐる此のなだらかな尾根で小さな人の子が二人百米許りのコブを見付けてステムクリスチャニアのメラロームを畫いて遊んでゐる。白馬、小蓮華の岩壁が、白黒のドギドギした光線を送つてゐる。名も知らぬ雑木の梢を影にして、一つの黒さも持たぬ火打の頂稜が遠くの空に浮んでゐる。日は中天に昇つて漸く絶好のざらめとなつて來た。雪の上に陽炎が立たん許りの暖かさである。幾度か杓子を見返り鑊を仰ぎ、盡きぬ感慨の餘韻を残して十時十五分降る。春の陽を存分に受けた銀盤を滑り滑つて十時四十分小屋歸着。横川はすっかり片付けて、晝飯

さへ濟ませば出發出来るやうになつてゐた。正十二時小屋を閉鎖下山。谷底へ下りたら雪がスツカリ腐つてゐた。指導標の赤旗が色あせて枯棒にうなだれてゐる。昨日は氷雪の山稜、今日は谷の芽吹き。すっかり春だ。時々、ぼとりと音して何かが動いた。枯葉の上の雪の融け落ちるのだつた。チャルメロ(露の若芽)がみちばたにこぼれてゐる。雪は發電所取入口で終つた。二俣の橋の上から不歸を振り返つて、砂塵の舞ひ立つ大道をテクシヤク行く。八方の雪が陽にテカテカ光つてゐる。火打は相變らず谷の奥に居る。二時半四家着。

五月の飯豊山

佐々保雄

一、まへがき

飯豊は仙臺にゐる間に是非登つて見たい山だつた。

それは晩秋の船形山の頂きからの淡紫色に、冬の藏王の雪坊主の間からの白銀の輝きに、そして初冬磐梯からの新雪の粧ひに、いつも私の心を惹いてやまなかつた。高さは二千米を抜く事數米に過ぎず、険しい岩壁も恐しいアレートもない山ではあるが、ほかでは求められないユニークな味を持つた「いゝ山」と豫てから聞いてゐた。

大正十五年の晩春、楽しかつた冬も過ぎ、街から望まれる山形境の山々の雪は、日を逐ふて消えていつた。春雪の豊富なうちにどこかへ登りたいといふ衝動が毎日私等を刺戟した。先づ足馴しにと藏王の北の雁戸へと行く。そしてそこから飯豊の山嶺がまだ白々と連なつてゐるのを見て、私達は何を措いても飯豊に出掛けやうとさめて了つ

た。準備が分擔して行はれる。雪中幕營の用意も整つた。旅程は沼井氏推賞の玉川溪谷を溯つて支流梅花皮澤の瀑から石コロミ澤ノ頭の雪を楽しむことにする。

しかしそこは私達には全く未知の境地だ。それで過去の僅かな経験から、時期は雪崩も大體落ち盡し且つ谷は雪で埋められてゐる五月の末と決めた。出發間際に沼井氏から親切な手紙が届いて私達を喜ばせた。そして私達の心はこの雪多い山に對する期待で一杯になつてゐた。

かうして私達は山旅に出掛けた。それからの八日間は全く愉快なものであつた。やはり飯豊は期待にそむかない山だと感ぜずにはゐられなかつたし、又友達同志のありの儘の生活もその旅の齎した嬉しいものゝ一つであつた。

殊に漸く春の訪れたヌクミ平のあたり、霧の中の石コロミ澤山上の逍遙、牛首山での數刻などは容易に忘れ得ぬ深い深い思ひ出となつた。私は其時の印象を暇にまかせて追憶的に書いて見たりした。又その旅のあひだのノートが其後飯豊を訪ねた友人達の參考になつた事もあつた。それで今後この地方への登山家の參考にもと以下當時の旅日記を秃筆を驅つて記さうと言ふのである。

行程を概記すれば左の通りである。

大正十五年五月二十九日。午前二時仙臺發、福島乗換、荒砥線今泉下車、小國街道を西下し、沼澤村泊。

同月三十日。同地より小國村を経て玉川に至り泊。

同月三十一日。長者ヶ原に至り泊。

六月一日。玉川に沿ひヌクミ平に至り、支流梅花皮澤に入りて瀧の澤合流點五丁下手にて泊。

同月二日。石コロミ澤を溯り大尾根に出で北烏帽子を経て赤谷路との出合附近にて泊。

同月三日。御西を経て本山に至り社内に泊。

同月四日。大日、牛首岳往復。

同月五日。會津、一の戸口より下山、山都八時半發、翌朝仙臺歸著。

参照地圖 五萬分一飯豊山、玉庭、大日岳、加納。本號に山澤名を記入せる附圖を添ふ。

一行は東北帝大生、三木準、二高生、加藤章、小山修壽、伊東信雄、桃井次郎、筆者の六名。玉川より本山まで人夫二名を伴ふ。

二、旅 日 記

麓 ま で

五月二十九日。(曇。沼澤村まで)

汽車はおなじみの「飯豊行」と私等の呼ぶ午前三時のもの。四時から五時まで福島で乗換へを待つ。八時頃赤湯について荒砥線に乗換へ九時二十五分に今泉驛に下車。驛前に居合せた荷馬車が山の方へ歸るといふので重い荷を頼んだ。そして空身になつた六人が歩き出したのは十時だつた。添川村は一時間後に、十二時近くには松原村を過ぎた。次の手ノ子村はまとまつた村だ。十二時四十五分に着いてこゝで晝食をとり一時間ばかり休息してこの村をあとにした。空がやうやく晴れ模様になつたので皆元氣がいい。

落合橋のたもとから峠まで近道十五町の指標がある。こゝで蝸の鳴くのを聞きつゝ暫く(二時——三時)休んで宇津峠(二四九米)に立つたのは三時半だつた。峠から飯豊の眺望を得たいと願つて來たのであつたが雲低く、たゞ厚い灰色の雲の下から眞白なその山の山脚の覗くのに「まだ随分、雪はあるな。」と感歎したゞけである。近道を下つ

て本道に合し川沿ひにゆく。途中雪崩の跡らしいのが多い。間瀬橋、上杉橋、下杉橋と渡つて沼澤の翠屋についたのは五時半。今日の行程五里。小國までゆく豫定であつたが夜行列車の疲れもあるのでこの村に泊ることにして、夜は沼澤の裏の白沼小學校の厄介になる。

五月三十日。(雨天。玉川まで)

けむるやうな雨が落ちてゐるが晴雨計は天候の好轉を示してゐるので一縷の望をかけて六時半に出發する。荷物は前日のやうに翠屋の馬車に頼んだ。明澤橋あたりから下流の荒川は變化があつて仲々い々景色がつゞく。八時近くに割鞘澤をすぎる。三十米程の瀑がかゝり岩にそふて糸をすいたやうに落ちてゐる。名高い綱取橋、今は眼がね橋と呼ばれてゐる橋の附近は此の溪谷での絶景である。道は狭い峡谷の岩壁をえぐつて右岸をこゝまで辿つてゐるが左岸に渡るとそれから下は澤もぐつと開けて了ふ。十一時過ぎに小國村に着きこゝで馬車を返へした。先頃山の様子を問合せた役場に禮を述べにゆく。親切な役場では私等の荷を見て人夫を玉川までつけるやうにはからつて下さる。いよゝゝ重い荷物をかつぎあげたのは午後二時。

玉川まではこゝから三つも峠を越えなければならぬ。朴ノ木峠、人形送り峠を越え、萱ノ峠(三時四十分)から急な泥道を下るところはもう足元が暗かつた。ゴウ／＼と音ばかり聞える玉川の釣橋を危げに渡ると、泊らうといふ小學校はすぐそばにあつた。その先生守谷永支氏は附近の地理に詳しい。

五月三十一日。(曇後晴。長者ヶ原まで)

雨こそ降らぬが墨を流したやうな雲がうつつたうしい。午前八時出發。

玉川には附近の山をよく知つてゐる伊東某といふ老人が居るが、老齡なので息子(といつても三十歳を過ぎてゐる)の長太郎をポーターとしてたのんだ。好人物だが山のことは餘り知らない。村はずれの小玉川營林署の擔當

官舎に一才たちよつて見る。森林主事の山田幸吉氏が冬には是非スキーにいらつしやいと言はれた。ヌクミ平を根據とすれば、飯豊の頂も踏めぬことはないとの話である。この冬試みた時は鋸目の途中で引かへしたとのことだつた。片具にかゝると南正面に當つて折り重なる山嘴の上に雪をべつたりつけた大きな山腹が見え始める。丁度梅花皮澤檜山澤の切れこみ邊らしい。尾根上は黒雲に蔽はれて見えない。泉岡の廣い原はよく整理された田地だ。しかし五月近いといふのに田に人の出てゐる様子がない。そこからも大尾根がはるかに望まれた。丁度雲が少し上つたので、鋸目の上半分が現れる。本山の頂は寶珠山にかくれて見えぬやうであつた。御西へのなだらかな雪の稜線。石コロミ澤ノ頭も西に續いて見へる。その東面はかねて聞いた通り仲々立派で黒々とそけて白き雪溪の上にきり立つて居る。澤の源頭は随分急らしい。眺め眺めゆくので長者ヶ原についたのは晝近かつた。(十二時四十五分)。

こゝに來て漸く山に入つて來た様な氣がした。山が迫つて來たからである。小學校で晝食をとるべく重い荷を下すと背がのびたやうにホツとした。荷物は出來るだけ私等の力で持つて行き度いのだが各自の負擔がまた少し多いので、この村から更に人夫を一人雇用することに決め、村の有力者藤田源四郎老や小學校の須具徳五郎氏に世話をたのむ。しかし承諾するものがなくない。丁度ぜんまい取りの時期なので村近くの山に出掛けて一日六七圓の働きが樂に出來るものだからそれ以上の日當でなければ重荷を持つて寒い雪の山へ入るなどは馬鹿らしいといふ腹なのであつた。しかし私達はかゝる高價な人夫賃を拂ふのは今後に惡例を残すものだから斷然之を斥けた。氣の毒がつて小玉川の方まで探しに行つてくれる。そこには舟山直喜といふ山好きがゐるからだ。

それを待つ間私等は脾肉の歎に堪へかねて、東に屹立してゐる乳房山にザイルを持つて出かける。その小さいながら立派な岩山が私等を惹きつけたからだ。相當面白く遊んで歸る。人夫を頼みにいつた人が仲々戻らぬので出來るだけ奥へと思つた豫定を變へて其夜は小學校の世話になることにした。

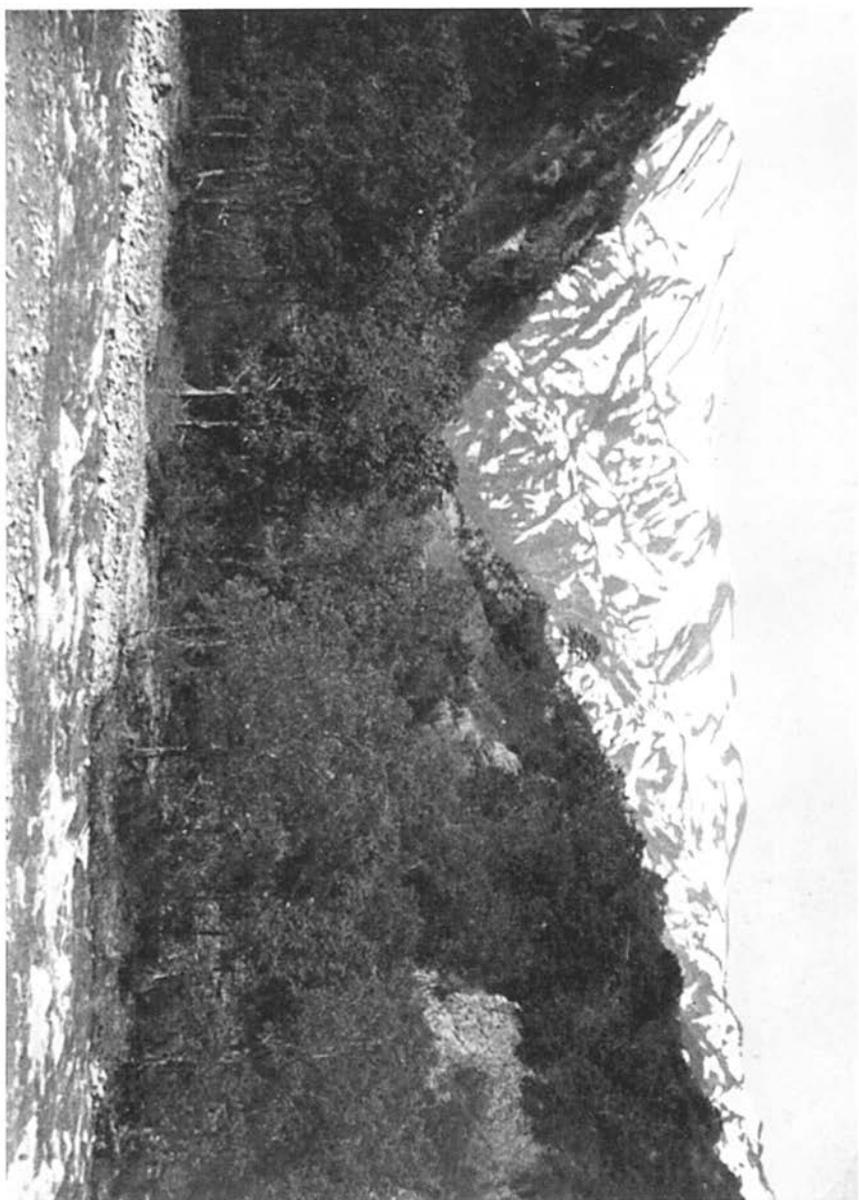
夜に入つて戻つて來たので聞くと「直喜の家は出産があつて急がしくて残念ながら出られぬ」とのこと。仕方がないから私達だけがかついで行く事に極めて了つた所へ、一日五圓の日當でゆくと云ふ藤田春利がやつて來た。多少の好奇心で行つて見たいらしい。折衝した結果四圓五十錢といふことに決めたが、減多に人夫を雇用しない私達には之は始めての高い日當であつた。沼井氏もここでは人夫難で悩まされた由であるが、長者ヶ原から山に入る人達はこの點に注意すべきである。

梅花皮澤を溯る

六月一日。(薄晴。梅花皮澤入り)

陰鬱だつた空がやうやく晴れさうな様子になつて來た。午前七時四十五分出發。西方枯松澤の奥にそびえる枯松山が朝映えして美しい。名の様に尾根のやせて谷の急な稜々たる山だ。低いながら一種の風格をもつてゐる。玉川を對岸へ渡る手前、即ち大淵のほとりには山毛櫨や檜の若木の美しい林がある。其上に雪をいたゞいて白く輝く地紙山の連峯は素晴らしい眺めだ。

川入には間もなくついた。こゝでまた通稱「春さん」といふ男を一人頼んだ。(八時十分——八時三十五分)川入の平には西ノ股澤がそゞぐ。これを溯つて峠を越えれば杓差の方に知られると聞いた。下桑畑澤、上桑畑澤と言ふのは川入の先の野生の桑畑の前後にあるもの。雪崩でこすられた所かアザミハゲと名の有るのはその少し先であつた。清水澤を越えると間もなくかねて聞いた大フタガリだ。(九時二十分)西の大フタガリの澤から幾度となく雪崩が押出したものとみえてその扇状のデブリは半丁幅程の玉川までも埋めつくし、川水は其間を割つてあふれ流れて居る。私達はこの二十間も幅のある雪崩の跡を通るのにかなり上の方を絡んだ。海拔僅かに三百米を過ぎないの



玉川溪谷より地紙運米を望む

に、こんなに残雪の多いのは、さすがに深雪を以て稱せられる地方だと勘からず驚かされた。この雪は毎年七月までも残つて道ゆく旅行者を驚かすといふ。暫くゆくとやゝ展けたセイジ合セノ手に出る。其處に來ればもう一面の雪原だ。(九時三十分)ヘタモノハラ澤にも大きなデブリが出てゐた。サカヒノ澤を越えてドウコノヘツリの手前で休む。こゝはセイジ合セノ休み場とも言ふ。(九時三十五分——九時五十三分)前面に戸板岩が屹立する。

ドウコノヘツリは川にのぞんだ急な斜面だ。こゝも雪崩の跡が岩片や泥土で狼藉を極めて居た。十時十分に旭又澤にかゝつた。瀧は高さ十米、幅三米もあらう。靴をぬいで合流點より五六間上を涉つた。淺くて膝までも届かず危険はないが刺すやうに冷い。(十時十分——三十分)其處から見事な山毛櫨の林を暫らくゆくとフカワタ澤だ。對岸の展けた河段丘は「中ノ平」といふ。

大淵からこのあたりにかけての玉川は實に氣持のよい谿谷であつた。南北に流れるこの廣い谷には明るい光がまぶしいやうにみち／＼てゐた。ひらけた河原や段丘にすく／＼と生ひ茂つてゐるトチ、ナラ、ブナ等の闊葉樹林のみづ／＼しさ。初夏の風に若葉のさゝやき、涼々と流れゆく水音に和して快い音楽を奏してゐる。それは確に飯豊山塊隨一の麗しい谷と言ひ得やう。

其處からが玉川沿ひの道のうちで一番悪いフカワタノヘツリである。河岸の削壁にはづかに切り開られた細い徑は崩れ落ちた雪や泥土でかなり歩き辛かつた。そんな所が三丁もつゞいた。谷沿ひの道にはあり勝ちのことだが、玉川登山道ではこゝがまづ特異の所になつてゐる。冬季はこの場所や前の大フタガリ、泥コノヘツリなどで場などがあるために、此の川沿ひの道は絶對に通れぬので、奥山に入るには小玉川から倉手山と九〇八米との間を越えてゆくのだ。其處を通過し終はると(十時五十五分)再び河段丘が開ける。小玉川温泉に至る別れ道らしい所で飯豊林道云々と書いた東京營林局の標柱が雪から頭を出してゐた。(十一時五分)其の先の湯澤でもまた靴をぬいで冷

い水を徒渉した。湯澤といふのは勿論此上に小玉川温泉があるからなのであるが、それは此の水の支流に過ぎないので、本當はそれより大きいモンガクの澤を此の谷の呼名とする方が至當らしい。下手に急瀉があるので針金がわたしてあるのを手がりに越えたが腰まで濡れてしまった。(十一時二十分——四十分)

このあたりには「ならの木石」(此の地方の花崗岩の呼稱)の大塊が累々としてゐた。それからはもう暢氣に雪の上を歩いていつた。日向山切合せを過ぎ、マガリ澤を越えると、愈々廣いヌクミ平の領域た。萌ゆる若葉に埋めつくされたこの平はほんとうに私達をよろこばせた。私達は、シュリ、ブナ、イタナラ、トチなどの明るい緑に染まるやうな氣持で歩いた。川から大分離れて林の中を南へくとゆくと、前が明るくなつて澤音が高く近づいて来る。

梅花皮澤が近いと思ふと急に足が早くなる。やがて私達は藁小屋を見出した。そこは澤を前にした日當りのいゝ小高い丘で、合流點を距る約一町程の地點である。小屋は二間半に二間の廣さで徑一尺程の太い丸太が蔦で結ばれて、しつかりしてゐるから冬季も使用に堪えるであらう。現に冬は深い雪をわけて村の者がこゝを根據として「シ、狩」をやるといふ。二十人は泊れやう。大小のなべ、わらじ、鋸、なた、斧等一通りの道具は備へてある。こんな所で暫らく木でも切つて遊んでゐたいとは皆の心であつた。この對岸はカイラギ平といふ。

晝食は小屋の中に火を焚いて温まりながら済した。食後は日當りのいゝ河岸の枯草の上に腰を下して、この言ひやうもない美はしい自然の裡に在る私達の幸福であることを泌々と想つた。

其處から、梅花皮澤の源頭から北烏帽子にかけての連嶂が兩岸のみづ／＼しい新緑の闊葉樹林の上に望まれる。

梅花皮澤ではないかと思はれる白い一條も、黒い岩峯の間にのぞく。瀑上から二つに分れた澤は何れも急な雪壁にとりかこまれてゐる。私達は志して來た登路の期待にそむかず手強さうなのをはるかに眺めやつて胸の高鳴るのを

禁じ得なかつた。

小屋で一夜を過したいのは山々だつたが、途中思はない日数を費したので、もう少し先へと重い荷をかつぎあげたのは、一時を大分まはつて居た。(十二時七分——一時三十七分) 愈々梅花皮澤入りなのである。それより暫らくの間はまだ兩岸展けた林。雪のとけた枯れ叢には、所々に踏みあたらしいものがある。魚釣に通つた者があるらしい。雪の解けた後を追ふやうに生へてゐる青い水々しいウドやコゴミを夕食のためにと人夫達は盛に採集した。いつの間にか對岸の山裾が川に逼つて、日蔭ではあるが、雪も止めない程にのしかゝつて来る。辿つて来る西側もやがて河岸が急になるあたり、細瀧をかけて落ちる澤を過ぎる。(二時十分——三十分) タキブ澤と云ひ、上流は奇麗な小瀧の連続である。熊狩に來た時祀る「山の神迎へ」といふ場所を過ぎると、川は急に西へ屈曲する。そして白く高さものが急に眼を射ると見ると、それはえぐれた様にのび上つた、黒い岩をとりまく、石コロミ澤頭のすばらしい景觀だつた。(二時三十五分——四十五分) こゝは梅花皮澤東部の高度指數の入つた尾根、七五〇米あたりの眞西にあたる地點であらう。此のあたりになると所々對岸にはデブリが押し出してゐるが、澤はまだ雪に埋つてゐない。泡をかむ水が轟々と流れてゐる。河はさして深くない。此の邊りは夏でも左岸がへツレさうに見られた。こゝで右折した澤は先二丁程で更に急に曲つて南へ入込んでゐる。それは大分けはしさうな所だ。やゝ急になつた岸の木根につかまり、雪の上をゆくと、右岸から押出した大きなデブリが河床を埋めてゐる。堆雪は河面より五六間も高くつもつてゐた。水はその下を潜り流れてゐる。その雪の中から尖つた大きな花崗岩が突出してゐる。これは下ノツブテ石で、玉川太郎が投げた石だと言ふ。面白い傳説でもあるのかと訊ねて見たが人夫達は詳しいことを知らなかつた。上流にもこんな石があるといふ。この先の左岸は屈曲點の外側に當るので到底へツレない、夏なら對岸に涉らねばなるまい。雪が堅いので皆アイゼンをはく。(二・五〇) ツブテ石の傍はデブリの上を通り、その先は雪

崩で押倒された藪を絡んだ。このあたり夏は悪場であらう。

こゝよりしばらくは南に向き、見ゆる限りは岩と雪の急峻な斜面ばかりである。白い雲が限られた碧い空を思出したやうに流れてゆく。澤が西へ折れる所に上ノツブテ石がある。之をとりかこむ雪はすっかり谷を埋めてゐた。

そこに下り立つて上方を望めば、こゝより先は谷間は全く雪の埋むる所であつた。谷はずつと開けて、ゆるい傾斜をもつて高まりゆくこのはゞひろい雪溪は、私達に氷河を幻想せしめるやうな景觀であつた。この地點は高距約六〇〇米、地形圖の梅の字附近であらう。梅花皮瀑の落口がもう近いと思ふと、おのづから足の運びも軽くなる。

(三・三〇) 谷は登るに従つて擴がり幅二丁に近い平な雪の原になる。兩岸はすっかり雪崩が落ちきつてその跡は慘憺たる有様を呈してゐる。

そのころは空は薄ぐもりとなつて、もう谷間には照る陽のくるめきもなかつた。その夜の宿り場も探さねばならない。私達は雪を掘下げて一夜を明かさねばならないかと豫想してゐたが、幸ひ北岸に小さな草地を見出して暖い一夜の宿を得ることが出来た。(三・三五)そこは地圖の花の字のあたりである。北から落ちる小澤の水が段丘の下を流れて、本流に注ぐのを用水とする。

野營地から少し上の方へグリセードの練習に出掛けると、谷間のひらけたかなたに遠く赤く染まつた雪の峯が望まれた。朝日岳の連脈らしく思はれた。夕やみが谷に忍びせまる頃カイラギ澤の源頭に雨を含んだやうな雲が屯してゐたが、そのうちに雨が新らしいテントの屋根をポツリ／＼と打ちはじめた。

石コロミ澤を登る

六月二日。(曇。山上濃霧)

午前四時に目をさます。東の尾根は灰色の眞綿のやうな雲に蔽はれてゐる。雪に埋もれた谿間の朝のひとつき、何といふ静けさだらう。食事の出来上るまでの自由な漫步の快さ。七時十分出發。

瀧ノ澤との出合に荷を下して合流點の間の山嘴に登る。そこは屋敷前ノ平と呼ばれる小さい丘で、五葉松が轟々と立つてゐる。丘を越えて南側に出ると、目の前に大きな岩山がヌツと現はれる。その荒々しい山肌に白く凍つたやうな瀑が懸つてゐる。それが私達の期待してゐた梅花皮の大瀑であつた。瀑は上下二段に分れ、上は細長く高さは約十間、下は約五間の高さで末廣がりになつてゐる。水景豊富で相當立派なものだ。瀑のある地點は地形圖の示すよりも下流にあつて、落合から四五丁の距離であらうと思はれる。瀑の上で澤は更に二分して、霧にまかれた大尾根まで匍ひのぼつてゐるらしい。

私達は最初この澤を溯る計畫で來たのである。そしてこゝに來て見ればそれは決して不可能ではなかつた。殊に梅花皮瀑の東側をからむのがその中の一番容易な登路と思はれた。しかし私達を最も強く誘惑したものは、中空まで長蛇のやうに續いてゐる本流の雪溪であつた。それを傳つて石コロミ澤ノ頭かモンナイノ頭(或はモンナイ岳)に取付くことにきめて私達はそこを辭した。

この分流點のわづか上で北西より落ちる梶川も源頭まで一面の雪である。(その上の一六九三米の三角點を梶川ノ頭といふ)それより石コロミ澤出合までは約十丁の距離である。この邊は幅一丁程の雪溪になつてゐるが雪が融けてからの川幅はどの位であらうか。人夫の話によれば現在雪の深さは三四十尺もあらうとのことであつた。やがて石コロミ澤とモンナイノ澤が間近く仰がれるやうになる。

石コロミ澤はまだ見ぬ氷河のやうな感じの澤であつた。兩側は削壁をなして其間を埋める雪は、はるかの高みに

○五月の飯豊山 佐々

三六

まで続き、はては山稜をつゝみかくす霧の灰色と臙にとけ合つてゐる。兩側より無数の雪崩が落ち、デブリの數は實に夥しい。所々に黒い點々のあるのに近よつて見るとそれは何れも上方から落下した石塊である。石コロミの名ある所以であらう。(合流點附近、八・三五)雪溪は登るに従つて傾斜を増す。「熊! く」といふ聲に指さす方を仰いだが、私達の慣れない目には遂に熊を認め得なかつた。陽氣な私等の聲が谷間に響くのに驚いて逃げ去つたものであらう。荷をおろしてパンを食べながら熊の話がしばしばはづむ。(九・〇五—三〇)この邊の傾斜は十二度。そこから雪溪は傾斜が急になるので用心のためにザイルで結合ふ。先頭の組は佐々、小山、桃井、伊東長の順。第二の組は加藤、三木、伊東、藤田の順である。

西の岩尾根に幅二十間程の急な雪溪が銀龍の舞ひ上る如く喰込んでゐる下に立つたのは正十時。二千百米のあたりであらう。その上は平均傾度二十五度位である。かへり見ると春雪に輝く朝日連峯が屏風の裾繪のやうに連つてゐるのが遠く望まれた。

ザラメ雪であつたのが登りゆくにつれ漸く堅く締つてシュタイクアイゼンの爪が氣持よく利くやうになつた。四十分後には斜度三十二度の所に立つてゐた。熊の登つた足跡があつた。眼を上げると、思ひきつて急な雪壁が威壓するやうにそゝり立つてゐる。蒼空と雪稜の接するかなたへと私達が期待して來た山稜は、濃い霧につゝまれて望むべくもないのが残念であつた。

「一一・二五。三二度。ステップを切り始める。一一・三〇、少憩。上方百米の所に雪剝けたる藪見ゆ。この邊にて水音らしきもの聞ゆ。右手のクレヴァスの下を流るゝものならん。一一・五五。三六度。上方に岩近し。一二・二〇。岩。草地に出て食事。休息。」とは當時の手記である。

足もとを拂ふ冷い風の中で私達は一心にステップを切つた。厚さ一寸ほどのかたいクラストが打落すたびに氣味

のわるい音をたて、霧の中へ見えなくなつてゆく。重苦しい霧が生あるものやうに雪の表面を動いてゆく。雪の中から僅かに露出してゐる五六坪の所まで登つて、そこで霧の冷たさに慄えながらパンをかぢつた。あたかもそのとき、霧が薄らいで西方に一つの山稜が影繪のやうに浮んだ。そこまでは高距にして二〇〇米位に思はれた。石コロミ澤ノ頭に違ひない、すると目的の鞍部までは一〇〇米足らずなので、前途の意外に近いのに私達は喜んだ。熱い珈琲を飲んで出發する。(二・二一〇——二・二二〇) 傾斜四十度を越えると思はれるやうな雪壁は、そのすぐ先で次第にゆるくなり、山稜との間の幅五六間の深いクレヴァスの端についたのはそれから十分後であつた。危げな雪橋を確保しつゝ、渡りザイルから解放されたのは一時三十分。大尾根はかなり廣い。南側の斜面には笹が騒然と鳴つてゐた。飯豊川より吹上げる霧と風との冷たさ。霧を冒して登つても眺望もないので石コロミノ頭を割愛して直ちに東南へ向ふ。

鞍部のあたりは花崗岩の礫土で、所々には枯れた高山植物群落の散らばつた歩き易い所であつたが、少し東に登りかゝると直ぐ偃松の領域になる。

霧風に飄々と鳴る間を露拂ひつゝ、しばしの苦闘。烏帽子迄はこゝから駱駝のこぶのやうな突起が二つ程あるが直ぐ前の隆起(二・二〇〇米)は敬遠して、右を搦みその南の肩に出る(二・二一五——二・二二五)時折風の加減でゴーツと飯豊川の谷音が聞えて來たり、霧のきれたかなたに兀立するその黒い河壁が隠見したりした。

この頭をからんで東肩に達するとやがて雪境が私等を東に導く。(二・二五五——三・〇五)その最低鞍部に着いたのは三時十七分であつた。脚下より灰色の蔭をひいてえぐれてゐる果しも知れぬ雪溪は、かの梅花皮瀑のある澤であらう。次第に登るにつれて雪は切れ勝ちで續く高みは又偃松の密集だ。縣界の切開きの跡、青笹の叢生せる所を行く。

登り登つて北鳥帽子（二〇一七・八米）の頂についたのは四時近かつた。やぐらの無い石標のほとり、黄色いしなびた枯草に腰を下す。紅茶やチョコレートが皆の間に廻される。眺こそないが第一の目的の石コロミ澤が樂にのぼれたので皆嬉しさうだ。春さん等もその新しい経験を非常に喜んでゐるらしい。と紛糾し奔騰する雲がさつと切れて南に飯豊川からの雪溪がはひ上つてきてゐるのが瞬時見下された。

石を積んでおりはじめたのは四時二十五分。天狗ノ相撲取場は知らぬ内に通りすぎて了ふ。北梅花皮瀑の東に派生する尾根へと下らぬ様に注意して東の小さな隆起は稍南を搦みあとは磁針の示す様に殆んど眞南に下る。暫くの楽しいグリセイド。突然目前に黒い裂け穴が口を開く。それは東へ張り出したその雪堤を割つて、長く／＼續く大きなクレヴァスだつた。十米近い深い穴がしゃくれた様に谷へ向つて切込んでゐる。更に又雲と霧、不透明な灰色の飽和の中のひたすらな南進——小さな起伏をいくつか辿つて。

もう谷間には夕べが漂ふてゐた。やがて足もとの雪も少しづつ反射の光を失つてゆく。それはもう泊り場が見出されねばならない時だつた。尾根が次第に東にまはり始める。尾根が廣くなつて南側にぼんやりと丈高い藪原が表はれてきた。そのほとりに雪融の水がうすい氷をはつてたまつてゐるのを便りにやがて私等の夜の營みが始められた。（五・五七）笹藪が切開かれて天幕が張られる。偃松がつかまれる。

炎が高く燃上るところから霧のやうな雨が降りだして夜の更けるに従つて大降りとなつた。

山 上 の 二 日

六月二日。（午前快晴、午後霧及霽雪、夜晴。飯豊本山へ）

高い笹藪にとり圍まれてゐたので尾根泊りの一夜も暖く眠れた。四時にふと目をさます。雨はどうなつたかとテ



(上) 梅花皮の瀑
(下) 蒜揚山(新谷方面より)

佐々保雄
八十瀬行正

ントの窓から覗くときのふの霧はすっかり晴れて黒い程蒼い黎明の空がひろがつてゐる。私達は恵まれたのだ。

北の雪田に出ると先づ目を惹いたのは北鳥帽子の右に浮城の様に連る朝日連峯の白い姿だつた。ポケットに手をつつこんで廣い雪の上をどことなくあるき廻る——お天氣が嬉しいのだつた。尾根筋を追ふて今日の行手を眺めると先づ視界を大きく劃るものは御西の膨大な平頂だ。その左の端に飯豊本山が覗く。桔梗色のギザ／＼の尾根は名高い鋸ノ目。寶珠山の左肩、紫煙の如き連りは藏王山群から雁戸、大東、船形など私等に親しい山々であつた。いづれも最上平野を浸す雪海に鯨の群の様に浮ぶ。神室の上からは朝日が昇るのだらう、そこを中心に黄金の暈が幾重にも輪を畫いてゐる。磐梯や吾妻は飯豊本山に遮ぎられて見へない。

凍つた雪を踏む音の外は何も聞えぬ静かな裡に、東を中心とする微妙な光と色の交錯のひとつときが私等を包圍した。私達のうすら青い影が桃色に染つた雪の上に長く／＼投げられる。(四・一五) 東の空が見る／＼紫がかつた透明な薄桃色に變つて行く。それがその日の生活の誕生だつた。あたりの雪がまづ其光を吸つて仄かに輝き始める。私達は朝餉の仕度だ。谿間の雲は潮の湧きかへる様に動き出した。

私達の泊つた所は推定通り飯豊川よりの登路が大尾根に合する地點である。その方へ少し下つて見ると脚下にコンヴェックスの急斜面が飯豊川まで落込んでゐる。時折聞える川のだぎる音。その谷から一氣に千米も聳えあつてゐる大日岳の姿はいかにも見事だ。その紅に燃えた色がほの／＼と褪せて行くのも美しかつた。その右に遠いはるかな日光連山が朝焼にもえてゐる。

平野の雲のうごきは愈々はげしい。最上平野の雲海は朝日の山々に波の様に打よせては消えて行つた。朧げな山々が桔梗色から次第に黒く際だち、やがて目覚めるやうな紫紺に陰影のつき始める頃私等はその宿り場を辭した。

(六・三〇) ふと昨日の來し方をふりむくと北鳥帽子に連る高い雪堤の縁端が異様にきら／＼輝いてゐる。恐らくつ

らゝであらう。雪田を少し東に下ると御手洗ノ池の平だ。雪に埋れて池のありかは解らない。そこより登るに随つて新潟の平野が望まれるやうになつて来る。西方に二王子岳がどつしりと眞白な姿を見せる。その右肩に佐渡ヶ島らしいのがうつすり筋をひいてゐた。一八五〇米の邊りに来ると大日の蔭に尖つた牛首が覗き始める。朝日連峰の寒江狐穴間の低みを通して鳥海の端正なコニーデが、鳥谷原山の右肩から土饅頭のやうな月山が、よく望まれたのもそこらだつた。此邊雪の上に土砂が散亂してゐる處があつた。天狗さんの種蒔きだと長さんは説明したが、この地名がそれとも斯う云ふ様子を言ふのかは分らなかつた。(七・三〇)

御田と呼ばれる所に来ると尾根がぐつと廣がつた。陽も大分上つて身の蔭がくつきりと短くなる。グラスなしには眩しいほどの輝きだ。尾根を吹くさはやかな風。私等はアーノルド・ランの推賞する「五月の山」を今日こそ充分に味はへるのだと喜んだ。それにしても僅の努力を惜んで短スキーを持つて来なかつたことが残念である。——御西から檜山澤源頭へと打ち續く廣大な雪田は實に誘惑的だ。夏の檜山は餘程六ヶしいそうだが春の熊狩りの頃は谷底を渡つて上まで足を伸ばせるといふことだ。赤瀧は右側をへつて登れるらしい。三月に入るとソロ／＼雪崩が落ち始めてやがて谷一面デブリで埋まる。今頃ならば下の白瀧と云ふ悪い所さへ越せれば今度通つた梅花皮澤の様子から推せば、後はずつと雪を踏んで割に樂に登られやうと云ふ。夏でも澤に慣れた者で脚が揃つてゐれば檜山澤も登れぬことはないと聞いた。春さん等は小玉川の部落や乳房山を遙かに望み得て大いに喜んでゐる。後僅かで御西ノ平と云ふ邊では、島のように雪にかこまれた藪を取巻いて兎狩りをやつたのも一興であつた。兎の足跡が一杯に入り込んでゐるのだつたが、一匹も出てこないのには皆啞然として失笑せざるを得なかつた。二三日は天候も崩れまいと見込みをつけて御西邊りの逍遙はゆつくり後まはしにする。兎も角小屋へ行かうと御西の北裾を搦んで東へ廻る。飯豊本山と御西の最低部に出、低い笹を分けて南側の雪田に移る。(八・三五)北側のスノーフィールドも廣いも

のだった。實川の源頭を成すものである。

そこからは猪苗代湖の銀盤とそのほとりにそゞり立つ磐梯の影姿ヒルノコト。會津平野の阿賀川の銀蛇を蜿らした廣がり、はるか南の方、積亂雲の湧き立つ下、那須から日光あたりの山の僅かな残雪のきらめきなどが望まれた。本山の南を搦んで雪を傳ふ。途中で確かにスキ一の跡らしいのが二本、薄いフィルムクラストに蔽はれて斷續してゐるのが見られる。多分毎年今頃やつて来る慶應の人達のだらうと語り合つた。そこからの大日の秀でた姿、殊に實川側に截り立つた急な黴い鬚尾根に氣を惹かれ乍ら明日の登高を楽しみに歩き續ける。頂にもよらずに尾根道に出て、暫くぶりで金標を外した。小屋はそれから二町程であつた。(九・四三) 風よけの積石にかこまれた神社はすつかり戸締りがしてある。當にして來たその前の小屋は戸口が開かれ雪が一杯につまつてゐて使用に堪へない。止むを得ぬので社の東の小窓からもぐり込んで先づ戸を明ける。雪はすこしも吹き込んでゐない。神社と云つても間口二間半奥行四間ほどあつたらうか。北の三間位は板の間で小さな社が祀つてある。南半分は土間。夏は神官等はこゝに宿るらしい。水は無いので前の小屋の中に吹きつまれた奇麗な粉雪を融すことにする。

お茶などわかしてゐる中にいつしかあたりは濛々と霧に包まれて了つてゐた。春さん等は今日中に里に降りたいと言ふので私等は見送り乍ら飯豊の頂迄行くことにする。風のため雪のたまらぬらしい尾根の上はすつかり砂礫が出てゐて夏と同じである。道通り行つて偃松の間を過ぎ僅か登ると頂上だ。小屋より十分足らず。長さん等はそこで休む間もなく明るい中に玉川に行くのだと飛ぶ様に降つて行つた。鋸目へと霧の間をかくれて行く連中の黒い姿。それから暫くは「ヤーホー」と應酬が続く。その下る方向には所々に標識の積石がある様で「東京營林局飯豊山林道石積を目標に下る、神社迄五丁、飯豊温泉迄二里二十三丁、大正十四年八月新設」といふ目標がそこに立つてゐる。頂上は花崗岩片の散り布いた十五六坪ほどの廣さの所で、その西北端高點に一等三角點石標がある。その傍に「道

中安全身體健固片桐先達」と裏書した三尺程の石碑が立てられ、表には劍がしめなはに結ばれてある。

ときどき霧がうすれると東の方に大又澤が瞰下された。そこには夏よく魚釣りが入るそうだ。上流に止めの瀑と云ふ十丈ほどの瀑があると云ふ。それからの三時間を私達はその頂で全く安逸な夢を貪りつゝ過した。——風向きが變つて霧が御西の方に廻り出したので私等は柔らかな微風と暖かな春陽に恵れたのである。大日から牛首にかけての連峰を憶れてスケッチに夢中の者、長々と寝そべつて夢を見る者。終には皆そこでねむつて了つた。時に遠雷のやうな音が静けさを破る。——雪崩のひびきであらう。

二時になつて再び霧があたりをたちこめて寒くなる。一先づ小屋へと枯れた偃松をひろひ乍ら戻る。雷の様なひびきが愈々頻繁だ。——一分とおかない位である。時に足許をゆるがす様な胸にひびく様な大きなものも聞える。二時半には霧雨が雲に變はり遂に雪になつた。サラ／＼と音をたてて見るうちに五分程積む。六月になつての降雪は生れて始めての経験で皆すつかり興がつた。それは三十分位で止んだ。出て見るともうすつかり晴れ渡つて悪戯な雪雲は地紙のあたりを北へ／＼と走つてゐた。食前の散歩と薪を集めに又頂上に行く。(四時)この頃に至つて漸く轟音は間遠になつた。見ると大日の急峻な下脚の邊りは先刻眺めた時とは大分雪のつき方が變つた様に思はれる。

——雪崩の爲ではなからうか。そしてあの様に激しく雪崩れたのは午前快晴でゆるんだ雪がこの二時間程の天候の異常で刺戟された爲だらうと考へられた。

夕刻日本海に沈む夕陽を石垣に凭つて眺める。日没前の秘やかなひとよき。牛首の左方、赤く燃え立つ入道雲下の白き連りは飛驒の山であるまいか。それは以前から見えてゐる上越の山々のはるか上に聳えてゐる處のものであつた。やがて私達は皆だまりこくつて了つた。息をのんでその日没の刻々を見つめてゐたのであつた。赤盤の様な大きい陽は見る／＼水平線に沈んで行く。七時五十七分遂に地紙の右に没した。其後の見渡す限りの山々のシルウ

エツトは帆差の左方海上に浮ぶ粟島の寂しそうな姿と共に忘れ得ないものである。

六月四日。(終日快晴。大日岳、牛首山へ)

戸を鳴らす風に目がさめたのは午前四時。寒さに首をちぢめて外へ出て見ると素晴らしい晴空が擴がつてゐる。但し風は強い。下界は一面雲の海で千米以上の山々だけが島の様にその上に浮んでゐる。日輪は藏王の左肩より昇つた。と同時に飯豊本山の影が大日牛首の山腹にサツト投出される。見る／＼橙色に輝き出す。雪肌と其影との境に揺動する微妙な銀色。陽の昇ると共にいつもの様に雲海の波がたち始めた、やがて綿を引きちぎつた様な霧雲が峯々に打騰り始める。

七時十分に輕装して大日岳に向ふ。雪は凍つて堅い。シユタイクアイゼンのツアツケが僅かにさゝる位のマアブルクラストである。御西までは殆ど夏の道と異ならない。たゞ今は雪の上をゆくのだ。即ち小屋と頂上との間の最低部から西手の雪原に下りて、あとはたいして下りもせず上りもせず本山南面の伸びた山腹をからむのだ。搦むと云つても、平らなうねりを只歩いてゆけばよいのである。一面の雪原で御鏡雪の形もなにも未だ出てゐない。本山と御西との鞍部に出るとます／＼廣い山上高原になる。夏の御花園と言ふ所であらう。廣やかなる山上の草原！

それは嘗ては水にけづられ洗はれて成つた廣漠たる平原の殘片ではないか。或は今の日本島が亞細亞大陸の縁邊として一様のゆるい起伏をもつた低地であつたかも知れない。それが如何なる強烈至大な力であらう。——この二千米に迄それを致したるものは。私等は大日、牛首の峻壁にこの山々の横顔ゴフツアイルをながめ、御西の山上草原にその面影オモイを視ることが出来るのであつた。御西では三角點附近にオアシスのやうな草地在が稍廣げて出てるだけであとは全く雪の蔽ふ所。そこには八時についた。この邊りはいつまでも腰を落して陽にあたゝまりながら雪のとける音にでも耳を傾けてゐたい所だ。併しそんなのんきなことは許されない。暫く休んで西に下り始める。陽の昇ると共に硬か

つた雪の表面がゆるんでツアツケも全部うまる様になつた。その緩い下りは（凡そ百二十米程）東側を搦んだ。西風の齧らす凄く高い雪庇の上に沿うて行く。所々に雪庇が落ちかけてクレヴァスが深く入つてゐる所もあつた。鞍部には間もなく着く。これからはあと二百五十米程の登りである。そこで少し早いと思つたが、石コロミ澤を登つたのと同じ組合せでアンザイレンする。「登高行」第五年によると「ザイル」をもつてこないことが大日の登行を断念させたとおつたし又練習にもよいと思つたので。（八・二五——四五）

雪がよいよ／＼軟くなつて少し急なところではカンジキをはいたまゝぐ／＼と足許がくずれ出すほどになつた。

所謂テレマーク・クラストである。深々とした實川から思ひ出した様に白雲が湧いて目の前をかすめた。時々頂上が隠れる。それから辿る山稜は左程狭くない。澤への切れこみも思つたほど險しくない。登ると程無く十間程の膝くらひの笹藪を漕がねばならない。（九・〇三）わづか行くと又藪が出てゐる。（九・一七）一九四〇米あたりに（地圖の移り目）かなり廣い藪が出てゐた。北側は偃松が露出し、南側は笹藪と雪のすべつたらしい草薺が占めてゐる。長さは三丁程あらう。尾根上の偃松の所々に古い鈍目が見られたが、少し下つて南側の草薺にとりつき、これを登り最後の十間はかり笹藪をこぐと再び稜上は雪で掩はれてゐる。（九・二二——二四）そして暫くは南にはり出した雪堤を西に辿れた。これまではザイルはちつとも必要でない。それから愈々最後の上りだ。高さ一五〇米。始め僅かは藪が尾根を占めてるのでこれをさけて南側を搦んで雪にとりついた。そこから仰いだ大日の白い斜面は随分急である。（視角度四十二度）これでは足場も大分切らねばならぬかも知れないとそこで少し腹を拵へてから出かけた。（九・三五——九・五二）取りつきは約三十五度の雪斜面だ。そこは東南に向いてゐるので雪が軟い。北側にはまはる。少し日蔭に這入ると何と云ふ違ひであらう。多孔性の堅いクラストでツアツケも容易にたゝぬほどだ。所々に黒づんだ所があるのは氷がはつてゐるのである。そこではザイルとピッケルがその登りを面白いものにした。随分

急なので大きく足場を切つてチグザクに刻んでゆく。やがて藪と山稜とにその斜面は次第にせばめられて行つた。上に行くに従つて氷の部分が増す。山稜にとりつき浅い偃松を上へ上へとわけてゆくと、いつの間にか私達は大日岳の絶巔に登りついたのである。(一〇・三〇)

頂上の一歩高い所だけは禿げてゐるが一寸外へふみこむと石楠や偃松の海である。休んでる中に北にあつてラヴィネドンネルが聳く。「又初つたな」と皆が顔を見合せる。日が照つて首筋が痛いほどにあつい。それほどの天気である。雪崩も多く出ることであらう。頂にころがつた鏝に「五月廿八日午後一時半、慶應、西川、後藤」と書いた紙片が入つてゐた。あのスキ一の跡は一行のものであらう。

歸りに又ユツクリとその頂に約して牛首へと向ふ。(一一・一七)下り始めるとすぐ急な藪だ。初めは身長ほどの深いのを十間ほど、すぐ下でやゝ浅いのを三十間ほどわけ下ると、脚下に底の見へないコンヴェックスの急な雪の斜面が打ち開けた。始め暫くは山稜をと西側の尾根に出るとそこは大日の南の上の肩だ。(一一・三〇)御影石のボロ／＼の岩がつゞく。然し地圖にあるほど長くはない。これはアンザイレンして辿る。暫らくすると又偃松の深く蔽ふ所となる。西面は截れた岩壁。そこで東面の急な雪壁に下りる。(一一・四〇)四〇度近い傾斜をもつその斜面は一足毎にもぐりこむほど雪がゆるんでゐる。南へ南へと下りて三十分ほどで鞍部についた。(一一・〇三)

こゝから仰いだ牛首の東側は三十五度の眞白な雪の斜面だ。胸のすくやうな接空線を青空に描いてゐる。西側を覗くと雪は既に無くてフサ／＼した偃松の領域だ。山稜は割に幅がるあ。三間ほどのり出した雪堤の上をグイグイ登つてゆく。北のこぶの蔭で浅い笹をこいだけで、たやすく頂上につくことが出来た。(一一・二七)

牛首の絶頂は嬉しい所だ。三角點も無い。風化し苔むした石英閃緑岩の岩塊が壘々と積重なつたせまい南北の連峰だ。あたりは偃松がビッシリとりまいてる。目白押しに皆でその岩にならんで山上の「盡きない情緒」の喜び

に心ゆくまでひたつた。二時間が夢の様にすぎ去る。

そこは私等のやうな氣まぐれの登山者でなければ訪れぬ人氣離れた頂だ。取り残された頂だ。飯豊が盛んに登られ初めてから已に幾年、その間に登山者から未だ踏まれてゐない所の山頂はこゝと彼方の烏帽子の岩峰位のもではなからうか。烏帽子の小さいながらその黝崖のかがうがうしさは私等を誘ふに充分であつた。初めて瞰下す裏川の幽氣こめた様な切れ込み。小大日への素晴らしく急聳した大きな山腹も氣がひかれる。しかしこゝから見た大日は藝のない丸い鈍頂だ。北の烏帽子がその右肩にやうやく頭をもたげてゐる。

おほらかな御西から本山にかけての連り。私等は注意深く雙眼鏡で一つ一つその山腹から實川へと下る尾根や谷の錯走を追つて行つた。——實川から登つてゆく時、又はそこを降つたり、この峻しい櫛ヶ峯の東面に取りついたりする時のために。しかしその一々を詳しく述べたてる愚さは止めよう。私等はそうした探索よりもつと多くの時をその頂で過したのだつた——全く楽しい食事や談笑の裡に。春の陽がさんくくと惜しげもなく光箭をふりまいてゐる晝だつた。頂をふきわたる風だつて、ほてつた頬には軟い快いものだつた。牛首の頂！ 誰しもそのひとときは忘れまいと心にちかつたに違ひなかつた。愉しい山上の喜び、その時語り出でた友の山への感謝の言葉も私
は忘れまい。

あまり遅くなつてはと云ふので、二時半になつてやうやく又來た方へ引き返す。北の隆起はその岩塊と藪の東側を搦み、なだらかな雪堤を一氣に滑つて鞍部につく。(二・五七)私等のパーティが寫真機を出して撮影に暇取つてゐる間に先きの組は既に大日に上り始めてまるで小さく蟻のやうに這ひ上つてゆく。その急斜面には雪の融けて流れる溝が模様のやうに規則正しく銀面を刻んでゐた。

歸りには私等の組は途中から雪をはなれて、ズット尾根通し岩場をひろつて攀ち登つてみた。それは大した難場

でもなく藪も案外浅かつた。肩のあたりでさきの組と一緒になつた。(三・二〇)尾根を來た方が藪が多少あつても、午後の陽でユルンで一步毎に一尺もくづれる雪の上りよりよほどよかつたらしい。最後の深い藪を遮二無二かさわけて再び大日頂上の人となる。(三・三七)小大日の方に向け下りる者や、仰むいてチギレ雲をかぞへたりする者など期らかな五月の頂きのおびた休息。見たいと思つた大已貴命を祀つた石窟のことも忘れて遊んで了ふ。

冷くなりだした風に氣がついて下りだしたのは四時二十分であつた。東側のやはらかい雪の斜面もこんどは下がわかつてるので、一齊にグリセードする。登りに休んだ最後のやぶまで來た時に私の寫眞機のないのに氣がつく。頂において來たのだ。やれ／＼とまた取りに戻る。頂上にそれは淋しくとりのこされてゐた。直ちに戻る。先刻下つた時にはまだなかつた薄いフィルムクラストがサツト足もとに崩れ流れる。北の斜面に出て見るとガリ／＼のマーブルクラストだ、然し今日の陽によくとけた所はポーラス・クラストになつてゐた。下に小さく加藤君等の組が滑り降つてゆくのが見える。私等の組はもとの所に待つてゝくれた。藪を漕ぎ下つて雪堤の張り出た所で連中の上り來るを待つ。一緒に下り始めたのは五時すぎ。(五時五分)十分程歩いたがそのまゝ歸るのも何だか物足りないの、南側の急な雪壁でステップ・カッティングやらグリセードの練習をする。こゝから見た牛首はピラミッドの様な尖峯だ。傾いた夕陽の畫き出す蒼すんだ山影をながめてゐると、かはたれどきの何とない佗しさが誰の胸にもわいてくるのだ。ザイルをまいて急ぐと御西への最底部はそこからすぐ下だ。(五・四五)歸りには御西三角點の西の隆起に行つてみる。(六・一九)「御西大神」とほつた小さな碑が笹やぶの間、石塊にかこまれて淋しくたつてゐた。三角點の草地で少し休む。(六・三五まで)このあたりゆるく南にむいた雪田には夏の雪溪に見られる龜甲狀の凹凸が出來かゝつてゐた。

一日の登行の快い疲れが私等を宿りの小屋に急がせる。行かうと思つた御西から籠山カゴヤマをへて本山への高みづたひ

○五月の飯豊山 佐々

元

も止めて朝来た通りに歸る。小屋についた頃(七・二五)はもうトツブリと日がくれて、遠い若松の平野に一列の電燈の灯らしいものがキラ／＼と輝いてゐた。朝、溜めておいた樋の中の雪がその日の暖氣でスツカリとけて水になつてゐるので炊事は間もなく終つた。ザイル、ピッケルを祭つての楽しい食事。眠りに就いたのは十二時近かつた。

下 山

六月五日。(淡晴れ。山都へ)

午前四時に起きる。相變らずの好天氣。山上の朝の清爽な氣分が、今日は山を出てゆく私達には何よりも名残り惜く思はれた。樂しかりし山旅の最後の日。山氣を滿喫したやうな氣分と、まだ物足りないやうな氣分との交錯。

九時四十分に神社の戸締りを元通りにして下り始めた。御前坂の下にも、屋根に石を積んだ小屋がある。有名な御秘所ヒツの岩場は兩側ともピツシリ雪でうめられて、中段も下段も様子はわからなかつた。上段所謂山檣を傳うて下る。一間ほどのくさり場も途中にあつた。長さ一町程の岩場。兩側は急だけれど手がかりが充分あるし、落ちる恐れのあるほどの所ではない様に思つた。(一〇・二〇)一九〇八米の登りにかゝる處に石像を祀つた鳥居あり。(子安神社)傍にたゞんだ姥小屋の小屋場がある。一九〇八年を越えたと(一〇・三五)草履塚が近い。そこには杉の皮で葺いた破れ小屋があつた。すぐ傍に本山の方にむけて社がまつてゐるのは劍神社で、その廻りをとりまく石垣にはわらじが山のやうにつみ重ねてあつた。行者山にはどこにもある草履を換へさせられる所であらう。下るにつれて尾根には雪が消え、そこから暫らく笹の中を道が行く。種蒔山までの一番低い地點に下る所は五町ほどの氣持よい雪の斜面が続いてゐる。左下の廣い雪田の彼方には小尾根の腹をからむ米澤道が遠望された。たしかに切合せと思はれる地點は雪にうめられてハッキリした目標も得られない。(一一・二〇)

種蒔きの頂（一一・四〇）をこえると、雪はます／＼少くなつて雪堤をわたつたり、道を通つたりが續く。しかし種蒔附近に落ちてゐると言ふ米粒や、そのあたりに生へると言はれる稻等は未だ雪に埋れて分らなかつた。之等は何れも「イ、デ」の名に關係ありと語られる處のもので、その爲に豊年を祈る里人の參詣が盛んなものらしい。尙、飯豊は「湯出^{ユヅ}」で山中所々に湯の湧くに由來するとも言ひ、又一説に木山附近の御影石の崩れで生じた石英粒が米粒に似てゐる所から「飯出^{イヒデ}」と稱へられるとも聞いた。やがて尾根は次第にせまくなり山背の西側を搦み始める。三ノ森から七ツ森の凹凸である。正十二時に三國への最初のコブに達した。そこに小箱のやうな社がある。菅原神社であらう。東側に急壁が截り立つ。十分程で次の瘤に。途中、片栗のうすむらさきなのが一面に咲いてゐる——雪どけあとのやはらかいふく／＼した土の上に。このあたりも東側は随分急に落ちてゐる。——なだれの殘虐な跡。せまい尾根を辿つて第三のコブの鎖を下つてやがてのぼると三國の上だ。（一二・三五）

その南側は慘憺たる雪崩の押し出し場がそげてゐる凄い所だ。頂の石垣でかこまれた小屋あとに荷を下す。そのガンビを通して大日牛首を思ひ出深くながめ乍ら晝食が開かれる。こゝから見えるその東面は誰しも登攀の衝動を感ずるであらう。是非一度と思はせる所だ。三國には「縣社飯豊山御末社箸王子」のある所で標札に「向て左は奥川字彌平四郎へ、里程約一里二十五町。同所より云々」と云ふ山城屋の案内や「右は駒かへし上段、左は新道なり、大正十四年開き」など、言ふのがある。

實川の谷に雪崩の音のひゞくのを後に、東に下り始めたのは一時半。その下りはかつて氷河の擦痕ありとされか岩壁のある剣ヶ峯である。云はれる所のは恐らく雪崩の擦過した跡ではあるまいか。急な下りだがさしてヒドイものではない。クサリや鐵梯子のかゝつた所もあつた。この岩場が地形圖に現はされてゐないのはおかしい。かねて聞いた空海の護摩之段の跡や、荒神を祀つたと言はれる岩窟も何處と知らずに過ぎて了つた。

岩下りを終ると(二・一〇〇)草やぶが續く。鞍部から地藏への登りは雪堤を辿る。地藏山はブナの林の疎らにある氣持のいゝ所であつた。(二・三七)血の池はうまつて見えない。こゝにも大小の小屋跡と横峯神社がある。

なつかしき山々の姿に最後の一瞥を與へてやがて南へと雪田を下る。(二・五八)雪は二町程、妙見のあたりで失せて、道は林の中へ。横峯(二・三四)米位の地點)と名のある所は下つてくれば知らぬうちにすぎる何でもない所だ。

長坂から登つて笹平にでゝホツとした時に見える高みなので特に名づけたのであらうか。笹平から喬木の林が始まる。ひたむきに眞すぐ降る長坂は下るだけでもずいぶん疲れる。杉のこんもり茂つてゐる最初の平は上十五里ゴの小屋場(三・四八)。第二の中十五里もやはり同じやうな社とたゞんだ小屋がある。下十五里も間もなかつた。附近の石楠花の紅や木蓮の白い花が美しい。(四・一〇)澤音は大分前から聞えてゐるがなか／＼川のほとりに出ない。坂は落葉がすべり、木の根がはびこり、兩側の雜草が蒸れてむし暑いこと甚しく、「木ノ根坂」の名の通り木の根の階段のやうになつたのを下つてゆくと坂がゆるくなつて杉の大木が見下され、漸く御澤の平に出た。

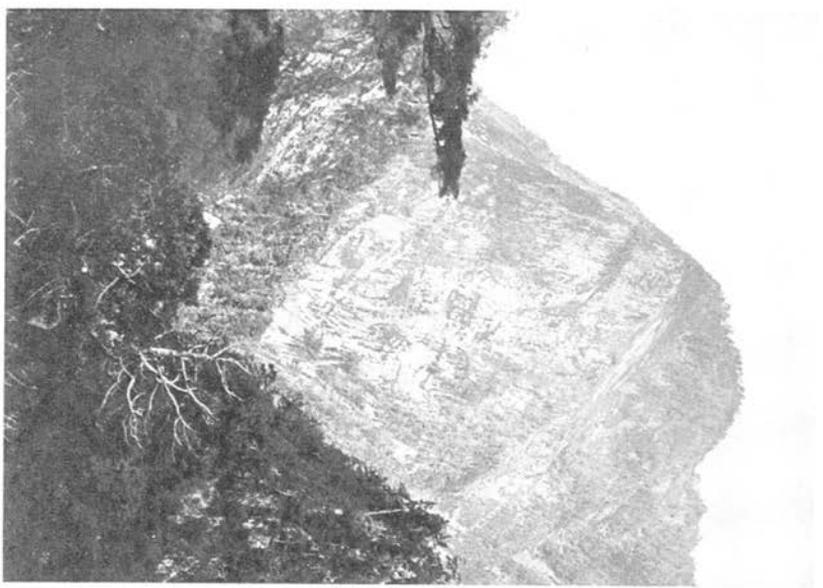
大きい杉の木が十本ほどこんもりしげつた下に御澤神社が鎮りゐます。そこにゼンマイや露が束にしてあつて、まだ煙の立つたき火のあとがあつた。人が近くにゐるのだらう。御澤の水で身體の汗をスツカリふく。この坂では行者でなくても水垢離はとらずにゐまいなどゝ冗談をいひながらたき火にあたつてると里人が二人澤奥から下つて來た。

大白布川の冷いのを徒渉して、いよ／＼道を急ぎだしたのはもう五時に近いからであつた。(四・四八)

それからは川入の村と一ノ戸の遙拜所でわづかばかりの休息をしたに過ぎない。山都午後八時發の汽車にどうしでも間に合はせやうと、私達は夜道を馳るやうにして歩いた。時間を超越した山上の幾日かにくらべて何といふあはたゞしさであらう。それでもいそいだ甲斐あつて目的の列車を捉へることが出來た。



佛鬼谷別宮貞俊



岩小屋尾根上より奥鏡山を望む
岩永信雄

あくる朝、紅に染められた藏王山が私達を迎へてくれた。親しみの深い深い泉岳が淡緑に萌えて私達に話しかけるその伸びくとした曲線を眺めやる私達の心は恵まれた山旅の後の大きな悦びでいっぱいだった。(終)

秋の黒部川

(樺平より平の小屋まで)

別宮 貞俊

昭和四年十月十八日——二十二日

十八日宇奈月より樺平。十九日樺平——オリヲ谷——石小屋坂——水平道路——十字峽。二十日十字峽——廊下を中心——御山谷。二十一日御山谷——平の小屋——ザラ峠——立山温泉。二十二日立山温泉——千垣。

一行 岩永信雄、別宮貞俊

人夫 米谷長次郎、野口松五郎、山本甚井

樺平迄

今年の八月も例によつて黒部川へ這入るつもりで、すっかり仕度をし、テントや重い荷物を鐵道で送つて了つたらば、いざ出發の日に腫物を切開することになり、山へ這入る筈のが思ひもよらず病院に這入つて了つた。その埋め合せもあり、且年來黒部の紅葉を一度は見たいと思つて居たので、岩永君を無理に誘つて出懸ることにした。

日電で作つて居る歩道は昨年の秋既に十字峽には達して居たので、今年何處までついたかを問合せたが、確答が得られなかつた。上下流の連絡がついたと云ふのもどうやら險惡な部分を高廻りするらしかつたが、兎に角出かけて、若し廊下を全部通過することが出来れば拾物であるし、若し通過が出来なければ、信州へ抜けるなり、何とでも方法がつくと思つて居た。

鐵道の時間改正で、金澤行急行は出發が幾分遅れて、三日市へ到着するのが早くなつた。併し人夫はやはりいつもの大山村の連中を連れることにしたので、千垣から宇奈月へ来る連絡を調べて見ると非常に悪い。以前は東京から行けば七時頃到着し、一電車が二電車遅れて千垣からの連中が到着したが、改正後は千垣の一番で來ても、宇奈月へ到着するのは十一時になつて了ふ。それでは餘りおそいので、前日に宇奈月へ來て宿泊する様命じて置いた。

十八日午前六時半頃宇奈月に到着すると會社の人が迎へに來てくれて居たが、肝心の人夫の姿が見えない。また一昨年への二の舞ではないかと氣を揉んで居たがやがて三人の連中が來たので安心した。先づ荷物を日電の事務所へ運び込み、朝食をすませてから、荷物をすつかり解放して、それを區分したり一と騒ぎやつて了つた。日電の新、武藤、高木の諸氏に種々模様を聞くとまだ歩道の連絡はついて居ない。しかし今日位は多分ついたであらうと云ふことで、兎に角吾々が行く時分には何とかして川通し行けるだらうと云ふので大に安心して了つた。川通し行けるとすれば第一日は樺平泊り、第二日は十字峽泊り、第三日は御山谷まで行き、第四日は御山谷を溯つて一ノ越から弘法茶屋へ行き、第五日は弘法茶屋より稱名谷へ下つて千垣へ出ることにした。樺平、十字峽には小屋やテントがあるの、こつちからテントを持つて行く必要はない。しかし御山谷の小屋は數日前に閉鎖して了つて、それも冬期獵夫が遣入らない様に嚴重に閉鎖したから、遣入ることは出来ないと云ふので、私達は當惑した。鍋を持てばともテントを持つことは出来ない人と人夫は云ふので、無駄でも平の小屋まで行かなくてはならない。しかし十字峽

から御山谷まではどの位時間がかゝるか解らないので、御山谷から平の小屋まで一時間で行けるにしてもその無駄は省きたかつた。すると新氏がでは無線電話で平の小屋へ話しをすると云はれるので、私達は始めて發電所と平の小屋で短波長で無線通話をして居ることを知つた。

それで私達はテントも鍋も送り返すことにしてつた。夏と違つて人夫達の荷物が大部分多いのと、今回は活動寫眞の機械を持つたもので荷物は思つたよりも多くなつた。

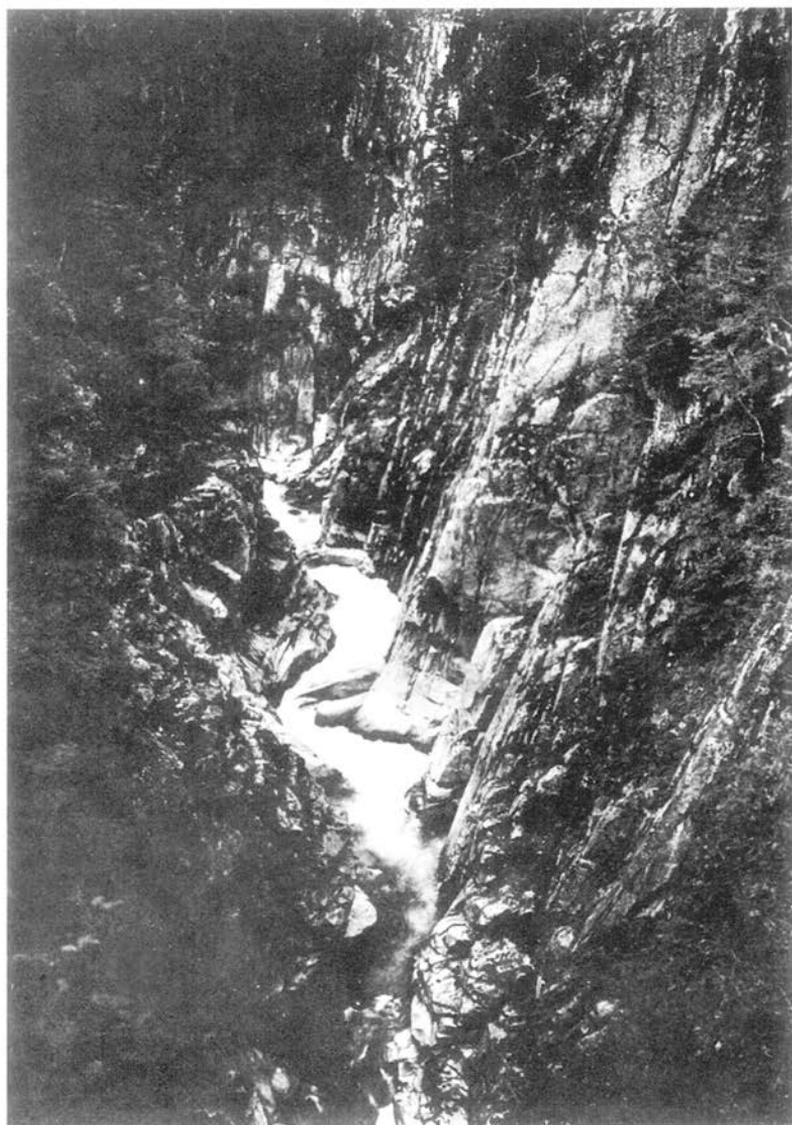
十時發の電車で出發する。柳河原から少しづゝ高い處に紅葉が見え出したが、時々ワレ谷の隙間から見える峯には雪が積つて居る。陰鬱に垂れて居た雲も追々と切れて來て陽光を見ることが出來た。軌道の沿線も先年通つた時は至る所に土工の飯場があつて、實に不愉快であつたが、今では工事も一段落ついたので、あとはすっかり片づけ了つたので、間もなく昔の有様に歸るだらう。所々隧道を掘つた時の土石の屑が、河原に堆積し、それに護岸が施してあるのが甚だしく目障りであるが、それに土がかぶさり、ヤブでも茂ればまた美しくなることだらう。その美しい景色が居ながらにして眼前に展開して行くのも萬更棄てたものではない。

やがて猫又驛に到着すると一般觀光者は下車させられ私達は尙ガンリンの機關車に牽かれ、驚く様な爆音を立てながら、上流に向つた。東鐘釣山の直下に隧道を通し、それを出ると直ちに高いカンチレヴァー橋で對岸に渡る。林道の釣橋は大分下の方にある。本流を渡るとまたすぐ隧道で、要するに猫又より下流では、電車からもなかなか良い展望が出來たが、それ以上では大部分が、隧道で、面白味は塵程もない。軌道の終點で下車して、一寸行けば小屋の平である。樺平までであるから馬鹿々々しい程食事もゆつくりやる。事務所に今夏以來日々の天氣の記録があつたが、八月後半以後は目立つて悪い。しかし十月になつて、雨が三日降り続いたことはなく、それに反して晴天の方は三日続いたこともあるので大に前途を樂觀して了ふ。

一時過ぎに出發したが沿道の不愉快なことは實に言語に絶して居る。至る所道は掘られ、軌道敷附近の樹を伐られ、やはり工事が全部終了しなくては見られたものではない。小黒部谷の少し手前へ來ると最早や其處では工事をして居ないので漸く本來の黒部を始めて見ることが出來た。附近の紅葉はまだ大分早い。小黒部谷を渡り、その右岸についてしばらく登り、間もなく池ノ平へ出る道の別れ目に來る。この峠の上から小黒部の谷へ下れば舊來の池ノ平道であるが、また尾根通し北仙人山へ行く道も出來た。しかし尾根通しの道は上下がひどく、水がなく、二度と行く所ではないと人夫に云はれて見ると大して通つて見たくもなくなつた。別れ道で一服して出掛ければすぐに猿飛になる。普澤だか、下立だかの水に強い者で、猿飛から本流を泳いで小黒部まで行つた者があると云ふことを同行の西川氏から聞かされて實に驚いた。祖先以來の傳統と、慣れとで人間の體力がそこまで行くかと思ふと一面力強くも感じられる。

檨平の別れ道で、またいつもの通り荷を置いて祖母谷を見に行つた。大正八年に私が始めて大黒鑛山から此處へ下つて、黒部の底抜けの釣橋に驚いた時は、實に立派であつたが今では大分朽ちて來た。祖母谷の方へ渡つて一ときり水の流れを飽かず眺めてから腰を上げて檨平に向つた。先年三階建の立派な小屋を作つたら、すぐに雪崩で轉倒した相である。今年は平屋のバラックとテントが四張程ある。やがて事務所の客となつて草鞋を解いた。

黒部の谷へ這入つて、ちやんとした居間に敷物を敷いて座り、その上に必ず風呂に這入るのであるから、十年昔木暮氏が苦闘したのとはまるで比較にならない。食車がすんでから種々測量のことや何か聞き、殊に十字峽まで本流及び左岸の三角測量が完全に出來た相だ、二千五百分の一の地圖を見せて貰つて、大に垂涎を禁じることが出來なかつた。土民測量に少し毛の生えた測量をするつもりで持つて來たライツの測距儀も、一寸出すのが面倒になつて了つた。



十月十八日(曇)午前十時宇奈月發、十時五十分猫又驛、十一時二十分軌道終點、十一時四十五分小屋平、晝食、午後一時十分出發、一時三十五分小黑部谷、二時四十五分祖母谷、三時十分樺平。

十 字 峽 迄

樺平から直ちに三百米ばかり登つて、水平道路に出るものと思つて居たが、此處からオリヲ谷まではやはり舊來の道を行くので、活動寫眞の方から云へば極めて好都合であつた。

幸天氣は申分なく、八時少し過ぎに出發した。川沿ひの道は毎日測量をする人々が何度となく通行するので、すっかりよく踏めて居る。奥鐘山の岩壁は何時見ても雄大其物と云へるが、殊に今回は壁の隙間に根を張つて居る灌木が、黄や紅に彩られて居るので、それが岩の色と映えあつて、實に美しく輝いて居る。やがてシヤマミ坂に出る。水の奔下して居る模様は忽ちカメラに收められた。しかし活動を撮す度毎に之れを背負つて居る人夫は一々荷を下すのだが、悪い顔一つせず、快くやつてくれるので、いつもの通り悦んで了ふ。壁にかゝつて居る綱梯子を上り、壁をへつゝ進む。この邊の悪場で測量に従事して居る人に、満腔の同情を注いで了つた。道はよく手入れしてあるので氣輕に歩くことが出来る。

シアヒ谷でもまた荷を置く。夫婦岩の下で逆光線にキラ／＼輝く水を見ても、どうやら一昨年八月通過した時より水量は大分少い様に思つた。此所からオリヲ谷に行く迄には一寸悪い所があるが、これも釣橋で通過して了ふから他愛ない。此の邊りは一昨年と少しも異なる所はない。オリヲ谷には日電のテントが二張あつた。且寧ろ第一日に少し早く——と云ふより途中で道草を喰はずに、オリヲ谷まで來た方が得策であつた。所々で撮影をするので、うも思ひの外時間がかゝる。

これから上の方に見える水平道路まで登らなければならない。最初の三分の一位が殊に急峻で、雨の時には先づ通れないと考へる方が妥當であらう。登るに従つて奥鐘山が丁度せり出し人形のように漸次高く見えて来る。高みが追々に見えて来るので、紅葉は益々美しくなる。途中で二回ばかり息を入れて、漸く海拔約九百米の水平道路に出た。道の幅は約二尺、これからは全く遊山気分になつて了ふ。最初は私は此の道路は山を見るのに極めて好適のものだと想像して居たが、來て見ると山を見るのには低く過ぎるが、谷殊に右岸から注いで来る支流の全容を觀察するには最も適當して居ることを發見した。又夏でも所々に水がある相で、益々散歩道として適當なことを感じた。間もなく眼の下に餓鬼谷の合流點が見える。先年下の道を通過した時はついうっかりと見落して了つた所である。尙少し進むと合流點は見えなくなるが餓鬼谷の全容が展開して居る。黃紅取り混ぜた中にクロ木の暗綠色が交り、また上の方では一面の樹木がその葉を振り落して居る。その隙間を透して、眞白な新雪が輝いて居る。餓鬼谷の源に位する高みはすっかり新雪の装をつけて、澄んだ空をバックとして浮き出して居る。また上流の方が見える所では右手には仙人山のガンド尾根がその特徴のあるスカイラインを示して、その末は黒部の谷に薙ぎ落ちて居る。その急に薙ぎ落ちて居る所こそ、今まで作郎越の歩道からはどうしても見ることの出来なかつた神秘境である。またすぐ前の尾根はアゾハラ谷のすぐ下手にあつて、尾根の延びた尖端は少し平になつて、松が數本生へ、美しい眺めを呈して居る。其處には其の内に合宿所が建てられる相だが、どうも惜しい。そして深い黒部の谷を越して、雄大な後立山連山が、その巖には新雪をちりばめて美しい姿を現はして居る。やがて小澤の流れ込む所で食事にした。尾根を一寸廻るとアゾハラ谷は美しい瀧になつて居る。その瀧の中腹を釣橋で通過する。アゾハラ谷のこの瀧から下では普通の流れとなり、また本流に注ぐ所では恰も白布を懸けた様になつて居る。次ぎは仙人谷であるが、仙人谷の邊では道は甚だしく彎曲してずつと本流から離れて了ふ。仙人澤の合流點にある大きな岩の島も、上から

指摘出来るし、其の他會遊の地點を皆眼下に指摘することが出来る。道から少し上で仙人谷が瀑になつて居る。道から瀑自身は見えないが、その飛沫は明かに見える。道路はうまく出来て居て、簡単に支流を通過することが出来る。東谷の合流點附近に在る日電のテント倉庫の見えたのは、確か仙人谷を通過するより前であつたらう。日足の早い晩秋の、谷底深く白いテントを見出した時にも私の心は躍つた。雲切谷では丁度その瀑の下を通過する。東谷の落口が直ぐ眼下に見える。東谷はその落口より少し奔流が続いて、一寸した瀧がある。その瀧は上から見た所で左程困難なく通過が出来相である。そしてまた暫く奔流が続いて、正面は高い岩壁に突き當る。水は岩壁の下で暗く激んで居て、動く態は見えないが、それから谷筋は右折して居るらしい。そして周圍の模様から判断して、そこには可なり高い瀑があるだらう。

東谷を過ぎてから道は俄然險惡となる。左岸は極めて急な角度に削立して居て、殆ど河原と云ふものがない。また右岸の作郎越の側も、しばらくは樹林があるが河の近くでは皆岩壁になつて居る。やがて作郎越のクロ木の林も懷舊の種になる。道は追々と棧道が増して来る。作郎越の對岸にある小澤は日電で白雲瀧と命名して居る。先年作郎越を通過した時、これが奥仙人谷であると思つたがそれは誤であつた。本流は益々險惡となり、遂にS字狀に岩の間を縫つて奔下する邊で其の險難は最高調に達した。廊下の此の部分を知らない昔は、何とかして此處を通過したら、など云つたこともあるが、上から此の模様を見ては先づあきらめるのが當然であらう。やがて道は棧道の連続となり、そしてそれが奥仙人谷へ來ると遂に吊橋になつて了ふ。奥仙人谷は日電では半月谷と云つて居るが、實に凄いわれ谷である。

同行の西川氏は私達が度々寫眞を寫して居る間に先きへ行つて了つたが、奥仙人澤の吊橋は針金が細いから安全のために一人宛渡つた方が良いと云ふ注意を守つて渡つた。橋の上から下を見ると随分深い、そして奥仙人澤の底

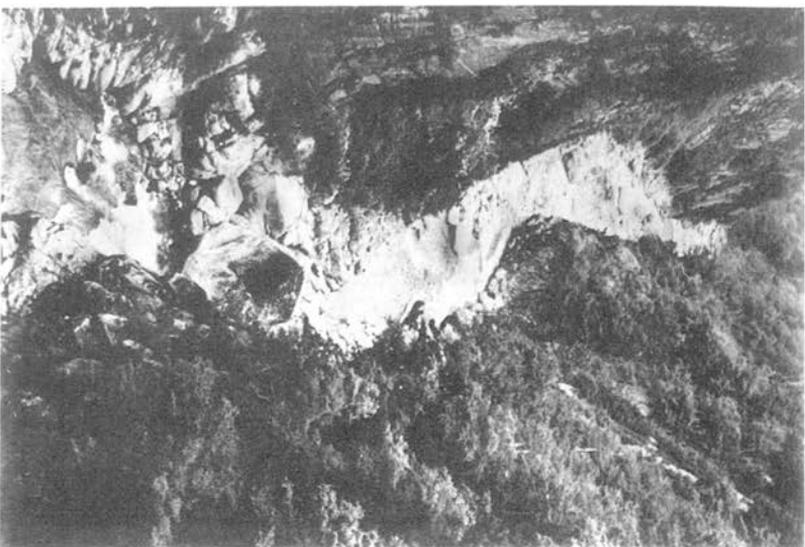
と本流の河原との間には著しい落差がなく、殊に驚いたのは水が一滴も無いことであつた。奥行きは相當にあるらしい。この吊橋を渡つて了ふと長さ二十六間七分と記してある。一寸見た感じでは橋の高さは長さに比べて勝るとも劣ることない。奥仙人谷を過ぎれば何時とはなしに地勢が緩になつて、やがて棒小屋小屋場の對岸邊に來た時は最早や極めて安全な歩道になつて了つた。

一昨年(昭和二年)小屋場から右岸を上流に進んだ時、ロープに頼つて緊張した處も全く夢の様で、殊に水量が著しく少い様に思はれた。十字峽に近く割合に廣い平地があり、それから少しばかり梯子の架けてある所を過ぎると劍谷の吊橋へ來る。橋は落ち口の瀑の直上に架けられ、橋の上から眼下に沸き返つて居る瀑壺を見る。水の流れを追つて眼を移せば本流を距て、棒小屋の澤を見ることが出来る。

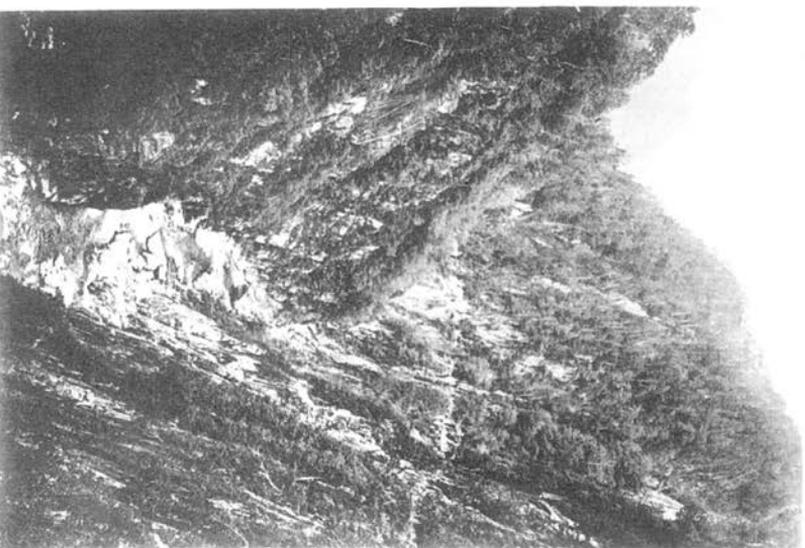
橋を渡つて劍谷の右岸に移れば、離れ離れにテントが張つてあつて、私達はその最も高いのに迎へられて、草鞋を解いた。やがて劍谷の水を汲んで沸かした風呂を沐び、晚餐には鶏のスキヤキや横濱から持つて來た焼豚で、山の中とは思へない御馳走である。一昨年神潭から架橋して、苦心してこの附近へ來た時には實に思ひもよらなかつたことである。

殊に私達の悦んだことは川通しの道が今日辛うじて連絡がついたと云ふことであつた。僅かばかり、命綱に頼つて行けば、高廻りをせず黒部別山谷に行かれると云ふ報告を得て、實に躍り上つて悦んだ。

十月十九日(晴)午前八時五分樺平發、八時三十分シマミ坂、九時二十五分シアヒ谷、十時五十分オリヲ谷、十一時二十五分出發、十二時十五分水平道路に到濟、午後一時四十分アゾハラ谷、二時四十五分仙人谷、三時三十五分東谷落口、四時三十分奥仙人谷、五時二十五分劍谷右岸日電テント。



作郎越の下一下流を望む 岩永信雄



作郎越の下一上流を望む 別宮真俊

廊下の絶険を経て御山谷迄

昨夜テントから外へ出た時には美しい月が、棒小屋の谷の上高く輝いて居たが、それから暫くして、雨の音を聞いた。今朝起きて見ると霧小便で、白い霧が棒小屋の谷を充たし、クロ木や紅葉が霧を通してかすかに見える様な天気なので少からず失望した。此の廊下の神秘境を通つて、記念に寫眞を撮つて歸るにはどうしても天気の好い日に通過したい。それなのに此の天気ではと少からず悲觀して一時は滞在して劍の大瀑を見に行つて今日を暮さうとさへ決心した。併し食事を終つてから空模様を見ると幾分明くはなるし、人夫達の見込でも大したことはあるまいと云ふ。それに秋の天気とすれば、これなら先づ好い方で、明日必ず天気だとは云へないと云ふので再び思ひ返し周章てゝまた出發と定めた。

出發ときめるとまた諸所の寫眞を撮るので、一しきり忙しくなる。一昨年行つた、本流に面した一枚壁の上の踊場へ行く。水の流れは前と同じく、いくら眺めても飽きることを知らない。少し下流には籠渡しが出来て居て、昨日櫂平を出發して、私達より早くテントへ到着した二人の人は、籠渡しへ乗つて本流へ流測計を垂れ下げて、水量の測定をして居る。その籠渡しを渡り、棒小屋澤の右岸の尾根を眞直ぐに登れば棒小屋の二俣へ容易く出られる相である。

天候は益々好くなつて、空に晴れ間が見えるので大に勇んで左岸の道を行く。樹立の中を間もなく過ぎると黒部の本流が眞直ぐに可なりの間見える。神潭の露營地がすぐ下に見えまた架橋した所もすぐ下にある。長次郎が設計した、眼をつぶつて居ても渡れると云つた橋の、橋臺とした大岩は今日は少しく水を被つて居る。此處で見れば水量は一昨年より少し多い譯である。

一昨年苦しんで通過した處を、いろ／＼と求めたが、道が出来て了ふと實にあつけない。數時間汗を流して通過した處が數分間で通れて了ふ。これから上流の地形は概して、右岸より左岸の方が傾斜が緩慢である。道は一箇所梯子があつただけで、あとは極めて樂な、危ない所である。

時々感歎の聲を發しては人夫の荷を解いて寫真機を出す。大正十四年に冠、沼井、岩永三氏が力行して廻行した所が、散歩氣分で歩けるのであるから桑滄の變と云つてもいい。岩壁の大、流水の壯と相俟つて、紅葉は益々美しくなる。道傍に一寸した平があつて、道路工事の請負のテントが張つてある。

歩きながらも一々岩永君から大正十四年の模様を聴く。ピトンを打つた處とか、石を深みへ落した所とか、しかし聴く私にはどうもピンと響かないのも致方ない。廊下の廣河原と名づけられた美しい右岸の川原を下に見て進むと、追々地勢が急峻になつて来る。下ノタル澤の水量の少いには實に驚く。そしてその下には一寸した川原と云ふには餘り小さい礫の堆積がある。本流は此の下手で著しく複雑に奔下して居る。

下ノタル澤より僅かばかり上手に對岸から小さな瀧が落ちて居て。それよりまた少し上手にも、また一つ大分大きな瀧が落ちて居る。これから眞の廊下となるらしく、左岸の道も愈々岩壁にぶつかつて棧道が始まるらしく見えた。寫眞を大分寫してから、出發し、愈々棧道に掛つた時に私達は非常に驚いた。此處から暫くの間は兩岸は全くの壁で、左の道は最早や道ではなく川の方向に架けられた橋と云ふ方が適當であらう。岩壁に徑二種位のボルトを水平に打ち込み、その端を壁の少し上に打ち込んだ他のボルトから針金で吊るす。その水平のボルトへネツのしつかりした丸材を三本許り渡して居る。その橋の下は直ちに本流の水である。その橋が、右岸の壁に沿うてずつと架けられてある。

本流は下ノタル澤より暫くの間、この絶壁の間に挟まれて、波一つ起さず、油の如く靜かに流れて居る。その下

プの深さは、たとへ深い青味を透して底の石が見えて居ても驚くべき程であらう。しかし此の澗の終る突き當りを見れば再び黒部の本性を現はし、岸を噛み、岩に咆えて奔下して居る。

寫真狂の私達も此の橋の上では如何とも爲し得なかつた。唯右側の壁に張つてある、手摺りの針金につかまつて行くばかりで、橋の上ではリユックサックを下すことが出来なかつた。美しい瀧に面した左岸の壁には白龍溪と記してある。恐らく日電の稱呼であらう。道が右に曲つた所で幸に岩壁に凹みがあり、ここでは道も若干廣くなつて居るので荷を下し、寫真を貪り撮した。

上流を見ると巨岩累々として居て、その突き當りは高い壁となつて居る。道は最早や橋ではなくなつた。西川氏は小屋を出發する時から先きへ行つたが、丁度此所に日電の人が私達を待つて居て案内してくれた。時々上流でハツバをかけて居る音が無氣味に聞える。左岸から大きな空澤が這入る。此の空澤の左岸の壁の一部が今年になつてひどく崩壞して、その巨岩が轉々として、遂に黒部の木流を埋め、石から石へ渡つて對岸へ行ける相である。しかし對岸の壁が直立して居るので、結局河は渡れても對岸へは取りつけないと云ふことである。此の空澤を過ぎると川は右に曲る。そして左岸では今道路工事の最中で、綱を水平に張つて、工人は皆高みから下した綱に躰を縛つて岩壁にダイナマイトをかける孔を掘つて居る。その惡場を過ぎれば黒部別山谷が這入つて來るので、非常に明るく感じられ、且正面には黒部別山谷の右岸をなして居る岩峯が特異な姿を、現して居る。綱にすがる處で始めて緊張して、黒部別山谷に來た。

黒部別山谷も今は源流の雪も無くなつたと見えて水量は極めて少い。天候も此の時分にはすっかり晴れて黒部別山谷の白味がかつた石や、奔流の泡に反射する陽光は眩しい程である。黒部別山谷はもつと急峻の様に想像して居たが思つた程でもなかつた。然しさりとして決して緩かな勾配で這入つて居るのではないから、源流に殘雪の多い豊

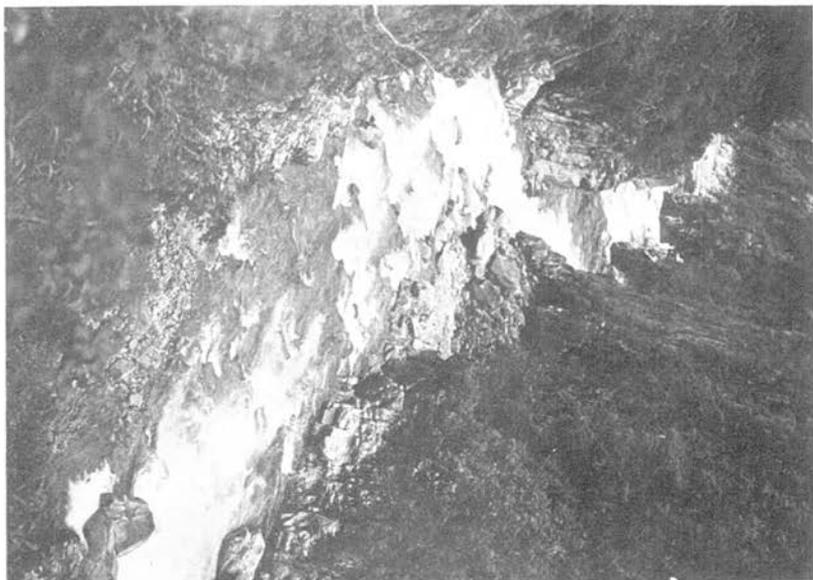
水期にはこの落口でも壯觀を呈することだらう。西川氏は既に到着して居られ、此處で同氏と別れることにする。西川氏は黒部別山谷の落口から少し登つた所に出来て居る小屋掛けに行くし、私達は別山谷の落口の上手から本流に架つて居る籠渡しを渡る。完全な籠渡しではあるが荷物と人とが全部渡り了るまでは一寸手間取つて了つた。本流の右岸の河原で流木を集めて火を焚き、晝食を認めた。

黒部別山谷より上流の本流左岸の岩壁はまだ全く人工が這入つて居なかつた。それこそ薙ぎ落ちた様な壁で、そこをへつるなど、云ふことは全然望めないことである。しかし全く人工の加つて居ない部分も極めて僅かで、多くの工人が盛に岩を割り、棧道を架けて居るから、旬日を出でずして、徒手の襲撃者を近づけなかつた大へつり下手の悪場にも道が通じて了ふであらう。しばらく左岸の川原を進めば、また籠渡しがあつて、再び本流を渡つて大へつりの中間へ出ることが出来る。そこには既に新越の方から來て居る道があるばかりでなく、簡単な小屋掛では鍛冶屋がしきりと岩に孔を掘る鑿を鋭くして居た。

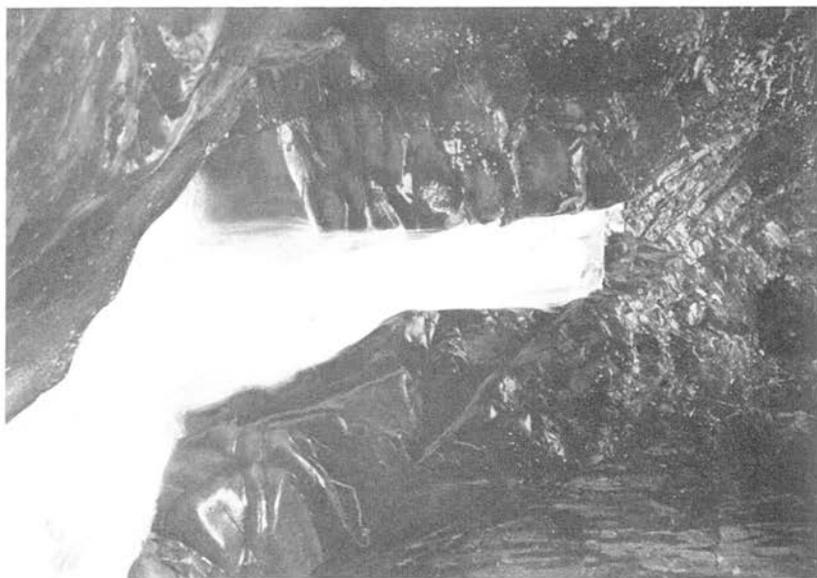
一同が渡り終つてから、話に聞いて居た大へつりの悪場も道の出来たために苦もなく通過して了つた。昨夏來た時、大きな残雪があつた所には今年もまだ残つて居る。しかし川岸が妙に駄々闊くなつて、見た印象は夏とはまるで異なる。時間が餘り早くないので私達二人には野口老人が寫真機を持つてついて來ることにして、あとの二人は荷を持つて一時も早く御山谷の小屋へ行くことにした。

新越の瀑の下手には天幕が二張あり、ヤブを伐り開いたらしく何となく荒涼たる感じがする。道から別れて、天幕の裏を廻れば、新越下手の狭流の見える大岩の上へ出ることが出来る。水の動く有様をカメラに収めてから私達も先きを急いで上流に向つた。暗くならない内にと隨分急いだ。榛ノ平、鳴澤小澤でも休まず、内藏介澤で初めて休む。一息ついてまた出かけ、丸山の壁の下で漸く廊下の圏外に出た時に雨が降つて來た。しかし此所まで來れば

神澤の上手



鉦澤落口の瀑布 岩永信雄



あとは日が暮れても大したことはない。御前谷では去年は樹が茂つて居て暗く感じたのに、今年は大分樹が伐られたと見え、夕方ですら明る感じられた。これからは得意の夜眼を働かせ、歩きながら菓子で空腹を醫しながら午後六時に御山谷に到着した。

無線電話がやはり豫期通り通じて居て、小屋はすっかり宿泊の準備が出来て居た。置手紙で平小屋から来た人が五時半まで待つて居たことを知つた。食糧、食器、寝具、炭、何一つ間然することなく、大きな小屋を吾々だけで占領して、今回通過した所を回想してはいゝ氣持になつて了つた。夕方から降り出した雨が霽になつた様であつたが、小屋の中ではいゝ氣持で火鉢を圍んで雑談に花を咲かせ夜の更けるのも忘れて了つた。

十月二十日、曇晴雨、午前九時三十五分出發、十時五十分下ノタル澤、午後十二時十五分黒部別山谷、午後二時十五分再び籠渡しにて本流の左岸、午後三時新越澤下、午後六時十五分御山谷小屋。

御山谷より立山温泉

朝起きて見ると昨夜寒らしかつたものが雪になつてあたりは眞白になつて居る。御山谷を廻行して一ノ越へ出るつもりであつたが、この雪ではとても駄目なので、その計畫はさらりと棄て、平小屋から立山温泉へ出ることにした。戸外の雪は中々止まず、時々起る突風につれて白煙の如く窓外をかすめる。ザラ峠が無事に越せるかどうかとも懸念されるが、兎も角平小屋に出ることにする。

吊橋を渡る時には川面を吹き下して来る突風に襲はれては凍つた針金を握んで、滑らない様に頑張つた。足も最初は冷いが、暫くすれば反対にほてつて来て、決して冷いとは感じない。この雪の中で先きを急ぎながらも時々野口の老人を煩はし、背につけた活動寫眞機を下して、附近を撮影するだけの餘裕があつた。小スバリ澤附近で、あ

の廣い河原に新雪が積み、カラマツの黄葉が風にゆられて居るのを見ると、この數日の間の自然の變化の急なのに驚く。

途中で下流の方へ行く人に會ふ。芦峯の人で、新越まで用事があつて行くのだ相で、今日のザラ峠の模様を尋ねて見ると、今日の様な日に越せれば越せない日はない相だ。いさゝか悲觀する。

しかしそれにしても私達の幸運を悦んだ。昨十字峽を出發しなければ、十字峽から一步も出られなくなつて居ただらう。

中ノ谷上手の吊橋へ來ると本流の左岸では日電の一隊がボーリングをやつて居る。昨年やつて居た御山谷の下手は掘つた所が湯が噴き出したので放棄した相だ。その湯は鐵管で導いて、路傍の浴槽に溢れて居た。一時雲が無くなつて、陽光に輝く赤牛や、木挽山が姿を現したので、悦んだがそれもぬか悦びで、再び陰鬱に曇つて雪が降り出した。米谷の云ふのにはこう云ふ天氣が一番悪いので、とても良くなる見込はない相だ。

平の小屋につくと其處では最早冬營の準備が出来て居た。今朝早く大工が二人ザラ峠を越して温泉へ向つた相で、引き返して來ない處を見ると越して行つたのだらうと云ふ。我々の行動についても種々考へたが、兎に角ザラ峠へ行つて見て、危険ならば引き返すと云ふことにして、時間は大分早いが此處で晝食を認めることにした。雪はやはり降り續けて居るから、少しも早く出發と云ふので挨拶もそこくで平の小屋を出發した。

雪を浴び、雪の山を見ながら登るので、すつかりスキーに行つた氣分になつて了つた。カリヤス峠までは積雪も少く、何でもなかつた。しかしカリヤス峠から中ノ谷に下る處では雪は大分深くなつて來て、中ノ谷の左岸を登つて少し上へ行くと、我々素人には一寸途を見出すことが出來ない位深くなつて居た。峠を越したら風も樂になるだらうと暢氣に考へて、風を背にして時々息を入れる。やがて峠が近づくと壞れた笠が半ば雪に埋れて落ちて居た。

恐らく朝小屋を出發した大工のものであらう。峠の上へ出ると豫期に反して風は猛烈に吹きつける。やはりこの雪は日本海から吹き送られて來たのだ。積雪も約一尺五寸もあらう。逃げる様に峠から馳け降りた。ザレをへつる所では道がすっかり雪に埋つて、一面の眞白な急斜面になつて居るので、僅かの所を通過するのに随分時間がかゝつた。そこを過ぎてからは別に特記する様なきは無く、やがて川を渡つて左岸を下り、再び渡り、三度渡り、そして妙に衰弱した私は岩永君より二三十分遅れて立山温泉に到着した。

温泉へついでから先づ砂糖湯をと思つたが、二三日前にすっかり冬營の準備をしたもので、砂糖は愚か何一つ享樂材料はない。米は大抵大丈夫だが、味噌が怪しいと云ふ様な有様だつた。其の上室の疊はあげて了つたから我々は帳場へ寝かして貰つた。

十月二十一日、雪、午前八時四十分御山谷小屋出發、九時小スバリ澤、十時中ノ谷吊橋、十時二十五分平小屋、十一時二十分出發、午後十二時四十分カリヤス峠、一時出發、三時十五分ザラ峠、六時十五分立山温泉。

後 記

翌二十二日は雪も降らず、暢氣に水谷平まで行く。途中で朝日に輝く、新雪の薬師岳を見ては、またいくつとなく寫眞を撮す。砂防工事の事務所へ寄つて、發動機車に便乗することを頼んで、ぶら／＼降る。水谷平から下にはもはや雪はなかつた。水谷平の白樺林、その下のカラマツの林、また對岸の錦を着飾つた山々は昨日までの氣分とは打つて變つて和かなものであつた。鬼ヶ城の手前から發動機列車に便乗し、また藤橋から、千垣までも工事列車に便乗して漸く無事に秋の黒部の旅を終つた。

(五年一月十二日)

○峠 大島

英

左の一篇は故大島亮吉氏の遺稿であつて未だ世間に發表されなかつたものである。唯この前篇とも見る可きものは、曾て雜誌「山とスキー」誌上に掲載されて、其後俄に「峠」の禮讀者が増した程愛讀されたやうに覺えてゐる。本篇は其續稿とも見る可きものであるから、前者と合せ讀まれたならば更に一層の興味を覺えるものがあらう。尙ほ同氏の遺稿で未發表のものは機會ある毎に本誌に掲載したい希望である。

峠

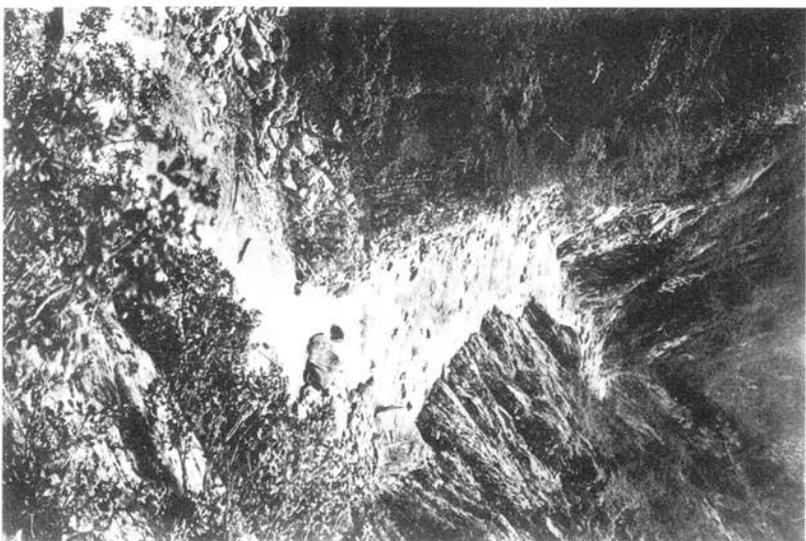
大 島 亮 吉

二頂の間、又は山稜の鞍部に、道路の通ぜしものを「峠」と謂ふと、地形學では教へられた。我國で、その意味の「峠」なるものを、言ひ表はすに用ひらるゝ語の中で、最も廣く用ひられてゐるものは、勿論「タウゲ」(即ち「峠」)である。「タウゲ」の語原は、往昔旅人が道中の安全を祈りて、その守護神に「タムケ」(手向)するそれより出で、その音便が即ち「タウゲ」であると謂ふ。而して「タムケノカミ」(手向神)即ち道祖神は、古昔は山の峠に主として祀られて居た。その名残は、今日でも尙多く存して居る。それ故「タウゲ」の第一義は、阪路の登りつめたる處、即ち峠の頂上となつて居る。峠の他に餘り一般的でない、又は一地方の俚言、特殊な專用語として、同じく峠の意に使はるゝものには、「サカ」(坂、阪、嶮)、「タワ」(撓、伊豆、武藏、尾張、中國)、「ダワ」(飛驒)、「タヲ」(嶺、古言)、「タラリ」の下略にて「タウゲ」と同義、中國、四國地方の方言)、「トラ」(撓、土佐)、「トネ」(佐渡)、「ノッコシ」(乘越、信濃)等が存する。それから、これは名詞ではないが、接尾語として、又「こゆる路、峠路」の意を表はし、固有名詞と接續して使はれる「ゴエ」(越)がある。「サカ」は單なる上りを云ふ他に「のぼりくだりする道」の意ありて、即ち峠の意となる

廣河原附近



神潭附近より上流 岩永信雄



と。「タワ」は山の頂上の撓みて見ゆる所を謂ひて「タワリ」と同義にて、所謂鞍部を云ふ。嚴格に云ふ峠の意ではないかも知れぬが、乗越と等しく山人俾人の越ゆる所謂 *Native Pass* である。「ダワ」は勿論「タワ」の訛言。「トラ」も「撓む」と云ふ動詞より出でた方言だと云ふ。(以上のもの登高行第一年一四六頁野村登是氏「地形を表はす方言」に依據するもの多し。)

以上の中、それが固有名詞としての峠名に用ひらるゝ、最も多きものは、中部日本、北部日本に於ては「峠」「越」「坂」である。その中で又最も多いのは勿論「何々峠」と謂ふのであるが、それに次いで「越」で、これも相當にある。「坂」は前二者に比較しては、甚だ尠いやうである。然し「何々坂峠」とか「何坂越」とか、或ひは又「何越坂」としたりした頗る丁寧な言ひ方をしたのは、又相當に地圖でも眼に付くやうである。

如何なる大なる山脈とても「峠」と云ふ意義の、或ひは又それに近い意義の地名語を有して居ないものはない。ヒマラーヤの如き、彼の大山脈でも人は印度から西藏へ越す、高い峠路を有して居る。'pa' と謂ふ語は峠のことであると。峯は唯だ K_1 、 K_2 、 K_3 或ひは B^x と *Karakoram* の頭文字を、或ひは三角測量の観測者の名の頭文字を採りて番號付けられねばならぬ程に人との交渉の尠 *Karakoram* や *Hindu Kush* の大山脈でさへも、二萬呎に近 *S* 峠は古昔より存したのであつた。それ等は勿論所謂 *native pass* である。Balistan と *Kashgar* との交融を繋ぐ古來よりの峠 *Mustagh pass* (一九・〇〇〇呎) の如きは、その最も著しいものであらう。必要は人をして斯かる二萬呎の高い峠をも見出さしむるのである。

高架索に於ても峠は澤山ある。皆一萬呎を超ゆる *Glacial pass* である。よく高架索の峯名に見る 'Tau' なる語は *Freshfield* に依ると、土耳其語で 'a range' とか、或ひは 'the point at which it is crossed' とか、通常の意義であると謂ふことであるから 'Tau' は正に又我國での「乗越」と同義である。

土耳其語には、その如く確然とした「峠」の意義を有つ語は無いとしても、同じ高架索山脈でも Adai-Kokh 山群では Ossete 語の 'Ysoik' と謂ふ立派な峠の意義を有つ語があつて、又その峠名の例も多い。更に高架索でもカスピ海近くの Daghestan 山脈には Merzbacher に依ると「アルプスで使ふ 'joeh' の意義である Tschetsch 語の 'duk' がある。

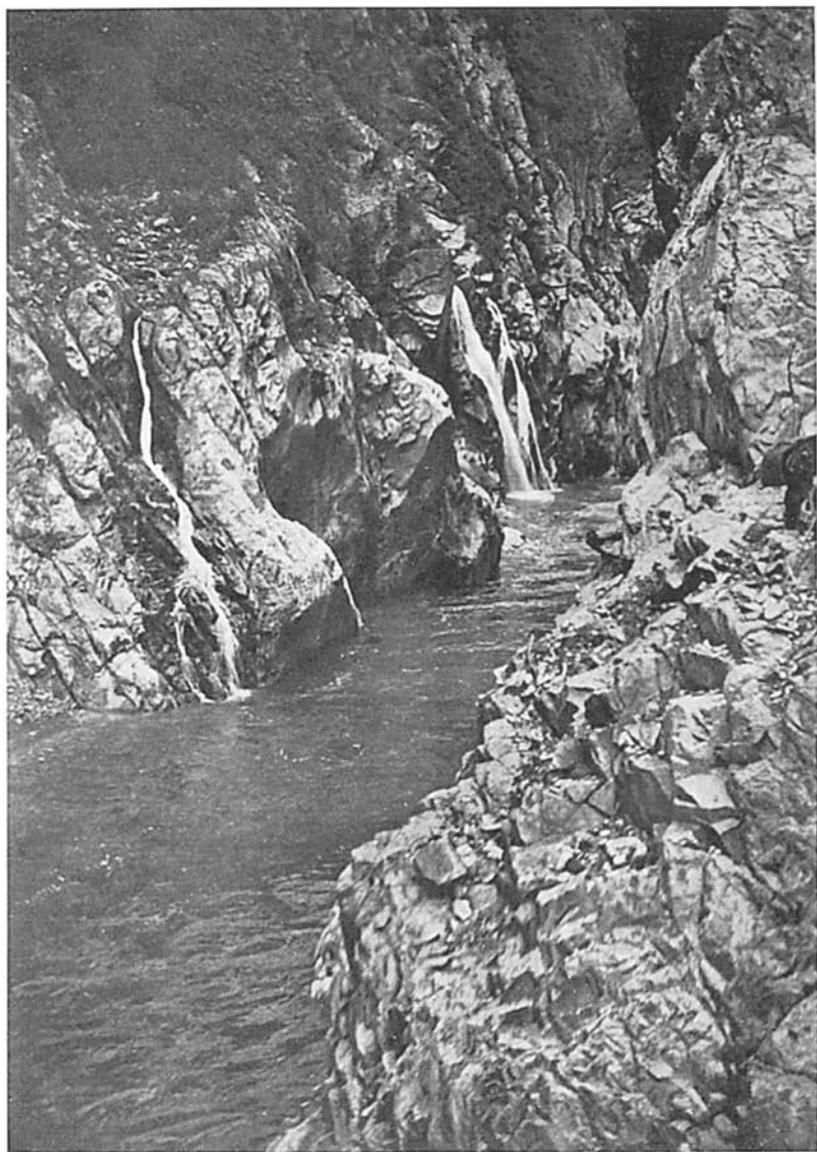
アルプスには峠に當たる語は澤山にあり、それ／＼各山群、各國各地で、特有な原義ある語、方言を用ひて峠名は出来てゐる。獨乙語系の地方では Pass を、伊太利語系の地方では Passo を、佛蘭西語系の地方では Col を最も廣く使つて峠名は出来てゐるが、以上は皆「峠」の意を原義にしてゐる語であるが、特殊なものとしては「E」の意である Thor, Porta, 「切れ目」の意である Furka, Brèche, Scharfe, 「肉又」の意である Forcia, Gabel, 「E」の意である Bocca 等が、それぞれ Dauphiné とか Bernina とか Dolomiten とか、アルプスの各山群で特別に用ひられてゐる。又 Scheidegg, Scheideck の如く、主として低い峠にのみ使はれて居るものや、Tauern の如き一局部地方に特定のものもある。この Tauern と前出の高架索に於る Tau とを比較して見ると、偶然なのかも知れぬが、餘りの近似に驚くと Freshfield は言つて居る。嚴格に言ふ「峠」の意では無くとも、我國にはまた「窓」と「きれ」と云ふのが存する。山稜の凹部を言ふのであるが、前者は越中劍岳にのみ特有で、後者は信飛國境を成す穂高岳の山稜と、後立山の尾根にのみ限られて居る。私は Mont Blanc 山嶺と Graian Alps とに在る 'Fenêtre' と日本の越中劍岳に存する「大窓、小窓、三窓」との偶然の一致に、深い興味を有つ者である。

日本で使はれる「たうげ」とは、好ましい語音だ。「峠」と謂ふ國字も可笑しい位に、可愛い理詰で出来上つて居るぢやないか。「山を上つてまた下る」と。そしてその語の起原に於ては正に日本的らしい。日本的だ。Weston や Freshfield の悦ぶのも單なる exotism ではない。古昔の旅人の、いみじくも床しき旅の習俗より起つたその「た

うげ」の語義。それだけで我々は古昔の歩旅を懐ふ。私は「たうげ」と謂ふ語音それだけでも、旅情を咬られずには居られぬ。「ごえ」(越)もよし。これを附尾して「何々越」と云ふのを聞くと、全く山を越えて向側へ行くと云ふ氣持がはつきりと湧かしめられる。峠名としては、この二つの語を用ひた「何々峠」と「何々越」が最もふさはしい、好い感じを與へる。峯よりも峠の方が、夙に人と交渉があるが故に一般には、峯より先にその名を有すると謂ふことは、説明の要の無いことであらう。然しながら特殊な事情は峠よりも、峯により早く名を人は付けることがある。その好例は Coolidge の示したアルプスの例である。即ち平原より望みて、特に他の山頂より超然として、孤高の姿もて聳ゆる峯頂は、同峯の屬する山脈に、未だ人が實際の交渉を、即ちその山脈の最低凹部を見出して、それを向側に越える以前に、既に命名せられると謂ふその例は、彼の Cottian Alps の最高峯にして名峯たる Monte Viso (或ひは Monviso) にて、その一萬二千六百〇九呎の頂は、洵に Piemonte の平原より望みては顯著である。それ故、人は未だアルプスに如何なる峠名さへも存しなかつた古昔より人々の口に上つたのであつて、然ればその名も Monte Viso 即ち 'visible Peak' となされたのであつたと。然しながら大體に於て「峯」は登山者のものだ。そして「峠」は旅行者のものなのだ。所詮人事を離れて「峠」は存しない。爰に於て「峠」の我々に與ふる情趣は、その有つ歴史であり、傳説であり、口碑であり、民話である。即ち換言せば、その峠の背後に續く往昔と謂ふものである。峠の有つ歴史的興味。それが古き由緒ある永年の歴史を有するものであつたなら、勿論興味は甚だ深い。然しながら今では、その往昔の面影を留めぬほど *prosaic* な姿の峠路でも、その麓の一村老から荒唐無稽、牽強附會も甚だしいやうなたはでもない、口碑傳説の一片を聴かされるに到つて、その峠越えの興味湧然として、心胸に漲るを覺ゆることもある、ましてや興趣豊かな歴史的背景の、色彩濃き靜かな峠路に、いにしへの華かなる面影をたづねんとするに於ては、旅人の哀情を更にせしむるに、峠の頂に鳴るに松籟の音あり、その上にかどやくに峯の夕榮があ

る。洵に旅行者にとつては、その峠が古いといふことが、大きい深い美の要素である。歴史の上に、大きな存在を有する著名な峠よりも、更に旅行者の興味を惹くのは、もの皆それと定かならぬ古昔と云ふものゝ中へのみ、唯だ生くるところの口碑傳説に依る峠のことである。その何處を越えたるかを明かにせずして、古くより口傳として残りし峠。そのかみの頻繁な通行も今は全く途絶えて、それと路筋を辿ることも出来ぬ古き峠路。此等の峠こそは、洵の旅行者の心を有つ人々の好事に近い興味を惹き起さずには止むまい。その生涯を通じて洵に登山者としてよりも、寧ろ偉大なる旅行者たりし彼の Freshfield が、一千八百八十三年六月の或る日、その友 Coolidge と共に驛馬車に揺られつゝ、佛蘭西領の Ubaye 谿谷より伊太利亞の平原へと Cottian Alps の峠 Col de l'Argentière を越えし時、ゆくりなくもこの兩登山史の大家は、彼の Hannibal はアルプスの何處を越えしか、と云ふ歴史上未決の一問題を語り合つて、終にその後の Freshfield のこれに對する研究ははしなくも、彼のこの問題の緒を與へし彼の Col de l'Argentière とは Hannibal's Pass' であると主張せしむるに到つたのであつた。Freshfield こそは峠の愛好者だ。彼の「峠越え」に就て誌す左なる一章句こそ、それを最もよく我々に教へるものだ。彼は即ち「峠越え」の愉しさに關して曰ふに、

“There is the instinct of every healthy child to get to the top of the nearest mound or sand-heap, and then to roll down again. There is further the craving of the more intelligent infant to get to the other side of things. The vigorous adult satisfies these longings by climbing over peaks and passes. There is more excitement and exhilaration in the peak; but it may be maintained that to a refined taste there must be more subtle and lasting enjoyment in the passes. The approach to a crest which has long barred our range of vision is always fraught with a dramatic interest. In a new or



白 龍 溪

岩 永 借 雄

unexplored district there is the practical question of the nature of the ground, stops or precipice on the other side. There is always the pictorial interest of the new landscape which is suddenly unfolded as the ground drops from under our feet, and our horizon is suddenly shifted. The descent into a strange valley through a landscape differing in colour, in expression, in features, in foliage, and in fertility from that we left in the morning, among people of another race and villages of a distinct architecture, condenses into the smallest possible space of time some of the most delightful sensations of travel.' (Below the Snow Line, pp. 171—173.)

斯くて彼は、アルプスの幾多の峠を越え、高架索の主脈を十一回も各異なりたる pass に依つて越え、Kangchenjunga を繞る幾つもの la を越えたのだ。十八世紀以來杳として、その記録を失ひ、世を忘れ、世もまた忘れたる高架索の桃源境 Suanetia の中世その儘の、城塔より成る村落を遙かに一世紀半の年月を置きて、始めて他の世界の者として、途も絶えし古き native pass の頂より瞰下せし Freshfield が以上の事を説くのは當然であらう。又その main chain を Baksan より Suanetia へと繋ぐ古き glacier pass を reopen す可く越えし彼が、その心境も容易に察知せられる。又彼の Karakoram の大山脈を越えたる Balistan と Kashgar との古昔の交通路であらうと想像せられ、然もそれは同山脈の南側 Balistan の住民にのみ傳説として存し、何等その地理的位置としては依據することの出来ない Satoro pass を越えんとする熱望にて、その所在を求めつゝ荒涼未知二萬呎の山谷を跋涉せし Youngusband の心意も、正にこの旅行者の峠に對する古昔の有つ興趣に、その一端を發して居ることであらう。不毛磽确、人に住地として許さざる甚だしく、正に Stone-waste の名に背かない其等の山谷の間にも一路人間の隠れたる歴史が、必要と忍耐とに依つて踏み馴し、痕づけ、そして今は唯だ民族の有つ傳説の中に、幾

世紀も埋もれて居たと云ふその形に於て消えたとして、なほ人の記憶から記憶にと残された斯る峠路を、何ものかに惹かるる如く未知の水河、山稜の峻絶をもともせず、辿り行つた彼の心境こそは、旅行者に對して「峠」の有つ魅力の一適例である。

我國では峠の道筋、殊に峠の頂上には、よくいろいろの形で神を祀つてある。それが前述の如く、手向神の名残であることは明かである。その神體はいろいろあるらしいが、詳しいことは知らぬ。然しながら中部日本で最も多いのは、恐らく地藏尊ではないかと思はれる。實際に我々は峠の頂に、よく石の小さな地藏尊が安置されており、又道筋に里程を刻んだ地藏尊の建立せられてあるのを見受ける。これは固より往昔に於ては、第一には旅人守護の爲に祀られたもので、且つ第二には、旅人の爲の道標の役目をさせられたものであらう。往昔の苦痛と危険の多い旅に於て、旅人を守護するために祀られし地藏尊。祀りし人は又恐らく心やさしき旅人か、又は旅の苦を知るその土地の者か、又は情ある旅僧等の如き人々であつたであらう。兎に角氣紛れの慰みや、又は慾の皮の張つた寄進等では、ちよつと出来悪いほどに、それは勞力日子を要するものである。それにしても何んと優しき心根の發露であらう。又それを單なる道標として見ても、それは今日の旅行者の眼よりして、彼の青年會、村役場、營林署の建てる道標と比べては、何んと床しい雅致ある道標であらう。必ずや往昔の旅人は、これ等の地藏尊の慈しみに充てる温顔に護られ、慰められつゝ幾多の峠を越えて、辛勞多き旅路を辿つたことであらう。今日でもなほ中部日本では比較的地藏峠なる峠名の多いことが、その往昔の名残を地圖の上でさへ傳へて居る。保福寺峠と並んで、上田と松本平とを繋ぐ地藏峠、上州鹿澤の山ノ湯へ行くに、信州から越える地藏峠、朝日岳の麓より寒河江川サカエの水上へ越す地藏峠などは、自分も越えたものである。上田への地藏峠は名のみのもので、その峠路には一基の地藏さへなかつたが、山ノ湯への地藏峠に至つては、峠の頂上まで八十何番かまで、うるさいほどに新張(ミハリ)の村を一番とし

て「道しるべ」の役目を務める地藏尊が安置せられてあつた。最後の地藏峠は、古い古い月山への參詣道で、もの寂しい峠の頂上には、唯一基の地藏尊が寂然として、月山へ詣でる遠路の敬虔なる參詣の旅行者を、護つてゐるかの如くであつた。名實共にふさはしい地藏峠であつた。然れど實際に「地藏峠」の名は附いて居らずとも、その峠の路筋や頂上に、地藏尊の安置されてある峠は、數は頗る多いであらう。そして今日でも、そんな峠を越え歩いて見ようとする旅行者に對しては、時としてよい感概を齎らさしめる。

それは四月も終りであつたらう。寒い雪交りの西風が尾根に強く吹く日に、梅峠（又は相木峠^{アヒキヤツツ}）の頂を、信濃佐久へ越した。するとその人氣なき峠の頂には、十石峠の「峠茶屋」の老婆の言ふ如く、頭の缺けもげて居ると云ふ小さき地藏尊が、ちよこんと一基寂し氣に立つて居た。頭は缺けても、又誰かに拾つて載せられてあつて、加之その周りには小石が澤山に積んであつた。その小石は勿論「峠の手向け」の習俗である。峠を越える旅人は、己れ遠を守護し呉れる地藏尊の爲に感謝の意として、必つとこの梅峠の地藏尊も、石の奉納にあづかつたのであらう。往昔の旅人の野花を折り、石を拾ひてなになりともを神の手向にすると云ふ古い床しい習俗。思ふに旅行者こそは、何ひとつ餘分のものを持つて居ない。特に往昔の足を頼りとするのみの歩旅をなす道中に於ては、殊にさうであつたらう。そこで彼等は「手向ノ神」へは何も手向けるものもないからとて、峠の路上に落ちて居た、あり合ふ小石の一つを拾つて、手向草（タムケグサ）として行つた。前に越えて行つた旅人の例に倣つて、後來の者も、又小石を手向けた。それが恁んなに澤山に積まれたのだ。さう云ふ風に唯だその時思つてみた。これにはなんにも根據のない己れ一個の想像だ。唯だ自身一人さう考へてその時その寂しい峠、草原と落葉松林の間の峠路を越えたのであつた。兎に角旅人に依りて傳へらるゝ「峠の手向け」なる往昔の習俗は床しいものである。手向山、手向草、手向神と云ふ語に依つても、その一端は窺はれる。手向山（タムケヤマ）は越え行く峠道の頂上を云ひ、それは古昔、神に手

向けせしところなれば斯く云ふのだと謂ふし、手向草は、何にても神の手向にする幣をの意にて、古昔、旅行するときは、特に道の神にむくゆる幣を入れて携へる爲に、旅人は幣袋と謂ふものを用意せしと謂ふ。石を手向草の代りとせしは、苦勞多い古昔の旅人の、止むを得ざるに出でし行爲であらうか。手向ノ神は、既に前出せし如く旅人が、その道中の安全を祈りて手向する神にて、即ち道祖神のことであつて、古昔では峠の頂によく祀つたと云ふ。ともかくも恁んなことを考へてその如き寂しい、一見何等の趣もなき峠の背後に續いて居る往昔の旅のことを想ひ見る機縁を得ただけでも、歩いて峠を越す旅行は、今日の我々にも有難味はある。霧の中にかぼそき道を辿りて、峠の頂上の地藏尊の圓い顛頭が、先づ最初に路の上に、ぼつつりと浮び見えた時の嬉しさは、そんな時知らない峠路を、土地の者の言葉と地圖を頼りに越した一人旅の、若き旅行者の心弱さのみが捉え得る感傷ばかりでもあるまいと思ふ。ほんとに往昔の旅人の彼のやうな心情で、その地藏尊へ感謝の爲、なにか手向けたくなるのも已れだけの氣持ではないやうだ。古、草津の湯へ通ふ旅人の、彼の荒蕪たる溶岩の原、六里ヶ原のかばそい踏み分けに迷ふを守護せしと云ふ地藏尊が、天明八年の淺間の大噴火に、一度埋めしが又掘り出されて、新たに祀られてあるのが今日地藏川のほとりに存する。少しく俗っぽく垣などめぐらされ、地藏尊そのものも大した作ではないとて、我々には何等か過ぎ去つた時代、遠國より效能著しき「いでゆ」のことを聞き傳へて、病苦の身に彼の淺間越の峠を越え六里ヶ原の萱萩を押分けて、旅をした人々の苦勞の一端を語るかの如くである。

一體、峠の旅行者に與ふる情趣感懐は、勿論その峠の有つ歴史、傳説、口碑など、その峠の所有する過去にも關係し、又峠の有つ自然、景趣、人爲にも因る。そして加之、その時々の旅行者自身の心境が大なる役目を演ずる。それ故峠に對しての、一個人の感得したる情趣感懐の如きは、甚だ個一的なものであり、著しく主觀的であることは争はれぬ事實だ。その點を自らも感じつゝ以下に於て、全く己れにとつてのみ何等かの點で、印象を強くしてゐ

る峠についての感懐をば誌してみゐる。峠は又頂と同様に一種の魅力を有して居る。それは洵に西歐の人が言ふ如く「登山」が Sport ではなくて、"a form of travel" である限りに於てはさうである可きである。

峠の名に就て、ひとつ氣のついたことを先づ記して見よう。だがそれは起因を究めると云つたやうなものではない。漠とした旅行者の見聞である。會津から越後へと越す彼の八十里越と六十里越との峠、名の起因は、嘗てその峠のある街道の道程の長さから來たらしく、往昔の旅行がその行く道程の長さ、辛勞を口癖にでもしてか、終にはそのやうな名も附けられたのではあるまいか、と何等の根據も無く書いて發表した事があつた。然しその二つの大きな峠の間に在る五味澤と言ふ、一軒で小宇と成つて居る村へ行つて、其處の老人からその二つの峠の名の所以を聞いた時、己れの想像もそんなに遠く距りたるものでは無い事を知つた。然しその「八十里」と謂ひ「六十里」と謂ふ長い里程が、己れをしてその街道の道程と想像せしめたのは、疑も無く誤つた推測であつた。それは各々の峠の、會津と越後の間の最奥の村と村との里程であつた。即ち八十里越ならば、越後の吉ヶ平ヨシガヒラと會津の叶津ウヱツ、六十里越ならば越後の大白川オホシラカハと會津の田子倉タコクラとの間の里程なのである。だが勿論この間の里程が、六十里や八十里などはありやうはない。其處が面白いところで、その峠の里程を皆十層倍にして附けたのである。八十里越は八里の峠である、六十里越は六里の峠である。何故それなら十層倍にして附けたのだらうか。それはその苦しい峠越に對する往昔の旅人の辛苦を如實に物語るものだ。峠の實際の里程を十層倍に誇大して呼んだ往昔は、それ程の里程がある程に苦しい峠だつたのだらう。それと解つて見れば己れの以前の想像も、全然その焦點を外れたものではなかつたのだ。この二つの峠は、會津の人々が主として今日も越すらしい。岩越線の開通せぬ以前は毎日五十人は下らぬ旅人が、八十里越を越えたと云ふ事で、陸測五萬に載つて居る會津領の「木ノ根茶屋」とそれとは十間を離れぬ越後分には「田代茶屋」と謂ふのがあり、夏分には力餅などを齧いで居たと謂ふが、惜しい事には、共に旅人の通行も日に一人

二人、或ひは三日に一人と云ふ具合に、年と共に減つては立ち行かなくなつて、木ノ根茶屋が先づ閉ぢ田代茶屋のつぶれて仕舞つたのは、つい一年前の事（大正十三年）だと謂ふ事を、五味澤の老人は語つた。大閣時代から在つたと謂ふこの古き峠。十一月の終りから三月の彼岸迄は、土地の者さへ越さぬ長い、そしてなぞの恐ろしい峠。それは現在でも同じく、未だその時期には共に「八十里」であり「六十里」である。到底雪の時期には、誰でもそねごし以外には越せぬと謂ふ。そしてその峠を越したいと思つて、わざ／＼行つた己れもそれが越えられぬのを、その峠の爲に却つて嬉しく思はぬでもなかつた。全くさうだ。假令、八十里越は雪が消えると、越後側は荷馬車が通ずるが、未だ清水越や仙岩峠の如くに、その横腹にトンネルを穿たれて、峠としての威嚴を損ね、品格を失つてしまふと謂ふ目に遇はぬのが、何より峠にとつての幸福だ。六十里越と云ふ峠名は、もう一つ月山の麓にあるが、これに就ては少しも知らぬ。その後、夏に越後から會津へと六十里越を越して見た。道の細く、且つ荒れた、長い峠であつた。殆ど一日はかゝる。峠の頂上には太い山毛櫨の樹があつて、會津側は急に落ちてゐて、眼下に只見川の川面があつた。

峠の名は、多くその一側の村名、國名などが付き、又近くの山名、澤名と同じのものが多く、他にいろ／＼のものがある。然しこのうちでひとつ共通的な事實は、峠の頂上にある事物を以て、よく峠の名とする事である。峠の頂上に明神様が祀つてあれば、明神峠とし、淺間神社が存置すれば、淺間峠とする如くである。薬師峠、山ノ神峠、権現峠は、その類である。又大きな杉ノ木が、頂上に目に立つ様に生えてゐれば、杉ノ木峠とし、それが松ノ木であれば、松ノ木峠となる如くである。山毛櫨峠、梅峠、朴ノ木峠、樺峠、枯木峠、唐松峠、一本栗峠、柏峠、榎峠、楢ノ木峠、漆峠はその類である。祭神、樹木以外には、峠の頂上に珍らしく大きな石塊があるので付けるに「石峠」としたのがある。鳥居の在るが爲の、鳥居峠などはさらにある例である。その石峠と云ふ峠は、自分にとつ

て忘れられない、愛す可き印象を残して居る峠である。それは越後の名山、守門山麓に在つた極く小さな峠で高さも僅かに海拔五〇〇米突位しかない。だが四月の初めには、其處は雪が五六尺も深かつた。その峠を通つたのは、恰度その頃であつた。この四月初めの、春の雪も殆んど降らなくなつて、雪の朝夕は緊つて硬い時分は、雪國の村々の人々が、秋に山で伐つて置いた薪の束を、小さな手楯に附けて村まで運び下ろすに忙しい時季である。これは敢へて日本の雪國に限つた事ではないらしく、例へば瑞西の山村でも又さうであると謂ふ。その時二人の友人と共に、夕暮この雪の峠に差し掛つたのであつた。私等は峠を越えた向ふの村で泊りたかつた。それで時間の遅いのも關はずに行かうとして居たのであつた。行手、夕日を浴びた峠の緩い斜面の雪が、薔薇色に薄れて行つた。然し峠の頂上に着いた時は全く暗くなつて、その峠の頂上、附近の地形の複雑なものと、雪に踏んだ峠の通行者の稀れな足痕も解らなくなつたので、私等は又來た側の斜面へ降りて、雪に殆ど埋つて、辛うじて入口の潜り込めるだけ開いて居る焚木小屋へ這入つて、寝る事にした。それは入口の他、尠しでも風の吹き込む穴も無い位の藁作りの小屋であつた。丸でシュラーフザツクの様な小屋ぢやないかと、笑ひながら私等はその中で「アイヌの火」を燃した。「アイヌの火」とは、私等の間に通る焚火の仕方である。と言つて別に變つた燃し方でもなんでもない。小さい火をちび／＼と燃して居ることだけなのである。だがそれも、其名稱の由來如何を問はるゝならば、威張つて答へる、それはアイヌの燃し方であるから。我々よりも數段優れたる *Camperouti* の名人たるアイヌの仕方であるから。必要以外に山へ行くと、大きな樹を伐つてはぼん／＼燃したがる我々は、未だその山での生活の奥儀に達して居ないのであらう。アイヌは眞に自然を愛してか、無駄に不必要な大きな焚火をせず、小さな火を身體で圍むやうにしてあつて居る。我々はそれを知つて以來、小さい焚火をやる時に「アイヌの火」でやらうと言ふ隠語を、自づと使ふやうになつた。その翌朝は、清爽なそして美はしい春の朝であつた。日が守門の雪白な頂を朝焼に染めて、雪の斜

面、谿々、村々のつくる影は、紫色に隈をもつて生々として居た。如何にも春の朝らしかった。峠の頂上に再び登つた頃には、もう麓の村から、村人が櫓をかついで硬い雪の上をせつせと登つて來た。私等は峠の頂について、始めてこの峠の名の由來を知つたのだ。昨夕は氣がつかかなかつたが、その頂上には、全く不思議のやうに一つの巨きな石塊がぼつとりと在つた。やがてその傍の薪の束の堆積の上に、私等は腰を下して、村人と共に話を交しながら、眼を又四周、眼下に移したりした。その時四月の晴れたる朝の雪に、斑らの、谿、平野、丘、村々の眺めより清新にして、生氣に充ちたものはなかつた。透きとほつた生氣の中に、輝いてゐる雪と、影になつたうす紫色が、午前の若い日の色の中にあざやかに浮び、柄尾の小平原をへだて、遠く海に近い平野は、うす霞む青色もほのかに、眼に映じ來る遠い朝景色。裏日本の春は、ふたゝびめぐつて來たのだと云ふ感じの、強く私等に迫るを覺えた。蟻のやうに、ぞく／＼と重い櫓を負ひたる村人の、雪を登つてくる光景も、その感じを強める活動的要素であつた。私等は年老ひた村人の一人と快活に話し合つた。そしてこの峠の石に就てのたはいもない話を一つ聽いたのであつた。昔、去る人が、この石の下に黄金を埋め藏して置いた。それは向ふに見える佐渡の島から見ると、黄金色に光つて見えるさうだが、近くでは見えない、又掘つて見る者も、古昔から數々あつたが、しかし掘りあてた者とはなかつた。けれど未だに佐渡からは、此の石の下が光つて見えると云ふとのことであつた。この石峠と、その石に關する俚人のたはいもない民譚。しかし何等の慾もなく、旅をたのしんで居たその時の私等にとつて、この些細なる俚人の語り草の一片に依つて、一見何等の興味もなしに、他の者に依つて越えられるこの低い峠のひとつが、如何ばかり匂ひ深い一種の旅の感懷をもつて、私等の記憶に深く存することゝなつたであらうか。洵に旅の快想興趣とは、極く微妙な時と場所との合致に依つて、各人各様幾千通りにも感ぜらるゝ捉えがたく、且つ言ひ表はしがたきなものかである。

雜錄

○大深澤週行記

加藤 章
小山 修 壽

大正十五年七月中旬、東北本線支線橋場驛にて下車、仙岩峠を踏えて生保内に至り、田澤湖畔より田澤に出で、玉川に沿ひて廻り、更に支流大深澤の源頭を窺め、大深岳に登り、東の方赤川を下りて藤七温泉路に合し、大更に出てこの行を終る。所要日數十日間。一行は二高生小山修壽、山本新吾、桃井次郎、加藤章の四名。

参考地圖 五萬分一 磐石、田澤湖、森吉山、八幡平、沼宮内。二十萬分一 盛岡、秋田。

第一日 (七月十二日、曇) 生保内まで

汽車は盛岡平野の夜明けを北へくと走る。朝露にぬれた待宵草が何處までも続く。心待ちにしてゐる岩手山はなかく姿を現さないが、その中に東の空に早

池峯のピラミッド形が見え出した。それに對して南に薬師岳が一段低い。盛岡で橋場線に乗換えるともう右手に岩手が汽車の窓一杯に立ちはだかつて、頂上近くに残雪が點々としてゐる、案外少ないと思ふ。停車場を二つほど過ぎて岩手を後ろにする頃になると、行手に時折お駒(駒ヶ岳を云ふので、やはり残雪に基づく名であるといふ)の邊とおぼしき部分が望まれる。

汽車は川底の美しい瀧川に沿ふと間もなく橋場驛に達する。降りて先づお駒を眺める。岩手に比して、残雪は可成り豊富である。お駒から笹森へ長く續いてゐる雪庇の残りだらう。驛の待合室で十五分ほど休み、準備を調べて六時四十分に出發する。安栖川橋を渡り山の鼻を一つまはるとそこが橋場で停車場より十丁許り先にある。戸數二十ばかり。萱ぶきの屋根の急傾斜、家の間どり、人の服装など、夏とは云へ何處となく冬國らしい感じがする。

柳澤橋からは道が急にせまくなる。この邊から國見温泉に行くと云ふ若者と一緒になつた。温泉には現在浴客が三十人程居るといふ。冬には老人が一人留守居するとか話して呉れた。駒岳については餘り知らな

つた。

やがて道は川の左岸に移る、橋はおちてゐるが未だ骨組が確かりしてゐるのにどうしたことかと思つて見ると雪のためだと云つてゐた。この邊から道はブナの林の中を行く、十五六丁で右岸に戻る。橋があるので徒渉せずに済んだ。この川には岩魚が相當居るらしく二人ほど釣つてゐるのを見かけた。

何時の間にか道は坂本川をはなれて電光形に登つて行く。登り切つて、遙か下に坂本川のせうらぎを聞きつゝ山腹を左に横切ると小さな流れがある。こゝで第一回の食事をとり出發したのが、十時。すぐお助け小屋があつた。小屋は壞れてゐてその上に非常に荒れてゐた。それから再び電光形の道が続く。あたりはもうブナの木はなくて、兩側が一丈もあらうと思はれる陣竹の藪となり、日は照つて暑く、休む數は次第に多くなる。

第二のお助小屋(太平小屋)の一丁許手前の清水の傍にリュックサックを投げ出したのが十一時半。清水を食り飲んで陣竹の間に蕨座を敷き、午後一時まで晝寝した。小屋は形だけ残つてゐる。こゝから仙岩峠の頂

は近い。峠からお駒がおぼろげに見えた。一番高く男岳、その前左に女岳、右にはなれて片倉(？)燒岳大燒砂、其前には横岳が左に長く横たはる。女目岳は隠れて見えない。鳥海山も遠望されるさうだけれども今日はかすんでゐるので駄目であつた。南方貝吹岳は美しく陣竹に装はれ、一筋道が山稜を走つてゐる。西には闊葉樹の多い太平澤の谷が深い。

此處から冷瀉に至る半里ほどの間は殆ど平坦だ。國見温泉の浴客らしい二三人に出會つた。第三の小屋(山中小屋)は跡形もない。冷瀉は周り五六丁ほどある。國見温泉への道は池を右に半週して林の中に消えて行く。二三丁下ると流れがある、堀木澤の支流で、太平小屋からこゝに来る迄水はない。

生保内川の美しい緑の谷間を縫うて走る白い流れを左下に眺めながら、道は山腹をへびつて次第に下つて行く。地圖に角館街道と書いてある館の宇の邊の切通しをすぎたのは三時五十五分であつた。それから又山の鼻を大きく一つ搦んで、最後に電光形の道を下りて六枚澤の橋に達した時は、もう日は大分西に傾いて了つた。六枚澤は上の方は可成りひどいさうだけれども

此邊では川底の廣い、石の白い美しい澤だ。松並木に入る頃は暮れて夕風が立ち始めた。私は今日は四人中で一番へばつて了ひ、此邊から小山氏に繩を持つてもらつた。

生保内の町には入らず、松並木の終る邊から近道をして、町の北端にある小學校を訪れる。午後七時。

校長の堀川先生やおとなしい若い先生には随分とお世話になつた。

第二日 (七月十三日、晴、一時雨。) 田澤まで

朝起きて見ると気分が悪い、立つてゐられないほど眩がする、飯も喉を通らない。仕方なく皆に待つて貰つて町の醫者に行つた。鬼川氏といふ、年は若いが親切な人だつた。無料で診察した上に薬まで呉れた。昨日の疲れからで一日も休めば快くなるといふ。しかし小學校に滞在することは出来ない、兎に角田澤まで行くことにして出發した。營林所に立寄つて大深澤のことを聞いたが係りの人が不在で判明しない。尤も玉川の森林主事畠山寅次郎氏宛の紹介狀を得た。それから少し歩いて中生保内に着き、駒ヶ岳の案内者である千

葉忠市郎氏宅で駒ヶ岳の話や地名など聞きながら晝食を攝つた。此處で千葉氏を煩はして荷物は全部田澤まで馬車で運んでもらうことにし、私達は空身で午後十二時四十五分に出發した。

今朝は晴れていゝ天氣だつたけれど、此頃から曇つて雨が時折降つて来る。

石神橋の傍で田澤に行く道と分れて田澤湖に向ふ。白濱から岸づたひに湖心亭の前を過ぎ、やがて湖岸をはなれて栗の花の匂ふ低い而も氣持ちのいゝ峠を越すと、目の下に田澤の部落が見える。路傍の桑の實を食つたり散々路草して、今夜泊るべき小學校についたのは四時半であつた。荷物は未だ届いてゐないので三人が迎ひに行く。間もなく戻つて來た。馬車は途中迄しか來ないので其處から荷車で運んだのださうである。夜は役場の宿直の人を訪ねて來た老人をつかまへて色々のことを聞いた。大深澤はそれほどひどい所ではないこと、ソヤノ澤は塞合澤の轉訛で兩側が切り立つてゐる爲の名であること、岩手側では大深澤(奥深澤?)を葛根田川と云ふとのこと、土地の人々は古くから大深澤と葛根田川とに依つて圍まれた山地一帯を可

成り恐ろしい處として取り扱つてゐるらしく、此處で迷つたら命がないと考へられてゐること等がそれである。

葛根田川の語原はカツコム(抱き込む)から來てゐるのださうである。此附近に於ける縣界の山は、その名が岩手側と秋田側とでは殆ど違つてゐる。震災豫防調査會發行之岩手火山地質圖及圖版にはよく記載してあるが、それに比べると測量部のものには不詮索の嫌がある。例へば五萬分一圖にある葛根田川上流の大白森は震災豫防調査會のには扇子ヶ岳(岩手)大城森(秋田)と二つの名があつて、よく山から來る感じを表はしてゐる。田澤の老人はオホジロモリと發音してゐる所を見ると後者の方が恐らく適當した宛字であらう。又その北にある曲崎山は震災豫防調査會の圖版には、石ヶ森(岩手)曲り岳(秋田)となつてゐるが、田澤の老人もその方が正しいと云つてゐた。其他此邊の山の名や澤の名に就ても調査會の地圖には親切に記入してあるし殊に葛根田川は詳しいから確に参考になると思ふ。關東森と源太岳との語原が私には氣にかゝるが、此の部分は調査會の地圖にも載つてゐないし、田澤でも亦玉

川でも質したけれども、遂に合點がゆかなかつた。

第三日 (七月十四日、晴。) 玉川まで

からりとはれない、天氣である。私の身體ももう異狀を感じない。それでも親切に皆が成る丈私の荷をへらさうとして呉れるのがうれしかつた。午前八時四十分學校を辭し、すぐ西で本道と分れて、正神峠への道をとる。道は荷車が通れる位の幅がある。車の轍の跡について何處までも行くと、一の木小屋があつて道は盡きてゐる。そこで教えられて來た道を二丁程引き返し田澤澤を越へて行く小徑に出た。夏草が兩側からかぶさり、草いきれのする道を登つて十時五分正神峠の頂上より少し手前にある杉の木立に達した。此處で道は二に分れ、右は地圖に正神峠と記してあるものを通つて尻高で本道と合する。私達は左をとつた。やがて峠が降る邊になると前とは變つた冷々する程大木の繁つた林の中を通り過ぎて又草地に出ると本道と合した。本道と云つても峠道と同じ位な細徑で、私達は初め疑つたほどであつた。

十一時五分小野澤につく。汗を洗ひ流したり、オコ

シを頼張つたりして三十分ほど休む。そのオコシは食ふと後に砂の残るものだった。

尻高に來たのが十二時。そこで晝食にする。午後十二時半に此處を出發し、玉川橋をすぎたのが一時。もう川は硫酸銅を溶したやうな色をしてゐる。誰か味つたら澁いと云つてゐた。

玉川の部落へ近づくに連れて、その後の黒森や男神山が顔を出し始め、玉川の入口では遠く焼山が望まれた。田澤の小學校長の伊藤氏から、玉川小學校の田中民五郎氏宛に名詞をもらつて來たので、直ちにその家を訪ねた。時に三時四十分。その夜はそこに泊めて頂くことにする。鳩湯を經營してゐるのは民五郎氏の父の吉之助氏であるが、今は客がないので此處に歸つて居られた。

夕方營林署の畠山氏を訪ねたが、小和瀬に林道を作りに行つたとかで不在であつた。その夜は主人が阿部長一(三九)といふ人と呼んで呉れたので色々澤の様子を聞くことが出來た。阿部氏はこの地方で謂ふ所のザッコ釣りで大深澤は可成詳しく知つてゐた。其話では澤はさうひどくはないらしく泊場も得られるらしい

ので安心して寝られた。阿部氏は頼まれれば案内もするやうな口振りであつた。

第四日 (七月十五日、雨) 大深の小屋まで

起きて見ると雨が降つてゐる、併しさう大した降りでもないしそれに又口小屋までは湯田又川の外は徒渉する所はないと云ふし、其の上早く小屋に行つて、其處に滞在してザッコを釣つてゐる田中豊之助爺さんから山の話聞きながら岩魚でも御馳走にならうといふ心持も手傳つて、午前八時半出發した。

玉川の部落から玉川に沿うて溯行するには、地圖によると川の兩岸に道が記入してあるけれども、左岸のものは今は廢道である。又澁黒川合流點の上も左右に渡りながら行く様になつてゐるが、これも今は右岸のみを行くのである。つまり又口小屋までは本流を一度も越えずに行けるのである。雨のために荷がこたへて休む度數が可成多い。

道は氣持よく、兩側は大體牧場になつてゐる。所々に柵があり、木を渡して乗り越える様になつてゐる。岩ノ目は川向ふに茅葺の屋根が二三見え、丸太を木ヅ

夕で結んだあやしげな橋が架けてある。

十時金倉澤に達した、この邊は一寸の間ブナの森で、川のすぐ傍から玉川林道が分れてゐる。次で又牧場を横切る。馬が五六頭背から白い湯氣をたて、訝しげに私達を見守つてゐた。

間もなく亦森林地に入り、暫くして戸瀬沼澤を渡る。此澤にも金倉澤にも不完全ながら橋があつた。

十二時新湯の跡に着く。家は全くない。唯草叢の中に土臺と思はれる丸太が二三朽ち残り、一體に桑の木が多く、荒れてゐる中にも心持ち平らになつてゐる所があるので、新湯の跡と判ぜられるのである。夕方などはウツカリ行きすぎて了ふであらう。勿論硫黄の臭が殊に激しいから、少し注意すれば分らぬことはあるまい。鳩湯には此處から川を徒渉して行くのである。川原に出て見ると湯氣を立て、未だ湯が湧き出してゐた。雨が一しきり激しく降つて來たけれども、いゝ場所もないので、大木の下に雨を避けながら食事した。

午後十二時四十五分出發、また林の間を歩いて一時間にして澁黒川(俗稱普兵衛澤)との合流點に達した。丸太を削つて渡してある。川はその名の如く澁を流し

た様に黒褐色を呈してゐる。

出合から一町ほど進むと道は二つに分れ、左は坂を登つて鹿ヶ湯(酸ヶ湯)から焼山に行くものである。此處までは道が案外よかつたが、これからは大きな秋田落の茂つた間を分けて行かねばならない、氣持の悪いことおびたしい。ヘヅリは唯一ヶ所のみで、他は全部山と川との間の平らかな森林地を通じてゐる。

二時二十分上五十曲澤を過ぎ、赤土色に濁つた赤澤を渡つたのは三時三十五分。赤澤の一寸手前は谷が可成狭まつてゐる様に感じた。赤澤には矢張丸木橋がある。

黒石澤は石が黒いのでそれとわかつた。それから地圖に記號のない思ひがけない大きな崩れ(黒石澤と石假戸澤との間、獨立標高點七九二の眞南の邊と思はれる)の下を過ぎ、石假戸澤は五時十分に通過し、六時十分湯田又川(俗稱、湯澤)の手前についた。地圖にはないが、此處から林道が分れて、等高線の數字の記入してある尾根を八百米邊まで登り、それから蟹沼の上を通つて蒸湯まで行けるといふ(豊之助爺さんの話)。湯田又川には橋がないし、其の上縦かではあるが出水

したので徒渉に暇取り、小屋に入つたのは六時四十五分であつた。

豊之助爺さんは初め變な顔をしてゐたけれど、わけを話したら喜んで私達を小屋に導き入れ、「すまない、すまない」と繰り返しながら、中を掃除して私達のために席を作つて呉れた。

其夜は案の通り岩魚の御馳走になり、山の話も私達の聞くことには皆満足な答が與へられた。爺さんの本名は田中豊之助で、通稱は虎さんである。生れは玉川だが十五歳から五十九歳の今日まで、年中の大部分は此小屋で暮すといふ。頤骨の角ばつたむつりした人で、聞かないと話さい。この山を一番よく知つてゐるのは俺より外にはないなど、盛に私達を頼もしがらせた。

第五日 (七月十六日、曇) 小屋滞在

雲行きが變だつたし、それに澤の水も減つて居ないので一日滞在することにした。

午前九時頃爺さんの後から三人も借りた釣竿をかついで出掛けたので一人小屋に居残る。あとは急に靜か

になつて水音ばかりが響いて来る。退屈の餘り仰向けに寝ころんで梁の上の眞黒になつた爺さんの釣竿を算へて居たらいつかねむつて了つて十二時近く目をさます。空は次第に晴れて来た。

晝飯を炊いて置くやうにと思つて、米袋と鍋をもつて谷におりて行くとガヤ／＼云ひながら三人が歸つて来た。岩魚が五六匹。釣つたのかと聞いたら捕へたんだと答た。間もなく爺さんも歸る。

午後になつて寫眞を撮らうと思つて川向ふに越すと二疋のマムシがゐたのでビックリする。一は黒く一は少し褐色を帯びてゐた。夜爺さんに話したら惜い／＼といつた。此邊は一般に多いさうである。

夜は又岩魚の御馳走になり、明日の行程を心に描きながら寝についた。

第六日 (七月十七日、晴) 廻行

今日は爺さんと別れていよ／＼大深澤に入る日である。徒渉の爲にと云つて作つて呉れた杖——何とそれは相應しい餞別であらう——を持つて心を躍らせながら午前六時半に出發する。川の左側の林中を二町許進

むと徒涉が始まる。深さは膝の一寸上位で、流もさう早くはなく水も冷くはない。流の幅は此邊で六七間である。然し川底は拳大の石がゴロ／＼してゐて歩き

悪い。更に一町程進むと又左側に徒涉する。夫から約十分許進むと川が二に岐れる。左を行くと間もなく冷水ノ澤がサラ／＼音を立て乍ら落口は瀧の様な形をして黒い岩を傳つてる。川は又合し、それからは徒涉の連続であるがこれと云ふ悪場もなく、八時ソヤノ澤の落口に達する。冷水ノ澤から此處迄に徒涉五回。ソヤノ澤落口の直ぐ上に箱がある、へづれ相にもないので聞いて置いた通り澤口から左側に徒涉し、魚釣りが取り付けた葡萄蔓に頼つて稍高い所をへづつた。夫から又左右に徒涉し乍ら一時間許進むと亦箱がある。右は通れない、其上此處は河幅狭く水勢頗る急である。それでアンザイレンして箱口で一人宛左へ徒涉して壁をへづり、へづり終つて直ぐアブザイレンして右側に徒涉し、十五分ばかり進むと八瀬澤に達する、時に十一時十五分。塵に覆はれた大きな雪塊が有つた。大深澤に進めるかどうかを知るため、空身になつてチンチラ瀧に行つて見る、高さは一丈もないが兩側が切立つて

行けさらもない。而もチンチラ瀧迄の途中が既に荷を脊負つては怪しいものだつた。で此處から引返して矢張り八瀬澤から廻る事にした。

八瀬澤落口から一枚岩瀧迄の間を特に一枚岩澤とかソヤとか呼んでゐる。一枚岩澤と云ふのは一枚一枚數へられ相な大きな安山岩から成つてゐる爲であらう。又ソヤと云ふのは恐らくソヤノ澤の語源と等しく、兩側から塞ぎ合つてる即ち箱になつて居るのを意味してゐるらしい。

正午十二時に出發して八瀬澤を廻行する。箱をなすチンチラ瀧附近は堅い大きな安山岩からなつて居るが八瀬澤は崩れ氣味の頁岩の軟かい川床になつて、四五尺宛の段をなして瀧を作り、水のある所は苔が生へてゐてよく滑る。石コロばかりの川床になつたかと思ふと暫くして又頁岩となり、左右に相當の大きさの崩れが有るので、左に入る道が見附けられなかつたが、多分此邊が獨立標高點一〇五三米の眞下かと思はれるので、尾根を指して眞直ぐに登る。傾斜がかなり急で苦しかつたが遂に尾根に辿り着いた。丁度大瀧の上あたりらしい。獨立標高點からの尾根は一旦低くなり此處

で又稍高くなつて居る。若し八瀬澤から大瀧の上に出る道があるならばその凹所邊だらうと思つて尾根を傳はつて行くと果して通路らしい鈍目を見附けた。踏分けに從つて大深澤に下る事が出来たのは午後一時に五分前であつた。食事を済してから大瀧を見物する。大瀧は私達が降りて登つて見たが登攀困難ではない。引返して二時二十分に出發、チラシノ瀧迄は近い。この瀧は左側が登れた。先二人が登り二人が下に居て、綱で荷物を引上げる。これに二十五分を要した。地圖では尙ほ相當箱が有るらしく思へるが徒渉のみで大したへつりも無く瀧ノ澤落口に達したのは午後四時二十五分であつた。落口の手前から小路を辿つて右側に登ると木の皮で葺いた屋根ばかりの魚釣小屋がある。その脇に野營することにした。山へ来て初めての野營だ。天候は次第に悪くなるらしいのが氣に懸る。今日は徒渉二十六回。

第七日

(七月十八日、曇、小雨時々来る。)

起きて見ると果して曇つてゐる。然し爺さんの言葉借りていへば、「雲が東に走るからその中晴れるだら

う」と思つて午前七時に出發する。瀧ノ澤は上の方は判らぬが汚らしい崩の多い貧弱な澤だ。大深澤は比較的美しい。相變らず川底には大きな石がゴロ／＼して居る。併し之は時として傳はつて歩くに都合の良い事がある。澤口から直ぐ左に徒渉し續いて又徒渉する。今日は天氣のせいか水が冷たい様に思はれる。七時四十三分關東澤口に着く。大深の本流と川幅も水量もほど等しい位で、澤の様子もよく似て居る。こゝで寫眞を撮し一休みして出發する。二十分許進むと爺さんから聞いた二つの瀧の初めのものゝ下に來た。此瀧は少し離れた二つの瀧からなつて居る。澤がひどく屈曲して、瀧の向は略ぼ直角位に曲つてゐる。下の瀧は高さ一丈程、上の方が少し高いかと思はれる。瀧の落口は狭いので一寸凄い。然し左側は綱を使はずに比較的容易にへつつて登れる。八時十八分瀧の上を出發し、徒渉を重ねて三十分程して東ノ又口ノ瀧の下に着く。瀧は二つに分れて落下してゐる。少ししぶきをあげる程度でその間を登ることが出来る。茲でも二人宛上下に分れて荷物を吊上げた。此の瀧の上は僅ばかりの間川底が岩で平たく、水は可成の早さで其上を一面に流れ

てゐた。

九時四十五分東ノ又口に着く。東ノ又の谷は石がごろ／＼してゐて、澤口では底の滑かな瀧らしい様子をして居る。北ノ又はその澤口で瀧状をなし、岩も少し赤味を帯びて居る。北ノ又東ノ又の出合七八間手前で左から樹木に蓋はれて谷間を流れ出るのが石假戸澤である。水量は東ノ又、北ノ又、石假戸の順である。瀧を上ると折柄の雨は止んだが空はまだ曇つて居る。魚止リノ瀧も二三間宛離れて三段になつてゐる、高さは共に六七尺位である。上り切ると上に大きな残雪が谷を塞いで居るので、餘儀なく綱で結び合ふことにした。残雪より三十間上に魚止リノ瀧より少し高い位の瀧がある、之は緊張を味ふに良い場所だつた。上り切つたのが一時四十分である。そろ／＼押し曲られた木が多く、谷の兩側から押被つてゐるのは近頃迄残雪に埋つてゐたものらしい。二時に左から流れて来る大きな二つの水のない谷に出合ふ。此處を過ぎてまた間も無く涸れ澤の少し上の谷に出合ふ。谷口で五尺位の瀧をなしてゐる。これから谷は益々緩かとなつて、私達は地圖上の二つの涸れ澤の少し南あたりに來た筈と思ふが

どうも位置が明かでない、それで未だ二時少し過ぎたばかりであるが、左の方の澤より一丈程高い、雨が降つても浸水する恐れのない場所を撰んで野營することに定めた。

私達は左側の二つの涸れ澤を目標として來てゐる。涸れ澤の少し上の出合に着けばもう天狗岩が見えると思へられた。然し地圖程の涸れ澤は見當らぬし、天狗岩の見える出合といふのは前に出合つた澤か、夫とも後に出合つたものか判然としない。それで私は此處に着くと直ぐ右側の崖を登つて見たが、涸れ澤の方向に一寸した崩れを見た外は、廣々した熊笹と頭の枯れた幹の白い諸槍の林が目に入つた許りで、霧の爲めに向ふは霞んで天狗岩らしい物は見當らなかつた。その上霧は向ふから益々あたりの景色を埋めて來るので、私達は外の谷に紛れ込んだのでは無いかとさへ思つた。が兎に角此處で野營するより外に仕方が無かつた。

第八日 (七月十九日、曇、後晴。)

起きて見るとひどい霧小便である。そこで昨夜相談して置いた通り、あてもなく重い荷物を負ひ廻る事を

避けて、二人は朝食の用意に取懸り、残る二人は一行の位置を確めて行先を決定する爲に午前六時に出發した。先づ天狗岩を見附けなければならぬ。それで私達の考を大體に於て正しいものとして、澤を少し下つて昨日入らうとしたが水の無い事を恐れて入らなかつた小澤に入つた。昨夜の豪雨で水は非常に多いが、進むに従つて川は益々狭く窪のやうになる。一時間許進んだ時霧の中からおぼろげに天狗岩が現れたので驚喜した。此川は天狗岩の東北の草地から流れ出てゐる。

天狗岩の北側は美しい草地で高山植物も少し咲いてゐた。餘り此處に着くのが早かつたので大深岳迄行くことにして磁石を頼りに鈍目を入れ乍ら進んだ。可成り進んだ頃右手に丸味を帯びた山頂らしい物が見えた。初めは大深岳かと思つたが、それにしては方向が右に片寄り過ぎてゐる。然し兎に角行つて見る事にして、九時にそこに達した。果してそれは大深岳でなく、大深岳から大深森に續く尾根の一部だつた。霧が少し晴れて大深岳が北に見え、天狗岩が目と鼻との間の距離に突立つてゐる。大深森の邊は青い根曲竹を下草として白い膚の諸檜の林が立ち續き、夫に残雪を配して高原

の春の様な情景である。濡れた體は寒いのですぐ引返し、十一時に野營地に歸つた。空は次第に晴れ白雲は東へ東へと飛んで行く。此の様な日にこんな谷間に居るのは惜しい氣がするので場所を天狗岩の下に移して明日の行動に都合の良いやうにする事とし、午後二時五十分豫ての野營地に着いた。着くや否や先づ荷物を草地に投出したまゝ天狗岩に登る。岩は大きな石が重り合つて出来てゐる。一面に灌木や草に覆はれ、ほど圓筒狀をなし直徑廿米高さ五十米位と思はれる、生憎霧が立籠めて駒も岩手も見えなかつたが眺望のきく所らしい。八瀬森や關東森曲り岳の方は晴れてゐた。何よりも嬉しかつたのは緑の濃い尾根の美しい出入りや谷の屈曲に見入る事だつた。谷の下手には燒山や母森がその中腹に爆裂口を開いて此方に向けて居る。眼を北に轉ずると八幡平らしいのつべりとした山が見える、その手前に聳えてゐるのは畚岳か。大深岳は右手に近く丸味を帯びた頭を見せ、その右で天狗岩の左下邊から今日辿つて來た谷から分れて谷らしい窪が通じてゐる。又そろ／＼霧が懸り始めた。夕食の準備の終つた頃はもう天幕はすっかり霧に包まれてしまつた。明日

は早起をすることにして食後直に床に就いた。

第九日 (七月二十日、曇) 大深岳

朝起きた時はよく晴れてゐたので手を打つて喜んだのも束の間、すぐ復た霧が押寄せて來た。火を造るのに時間がかゝつた爲、出發は午前七時廿分になる。之が後に大影響を及ぼさうとは神ならぬ身の知る由も無かつた。

昨日見て置いた谷を登る。一時間十分で案外容易に大深岳の南肩に取ついた。それから縣界を進む。昔の切開きの鈍目は微かに残るが熊笹が密生して居て何所も同じに見える。九時には三角點に達した。かうして兎に角私達は大深澤を登り切つた。唯ソヤノ澤落口の箱と一枚岩の澤が残つて居る。

頂上は霧に包まれ隣りの源太岳が時折見えるに過ぎないが、頂上の一時間は楽しく過ぎてしまつた。寒いので先づ火を焚いて熊笹に濡れた着物を乾し乍ら大分カビ臭いパンをかじる。頂上は地圖で見る様にほと平らかな三角形をなし、熊笹、石南花、偃松其他の灌木が密生して居る。石南花はあちこちに桃色の花を着け

て居た。三角點は中央より稍々東に寄つた五六坪の草地にあつて、朽ちた柱が目に入る。

いつ迄待つても霧が晴れ相にもないので斷念して出

發する。三角點から眞北に進んで平な所の果迄行き、

そこから崖の多い赤川を霧の絶間から覗いた。最初は地圖の濕地に出で、ガレの西の澤を下る積りであつたが、方向を誤つた様にも考へられるので、思ひ切つて北東北に向つた。進む事半時で大雪田に出る、風が下

から吹上げて氣持が悪い。雪田を横切ると霧が一寸の間途切れて、嶮岨森から諸槍嶽へかけて、頂上近く残雪をつけて居るのが見えた。私達の越した雪は、濕地の東の澤頭に在る長さ十町位の立派な雪田である。雪田を越すと直ぐ一つの谷に入る。暫して右から來る谷との出合迄降りて草鞋を履いた(十二時十分)。その

時空が次第に暗くなつて來たので、怪しいなと思つて少し足掻きを早める。出合の下の瀧の側を下つてすぐそこから初まる大きな崖の下に差かゝると果してポツリッポツリッと大粒な雨が落ちて來た。來たなと思ふと續いて土砂降りとなつた。此所は兩側のガレた細谷で降り込められてはたまらぬので夫からは殆ど夢中で

降つた。途中硫黄泉の湧出てゐる所などあつたが立ち止つて見る暇もない。又相當の谷が右から合すると一丈程の瀧を降りる。雨が降り始めてから末だ三十分ならぬのに水嵩が増して、どうにも動きが取れなくなつたので、餘儀なく谷の横に二坪程平らな所を見出したのを幸と其所で雨の止むのを待つた。流れを見て居ると恐ろしく早く増水する。

つい今迄水の上に出てゐた石がすぐに水の下に隠れてしまふ。やがて雨は止んで日も一寸覗き出す。一時間許り過ぎるともうどん／＼減水する。呆れる程増減が激しい。まだ平水にはならないが出發と決める。濁つて居るので徒涉の時淺いと思つて腰迄漬つたりする。又天氣が濕つぽくなつて來た。四時に地圖の濕地から流れ出る澤との出合に達した。此澤は水が澄んでゐて水量も尠い。惡天候には濕地の方を下るべきであつたらう。

谷幅が次第に廣くなり水量も相當有るので、成る可く徒涉を避けて岸をへつた、北ノ又に出る途中のガレを五時半に過ぎて、六時半に北ノ又との出合に着いた。澄んだ流れに腰迄漬つて徒涉すると直ぐ岸の上の

ブナの大木の下に野營し、濡れた物を乾かして例の麥焦しで我慢することにした。

若し今朝一時間早く出發したならば、頂上は晴れてゐて多少の眺望は得られたし、従つて霧の時間を待つ必要もなく、又雨の爲に苦しむことも少なく、すべてが順調に運んで居たことであらうに。

第十日 (七月十一日、曇。) 下山

どんより曇つた日である。午前八時五十分出發。豫定は北ノ又を夜沼川の出合迄下り、夜沼川を遡つて藤七温泉道に出る積りであつたが、北ノ又川は案外水が多く、その上兩側が切立つて居るので下りが困難だつた、そこで北ノ又川の川の字の邊に落峯から流れて來る小さな流を遡り温泉道に出ることにした。百米餘り上ると流は盡き、夫から根曲り竹をくゞつて落峯に辿り着き、更に笹や雜木林を押し分けて十一時四十分漸く道に出る事が出來た。そこでバンで腹をこしらへ山道を人里へ向つた。

人間の作つた道を踏むのも今日で六日目振りだ。夜沼川を渡り炭焼の部落を過ぎた。かまどから煙が出て

ゐるので呼んで見たが誰も應じない。私達は六日も人間に遇はぬので人懐きで一杯だが、向ふは何とも思つてゐないんだ。雨が又やつて來た。又沈黙の歩みが續く。

鈴蘭の岡、落葉松の林、白樺の混つた赤松の一叢など送り迎へて、暗い空の下を山に別れて行く心の暗さで無駄口一つきかない。寄木で二時間許つて鐵道馬車に乗せてもらう。雨に降られて夕闇迫る頃、「シペリヤを行く様だ」と云つた友の瘦顔を見乍ら、ゆられにゆられて、唯里へ〜。

○飯豊山の登路に就て (概報)

二 高山岳會

本篇は本號附圖「飯豊山概念圖」に就て之を説明的に記載せるもの、特にその記入せる地名の出所を明かにせんためには散見せし諸紀行文及予等の歩み訪ねし行程を擧げなどし、繁雜を冒して之を他日のため、引用参照に資したり。文中の算用數字は附記せる文獻の見出しなり。その項の詳細は其等の原文に就て知られ

たし。尙、從來餘り知られざりし登路に關し、予等之を試みて其の手記の手許に藏せるものは凡そ概要をこゝに紹介してその方面の一端を知るに便せり。若し此記事にして今後の探訪者に多少とも寄與する處あれば予等の幸之に過ぎず。

参照地形圖、陸地測量部二十萬分之一地形圖——仙

臺、福島、村上、新潟。

同五萬分之一地形圖——赤湯、米澤、手ノ子、玉庭、

加納、小國、飯豊山、大日岳、野澤、中條、新發

田、津川。

尙ほ文中及圖中、誤謬の點につきては必ず御教示又

は是正を給はらんこと希望に堪えず。

飯豊山塊を取巻いて走る鐵路三條。曰く磐越西線、

曰く羽越線、曰く奥羽本線。

其の孰れによるも登山するを得可く、今之を大別して左の十一路とす。(登山路とは判然たる徑路を有するものを意味す。)

磐越西線登山路

一、一ノ戸口(山都驛下車)

二、彌平四郎口(德澤驛下車)

三、豊實口(豊實驛下車)

四、實川口(日出谷驛下車)

五、新谷口(白崎驛下車)

羽越線登山路

六、赤谷口(支線赤谷線赤谷驛下車)

七、二王子山越え(新發田驛下車)

八、胎内川入り(中條驛下車)

九、大石川入り(坂町驛下車)

十、玉川口 (同驛下車。十一に同じ)

奥羽本線登山路

十一、玉川口(支線荒砥線今泉驛下車)

十二、米澤口(米澤驛下車)

一、一ノ戸口 (地形圖、陸測五萬分之一、
加納、大日岳、飯豊山参照)

最も普通なる登山道にて、磐越西線山都驛下車、北上して藤澤より一ノ戸川に沿ひ、その最奥の部落川入まで約五里。鑛泉宿あり。その西二十町、御澤より急坂、長坂を登りて地藏山に至り、劔ヶ峯の岩場を攀ぢ三國岳に達し彌平四郎道と合す。川入よりこゝまで約

二里、登り六時間見當。下り三時間。途中の狀況、武田氏の紀行に詳し(34)。外(8)(9)(10)(11)(30)。

積雪季、殊に冬季の登路としては川入部落に入るまで、及、劔ヶ峯にて多少困難あらん。(30)(35)。尙ほ川入より牛ヶ岩山を経て地藏に至る道ありと川入にて開けり。(この方面の地名上述文獻による)

二、彌平四郎口 (五萬分)地形圖、野澤、
大日岳、飯豊山)

これも普通の登山道にて、德澤驛より東北、奥川に入り八時間を歩み彌平四郎村に入る。(28)(45)。宿屋數軒あり。途中、極入より高陽山をへて實川村方面に入る石谷林道、久良谷に沿ひて立石山をへて實川に降る久良谷林道あり。又四ツ澤に入りて七森に登り湯ヶ島に入る路あり。最後の道の記載に西川氏等のものあり(17)。以上三道は何れも實川沿ひの道に合し、楯ヶ峯方面に至るを得。飯豊本山への道は長坂を登り、一度御澤に下りて一ノ戸道と三國岳上にて合す。行程約二里半、八九時間と見れば可ならん。この下り御澤附近迷ひ易し(18)(41)。約三時間。冬より早春にかけては大祓より標高示數の記入されたる尾根を登り、鏡山

より疣岩への山稜を傳ひ三國に達するをその登路とすべきこと、本郷氏の記録に詳し(7)。尙ほ外にこの登路につき相當記せる紀行は(28)(34)(37)。積雪季(35)(36)(45)。(この方面の地名、上述文獻による)。一及二とも三國岳より本山までは登降路同じく、切合せより米澤道を合す。途中御祕所ミヒツの岩場ある外危険なる場所なし(27)。約二里弱、三時間にて充分ならん。積雪季の様子は前記本郷氏の記文に詳し。

この一ノ戸及彌平四郎より三國岳を経て本山に達する登路は、飯豊登山路中、最も容易にして便利なるもの。何れも始め、長坂の苦しき登りを有するも、その逸早く高山稜に達し、途中、實川の深谿、大日、牛首の兀立を眺めつゝ樂に本山に達し得るを特色とす。殊に種蒔山附近より大日連嶂の眺望は何人の登高慾をもそゝらすんば止まず。この通路の参考とするに足る記事は下記紀行に散見す。(7)(8)(9)(10)(11)(25)(28)(30)(34)。

山稜上、夏季行者のための小屋場數ヶ所あれど、常時家屋ありて積雪季にも泊り得るは、四ノ子王木社にして、實に飯豊山上唯一の避難所たると同時に根據地點

也。(30)(34)。(三國本山間の地名、上述文獻に依る)

三、豊實口 (参照地形圖、大日岳、飯豊山。)

德澤驛の次驛、豊實驛トヨノ下車、荒澤に沿ひて上り、荒澤部落を經、萬治峠下にて德澤より大出戸イデトを過ぎ來る道を合せ、實川村に至る。約三里。冬季實川に沿ひて入るの險を避くる最も安全なる路也。又荒澤村を起點として積雪季に高陽山、立石山を經て遠く三國岳に至るを得。無雪季には豊田林道(立石山附近まで)以外は藪深くして困難なり。豊實村營林區官舎の湧井氏は昭和四年三月、途中二泊して種蒔山附近までスキーにてこの山稜を辿られし由を聞けり。實川を終始瞰下すること、及び裏川奥の大日、牛首等の山々の姿を併せ眺め得るを特色とす。豊實、實川村間の積雪季の状態に關しては、本號に記事あり(30)。尙、この方面に關しては荒澤部落の玉木清八氏詳し。(この地方の地名、玉木氏に據る。)

四、實川口 (参照地形圖、同前)

日出谷驛ヒデヤにて下車。實川村に入るの捷路、三里弱。無雪季には實川島對岸、實川端を通りて村までトロあ

り、途中實川の谿谷を瞰下しつゝゆく。積雪季には雪崩の危険甚だ多し。尙ほ詳しくは記して(30)(32)(33)にあり。外(1)。

尙日出谷より北に中村、又は水澤より峠を越して新谷川の炭焼き小屋に入りそれより蒜場山に登り、又は川を溯りて烏帽子に達するを得と言ふ。

實川村を中心として飯登山に入るに三路あり。一は前川(實川本流)、二は水晶笠掛の峯を傳ふもの、三は裏川なり。

前川を溯れば途中發電所堰堤までトコ道あり、その先、湯ヶ島まで小徑あり、途中天神道尾根より水晶峯へ、杉ウド尾根より笠掛山へ登るを得る由。又湯ヶ島よりオンベ松尾根を登りて櫛ヶ峯に登攀するを得。堰堤小屋より笠掛山まで(43)、又湯ヶ島より櫛ヶ峯山稜まで孰れも一日の行程なり(32)。笠掛山下に沼あり。

山稜上有數の泊り場とす。孰れも踏跡程度のもあり、無雪季にも登るを得べけれど相當藪と闘ふの覺悟を要す。實川沿岸及オンベ松の尾根に關して前號佐山氏の紀行(32)にてその大概を察せられたし。これらの尾根を登るには陽春の候積雪を利用するを以て最も愉快

なる登高をなすを得べし。但し四月中旬以前にては沿岸雪崩の危険甚だ多し。

湯ヶ島よりは鏡山に至る林道ある由、豊實にて聞けり。されど狀況は知らず。

蓋し實川口の最大の興趣は湯ヶ島より奥、本山までの深谷にあれど未だ之を探りし登山者あるを聞かず。湯ヶ島に根據を置き、冬春の間雪崩期の隙を窺つてその雪に埋れたる谷又はそのへりを傳ふか、又は最減水期八月下旬に澤通し行く外方法無きやう實川にて聞けり。澤通しゆくこともほんの僅かの時日に限られそれ以外は深く繁き藪の横へつりの苦痛を忍ばざる限り不能ならんと言はる(32)。但澤上りそのものとしては機會を擇べば左程むづかしきものに非ず、又數日間藪と苦闘することを豫め覺悟すれば、途中不快を感ずるとも兎に角流に沿ひて廻り得べしとのことなり。

予等未だ之を試みたることなければ、土民に就て聞く所あるも徒に臆測に走らんことを恐れ、こゝに之を述べず。

想ふに本谷を廻りて大日東面の彼の電光形大雪溪に氷斧を振ふことの如何に壯絶快絶なるべきか。若し虹

吹瀧あたりまでの廻行容易とならば、種蒔、本山、御西、大日、方面への種々の登路更に考へらるゝの時に待つのみ。

楠ヶ峯、笠掛山稜は、實川村の背後の峠より高メアテ附近まで踏跡あり、それより上は全くこれ深叢密藪の蔽ふ所なれば、積雪季に辿るを最も愉快とす可し。高メアテ以下(31)及び牛首山以北は前號及本號に記事あり。(30)(32)。

楠ヶ峯は飯豊山中鋸り目(後述)と共に、有数の痩せ尾根にして岩稜突兀、積雪季の登高は相當興深し。されど遠望して之を想像するが如き險難には非ず。登攀技術も之を考ふる程の所少し。只大日岳上の肩附近及び楠ヶ峯への取りつき東面の雪壁昇降に注意を拂はば可ならん(30)(32)。大日牛首間は往復三時間あらは充分遊ぶを得べし。(30)(21)。尙、無雪季には偃松にて相當行を妨げられん。笠掛より本山まで二日を要せる記事あり(43)。

又水晶峯南方「大根オロシ」の岩嶂は山駈けの輕装せる獵人も綱を用ひて通過する難所にして荷重きときは

困難なりと聞けり(31)。

裏川方面より山上に達せんには裏川を川通し溯りてか、或ひは烏帽子岳へ辿りつきてより東するかの經路考へらる。孰れも一度は白葎澤合流點の要所口ノ小屋を通るを便とす。小屋まで約二里、裏川溯行はこの小屋よりやゝ上流の箱にその險始まる。

最初にこれを試みんとせられしは日本山岳會員黒田正夫氏にして僅かに最初の惡場入口にて引返へされたる由聞けり(31)。實川村の猪俣留次郎翁はこの方面を知れること最も詳し。(この地方の地名、この村にて聞けり)。この溯行は飯豊の深奥を探るの感ありて確かに痛快極りなきものと思へど予等未だその實際を知らざるは遺憾なり。この澤へ入ること容易とならば山上への登路は面白きものを幾多擇ぶことを得可し。

烏帽子岳への經路は辻川氏(38)及佐々氏の行あり(31)。前者は夏期後者は早春、以下之を相對比しつゝ其概要を記す。辻川氏の行は昭和二年七月。一行四人、實川村の猪股連三、同清三郎、五十嵐源次を人夫として裏川より白葎澤に入り、燒曾根山に登り、山稜を烏帽子岳に至り、大日岳、本山を経て米澤口より下

る。

無雪季には村より大體地圖の小徑通り燒會根下要所口小屋まで行くを得。約二里（積雪季には堀切窪を通る。途中、夏には氣にも止めぬ所にて、積雪季には雪崩の危険を感じしむる所多し。）圖上橋の記號ある所は橋場と言はれ、川の岩に狭まれたる所に丸太を三四本並べあり、これより路は西岸を行くやうになり居れるも、雪崩にいためるまゝ手入れもなしあらざる故、そのまゝ東岸を行き、小屋直前にて川幅二十間の樂な徒渉をなす。燒會根へはこれより踏跡あり。白葎澤は河幅平均二三間。小屋少し上手より直に箱の連続となる。始め二丁の淺き所は水を涉り、最初の淵は左手の岩をへつりて通過、更に一丁にして三段の瀧あり左手の岩をへつる。其先にて地圖上の崖始り、澤あるし。東岸朴の木島に上りて泊。實川村より小屋まで四時間小屋より朴の木島まで三時間。次の日雨のため澤を試みず、晝より裏の燒會根道に出で（午後三時半）燒會根より西に瘦尾根を傳ひ、クヅノクラ澤西股コピアタ澤上に泊る（五時半）。此尾根にての泊場也。次の日、尾根に戻り、木下シ、ヒキ上ゲ、タアバナを通り、前烏

帽子と大烏帽子の鞍部に至りて行を止む、十時間連続

の藪くぐり。（烏帽子まで小屋より途中雨に妨げられしとは言へ通計二日を要したり、之を早春雪を踏み一日にて往復したると比較せば、如何にこのあたりの山の積雪季の登高の安易なるかを知るに足らん。戒心すべきは只雪崩のみ。）途中、木下シ、シゲバナに泊り場あれど孰れも水に遠し。烏帽子下の平は陣竹深き藪原にて泊るに堪えず。烏帽子附近は飯豊山中道遙地として優秀なる場所なり。（大日方面への尾根傳ひに就ては後述す。）

實川村はこの方面への恰好なる根據地にて、山好きの者も相當多し。人夫の日當一日二圓五十錢見當也。

五、新谷口

（参照地形圖、津川、大日岳、飯豊山）

白崎驛にて下車、新谷川に入り二里にして新谷に達す。こゝにて津川よりの縣道と合す（途中峠道三里）。營林区官舎あり。附近の事情を知るを得べし。これより飯豊山に入るには新谷川を溯りて烏帽子に直接取りつくか或ひは蒜場山へと途中迄林道を辿りて尾根に出で、東して蒜場山に達し、夫より山稜傳ひに大日方面

に至るかの二途あり。前者は蒜場山下の炭焼小屋附近まで踏跡あり。それより本流は箱多き澤づたひとなる由なり未だ探る機會を得ず。後者の模様は、八木澤君の紀行に詳し(41)。(一行四人、昭和四年六月、この方面より入る。同行の入夫は栗野太與治、阿部龜太郎にて、兩人とも好人物にてよく働けり。日當一圓五十錢は飯豊山中他に見ざる低賃銀とす)今これを抄録して参考に資す。(この方面の地名、多く營林署及村人に依る。)

新谷より若栗新田まで半里(第一日)、林道は人品頭(ヒトシロ)山の北肩に出、金七峠に達す。山腹をからみてセンボクの平を通りタシロ澤にて林道終る。これより炭焼の踏跡ありて東方小屋に通ずれども、他の古き踏跡の澤に沿ひ上れるを傳ひてやがて東岸に移る(第二日)。尙ほ古き踏跡は尾根の西をへつりてスタヂ澤西俣源頭に至る。これは以前炭焼が赤谷方面より入れる跡なる由。藪に蔽はれて明かならず。俎倉山東の低所に出づる僅か手前にて路を棄て残雲を踏みて尾根に出づ。那界の尾根は凹凸激しけれども、古き切開の跡僅に残れるため存外行程捗れり(烏帽子岩の西鞍部にて第三

日の行を終る。)烏帽子岩は這ふが如くにして登る瘦せたる岩尾根なり。之より暫く藪手強し。蒜場の登りは疎なる柴の間を縫ひ、雪間に咲ける片栗、岩鏡の花を踏みて樂に歩行し得るも、頂近く又藪深し。烏帽子岩よりこの蒜場の西峯まで約三間。尾根東側に雪堤連り始む。あたりによき泊場多し。三角點は丈餘の灌莽に取り卷かる。附近は地形錯雜、灌莽繁き時の尾根傳ひは不快ならん。山頂より東に出で、初めて飯豊山への展望開く。南へ戻り氣味に思ひなされるが二澤を暫らく下り後東に郡界に出づ。尾根の東側の残雪を傳ふことを得。一一四〇米の隆起の南の鞍部は櫛の木繁れる平、風當らず水近く薪多き好き泊り場なり、眺望又開け快き處也。(此日の行こゝに終る。三角點より一時間足らずにて達せり。)千四百十米の峯は上半藪に蔽はる。下りは那界の喬木林を目標に雪を下る。その廣き残雪切れるあたり白樺交れる櫛の深林なり。一〇四〇米の峯の邊は灌莽深し。高館山(一〇三九・四米)の登り急也。頂上また灌莽にて眺望なし。一段下つて愈烏帽子への登りとなる。残雪上、或は下生え少き林中をゆく。獸の路も所々利用することを得。一三四一

米の峯より深き藪となり（一四二〇米附近の平に泊る。）やがて登るにつれて藪も浅く高山植物帯に入る。後烏帽子と北峰との鞍部に達す。未だあまり人に汚されざる烏帽子の頂上は好し。（この附近の早春の様子は前號の佐々氏の紀行に詳し。これより大日岳迄は前記辻川氏の行と併せて述ぶべし。）（38）（42）。

四及五共に北峯の急な降りを終へたる邊はこの尾根にて最も好き處なり。馬糞穴へは登らず北側をからみ東側一三八〇米の鞍部に下る。裏川の源頭に窓の如き感じを與ふる狭きキレトあり。このあたり尾根は大略裏川側に急にして風強きため、灌漑浅く、且獸の路つゞけり。再び灌漑及び陣竹の藪を潜れば雪田ひらけ、キンカ穴澤源頭に達す。途中小隆起多し。一六六五米の登りに少しく藪と闊ふ外は歩行容易也。實川側の大雪田を渡り行くことを得可し。好野營地所々にあり。（辻川氏の行、一六六五米の僅か東上にて烏帽岳下りの一日を終る。八木澤氏の隊は大方は雪傳ひに小大日西下一八六〇米の鞍部に達し得たり。この行程の差は主として残雪の有無に據るものとす。）尙ほ大部分は雪を踏みて小大日西の峯（二〇六〇米）に達す。（七月

には雪なくも膝位の小笹の尾根なり。又西側にて雪堤を辿ることを得たり。）矮き偃松現はれ始む。小大日より大日迄は南側に雪田連なれり。（六月）登りの偃松中には切開あり。（七月に於て一六六五米より約四時間）。大日岳より御西を経て本山への行は下記の文獻にて其一般をうかゞふ可し。（7）（25）（28）（30）（24）

概して此の方面より本山への登行は烏帽子附近の爽やかなる氣分をその主たる特色とす。

又新谷より綱木を経て赤谷に至り加治川口をとりて本山に至るを得。

六、赤谷口

（參照地形圖、新發田、津川、飯豊山、大日岳）

羽越線新發田驛にて、支線赤谷線に乗換へ、終點赤谷驛下車。西方面より唯一の登山路也。赤谷にて白崎津川より來る路と合す。これより加治川に沿ひ湯ノ平（瀧谷）温泉まで五里弱。湯ノ平より大尾根まで急坂約三里。大尾根より御西まで尾根傳ひ一里。この登山路は飯豊川、加治川の深谷を脚下に瞰み時に不動ノ瀑を遠望し大日岳の高聳するを仰ぎつゝ登るを特色とす。西部より本山に至る最短なる唯一の道なり。赤谷より

本山まで最少二日を要すべし。この道の記載はその状況の推移、概略下記諸氏のものに知るを得べし。大平氏(27)、沼井氏(25)、藤島氏(3)(4)の外に(5)(9)(40)。赤谷線通じてよりこの方面よく拓かれたり。(この方面の地名多く後二氏等に依る)。

尙ほ赤谷を基點として左の敷登路を考へ得べし。則積雪を利用して加治川南岸祝の鼻より蒨場山に登るもの、踏跡あり。又都澤落口下の架橋點より烏帽子山稜に達するもの(林道を利用し得)又湯ノ平温泉より南岸に徒渉して烏帽子又は小大日方面へと攀づるもの。

湯ノ平温泉より上流への谷溯行は、この方面の最も興味あるものにて、不動瀑より上は實に秘奥の深境となす。その詳細につきては知る者少し。尙ほこの地よりは北股川を溯りても、センダク澤を溯りても又オーエンの峯(逆峯)に登りても大尾根に達するを得。後者につきては昭和三年六月上旬杉原氏一行の登行あり。以下渡邊氏の紀行を大約左に紹介す可し。(40)。(一行四名赤谷の小柴豊吉を人夫として行けり、人夫賃二圓五十錢)。

湯ノ平を午前七時四十五分發。デブリイを踏みガレ

をへつりて暫く夏路通りゆく、タメノ平の手前(九時半)にて北へと急斜面を攀ぢオーエンの峯に登る。下半は雪融水の流れし跡にそひて登り、上半は藪をこぎ三時間に於て尾根上(十二時半)に達す。尾根はかなり瘦せたる所あり。概して雜木密生す。途中、青瀧を見下し得。標高約千三百米の所にて始めて殘雪に會す。こゝまで約三時間半。地紙より石コロミノ頭の方まで見渡せる地點也。(此地野營に好適。泊る)これより上尾根廣まり殘雪豊富なれども所々灌莽深く行を妨ぐ。上るに従つて陣竹となれども、さして甚しからず。センダク澤源頭の廣き雪溪に出で、アユクラ澤の雪溪と合して雪田の山稜を蔽ふ處より搦み、石コロミ澤ノ頭の東鞍部に着す。(野營地より約七時間を要せり)。

このオーエンの峯傳ひは、積雪季には夏道を行くよりも、雪崩に對して安全且つ一層容易なるものと思はる。(尙藤島氏も記されし如く(4)、圖上の彦兵衛の瀧は土地の人も知らずといふ)。

尙外に赤谷よりは、積雪季に燒峯山より赤津、藤十郎方面に至る行も、展望を樂しむ上に於て愉快ならんと思はる。又内倉川に入りても山上に出づることを得

べし。

七、二王子山越え (参照地形圖、同前)

前述赤谷口の外、西海岸方面より本山に至るものに二王子山を越えて至るの路も考へらる。即ち二王子山までその登山道を利用し、後東に長驅して、榊取倉、赤津、千石、萬石の平、藤十郎、二ツ峰と起伏變化に富む興多き行程これなり。昭和四年六月、杉原氏初めて之を試む。左に同行山木氏の紀文を借りて其大略を紹介すべし(44)。(地名はこの行による)。

六月二十二日。新發田驛より杉原を経て山麓南侯部落に至り、須藤七太郎方に泊る。途中石喜に營林區官舎あり。附近の状態を聞くを得んか。

六月二十三日。七太郎氏體頑健、寡言朴訥なる好人物なり。依て同行を乞ふ。道は一本杉より來るものと合するあたりより急となり、七曲し、再び平となれど杉並木あり、凱旋橋を渡りて二王子神社に詣づ(麓より一時間)これより奥の院までは路悪しく且急なれば一の王子神社まで下の社より一時間半を要す。

尙ほ峻坂續き、九四四米あたりより漸く緩となる。

雜 錄 ○飯豊山の登路に就て

一二〇〇米附近に至りて始めて残雪を踏む。(一の王子より二時間)更に一時間程の間は時折残雪を踏みつゝ三王子には立ち寄らず、やがて奥之院本社に着く。山上より見たる飯豊方面展望は、期待に負かず素晴らしきものなり。これより暫く藪を押し分けたる後山脊西側の残雪を辿り、四十分にして二本木山に至る。この下りは深叢残雪半ばせるも、遂に長峰に下り終らずして野營す。水遠ければ雪を融して用ゆ。

二十四日。時期少しく後れたれば、この低く長き尾根はさして残雪を利用すること能はず、藪深くして雷岳まで半日を要せり。榊取倉を過ぎて間もなく雨に逢ひ、ヤンゲンとの鞍部に野營す。

二十五日。午前小雨。午後又藪を泳ぐ、ヤンゲンの北肩あたりにて漸く残雪上に出で、足の軽きを喜びし間もなく又凄き叢となる。赤津山下にて野營。雪げの水を用ゆ。

二十六日。快晴也。赤津へは残雪眩ゆきを踏み、一時間半にして達す。赤津より藤十郎山までは雪堤連なれり。千石の平は心地よき所なり。所々に水を湛えたる小池あり。この長尾根中の樂園と稱すべし。(赤津よ

り一時間)。平下の鞍部よりは雪無し。二時間を費して藤十郎山上の人となる。二ツ峰を望める景よし。源左衛門澤の源頭に泊る。

二十七日。快晴。北ノ股川寄りの残雪を踏みて容易に一四〇四米の崖に達す。(一時間半)。次の突起も南側を雪堤によりてからみ、愈二ツ峰の登りにかゝれば、偃松現れ尾根次第に狭く且急となり、漸く飯豊に近付きたるの感あり。二時間の後二ツ峯の瘦せたる峯頭に立つ。二ツ峯より主として北股川よりの残雪をつたふこと二時間、やがて高山植物の妍を競へる門内岳に達す。この日は石コロミ澤ノ頭の下草原に野營す。

二十八日。霧の中を大尾根傳ひに本山に至り、この行を終る。

概してこの行は雪の季節に遅れて藪に苦しめられたり。されど二王子山上の大觀、千石平の樂天地、二ツ峰の奇峰は特記するの價ある可し。二王子下より六日の旅なりしも五月の候ならばこの半の日數にて足る可し。又短スキーは充分利用し得べし。

八、胎内川入り

(參照地形圖、中條、小國、飯豊山)

羽越線新發田、中條、平木田、又は坂町等より下車し、坪穴部落を経て入るを得べし。深刻長流せるこの溪谷は、澤登りとしては興味深からんも、本山方面に登るためには迂遠不便の感ありて、未だ一人も試みず、故に知る所少し。この方面よりの登路の狀況は、更に他日を期して記す所ある可し。

九 大石川入り

(參照地形圖、同前)

羽越線坂町下車、自動車は下關を経て下川口まで通ず。更に南すること一里餘、最奥の大石部落につく。宿舎とはなく、河内源吉氏の好意に依りて其家に宿するを得可し。この方面よりの登行は大石川を溯りて飯豊最北の俊峰、杓差岳に登り得ることに興味存す。

(尙杓差岳には玉川方面川入部落より西股澤を越えて達するを得といふ。)杓差へは西俣、中俣、東俣の孰れよりも之を溯りて登ることを得れども後者最も悪し。西俣方面に關しては既に遠藤氏の記載あれば詳しくはそれに依られたし(2)。今其大略をいへば、大石よりタキフ澤までは小徑あり。これより水の少きを利用して澤通し溯る。(通常はタキフ澤をや、登りて西に尾根



(上) 地紙山より杵差岳を望む

(下) 大尾根より西南方一蒜場、烏帽子及びニツ峯—を望む 武田 豊太郎

をからみて本流を追ふと言ふ。澤は徒渉も深く瀧と淵との連続もあれど明るき澤なり。ジガイ澤より十町足らず上流東岸に小屋あり。(尙小屋は途中中俣合流點にもあり孰れもゼンマイとりの小屋なり。)小屋より五百米等高線にそひて樂に山脚をへつりオホクマ澤に入る。(この奥にて氏等の一日終る。)これよりホコタテ澤との間、標高示數の入れる尾根を登る。藪甚し、一四六〇米の鞍部に好き泊り場あり。一五〇〇米邊より草原となる。絶好の野營地なり(氏等の一日終る)。杓差までは快き遊歩にて達す。これより大尾根づたひは略す。(後述)。

尙ほ氏一行の直前、村上の某氏、數名の人夫を伴ひて西股より杓差へ行かれたるがこの方面最初の登山なる由。(2)(37)。

東俣の一部につきては當部員照井氏の興深き記文あり(37)。(昭和四年七月、一行三名)。其梗概を採録すれば、兩俣落合より一時間程、釣橋ある所まで東岸によく踏めたる路あり。左岸鑛山事務所跡よりは見わけ難き踏あととなる。釣橋より一時間餘にしてへつり始まる。澤中は悪し。大石より五時間にしてブナイデ澤落口に

至り、徒渉してブナイデ澤に入る。少し溯れば小屋あり、ゼンマイ取の盛時に使用する小屋なりといふ。(一行こゝに宿泊)。小屋よりは五葉松多き三吉ノ峯を五百米邊まで登り、南へへつりて廣河原へと山腹を搦み下る、廣河原は本流中唯一の磧にして泊るを得。小屋より約五時間を要す。廣河原より五六町上にフッコシの瀧あり(圖上大石川の大的の北屈曲點の僅か下流にあたる)。往年材木を伐り出せし時兩岸につかへて生ぜし人工の瀑なり。但、瀑より上は岩魚も上らず、谷は益々險惡なりと言ふ。殊に大石川と記入せる字のあたりは最も悪く、谷底よりも見上ぐる岸のはざまの方が反つて狭きかと思はるといへり。荷あるため興多き澤のぼりを避けて對岸に深き徒渉をなし、急峻なる山脚を攀ぢ、八百米あたりに至り小澤にからみ下る、澤は急峻なる雪溪をなせり。(この澤の畔まで休憩時間を除きて約五時間、野營す。)

これより再び藪尾根を搦みて大澤との間の尾根に出づ。期待せし大澤の雪溪は甚しく急に、且つ雪切れ多く瀧高きを以て、尙ほも深き藪を分けてゴンロク尾根に至る。(小澤より二時間半)。初めは暫く獸の道ありて

樂なりしも、やがて鹿砦の如き灌莽に妨げられ行進意の如くならず。(雨の爲一三〇米附近に不便を忍びて野營す。)一五六〇米の峰より登るに従つて灌莽は陣竹の藪となり、幾分歩行も容易となれり。途中所々に残雪あれども之を利用し得る程長大ならず。杵差山頂附近は、暢やかなる草原にて、藪の苦しみもこゝに至りて忘れたるが如き心地す。(野營地より休憩時を除き約六時間。)この日は杵差山頂南下三町のあたりに泊る。好野營地なり。杵差より南の大尾根につきては既に遠藤氏の記文あり(2)。氏等の通られし八月の頃は、最早東にかゝる雪堤消え失せて相當藪に苦しめられたるやうなるも、照井氏の行きし七月には未だ残雪多く、之を利用することを得たり。兎に角地紙山迄は一日の行程として樂なり。

尙、大石川溯行は水浅き時期なれば不可能ならず。多くは岸を搦みてその上流に至り、杵差に達すべく、日數は大石より四日を要す可きか。(地名大石村にて聞知)。

十、玉川口 (参照地形圖、同前)

坂町驛より自動車を驅りて小國街道を東し、横根にて下車、玉川道に出ることを得べし。次項と合叙す。

十一、玉川口 (参照地形圖、赤湯、手ノ子、小國、飯豊山)

奥羽本線赤湯驛にて、支線荒砥線に乗り換へ、今泉驛下車、小國街道を傳ふ。昭和三年より自動車の便あり小國まで利用することを得可く、尙ほ玉川までも車を走らせ得可し、之を往年此間に二日を費したるに比すれば轉た今昔の感に堪えず。飯豊登山路中最も潤ひある玉川溪谷に入るも甚だ容易となりたる譯なり。玉川より二里にして長者ヶ原に達す。今泉よりするも坂町よりするも、共に一日の行程なり。必要な時は長者ヶ原にて人夫を雇ふことを得れども、沼井氏も記せし如く、屢々人夫難に遭遇することあれば其覺悟を要す。藤田虎吉氏宅、又は小學校に宿泊することを得可し。近年は人夫賃一日三圓五十錢とす。實川、彌平四郎方面と共に、他地方に比して高きに過ぐ。長者ヶ原より本山へは種々の經路考へらるゝも、大別すれば直接本山に至るもの、及び大尾根上を辿るものゝ二とす可し。

前者は村より二里にしてヌクミ平に至る。途中路明かなり。半日の行程とす。沼井氏(25)宮川氏(24)の記文あり、佐々氏又本號に詳記せり(26)。尙ほ外に(5)(23)あり。

ヌクミ平より梅花皮澤を涉り、本流左岸を傳ふ林道あり。(地圖と異なる。)大又、檜山二流の落合より道は所謂「鋸目」の險を目指して急峻なる上りとなる。一三二〇米の地點まで四時間と見れば充分ならん。この三角點より山稜の凸凹激しく約一時間にして一四〇〇米附近大又澤側に三十米程下れる處に尾根唯一の湧水あり。一八一一米の寶珠山(タマシユ)の北下に野陣場あり。(12)(24)(25)。三角點より約四時間を要す。夫より道は偃松及び草地の間を縫ひ、時々岩を攀ぶることあり。寶珠山より本山頂上まで二時間と見れば充分也。即ち通計小屋より十時間を要し、一日に之を登るは無理なる可し。下りは八時間にして小屋に達す。路は明瞭にして玉川口の普通登路とす。(6)(9)(12)(19)(24)(25)(33)。

尙ほヌクミ平を根據地として本山への直接登路として東に大又澤溯行、南に檜山澤溯行の二途あり。前者

雜錄 ○飯豊山の登路に就て

は未だ之が實際を知らず。後者は大正十五年七月、杉原氏之を試みしも、思ひしより谷惡しく、白瀧より斷念して引歸せり(33)。谷は意外に狭く、而も兩岸高く直立せるを以て南北の方向を取れるにも拘はらず案内暗き感ありといふ。初めは左岸にかゝりたる棚上をゆく。水流の幅は三間より五間にして、處々デブライにて埋れり。屹立せる岩壁又は雪崩跡等續きてへつりはかなり危険也。落口より十町足らずの所に、二時間餘を費して白瀧に達す。是に至つて左岸のへつり不可能となり、又對岸への徒涉も叶はず、瀧の上は澤を埋めて雪溪の續けるを見ながら杉原氏の一行は斷念して引返せりといふ。白瀧までは所々に雪橋ありて右岸に移るを得れど、へつりは左岸の方容易也。積雪期には雪崩に注意すれば、雪に埋れたる澤中をたやすく本山方面に達する由なれど實際を知らざればこゝに記さず。尙ほ積雪季にヌクミ平に入るには、川沿ひは雪崩の危険多きにより、小玉川より山越えに入り込むものなりといふ(30)。

長者ヶ原より大尾根に入るには種々登路あり。即ち川入より西ノ俣川を溯りて西ノ俣ノ頭(一〇二三・二一

米)に出で、南走して地紙山より大尾根を辿るもの其一也。されど未だその實際を知らず。又積雪季の登路としては大尾根への最短距離なる大フタガリノ峰を攀づるを得べし(25)。

又丸森尾根(地紙山より東北に派生せる標高示數の入れる尾根)に登りて大尾根に出るもの其二也。これは小玉川温泉に至り(後述)、湯澤を涉り、尾根を踏えてモンガクノ澤に入り、更に丸森尾根に登りて之を辿るもよし、又玉川の河畔より直接尾根に取り付くもよし。されど後者は積雪充分なる時の外は困難ならん。前者は先年沼井氏之を試みたり(25)。

温泉までは本流落合より約半時間にして路は迷ふ所なし。湯場は土用の丑の日より開き、小屋は平素疊み置くものなり。温泉よりモンガク澤まで半時間、不充分なれど切分けあり。雪にて澤を埋め居ること多し。モンガク澤より尾根への登攀約一時間。努力を要す。尾根は藪深し。松平内ノ澤源頭に泊り場有(23)。

尙ほ日向澤水源の平も野營し得可し。丸森の登りは藪及喬木にて眺望佳ならず。丸森よりは尾根上を行くより、寧ろモンガク澤源頭にかゝる雪田を辿る方得策

也。前述泊場より地紙下まで約一日を費すことあり。

尙ほ小玉川温泉を起點としては、モンガク澤が多量の雪に埋められ居る時は、澤を遡行すれば地紙山までさして藪に苦むことなく登ることを得ん(21)(42)。

又湯澤を溯りて(5)梶川ノ頭(一六九二・三米)に出で、大尾根へ行くも可なる可し。

更に地紙方面に出でずして大尾根に達するものに、ヌクミ平より梅花皮澤を溯るもの有り。五月頃の概況は本號に其記事あり(30)。ヌクミ平より梅花皮澤の下ノ二岐まで半日行程也、これ上ノツブテ石より上は澤が雪に埋まり居る爲なれば、若し夏季の如く所々悪場を通過する際は一日の行程たる可し。二岐よりは梅花皮澤の澤に入るか、尙ほ本流に沿ふかの二途あり。前者は不可能にあらざるも未だ之を試みたるものなし。後者は上ノ二岐にて又モンナイ澤を登るか石コロミ澤に入るかの二途あり。雪溪を成す時は孰れも下ノ二岐より半日行程也。福田氏は雪無き時半日にて石コロミ澤ノ頭に達したり(5)。

尙、この方面にてはヌクミ平より標高示數を記入せるカイラギノ尾根を辿りて北鳥帽子に達するを得べき

も、唯雪無き時期には藪にて困難ならんか。

地紙山より御西まで三里に亘る大尾根に關しては、既に沼井氏の詳細なる記文あれば(25)、復贅言を要せず。雪無き時と雖も地紙より強行一日にして本山に達す可し。積雪季には極めて悠揚たる山上一日の行樂を恣にするを得ん。其他この大尾根の記文には(23)(30)(32)(34)(37)(44)等あり。

こゝに予等の北烏帽子又は北ノ烏帽子と稱せるは、裏川の烏帽子と區別する爲に二〇一八米の峰を指して呼べるものなり。

最後に大日岳と本山との間はこれも周知の場所にして(6)(25)(28)(30)(34)、約一時間の行程也。大日岳の登降は兼て噂されたる如くに困難なるものにあらず(28)、夏季の藪も他の登路に比しては寧ろ云ふに足らず、御西より往復三時間あれば充分なり(11)。(玉川方面及本山方面の地名は、多く長者ヶ原にて聞き知れるもの及び上掲の文獻に據れり。)

十二、米澤口

(參照地形圖米澤、玉庭、飯豊山、大日岳)

奥羽本線米澤驛にて下車、西行し、口田澤より西澤

及び玉庭をへて下屋地に當り白川を廻り最奥の部落嶽谷まで約九里。途中路悪く一日の行程也。尙ほ川に沿ひ大日杉迄、約一里強、途中ブドウ澤落口北岸に小屋あり。泊すべし。大日杉よりは愈々急坂サンギ坂を上り地藏岳に出づ。こゝより種蒔山下大又澤の雪溪まで一里弱。切合せよりこの方面に下るには、地藏岳を目標としてこの雪溪を傳ひ、東方の尾根に上る道に注意して見出すを要す。無雪季には路は一旦澤に下りて東尾根に登る也。本山より岩倉まで一日行程とす。

この登山路は飯豊登山路中には割によく踏まれて居るものなれど、麓に達する迄遠く、米澤方面より登降し得ると言ふ外に特色とはなきやうなり。只、上流區域の森林溪谷は美しく見るべきものあり。途中の狀況につきては、古く大平氏の紀文の外下記を數ふ可し、何れも夏季の行とす。(11)(27)(38)。尙ほ小國方面より東瀧を經、鍋越山を踰えて地藏岳下に登り來る道あれども、之に關しては知る所少し。(地名は上掲文獻に依る。)

以上は餘りに簡單に過ぎて、或は後遊の士を誤る虞なきを保せず、讀者願くは各記文に就て詳細を知られ

んことを。殊に予等は未だ探られざる山谷の記文を得て一日も早く本文の缺を補はんことを囑望に堪えず。

附記。飯豊山に關して散見せる記文は左の如し。(氏名はアルハベツト順)

- | | | | | | | | | |
|------|-------|-------------------|----------|------|-------|---------------------|-------------|-------|
| (1) | 阿部 能成 | 山村雜記(山中雜記) | (大、一三) | (18) | 同 | 飯豊山(十九頁) | (同) | (同—七) |
| (2) | 遠藤長四郎 | 杙差岳より飯豊山へ | (やま二二) | (19) | 同 | 飯豊山より玉川溪谷へ | (同) | (同) |
| (3) | 蒺島 玄 | 飯豊山遭難記 (キヤムビンゲ八二) | (二四) | (20) | 同 | 飯豊山、大目岳 | (同) | (同) |
| (3) | 同 | 越後赤谷より飯豊連峯 | (山岳二三—一) | (21) | 同 | 飯豊山、大目岳、地神山 | (同) | (同) |
| (4) | 福田 昌雄 | 飯豊山峯への一登路 | (山岳二二—一) | (22) | 同 | 飯豊山(七十六頁) | (同) | (同) |
| (5) | 北大山岳部 | 東北朝日岳より飯豊山 | (同部報告二) | (23) | 三田 博雄 | 丸森尾根と地神山(二高山岳部記録手記) | | |
| (6) | 本郷 常幸 | 飯豊山、大目岳 | (登高行三) | (24) | 宮川 久雄 | 東北朝日岳及飯豊山 | (登高行一二) | |
| (7) | 石川 光春 | 飯豊山行 | (山岳一一—一) | (25) | 沼井鐵太郎 | 飯豊山 | (山岳二〇—三) | |
| (8) | 板橋 敬一 | 飯豊山の登路について | (山とスキー二) | (26) | 同 | 飯豊山塊の登山(通信) | (山岳一七一—一) | |
| (10) | 笥 素彦 | 飯豊紀行 | (わらぢ—三) | (27) | 大平 晟 | 飯豊山 | (山岳三一—三) | |
| (11) | 川上 俊秀 | 飯豊山 | (わらぢ—二) | (28) | 岡本 信三 | 五月の飯豊山 | (登高行一五) | |
| (12) | 國府 貫一 | 飯豊山より朝日岳を経て月山へ | (登高行一六) | (29) | 大島 永明 | 飯豊山、大目岳(通信) | (山岳一五一—三) | |
| (13) | 慶應山岳部 | 五月の飯豊山(年報欄記録) | (登高行一五) | (30) | 佐々 保雄 | 五月の飯豊山 | (山岳二五—二) | |
| (14) | 同 | 飯豊山スキー登山(同) | (同—六) | (31) | 同 | 早春の鳥帽子岳 | (山岳二五—一) | |
| (15) | 同 | 飯豊山大目岳(同) | (同) | (32) | 佐山 英駿 | 實川と櫛ヶ峯 | (同) | |
| (16) | 同 | 東北地方の山旅(同) | (同) | (33) | 杉原 五郎 | 檜山澤瞥見 | (二高山岳部記録手記) | |
| (17) | 同 | 秋の實川(同) | (同) | (34) | 武田 久吉 | 飯豊山に登る | (山岳二〇—三) | |
| | | | | (35) | 田中 三晴 | 飯豊山スキー登路に就て | (登高行一五) | |
| | | | | (36) | 同 | 同 | (登高行一六) | |
| | | | | (37) | 照井 秋生 | 大石川東俣と杙差岳 | | |
| | | | | (38) | 辻川 秀夫 | 実川と鳥帽子岳 | (二高山岳部記録手記) | |

(39) 辻本 満丸 飯豊山御祓所の下段 (山岳一六一)
 (40) 渡邊 遜 オーエンの峯を登つて (二高山岳部記録手記)

(41) 八木澤行正 蒸場山より (同)

(42) 山形高校山岳部 湯澤を溯りて地紙、飯豊へ(通信)

(43) 同 實川より大日、牛首(同) (山岳二四一三)

(44) 山本 新吾 二王子、赤津、藤十郎、二ツ峰

(45) 山下 熊二 彌平四郎あちこち (二高山岳部記録手記)

(46) 同 (登高行一六)

○晩秋の小金澤谷

吉田喜久治

はしがき

本誌第二十二年第二號に私は「葛野川小金澤」と題する一文を寄稿したが、その後再遊の機会を得たので前稿の補充訂正の意味でこの紀行を書いて見た。

地名に就いて

武田久吉博士は黄金澤の文字を用ひられ、甲斐國志

には金澤と小金澤の二とも用ゐられてゐるさうであるが、こゝでは一般に通ずる小金澤を當てゝ置かう。

士民(七保村)の云ふ小金澤或は小金澤山とは、葛野川の本流を育む山地一帯の字名であることは甲斐國志以來今も同様であるらしく、土室川落口より上流を單に本谷と稱してゐる。即ち葛野川を主としていふときは本谷であつて、端的に澤を指していふときはコガネ澤といふのである。

本稿では便宜上、葛野川の土室川落口より上流を小金澤、一、九八八米小金澤三角點を黒岳山、二、〇一四米雨澤三角點を雨澤頭として置いた。

小金澤を育む連嶺即ち石マラ峠より黒岳山に至る尾根を總括して小金澤山或は小金澤連嶺と呼んだ方が妥當の處置であらうと私は考へる。

もしどうしても何處かに「小金澤山」を持つて行かなければ氣が濟まないならば黒岳山に冠するのが最も適當だと信ずる。五萬分ノ一「丹波」圖幅で見ると眞木澤の最奥の赤ヤノ澤が喰込んでゐるが、木澤に非ざることは周知の事實である。又雨澤頭も精確に云へば日川支流アメ澤のセリより少し北寄に當つてゐるので一寸

變である。

本稿に記載せる地名は、小菅、七保、廣里、神金四村の稱呼を採録したもので、従つて或村に通じ或村に通ぜざる點が多々生ずるのは止むを得ない。

眞木澤—大峠—白草合流點—

新榮兵衛小屋

昭和四年十一月二十二日夜の九時半初狩驛に下車。

今度の旅は豫て同行の管であつたO君、N君共に都合悪く、結局獨り新宿驛を出立したのである。

待合室で提灯を點して、驛前の廣い道を甲州街道に出て右に折れる。月はまだ出ないが、雲氣一つない透徹つた大空には無数の星がまたゝいてゐる。

鐵道線路を踏切つて、それに沿うて、笹子川の深い溪底から淙々と高鳴る川音を耳にしながら端山の裾をめぐつて行く。

五萬分一地形圖「谷村」圖幅に記載された、神社の傍を通り、下眞木に抜ける間道をうつかり見逃して、鐵橋のところまで来て仕舞つた。

十時半街道から左に被かれ龜子橋、大橋と云ふ二つ

の橋を渡り、眞木に入る頃ほひ、東北方の山坡の間に月が昇つて、あたりが明るくなる。

家並のつゞいた賑やかな下眞木、上眞木を通ると、端倉峠を経て端倉鑛泉に到る岐路があり、その僅かに富士見鑛泉と云ふのがあつた。

月は村界の山坡にさへぎられるので再び提灯をとぼした。對岸は月光に映えて、明るく浮き出て居る。

十一時二十五分だら／＼と下つて、眞木川のほとりに出て遊仙橋と刻まれた高い橋を渡つた。右岸は崖側がひらけて桑畑の間に間明野の人家が聚落する。間明野を過ぎ道は左岸に渡り、眞木川最奥の里落桑西に出る。

午前零時二十分桑西の井上吉五郎氏を尋ね當て、寢入はなを無理に叩き起こし、爐端に上りこんで、同氏に小金澤谷の地勢を詳しく訊ねた。

午前二時五十分同家を辭して、戸外に出ると、半圓の月は中天にかゝり、嚴冬を偲ばせるやうに空に凍り付いて、邊りは眞晝のやうに明るく照されてゐた。かさ／＼と鳴る霜柱を踏み締めつゝ林道に戻つて橋を渡ると木炭を山と積んだ物置のやうな小屋が在る。

だら／＼降りには何氣なしに進むと道は消えて仕舞つた。往路を戻つて注意すると、枕木にするらしい栗の木の本材が散亂した所から林道は少し高みへとついでゐるのであつた。

一三時二十分左岸に移り、又右岸に戻り、暫くして小澤を渡ると、林道は直きに亦左岸に移る。掘下げたらしい、じめ／＼としたぬかるみを通る日蔭ジャクソンか云はれる所であらう。

いつの間にやら又、本流に岐れて枝尾根(大澤右岸)に紛れこんで居た。こゝは桑西で云ふ大澤であつた。可成戻つて幽かな踏跡を發見し、河床に下り、右岸に移ると、眞木川に沿ひ、林の中に通ずる一條の細徑が續いてゐた。

曉近く徑らしいものは消失して、身動きも儘ならぬ熊笹の茂みの中を、がさ／＼と歩るき廻つてゐた。磁石を見ると、方向が審かしい。空身になつて、高みに上つて仰ぐと北微東に小尾根をへだて、大峠らしい茅戸のタルが見えた。黒岳に源を發する赤ヤノ澤の流域に迷ひこんでゐたのであつた。

叢林を遮二無二押分け、大峠澤右岸の崖上に出て河

床に下り、河身に沿うて進む。水の餘り動かないところではガラス板のやうな水が張つてゐる。

夏ならば河中に蹲居した岩から岩へと飛び移つて行かれるが、何分にも岩が凍つてゐるので、度々轉倒して尻餅をついたり、のめつて脛を岩にぶついたりする。濡れた箇所は忽ち凍結して仕舞ふ始末だ。

水が涸れ、笹藪を分けて上り上つて大峠の石塊のあたりに出た時には、夜は全く明けはなれた(七時)。

眞木澤の源頭をなす黒岳と雁ヶ腹摺山との鞍部は、茫々とした廣い草原であつて、荒寥とした感じを與へる。こゝは眞木澤から小金澤谷への乗越であつて、眞木澤の山人達は大峠と云ふてゐる。

大峠に鏡ダルと云ふ別稱のあることは本誌第二十年一號所載田島氏「多摩秩父行」で始めて知つたのであつて、同氏はこの鞍部から紫紺色を湛えた青空を望めば恰も鏡にふさはしいと形容され、又松井幹雄氏の「大菩薩連嶺」中には越中の窓と同意義で小金澤の方から登つてくると、この鞍部が圓く割れて鏡のやうに見えるとある。鏡ダルから生まれるから鏡澤と呼ぶのか或は鏡澤のツメに當るタルであるところから鏡ダルと

名附けられたものか、その邊の詮鑿は私どもの能くするところでは無い。桑西では此の地名を尋ねたが知らなかつた。松井幹雄氏に據れば小菅村での稱呼ださうだ。

顧ると、新雪に粧はれた富士が崇高な麗姿を現はしてゐる。嚴冬の一月、烈しい風雪の最中、あの氷の斜面にピツケルを打振つた苦闘の瞬間がまさしくと想ひ起されるのであつた。

暖かい時ならば草叢に寐轉んで、四圍の山々を眺めもしやうが、小金澤の谷から颯々と吹き上げる風が身を切るやうに冷いので、匆遑として雁ヶ腹摺山の西北面をからむ小徑について驀地下つて行く。

草原の緩い斜面には一面にべつとりと新雪が塗られてゐる。小徑は雁ヶ腹摺山から分派する枝尾根を辿り大峠からものゝ十五分とかゝらないでカマミ澤に降り着いた。

カマミ澤は別稱大峠向フ澤と云ひ、これは松井氏に據れば小菅村での稱呼ださうだが、大峠は元來眞木澤山民の稱呼であつて、その向フ澤であるから峠の南面即ち眞木川の稱呼でなければならぬと考へられる。然

るに眞木ではその存在を否認してゐた。小菅の山人達は、分水嶺の狩場山ノ神の西から土室川を横斷して榮兵衛小屋に到るとの由であるから、佐野峠、田無瀬、遲能戸、眞木澤と辿つて小金澤谷に入るやうな迂遠な行程は考へられない。

こゝで徑らしいものは杜絶えてゐるが、これから下には實に素晴らしい徑があるのだ。野獸の通路、そして岩清水が永遠の静けさを求めてさまよひ歩く、自然の流路がそれだ。

小憩して、流れに沿うて行くと、七時二十五分左から小澤が合する。黒岳山に生ずる本流であつた。水量は大差ない。カマミ澤落合附近の本流は兩岸緩く闊けて河床一面密叢に埋もれて歩き難い。ヤブを脱け出ると落差が著しくなつて来る。

五萬分一「丹波圖幅」に據ると、小金澤の谷は扇狀に岐かれてゐるので、地形圖だけの判斷では何れを本流と看做すか定め難いが、マミヤ澤は落口が二十米餘の瀑布となつて本流に落ち込み、又長峯とマミヤ尾根との中間の澤、本流に比して水量は半ばし私は黒岳山に生ずるものを本流と主張するに躊躇しない。土民も亦

斯く稱してゐる。

源流に對して松井氏は黄蓮谷なる稱呼を用ひて居られるが、又、ヤケノ澤とも言ふ。例の大焼野から名付けられたものであらうが、眞木でも七保でも知らなかつた。

カミヤ澤の落合から十分ばかり降ると左岸に焼失した小屋の残骸があつた、以前私が見たものである。

前稿に大峠から出る澤の合流點の上本谷左岸に小屋が在ると書いたのは誤りである。

下荒出澤の落口迄には落差の小さい瀧のやうなものが、二三あるが何れも容易に通過した。

八時三十五分下荒出澤の落合に達したが、果してこの澤が下の荒出澤であるか否かは不明であつて桑西の井上の言に據ると、大峠に生ずる澤の落合から下流マミヤ瀑に到る間に、上、下荒出澤、大樺澤の三つが合してゐて、上荒出澤は水は小さく、特に注意しなければ、知らずに通過して仕舞ふとのことである。今度はこの三つの小澤の中、二つは見落して仕舞つた。

上の石小屋は上荒出澤落口の下手左岸に在り、下の石小屋は大樺澤落口の左岸の高みに在るさうであるが

二つ共にその存在を確かめなかつた。

そろ／＼瀑が出て来て、左岸を絡んだり右岸を高く捲いたりする。兩岸の壁が戸口のやうに接近した箇所を通り抜けると、そこがマミヤ澤の落口であつた。(九時三十二分)

マミヤの瀑は七保では鏡ヶ瀑と呼んで居り、小金澤谷最大の瀑であつて、瀑幅は約〇・八米高さ約二〇米に達する。マミヤ澤全流の水が斷崖上から蒼黒い瀑壺へと奔落し、深く割られた釜の中で白く沸き返り、無氣味に激んでは溢れ出て本流に合してゐる。瀑頭は陽の光を浴びて白金色の美しい飛沫を散らしてゐる。

先刻のヤブ潜りで、大切な草靴二足と鋸を失つて仕舞つたので、ゴム底足袋では明日の行程が一寸氣に掛る。

桑西の井上は、曾つてマミヤ瀑の上からマミヤ尾根を横斷して、魚止瀑に到つた事があるさうだが、これは傾斜も緩く比較的容易であらうが、逆に魚止から登るのは苦しいだらう。時間の點では河通しも大差ないさうである。

私は神金村で以前マミヤ澤附近にて、檜の伐材が行

はれたと云ふことを聞いたことがある。マミヤ澤上流の檜立澤及石楠澤とか云ふのは、神金の柚の削唱に係るものであらう。

九時五十分出發、今度は河通し行く心算であると、ものゝ五十米と行かない中に峻聳する兩岸の岩壁は相觸れんばかりに迫り合つて、その下には幾つかの奔湍と深淵とを擁してゐる。やはり河通しは難しい。

記憶に残る右岸の細いザレを登りやがて尾根に達しやうとする所でその儘左に數米絡み、草崖を攀ぢて、枝尾根に出る。絡んで行かうとするが、次ぎの枝尾根との間が切れこんでゐるので、とう／＼尾根を登り切つて頭に達する。忽然として視界が展げ、直前にアメ澤頭から垂下するマミヤの尾根が迫り、その末端は小金澤の深谷にと没してゐる。右顧すれば、まばらな木立を通して、雁ヶ腹摺山から大樺澤頭(丸岳)大峯への連脈が臥牛の如く蜿蜒と横はつてゐる。

尾根について降り十時四十分水面から數米の段丘のところへ出た。河は意外に穩かな相貌を呈してゐる。

下流を見ると、河幅は闊けて、兩岸には石洲があるものの、一二箇所岩鼻が突立て、その下は深く淀んで

静の様になつてゐるので、再び河身を離れて登つた。高廻りを終へて、降つて行くと、水面から數米の所で急なところに出たので、ロープを使つてさんざ苦しんだあげくやつと河原に下りた。

可成休憩して十一時半出發、右岸にガレが難き込んでゐる、その下を通ると、瀑となる。左岸に上つて、ぐら／＼と煮えたぎる釜を下瞰しながら降りかけると草崖の尖端が斷たれて、瀑釜から溢れる水が、その裾を洗つてゐる。曾つてはあつさり片附いた所も、岩が凍つてゐる。手剛いので悠つくり降りた。

この瀑から又三つばかり瀑をつらねてゐる。第二のものは小さいが最後のは大きいもので、狹められた岩の囲みを割つて奔出し、咆哮怒號してゐる。その左岸を高く捲いて一寸と行つたところが、白草のドウである。(十二時半。)

礮で中食を執る。桑西で炊いて貰つた飯は、すつかり凍つて、味も何も無く、砂を嚙んでゐるやうであつた。寒いので食事を済ませるとそこ／＼に出掛ける。

長峯とマミヤの尾根の間の澤(大菩薩澤と云ふ立派な名稱が流布されてゐるが、私は山人達から會て一度

も此の名を聞いた事がないので、その出所を御存知の方から御高教を得たい。七保ではマミアイと云ふのを聞いたが、この澤の上流を云ふらしい。は水量こそ僅かではあるが、岩壁削立して屏風を立て廻はした様に掩ひ冠さり、陽の光も通さぬ幽暗さである。

雨樋に似た河床を暢氣な氣分で歩く、兩岸が闊けて少し明るくなる。

一時五分谷が西南に曲らうとする所に、左岸に小澤が注入してゐる。七保、小菅、西原の三村で新築した小屋(假に新榮兵衛小屋)に到るには、この小澤について舊榮兵衛小屋跡に到り、小徑を辿つて山腹を搦み、長峯に上るジグザグの始まらうとするところに小屋があるのである。

こゝで流水は再び兩側から奔々と挟まれて、その間隙から迸つて魚止瀑となつて居る。瀑そのものは小さいが、壁になつてゐるので、簡單に通過を許さない。

私は魚止を越して、次に左岸に落ち込む小澤を上るつもりで、左岸を登り左に絡んで枝尾根に達した。小屋に行くのに、折角上つたのを降るのも惜しくなつたので、この儘絡んで行けば、新榮兵衛小屋の小澤に逢着

するだらうと、高をくゞつて絡みかけたが、自然と上つて仕舞ふ。仕方が無いので長峯に達する積でその儘攀ち登つた。

枝尾根の頭に出ると、これから登る山腹が如何にも急峻に見える。二時、傾斜が緩くなると間も無く、草叢を横切る小徑を發見して、すら／＼と歩いて行くと、五分程で長峯から来る路に合して、新榮兵衛小屋に達した。

小屋内はひどく汚れてゐたが、薪は山の如く積んであつた。取り片附けて、爐邊に打くつろいだ頃ほひ二人連の登山者が降りて來た。

新榮兵衛小屋—白草合流點—不動瀑—

鷄淵奥野營

二十四日。一つの飯盒で、味噌汁を拵えたり、飯を炊いたりするので、六時頃出る心算が七時二十分漸く小屋を出た。陽は既に高く昇つて空は朗かに晴れ渡つてゐる。

昨日の小徑を辿り、山腹を一面に蔽ふた、深い笹の中をがさ／＼と潜つて行く。

七時三十五分朽ち果てた小屋の前に出る。其處に舊榮兵衛小屋跡と墨書した棒杓が立てゝあつた。

小屋の傍には清水が滾々と湧き出てゐるが、すぐ伏水となつて仕舞ふ。山腹を絡んで八時その澤の落口に降つた。こゝからは流に沿うて降り八時二十五分白草のドウに着く。本流を横切る始めての徒渉は氷のやうに冷い。

右岸の汀に沿うて行くと、溪が狭つて來たので灌木に縋り、岩角に確保して、下りぎみにへづり始める。

この壁へづりは全流を通じての最悪場であつた。

僅かの距離に二十分餘費して、左岸に小澤の注ぐ上手に降つた。流石に水嵩が増して、奔流岩を噛み、崖を剝る景觀が漸く展開されて來た。

八時五十分幅の廣い瀑の左岸を絡み、こゝ暫くは河中をあちこちと涉つて行く。崖の迫るところでは、奔流となるので河縁は歩けない。

九時半瀧が二つばかり續いてゐる、左岸を絡んで降ると一としきり河勢が穩かになるが、暫らくすると亦瀑があるので右岸を高く捲いた。

十時四十分左岸を絡んで水邊に降り、下流を見ると

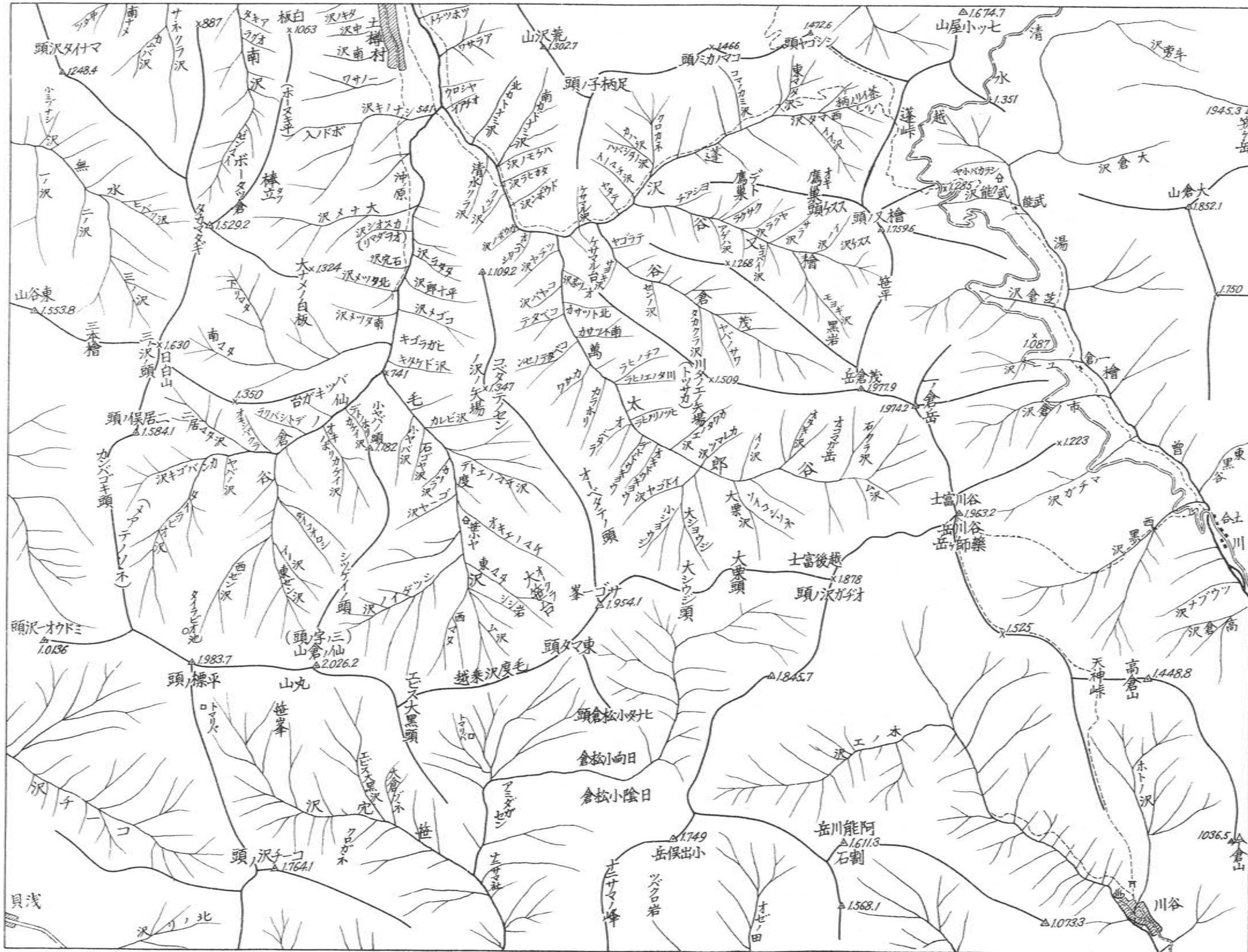
落差の激しい支流が奔落してゐる。之はシホヂ澤であつて、其の落口の少し上手に不動瀑が奔下して居る。

左岸の草崖を登て行くと白草ノ頭に到る小徑を認めた。絡んで行くのは却つて困難であり、時間を要するので瀑の上からロープを二回に使用して河床に降つた。(一〇、四〇——一一、〇五)。

奔轉落下する溪水は、圓く剝られた瀑釜の中に沸きたぎつて物凄い渦紋を描いてゐる。(瀑身幅一米高一〇米)。

白草のドウよりシホヂ澤落口までに右岸に小澤が二つ入つてゐる。シホヂ澤は、水量に於て他のものに數倍し、下流の瀧澤に匹敵してゐる。五萬分一地形圖「丹波」圖幅では適確に指示することは至難であるが、小金澤御料地とある、「澤」の字のある谷であらう。その落口の十數米上に不動瀑がかゝつてゐるのだ。三窪にシホヂ澤を含むや否やは明らかでない。七保では三窪とは云ふが、三谷三窪或は一、二、三ノ澤などとは云はない。

瀑壺から溢れ出る急瀬を涉つて、シホヂ澤を横切ると右岸は緩く闊け、踏跡を辿つて行くと、十一時十五



上越國境
地名圖

松本善二原圖

$\frac{1}{50000}$

分右から小澤が流れこんでゐる。その落口に小山のやうな巨きな岩が河中に踞坐してゐる。不動瀑を捲くには、こゝから左岸に涉つて、取付くのである。

十一時半左岸に移ると、河床に岩塊が堆積して、水流を二分してゐる。六人ウツリと呼ばれるところであつて、島の中央に巨岩が二つ相擁してゐる。その下手に在る岩蔭が岩小屋である。

十一時四十分瀑が出てくる。左岸を絡み終へると、其處に小澤が瀑となつて、瀉入してゐる。

落口を通つて左岸を上り、崖をロープで降りた。

十二時十分瀧のやうな奔湍がつよく、右岸を二度程絡むと、瀑が出る。河床に降つて、左岸を絡み又直きに右岸を小さく絡むと、そこから又瀑が続いてゐる。御茶ノ水瀑である。

左岸を上つて、捲いて行くと枝尾根に出る。かすかな踏跡があるので、それについて上つて行くと、岩肌が露出して、登れなくなる。そこで戻つて枝尾根の末端を廻つて行くと對岸に、大樺澤が懸瀑となつて落下してゐた。その下手に降つて、右岸に移り、碛で心せくまゝに慌しい中食を探る。(一、四五——一、五〇)。

水量は次第に増大して、ハチ切れそふな水勢は岩に激し急瀬に逆巻き、もうこのあたりでは徒渉も容易でない。

去年の秋はこの附近は水際を面白く歩けたのであるが、水量が多い今日では到底河床を傳つて行く事は出来ず、主として左岸の水面より數米乃至十數米の箇所を昇降して行く。

三時五分大きな淵の續いたところを過ぎ、枝尾根の鼻を廻ると、瀧澤が其の名の如く瀑を連ねて落込んでゐた。

水量は次第に増大して殆ど岸とすれ／＼に溢流してゐる。

見覚えのある巨きな潭の所に出て長峯から分派する枝尾根を廻り、その枝尾根の小徑を暫く辿つて草崖をそろ／＼降り始めた。此處は以前一時間餘も費して上つた所、流石に急峻である。水邊に降りて左岸に沿うて行くと、以前とは異つて意外にも油のやうにとろ／＼と重く流れて、澱となり、水深は次第に増して、遂には全く靜止して、蒼黒く淀んでゐる。

鐵砲の堰を止めてゐたのであつて、水際に沿つて行

く中にとう／＼岩の鼻で行き詰つて仕舞つた。

鷄淵も目睫の間とは知りながらも、初冬の陽は既に山蔭に沈み暮色蒼然として、暗黒の帳は刻々と谷を掩ひ始めた。前進を止めて、僅かに身を入るに足る岩蔭に露營することに意を決した。

もう薪をあさる時間もない。濡衣を脱いで持つてゐるだけの防寒具を身に着け、萬一を慮つて持参した木炭で暖をとつた。

谷の上には、綿を千切つたやうな白雲が頻りと往來してゐたが、對岸の岩壁も、鏡のやうな水面も闇の中に没する頃に、パラ／＼と雨滴が落葉を叩き始めた。

鷄淵—フカワシロー猿橋

二十五日。身體を蝦のやうに曲げた儘、身動きも儘ならない窮屈な露營の一夜は明けた。空はどんよりと曇つて、榮兵衛小屋より寒くなかつた。飯盒の底を叩いて、一時凌ぎに詰込み、悠つくり身仕度をして、七時に出發する。

少し戻つて登り、昨日行き詰つた崖の上を高く捲いて、水面から數米のところを、灌木の密生を分けて終

んで行く。

小澤を横切るとかすかな小徑らしい痕跡を見出したので、それを辿つて行く。七時四十分右岸に小屋のやうなものが見え、近寄ると其處が鐵砲の塚で、明瞭な道に出た。

七時四十五分鷄淵の上を辿つて、閻魔谷の落口を對岸に見ると、やがて猫額大の平地に出た。そこに小屋が一軒あつた。

前稿に閻魔谷落口の對岸柵平と記したが、正しくは閻魔谷及スバノ澤落口の對岸が即ち柵平であつて、小屋はそのスバノ澤寄りに位してゐる。

小屋に入つて休んで居ると、溪底から滔々と云ふ音が聞えて來るので、飛び出して覗くと、鐵砲が切られて、今迄清く澄んでゐた水が濁流と化して、さながら怒濤の如く狂奔してゐた。

温い汁など拵えて貰ひ、爐端に寛ろいで二時間餘も山人達と話をして十時にトチ平を發つて、左岸の道を辿り、右岸の林道と略同高度に山腹を絡んで行く。

十時三十五分八丁坂の中途に合しジグザグに降つて小金澤橋を渡り、橋畔のフカワシロで七保會山岳

部の看板をかけた家で、勤めらるゝ儘に上り込んで仕舞ふ。

昨夕から催してゐた雨はとう／＼本降りとなり、十一時四十分雨具を装つて出發する。

新に拓かれた小金澤林道は、左岸の道と並行して、殆ど高低無く、五萬分二「丹波」圖幅で板小屋から五耗の地點と一種の地點（六八八米獨立測點の下二耗）にトンネルが開鑿されてゐる。

葛野川の流は、泥濁と化して、滔々と逆巻き、いつもの美しい佛更に見られない。坦々とした立派な道を歩み續けて、上和田の神社の下で舊道に合する。殿上の桂川館で中食兼夕食を喫し、猿橋驛發五時五十二分の上り列車で歸京した。(丁)

○日肥國境を越えて

(市房山を上下し米良莊を探る)

北田 正三

自昭和四年十一月十一日至十四日。

参照地圖 陸測五萬分一 市房山、村所ムラシロ

はしがき

雜錄 ○日肥國境を越えて

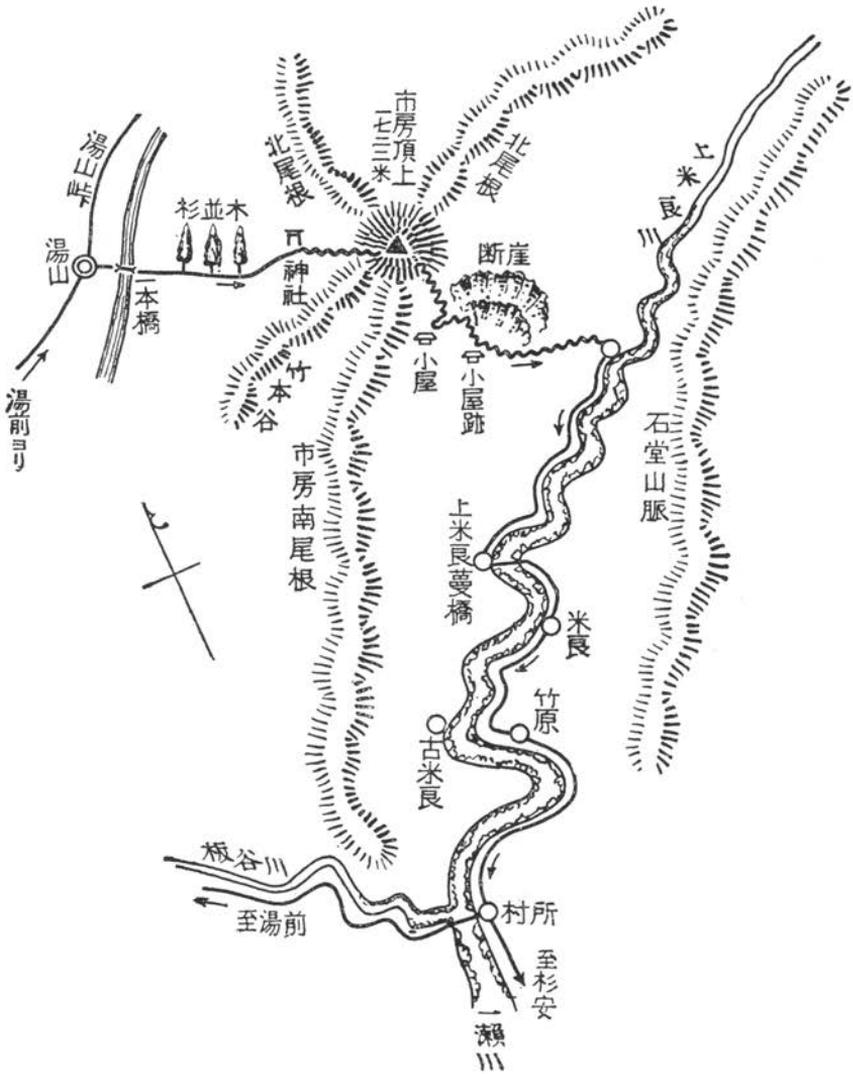
史實にのこる日肥國境山脈の異郷、肥後の五ヶ莊と云へば人は既に多く之れを知るも、國境を越えた日向の米良の莊については今も尙知る人がすくない。まして其の奥地、米良川源流の山谷深林は秘められた傳説口碑の地とせられ、之を探る人も稀である。

肥後の五ヶ莊や、日向の米良莊は市房山の東西に分れて、神秘境として山戀ふ者に、まして九州の山旅を好む人々に謎とされてゐた。

前者は訪ふ人の數多く、次第に文明の光は先づ西より入りて昔日の面影とはなく、山行く者のあこがれを裏切る事あれども、後者は未だに訪ふ人も少なく、米良と云ふ名さへ多くの人には耳遠いものである。

深き谿谷には道なく日向路よりすれば村所より米良まで、それ以東の山峽は全く忘れられた秘境である。肥後路よりすれば、原始林に掩はれたる市房山（一七二一米）の南國特有の山稜ありて人をよせつけない。

日向よりすれば一ノ瀬川上流の棧道、野獸の踏分け道、米良の谿谷に入れば道はあれども深き淵にのぞみ瀬にかゝり、下流は鐵線橋なれども上流は原始的な蔓橋、道をはばまれての難行は容易に人を入れぬ。山路



は、大密林茂りに茂り合ひ、日をさへぎり、巨幹天に延び、丈餘の熊笹が道を蔽ふてゐる。

兎に角、九州中央山脈の神秘境として只一つ残る日向の米良莊は不思議な郷谷である。従來は肥後湯山より市房山表登山路を登り、其の頂上より密林を通して遙かに十八里の間に隱見する、米良川流域を望見するに止まつてゐた。

一、原始林に蔽はれたる市房山の

東稜を下る

霜月の紅葉を尋ねての山旅ほどすがくしい登行はまたとないであらう。よしやそれが信越の氷雨降る深山路でなくとも、南九州千七百米級の山谷にはすばらしい密林に錦織りなす美觀を至る處に見る事が出来る。阿蘇の根子岳（一四三二米）の頂上より、あかくと見渡された日肥國境の山々、鞍岡、椎葉への山旅、三方山（一五七七米）内大臣山（一二五〇米）の黒々と聳えた大深林を眺めた私の想は、多年の宿志、市房山を越えて、米良莊の深谷の紅葉に引き寄せられた。旅装を急ぎ、福本青年を案内として十一日夜あはたゞしく蘇峽

を出で、十二日曉かけて薄月夜を走る肥薩の汽車は、肌寒く朝霧深き球磨川のせゝらぎもねむく、人吉驛の灯も淡き午前五時始めて山旅のなごやかな気分となり、更に乗換へ七時球磨平原を走る汽車は名物球磨の底霧の中を實に悠然として歩む如く進む。五ヶ莊への門戸、湯山驛にて重いルックサックを放り出した。

過ぎし八年の昔、多良木より此所に来り一泊して更に湯山路より市房山に單身登山せる時は小雨をほ降る五月曇り、青葉の山々なりしを回顧し、薄れ消え行く山の端を見渡しつゝ、驛長久保氏に市房山東側山稜の下降についてきゝたゞした。此附近には何人も市房を越えて米良の莊に下りし人なく、昨年獵夫が猪を追ふて下りしも終に深谷に谷まりて、森林と熊笹とに道も方向も失し終に二日間迷ひ抜き、救助隊に漸く助けられたる由。谷深く樹林密にして急崖多く下降は到底不可能ならんと氣の毒げに語る。案内福本は先年來より日向奥地の山林伐採に従事せる山の男、心に決する處あるものゝ如く、「行ける處まで行き米良の上谷丈けでも見たい」と云ふ。私も米良の上流「山ノ口」或は上米良の尾根續き折尾谷の南面から「村所」にでもとはかな

い想ひに未知の行程を決行するにきめた。

市房の八汐ツツジの五月の美しさを心に描いて朝風身にしむ湯山路の山峽に入る。

市房登山路（湯山―神社―急坂―頂上）より更に東尾根の縦走を試みんとした人達もこれまでにあつたが、いづれも天候と時期と密林にさまたげられて果し得ずそのまゝになつてゐる。それで私はこの地方の登山には十一月中旬が最適と考へて旅立つて來たのだ。私の過去に於けるいくつかの山旅も、大抵は霜葉を踏んでの山旅であつたのだ。

八時半湯山に着。文明の利器は往時の二日路を僅かに三時間餘で駆つて來たのだ。私達はこの小さい部落で朝食を濟ませ、土地の人々に市房山の日向側に就て様子をきいて見たが薩張り要領を得ない。地圖を頼りに歩くより仕方がないとあきらめ、九時半に湯山の村を後にした。

長々と目も遙かな湯山峠の道、右手には朝霧の晴れた空に市房の黒き全き姿。頂上への並木が澄み切つた秋の朝空にクッキリと浮び出して美しい。

市房神社までの登りはだら／＼と長い。ところどころ

ろに取残された老松の下で、重荷に苦しむ私達はよく休んだ。道を左に取り、澤を渡り、一本橋を渡る、前年の古木は折れて残骸を谿に浸してゐる。送り迎へる巨大の老杉、枝を交え、幹を張る、神社への參詣道。秋の光が梢間を洩れて、相映する紅葉の美しさは得も言はれぬ風情である。十時半、市房神社に着く。長閑な小春日和、社前にはたくさんの山鳩が群れてゐた。小憩して、また急な登りにかゝる。

石佛岩もすぎ、しばらく苦しい登りの後やうやく千五百米の鞍部に達した。こゝから頂上は間近く仰がれた。腰をおろして休んでゐると吹き通す風をつめたさに秋の深いのを泌々と思ふ。

午後一時すぎ私達は遂に市房山頂に立つた。透徹な秋の蒼空の下に展開した眺望をほしいまゝにする。

近く左手湯山峠を下に、合戦原カセバより、椎葉の薄紺の谷々を隔てて、都野岳（一六〇六米）の張つた山脚、銚子笠山（一四八八米）、五勇山（一六四三米）、遠く國見山（一七三八米）、三方山（一五七七米）五ヶ莊へのなだらかなスロープ、更に雲烟の彼方には祖母、傾、豊後路の數多い山々、遠く縹渺と薄絹に包まれたやうな丸

重の連峯。なつかしの阿蘇はたなびく烟のみにて山姿は認められず。

雲の上にくつきりと、温泉岳の上半裸身、湯浴み姿をあでやかに見せてなまめかしい。足下に擴がる五ヶ莊の山谷の深き森林。南には近く、をほどかに雲に聳ゆる高千穂の靈峯、遠く杉安方面の平野は三角形に展開して、そのむかふに光るは太平洋の波か。憧れの米良の深谷は、吾立つ山の東の裾を蜿々長蛇の如く流れてゐる。其の激湍は白く陽光に輝きて今將に雲を呼ぶ龍の躍動にも似てゐる。石堂山（一五四七米）や、樋口山（二四三四米）は近く東に聳え、標高こそ低いが日向境の山々の重なり合ひたる山脚の廣さ。目醒むるばかりの大森林に掩はれて遠く美々津の水源にまで延ばしたる山肩の長さ。竹元谷と米良川の谿谷を挟みたる尾根筋も亦物凄く黒き密林に掩はれて、兩谿谷の特色をはつきりと分けてゐる。

山ノ口は見えず、上米良らしき黄熟の山田に點々炊煙の上るを見る。まことにこの山頂のひろびろした眺めは私にとつて大きなよろこびであつた。

日向路の山と肥後路の山と、一つは山脚遠くなだら

かに波うち、一つは深く谿谷に下る。嘗て臺灣、新高より能高の連峯を望見せし大觀に似たり。案内が飢と渴とを醫やす間にスチッチなどして、残る東面の山稜を見下す。急坂に樹林鬱蒼と茂つてゐる。

微風だになく、一天静まり晴れて、九州百里の視野が展開する。足下、湯山の宿場に鳴く犬鶏の聲、馬の嘶手に取る様に聞えてくる。程近き下の谿谷、丁々と響き上るは、杣の斧の音か。市房山上の午後は静かであつた。上々の恵まれたる天氣を幸に一氣に東尾根の深林を突破せんと意氣昂然、ルツクサツクの紐をしめ案内をまねきて東に向ひ山毛櫛の林にすひ込まれた。枯葉は柔かく腐りて脚の下が氣味悪い。少し下れば忽ち地上五尺、熊笹と陣竹のすきもなき竹ぶすまである。苦しい藪潜りを約五百米程もやつて、漸く少し開けた所に出た。深山ツツジの返り咲き美しく、妖精の踊る舞臺としてふさはしき場所、しかし處々に黒く堀り返されたる土塊は、猪がマムシを探したる跡だといふ。近づいて見ると爪跡點々として、踏み荒されたる新らしき土の上に印せられてゐた。又下り、更に熊笹の藪に入る、しかしやうやく疎となりブナの巨樹が多

くなつて來た。次第に森林となる。ケヤキ、ハザコ、シイ、などの巨木、或は倒れ組み合ひ、或は天を摩して茂り合つてゐる。

行けども下れども熊笹はつきない。午前の露多き時ならば、全く泳ぐ様であらう。又夏季ならば必ず山ピルとブヨとに強襲さるゝであらう。しかし時を得て其の苦痛とでもなく喜びてひた下りに下る。時々、バサツと異様な音に驚いて、よく見るとムササビが樹間を元氣よく飛んでゐるのである。時々休憩して密柑を出して渴を醫やす。下るに従ひて日は左より右の方に廻る。扱は東に向つてゐると思つてゐる間にいつか西に向つて下つてゐるのではあるまいかと驚いた、巨大な檜の木に登りて遙かに下方を見れば、米良川と竹元谷の中間の尾根、九百米の大森林がすぐ目の下に近く横つてゐる、磁石を見れば方角は異つてはゐない。

猪取るワナ、据銃（猪を捕へるために仕掛けた火繩銃）には最大の注意を拂つて漸やく此の深林を抜け出した。顔と云はず喉と云はず、傷だらけになつてゐる、そして疲れも次第に加つて來た。

未知の尾根の下降と云ふ精神の張り切つた疲れ、山

行く者に取りて最も苦手とされてゐる藪ぐりの數時間、實に名狀し難い疲れであつた。時に午後二時半。

更に元氣を出して疎林に入る、森林は左右に延びて此瘠尾根のみ疎らなケヤキの林である。更に降る、右に尾根を下れば少さき澤ありて、したゝる水滴が秩父古生層の岩間より我等を喜ばして呉れた。百米程下り漸くにして木挽の仕事場を發見した。巨大な赤檜の樹幹が前面の谷より彼方の谷へ倒されてあつた。しかし人影はなく、少なくとも二三週間前の仕事場らしく思はれた。下ること百五十米許りで終に小徑に出た。もう大丈夫だと案内は汗をふき乍ら喜ばしそうに笑つてゐる。渴を醫やしてふと岩間を見る。赤き草イチゴがルビーの珠をつどつてゐる。右に小徑があつた。左に徑を取つて又谷を下る。檜の疎林となる。二つばかりの山道（炭焼道）の追分をいづれも右に取りて下る。程なく紫烟ほのかに立ち昇るあたりに人の聲がする。喜び下れば馬二頭が樹につながれてゐる所に出た。

山人が二人驚愕の面持で手に巨大な山斧を持つたまゝ無言で佇んでゐた。「上米良谷へ下る道があるか」と問へば始めて安心したらしく、「どこからきなはりました

た」と聞き返す。湯山からと云へば、どうして此の谷に下つて来たかと反問す。彼等は官林盜伐の常習者で人の來ないと云ふこの東谷で自家用の炭を焼いてゐる山ノ口の人々であつた。然し彼等は先祖から今まで東側谷の森林は自分等の物と思つてゐて、自由に伐つて用ひてゐるので、之れを盜伐と云ふ方が或は侵入者としての暴言かも知れぬ。純朴な山人は思はぬ處から思はぬ服裝をした人が下つて来たので、非常に驚いたのである。

頂上から下りた事を話すと、尙、眞實とは思はず、やはり久米谷から来たのだらうと反問する。据銃の箇數、場所などを話したので始めて信じ、よく下つて來たと驚いてゐる。

「氣ばつけてをりなつせ」とやさしく教えられて前面の尾根道を下る。炭焼小屋の廢屋を右に、小徑をひた下りに雜木林を下る。

見ると左側の恐ろしい斷崖が、ぞつとする程凄く夕日を受けて輝いてゐる。

若し我等が今少し上方の藪で路を左手にとつたならば必ず斷崖の上に出て、先年の獵師と同じ運命に陥い

らなければならなかつたのである。實に幸運にも右に笹を抜けた事が此の思はぬ成功を我等に與えたのであつた。

急傾斜の雜木林を下る。足は疲れてか、ぐら／＼して止まる事は出來ぬ程に安定を得ない。汗にまみれて下る。苦しくなつた。日は既に山のかなたに没して、暮るゝに早き山峽の晩秋はさむざむと身にせまつてきた。

忽ち左方に轟々たる水音、樹林を通して飛沫が見える。其の上方は夕日を受けて輝き、中央は青く、下方は白く岩に懸りて實に美しい大瀑布である。高さは二百米を越す様に思はれた。此のあたりの林相は、南を受けて針闊混濬林である。

下つても下つても坂は盡きない。下り坂の藪は登山者の修驗場である。心ある登行者は此の下降到絶大な注意を拂ふと聞く。

又一つ炭焼の廢屋を下に見てやうやく坂も樂となつた。猫の額程の地に下りつきてほつとした。上方を顧みると、よく下つてこられたものと自分ながら驚くやうに急坂である。登る氣には到底なれない所だ。思ひ

出した様に薄暗くなつた。あたりには野生の茶の群落が皆白い花をつけて香氣を漂はせてゐる。下る道は野生茶の藪である。

其の美觀はかつて、日向には野生の茶があつて、實に美しいと聞いてゐたが、今其の中に立ちて、むせかへるばかりの香に酔ふて、ひた下りに、前面の黒くなつた谷へ下る。瀑布のひゞきは遠ざかり、坂は又急となつて來た。そして全く道がなくなつた。それから二十分程下つて、やうやく、生新らしい木を伐り倒した場所に出た。そして其の木を引いて下つたらしい跡をひたすら下つた。

さら／＼と小谿の音を聞く頃、足下は暗くなつて了つた。朽ちた丸木橋を渡つて谿流に出た。顧みると市房山の上半身は未だに夕燒雲の反映を受けてピラミツ下形に、血の様に燃え立つて、其の下半身は縞目もはつきりと、苦しみながら下つた密林と急坂を見せてゐる。一步毎に溪流の響きは増して、いよ／＼近づき下る米良川上流の偉容を思はせてゐる。

四圍の山々は最早見えない。二人の山巡禮が、山ノ口らしき谷あひに下りついた時、一群の白鷺が靜かに

峽を舞上つていつた。更に下る百米あまり、激湍岩をかむ米良川の清澄なるに驚く。溪の美しさも、四圍の豪壯なる景觀も時間がないのでゆつくりと觀賞してゐることは出来ない。暫らくゆけば二三坪ばかりの燒畑あり。次第に闇が深くなつた頃、なつかしい人里の音を聞く、一老婆の葱引けるに逢ふ。重たく疲れた口を開いて問へば、「山ノ口ですばい」と答へる。上米良まで三里、村所まで六里。

無理に願つて、名ばかりの小屋に宿を得て、燃えさかる火に向ひ夕食をとる。主人は未だ山仕事より歸つてゐない。やうやく溫まり毛布にくるまりて、炊いてもらつた飯を食つてゐると、表から馬の嘶き、犬の聲。がらつと開いた戸口に立つた壯漢は先刻山で逢つた二人の山人であつた。ばち／＼燃える椎の木を折りくべ乍ら、猪獵の手柄話に耳を傾け、すゝめられる猪の鹽漬肉を賞味し乍ら食を終る。

時は既に八時半、全く疲れ果てゝゐるものゝ今日完全日肥國境の難關を突破した事を思ふと喜びが胸にこみ上げてくる。思へば四時間半の下降は苦痛であつた。山の人々に何が爲めに此の奥へ來たかと聞かれ、

只物好きと答へてもどうしても承知せず、金山探しか又は山廻りの役人であらうといつて信じない。色々説明してやつと了解したが、世の中も變つたものだと笑つてゐた。

かくて米良郷の夢の第一夜はふけて行く。

米良川の仙境

十一月十三日、午前九時半まで霧の晴れ間を待つて出發する事となし、ゆつくり準備した。

肌寒き峽間の朝はまるで雨天の様にしつとりとしてゐる。朝食をおはる頃やうやく朝の光は椎の純林を通して、前面の石灰岩の川壁をはつきり見せた。

元氣を出して出發。心はすが／＼しく元氣は恢復してゐるものゝ足はやはり妙に重い。

次第に晴れ渡る朝霧に現れて来る峽中の樹木、岩、峯、激湍。道は峽の右を絡んで二百尺の斷崖に懸つてゐる。

左、清澄な激流は岩にせかれ、白く漂白された流木にはとまれて、白泡を高く飛散し、垂れ下つた色美しき紅葉にしぶいてゐる。日は全く高く上つてゐるも、

ぼんやりと霧を通して白光を紅葉に映じてゐる。半圓の山の端が下流に鱗狀になつて幾重にも峽をくぎつて遠くならび、卵白色の朝の空にまで延々と續いて峽の深さを思はせる。道はいつ頃作つたか知れぬ、くちた棧道である。

嘗て、坪内先生が物された戯曲「役の行者」の舞臺面を思ひ出して、私も今あの一人の凡俗を脱し得ない修験者の様な氣になつて黙々として下る。そしてとりとめもない思ひが胸に湧いて来る。

同行の案内は變る景色の雄大と神祕に打たれて、人に見せたしなどと感激して疲れも忘れたらしく道を急ぐ。次から次へと同じやうな山が朝霧の中から現はれてくる。昔の詩人が幾百峰を送る、などと歌つてゐる其の情景が實際である事を深く感じ乍ら、がらにもない詩仙となつた。

行けども歩めども山又山。午前十時五十分路傍に廢屋の跡あり。焚火をして、露に濡れた下半身を乾す。このあたりの河床は全くの激湍で、轟々と怒聲を上げて文明の海へ急いでゐる。あたかも、人の世の如く、一刻も争つて、其のより住みよき場所へ近づかんかと

の如く。しかしそれは歩一歩、墓場への近道に他ならぬ。清澄なる岩清水もやがては鐵管を通り水力電氣に使はれ汚されて、黒く濁つた水となるを知らずにひたすらに急いでゐるのだ。

道は仲々はかどらぬ、峽の景色は全く千篇一律で只河床が次第に低く、廣く、岩が圓くなつて來たばかりであつた。米良川は未だに水電に惱やまされずに全く處女地である丈けに實にすが／＼しい深山川の面影を見る事が出来る。

深き杉の森林に入る頃より道らしき道、人の足跡を見た。行く道は漸やく廣さを増し、川の斷崖をしばしはなれて、林道をたどり又川の斷崖に出づ。道は次第／＼に廣さを増して車の轍を見る頃、傍に笕の水を見て渴を醫やして進む。峽が行手より三角形に鱗状の山々を重ねてせまつてゐた山峽は反對に向ふへ開いて來た。氣がついて見ると、峽は非常に廣くなつて、肌を刺すやうにつめたかつた風もいつの間にか温かくなつて來た。

馬のいななき、人の聲、犬の叫び、走り出る村童。やうやくにして五十町一里にして四里半の峽を人里に

出た。上米良の部落である。時に十二時半。

小學校分校あり、全部茅葺きである。茶店らしい商店が我物顔に四辻に頑張つてゐる。モンペの如き腰袴をつけた婦人、少女等皆蓆製の籠を背にしてゐる。肥後とも日向ともつかない言葉なまりの主婦が心盡しの澁茶と乾柿を感謝しつゝ更に二里、村所に下る。

又しても送り迎ふる百餘峰。全く疲れて二人は黙々として歩む。ハタと河の崖に出た。

見渡す峽谷には三尺幅の長橋がゆら／＼と揺れてゐる。村人らしきが其の中間を渡つて來る。道を問へば村所への近道は之の蔓橋を渡つて左に行けと教えてくれた。見れば橋は昔の蔓橋に少し改良を加へたもの、白く泡立つ脚下の激流に心をびえて、漸く渡り、竹原と云ふ小部落で渴を醫やしてひたすら下る。左手の小徑より一人の樵夫來り我等を山官吏と思ひて種々と質問す。よき道づれを得て、同行の案内は上米良莊の古實を質問し、私は其の要點につき種々とたゞした。

いづれも同じく平家末孫の悲哀な物語りで、世を逃がれ、世に追はれ、人を避け、一族のはてしなきさすらいの奇しき因果物語りである。日向の里より次第に

山に追ひ込まれて幾十里。此の奥地に今日までの數百年の永き間、此の幽郷にての自給自足の生活、それはこの深山の瘠地の開拓に汗と血との涙ぐましき奮闘努力であつた。

かくまでして拓き、逃れ、又追はれてしかも根強い一族の誇りを今に至るまで忘れ得ずに暮す郷人を私は夢物語りの様に聞いた。

現今は上米良に至るまでは形ばかりの分校ながら小學校が開かれ、外界の交通開け、何等普通と異なる所なけれど、上米良よりの奥地、上米良川流域と、山ノ口とは全くの九州に於ける人外境で、戸籍なく只二家族七人の人を見たのみであつた。

部落の生活は何事も古代神式の法則に依るのだ。祭司の家ありて、四季の祭も、冠婚葬祭も祭司が司り、家と家、人と人との争ひは昔の「潔め」にて裁くなど全く世を外の中古時代である。

佛教は勿論、他の宗教は上米良にもなく、今も尙熱湯にて其の身の潔白を證する神事はしばしば行はるゝ由である。結婚は血族結婚なるが故に早婚で従つて一般に眼病多く、生業としては、猫額大の瘠地に耕作し

他は狩獵に従事してゐる。近來は交通開け、夏秋は炭焼、伐木を生業とする者が次第に増して來た。

殊に山中自生の山茶、椎茸の採取は實に豊富で、私が目撃した山茶の自生地などは全く驚くべきものであつた。其他は奥地に至れば焼畑法で雜木林を伐りて炭を焼き、小枝等は焼きて其土地を耕作する。粟、稗、大根等を植え、地味瘠せて適せずなれば、茶を散植するらしい。此の焼畑に植えた大根、粟などは實に見事に成熟してゐた。

自生の茶の白花、其のむせかへる香に満ちた道を下る我等三人、全く仙境にある思ひで「村所」へ下る。近時漸く村所まで自動車來り、之より宮崎市まで、二十五里は交通が開けてゐる。

名物「大鼓踊り」の昔話などを聞き、其の節まはしを聲高く歌ふこの樵夫に心引かれて話しは益々佳境に入つた。疲れも忘れ、瀬に高鳴る米良川を渡る河風も心地よく、黒きまでに茂る神代杉の林道を一廻りすれば川幅は急に廣くなり對岸に散在する方錐形の民家も形面白く眺め、温かき峽風。米良川に別れをつけて、米良郷の門戸たる、村所(ムラシヨ)に近づいた。

村所は肥後國境より流下する板谷川との合流點にある少部落である。午後三時、山路の疲れを忘れて松尾旅館と云ふ小宿に投じた。道づれの老人はいつ何處で別れたやら、風の如く來り、風の如く去つて了つてゐた。どこまでも變つてゐる里人の氣風である。

宿の二階に上り、障子を開けば、見よ、山幾重の彼方、半面に午後の陽光を一ぱい受けた、市房山が方錐形に半天に聳えてゐるではないか。私は苦しかりし山旅を泌々と思つた。

翌十四日の朝は巨大な猪六頭の獲物に騒ぐ陣鐘、太鼓を打ち鳴らす村人に驚かされて飛び起きた。

宿の店先には血生臭い茶褐色の猪、大小六頭が並べられて里人は四五人の壯漢を取りまいて其の手柄を聲高に語り、一方では茶碗に波々ついだ酒を燃え盛る火に顔を赤くして飲んでゐる。全くこんな人氣の少い峡谷の旅の終りにふさはしい情景であつた。

○故山崎博士蒐集古地圖及

錦繪展覽會

小島 鳥水

故山崎直方(理學博士)氏が、日本の「山岳地理學」を啓發せられたる功勞の、大なることは、早期時代の登山家が、等しく認めてゐるところであると信ずるが、博士逝去後の一週年を、記念するために、遺愛の古地圖及び錦繪を、本年五月二十四日、二十五日の兩日、東京帝國大學大講堂に陳列せられ、一般公衆の參觀を許すことになつた、私も案内状を受けて、「山」の博士を敬慕する一人として、二十五日に拜見に出た。

古地圖は、外國製の世界地圖、亞細亞地圖、日本支那地圖などに、外國都市の鳥瞰景圖、各國の地理帖、航海報告書等をも加へて、八十四點、日本の圖で、陳列品中、最も古いのはオルテリウス竝にテイセラ(一五九五年)の無着色圖、拉典語の背文があつて、歐羅巴製の「日本のみを圖せる最初の地圖」なることを、特色とするのみならず、それ以前の歐洲製諸地圖中の日本の圖形は、皆不完全であつたのを、本圖に至つて始めて略ぼ整へる形狀を、示すに至つたと云ふことである、その以後の日本圖は、ナルカトル、ヤンソン、ブラウのものが多く(殊に後の二者が多い)一六一〇年から一六五〇年頃の製作である、就中ブラウの地圖

は古くから、日本の學者に親みを持たれ、その世界地圖は、新井白石の采覽異言、桂川甫周著はず所の、萬國圖說の基礎をなしたものと傳へられてゐるだけに、ブラウの地圖の前には、懐古の情をおぼえる。

日本製地圖となると、さすがに木版畫の國だけあつて、外國地圖の、殆ど凡べてが、銅版であるのと異なり、寶永五年、石川流宣の萬國總界圖を最古として、凡べてが、木版である、世界圖、支那圖、日本圖と大別されるが、江戸圖も可なりに多い、明治以後の分は參謀本部地圖が、明治十七—十九年、内務省地理局の地圖が、明治十九—二十一年、共に五千分一東京圖であるが、今日から見ると、やはり古代地圖の一種としか、思はれない、日本製地圖は、全部で七十一點あつた。

次に五雲亭貞秀の錦繪は、山崎博士得意の蒐集で、東海道に關するもの六點、江戸の分が三點、横濱が四點、その他東海道各地、京阪地方、西國、關東以北等に關するもの二十八點であるが、私が特に興味を惹いたのは、富士山に關する、貞秀作の錦繪八點で、中には上下六枚續もの大作がある、これは北川歌麿の有名

雜 錄 ○故山崎博士蒐集古地圖及錦繪展覽會

なる兩國橋納涼圖上下六枚（三枚續きを二組み、上下に續かす）以後、殆ど類例の無いもので（絶無とは言はないが）貞秀のは、富士兩道一覽之圖といふもので安政六末年の製作である「南口村山並大宮より登山細見全圖」は、萬延元年の製作で、村山が今日では廢滅の古道となつてしまつただけに、興趣が深い、「富士登山之全圖」は、北口（吉田）の寫生で、謹拜五雲亭貞秀と落款がある、その謹拜が床しく思はれる、前記六枚續を除く外、凡べて三枚續きであるが、中には普通の横つゞきと違つて、縦に三枚繋ぎ合せたものもある。孰れも構圖の關係上、立體に便なるところから、堅つゞきを選んだものであらう、恰度辻村理學士（太郎氏）が見えられてゐて、貞秀の鳥瞰式繪圖が、現代の飛行機から瞰下して作製した同様式地形圖と、或點の描法（例へば橋立式の砂嘴地形の如き）が偶然にも酷肖してゐること、貞秀の繪圖を、舊來の批評標準のやうに、藝術上よりのみ見ずに、學術上よりも見直すこと等に就いて、有益な感想談（一寸した立話ではあつたが）を承はつた、又辻村學士の御照會で、故博士の夫人にもお目にかゝり、親しく御挨拶を申し上げた、夫人のお

話に依ると、博士の貞秀蒐集は、中學生時代からで、神田あたりの古本屋を、随分根氣よく搜索せられたといふことであるが、陳列錦繪の、保存良好にして、今日殆んど獲難き品もあることを思ふと、如何にも偶然でないと思ふ、殊に浮世繪師の中で、誰も殆んど願みるものもなかつたほどの、貞秀の作品を見出して、世に紹介したのは、博士が實に第一人者であつた、博士と貞秀とに就いては、私は改めて書くべき機會があると思ふから、茲には詳述しない。

外に、貞秀作の武人及び合戦に關するもの、風俗に關するもの、外國人並に新文化に關するもの等が、四十一點あつた、陳列品中の大部分は、大講堂の長廊下に、兩側に箱入りに並べられた外に、兩壁にも、地圖や錦繪が掛けられてあつたが、それでも夫人のお話に依ると、博士蒐集の三分の一だけを、漸く陳列し得たに過ぎないと、いふことであつた。

來賓には「山崎直方所藏、内外古地圖並錦繪陳列目錄」を配附せられたが、解説はよく要領を摘んで、親切であつた、私の本文中、外國地圖に關する記述は、同目錄より借用したものである、解説者秋岡武次郎氏

の勞を多としたい、但し會期が僅かに二日間しかなかつたことは、残り惜しく思はれた。

雜報

山岳氣象雜考 (小池文雄) 變幻極りなき山岳地の天象を、

而かも各地に亘つて、綜合的結果推論を下すは、専門家と雖も至難とする所、ましてアマチュア登山家の其の時々に於ける氣紛れな、觀察のよくする所では無いが、局部的地方の天象を氣に留める事は非常に興味ある事である。

特に時間と金を餘分に持ち合はせない吾々大衆登山家は勞ひ休暇、祭日を利用するの止むなきに到るは必然であり、冬期登山の如きを行はんと欲せば、天候に留意すると否とに由りて時間的に、經濟的に非常なる差異を生ずるは明かなる所であるから、旬日以上の長時日間の登山は多少の餘裕こそあれ、一日或ひは二日程度の日曜、祭日連續の小休暇を利用して最も能率よく二二〇〇、二三〇〇米級の日歸り登山をせんには、天候に良好の見極めが付いたなら疾風迅雷的に準備、直ちに行動を開始し、又全々望みなき時は、潔よく計畫を留保するに吝ならざるは賢明の策ならんと思はれる。アルピニズムの本道から云へば前述の斯かる考は甚だ墮落せるものと非難を被る事と信ずれども、山が吾々の生活の全部でない以上(少くも有形的に、精神的には多くの山男は山が彼の生命の全部ならんも)時間と金を

雜報 ○山岳氣象雜考

無制限にかけて行ふ登高行もさる事ながら、能率的に登山する事も強ち排斥すべきに當らぬと考へられる。而して上述の日歸り登山には特に冬期に於ては一日前に明日の天候の大略を知らねばならぬ。都下の某新聞には氣象配置圖が毎日掲載されあり、あれを克明に毎日次々と配列して、夫と實際の天氣の變化とを照合すると其の間に、おぼろげながら或る共通的法則が認知せられ氣象圖の動きに由て大略の判斷を下し得るのである。唯、惜しむらくは、吾々が毎朝手にする新聞紙の氣象配置圖は其の前日の午前六時現在のものなるに依り、新聞紙に頼る限り絶えず廿四時間前の氣象をしか知悉し得ず、翌日の天候の推斷を下さんとせば其の間に少くも四十八時間の隔りあり、低氣壓高氣壓の進行方向と其の大略的速度は豫知し得るも、變幻自在なる氣壓變化の跡を追ふ能はず、之れに比すると各地測候所は午後二時頃、大體其の日の午前六時の天氣圖を畫き得るを以て吾々は測候所に問ひ合せる事に依て、各氣壓の中心地を知るを得、測候所發表の明日の天氣豫報と山岳地の特性より判斷して、翌日の天氣の豫想を立てるのである。山岳氣象と云ふも一般氣象の延長であり只、夫が激變的に早く去來する丈の事で大體は兩者共通の所を持つて居る。勿論、山麓が曇天なる時、山頂は快晴に恵まれ、或は山頂に小吹雪の舞ふ時、麓は比較的靜穩なる事あるも、山嶺が大荒れの時、裾野は快晴、或ひは其の正反對の如き奇現象は滅多に起らぬ事である。

高氣壓の進行方向の尖端に位するときは概ね良好の天氣に向ひ、中心にある時最も快晴に、過ぎ去ると共に天候は捗かばかしからざる様になり、低氣壓のときは、之れと正反對の事柄が云ひ得る。高氣壓の場合には前日の第一日は輕風あり殘雲飛び氣溫低く、午前より午後に向ふに漸次良好となり第二日は無風の日本晴、山は雪をまとふて、紫藍色に映え、銀の山濤は涯際なく、眼界の限りにまで及ぶものであるが併し此の好天氣も多くは、午後になると共に無風のどんよりした、遠方は霞にぼけた様になり、氣溫昇り、夕頃より翌朝にかけて、山は雲の帽子を被つて不機嫌になつてしまふ。やがて次に來る低氣壓の襲來と共に、荒天の兆候を呈する様になる。高氣壓と低氣壓は殆んど交互的に推移通過するもので夫に従て天候が左右される。

一九二九年の、冬春季に於ける氣壓の動きは大體西伯利亞、滿州に高氣壓發生し其れが、東南に進み本邦を通過する頃より天氣良好となり、過ぎ去ると共に循環的に後より來る低氣壓のため惡變する。大略の循環的天氣は、一九二九年に於ては、晴一日、快晴一日、晴後曇一日、雪一日或は二日、曇後晴一日、と云つた五、六日を一週期として殆んど規則正しく行はれ、西北より南東に進む氣壓の移動があるために三、四日荒天の後には一日の快晴日が求められるのが當であつた。併し前記の一九二九年の天氣循環即ち氣壓移動は平年の豫測よりも非常に早く、ために測候所發表の天氣豫報が何時も半日或は、其れ以上遅れ

た様であつた。例へば三月二日晴後曇と發表したとすると前日の三月一日の夜半に晴に相當する氣象推移が通過し去り二日の午前は朝からどんより曇つてしまつたり、又或る日に曇後晴としたものが前夜に曇に相當する氣象推移が過ぎ去り其の日は午前中から早く晴れてしまつたりすると云つた調子の事が多かつた。之れに比すると一九三〇年の冬期氣象は前年に比して全々反對であり一九二九年の氣壓移動が西北より南東に進行したに對し今年は低氣壓の多くは、琉球列島の東南海面に或ひは東支那海に發生し、北東進して本邦を襲ひ、微弱の低氣壓が滿州或は西伯利亞に又オホツク海方面に停滯し、高氣壓は、不規則的に中部支那、蒙古東部地方に發生し、徐々に本邦に移動し、日本海に入り四邊に存在する小低氣壓に取り圍まれて、二進も三進も行かず、ぐづつてゐるため、快晴と迄ゆかないが比較的良天氣が冬期奇蹟的に三日も或ひは四日位も續いた例があつた。今年の低氣壓は南西から來た所爲か雪の日も割合に暖かで、北陸方面は案外降雪量少く、寧ろ表日本が何時もの年より降水量多く、從て南アルプス地方が其の障壁となつて、比較的多量の降雪量を見たのかも知れぬ。昨年の高気、兩氣壓の循環的移動は敏速で、高低の差も大きく、從て荒天後の快晴の日は溫度急激に下降したに反し、今年の夫れは氣壓移動緩徐で晴の日と雖も溫度は甚だしく降下せず、從て推移が徐々に行はれた結果、測候所は轉手古舞を演ぜずとも濟み、豫報は比較的確實に的中

した様であつた。昨年は快晴の日の多くは午後になると、高山の峯頂は早や嵐の先手に見舞はれる事が多かつたが、今年は反對に午前曇、午後晴れる日が多かつたのは數度の小さな山行に於て特に感じた事であつた。一概に云ふならば一九二九年の冬期天候は南晴北曇であるに一九三〇年は北晴南曇が多かつたと云へやう。又本邦東洋上を北々東の方向に高氣壓が進行する際は、其の側背にある上信國境の山脈は却つて快晴が打續き、今年冬期の如く弱き低氣壓東西兩方面に停滞せし事多かりし時は、北アルプスは、其の大氣の分水界となり、東方山脈が惠まれた事が多かつた。

又黄海より起つた、西南西の方向より來る低氣壓襲來のときは、北アルプスの鹿島五龍以南が曇り、例年南方に比して晴の日少き白馬連山が今年は却つて快晴が多く訪れた様であつた。降雪量、晴曇の關係より來る雪線は白馬、唐松、五龍、鹿島、蓮華と段々南に行くに従て高くなり、積雪量も南に行くに従てめつきり少くなる様子が東方よりよく望まれる。是に掲げた雪線の意は天空に於ける夫ではなく、山岳地の積雪量の多少に由て生育植物の繁茂に差異を生じ、ために北方程樹木少く、雪量多く南漸するに従ひ樹木多き割合に雪量少く、其れがため森林帯と灌木帯又は裸地帯との限界が一線をなして北より南に進むに従ひ標高を高めて行く夫を云ふのである。

即ち北アルプスの東方親望地帯より之を望めば、白馬八方附

近は標高一二〇〇米附近まで山層が純白に見え、爺岳、蓮華、不動と行くに従ひ此の標高が一八〇〇米—二〇〇〇米位まで昇つてゐる。之の線が一定の傾度を以つて緩慢に上昇してゐる。

勿論鹿島槍以南は其西側に劍、立山、薬師の連脈あるため之等が雪雲の急先鋒の第一の凝結器となるため東方に位する信越飛の國境山脈は雪量は大分少くなるのであらうが何れにしても面白い現象である。又妙高は特殊の快晴日を除いては他の山が晴れる日でも必ず其の腰に一沫の濃霧の帯をまとふ事は珍しくない。此の山は朝五時八時の間に一旦晴れて全容を見せても晩冬の強烈なる日射を其の南東の山懐に受けると八合目附近の外輪火口壁に水蒸氣の上昇に原因せらるしき濃霧を生じ之れが一六〇〇米—一二〇〇米範圍の中腹を被ふもので、氣候の更變期たる十一月、或ひは陽春三月の候によく此種の現象を見るのである。早朝山が晴れ上つたのを見て勇み立つて出發し中途濃霧圈に入り、天候惡變と早合點して計畫を放棄して、歸途に就きし後再び晴れて、すつかり口惜しがる事に出遭つた。地方的氣壓配置良好の時は濃霧圈以上に出ると、各高峯は何れも雲海の上にそそり立ち、こよなき山の景觀に接する事が出来る。四阿山群は平年ならば信越國境方面の山に比し晴の日多く、北アルプスが四日荒天にさいなまれるならば其の中二位が一三〇〇米又は一七〇〇米以上の高地が全部雲に被はるか又は峯頭に雲をまつはらせるか、若し快晴の來るべき氣壓配置の日ならばあの

廣大な雪原を惜しげもなくさらけ出す。山腹の傾斜が緩い所爲か、妙高、北アルプスに於て見る如く峯頭を雲上に出す如きこととは決してないと云つてよからう。

話は本筋に戻るが、氣壓移動の配置圖を見ての小さき經驗よりして高氣壓比較的一地帯に長く停滞し良天氣の長く續いた後は高氣壓、低氣壓の小さき瘤を所々方々に生じ天候概ね抄かばかしくないを常とする。又氣壓の谷に相當する所又は氣壓の峯（尾根）に相當する所に來た時も天候は非常にぐづつてゐる。併し不連續線は概して北東より西南に連なり移動方向は之れと略々直角に北西より南東に向ふらしく思はれる、之の線の通過の如何に由りて天候轉移の動機となるらしく思はれる。

以上は勿論極めて淺薄な一部の面かも定常的循環をなす場合に限つて述べたるものであつて、過半の場合は寧ろ不規則的の變化をなす場合が多からうと思はれる。

尙金峰、國師岳に舊臘十二月廿五日―卅一日迄スキー登山せし際天候に關し色々注意はして居つたが、入山して後は新聞紙の氣壓圖を得る事が出來ないので科學的根據に基いた判断が下せなかつたのは残念であつた。以上雜然と取りとめもなく書き列ねたの對し大方の御叱正と御指導を願ふ次第である。

○映畫「死の銀嶺」に就て

「マッターホルンの征服」といふ寫眞で、散々山岳人を輕蔑した活動寫眞屋ファンクは、未だ飽足らないと見えて、今度は

「死の銀嶺」といふ奴を作つた。飛行機から寫した寫眞だけは、ほんとのパリュネーが出て來るし、景色も中々よく撮れてゐるが、その他はもう驚き恐れ入るの他仕方がない品物である。氷河に圍まれたパリュネーの北壁と稱するのが何處かの石垣に水を掛けて凍らした様な氷柱のぶら下つた所であつたり、パリュネーの尾根と稱するのが何處かいゝ加減の山であつたり、二十哩も先きのシルスに住んでるクルツツカーが每晚小屋へ見廻りに來たり、吹雪の夜に松明で搜索に出掛けたら、よくもまあ出鱈目があゝまゝで續けられるものと感心する。さうかと思ふと、あの主役になる愛嬌のないドンキホーテの様な男は、運動中樞が全く缺ける事を、暴露して見せるのが藝らしく、石垣の氷柱を登るのを見てゝもハラハラさせられる。それだけならいゝが、こいつが又山登り教科書書きとでも云はんばかりに、ピツケルはかうして使への、繩はかう使ふもののだ、小屋の薪はかうやつて燃すもののだと、人を小馬鹿にした様に型を見せるのだから呆きれる。その上にそれが間違つてると來ては物も云へない。

もつとひどいのは、小屋からふらふら飛び出して行つた女が何時の間にか山へかゝるとピツケルを持つてゐたり、そのピツケルが又膝に當てられるとぼきんと折れる様なや、はだつたり、氣狂を吹雪の中にしぱり付けたら、死骸を袋に入れて吊して見せたり、之でもか之でもかと山岳人を馬鹿にし切つた寫眞だ。

百害あつて一利のない寫眞だ。おまけに話の筋がドンキホーテに似合はないセンチメンタルな甘いものだから呆れるばかりだ。山の寫眞もひとつ特別の檢閲機關を作る必要がありさうに思はれる。(浦松佐美太郎)

〇一九三〇年のカンチエンチュンガ登攀に就て

ドイツのデイレンフルト氏を隊長とするカンチエンチュンガ探検隊は、三月六日ダーゼリングを出發、ネパール王よりの許可を得た爲最初の計畫通りカンラを越してネパールに入り四月末カンチエンチュンガ氷河の根據地に到達した。その間荷物の運輸に關しては人夫との間に非常な困難のあつた事が報導せられてゐる。五月に入つてからカンチエンチュンガへの登攀が試られてゐるが、雪崩とか隊員の健康とかの障害の爲に未だに期待する程の前進もなされてゐない様である。

附記 最近此の探検隊が出發してより英國の新聞紙上にカンチエンチュンガが世界第二の高峯なりと傳へられる所があつたが、最近の英國王立地學協會雜誌に依れば、矢張りK²が第二であつてカンチエンチュンガはそれより低いと記載されてある。

(浦松佐美太郎)

一九二九年の獨逸探検隊のカンチエンチュンガ登攀——一行は

Dr. Eugen Allwein (一九二八年のパミール探検に参加せり)
 Peter Aufschneider; Paul Bauer (一九二八年のコーサス探
 検隊に参加せり) Dr. Ernst Bergel (同じく一九二八年のコーサ

ス探検に参加せり) Julius Brenner, Wilhelm Fendt, Karl von Kraus, Joachim Leypold 及び Alexander Theonens の諸氏で、何れもミュンヘンのアカデミツシエル、アルベンフェイラ及び獨逸山岳會の會員である。一行は昨年七月ダーゼリングに到着し、食料品を調べ、九十名の土着の工夫(其の中、十五名は曾つてエヴェレスト探検に加はつた事がある)二名の工夫監督、二名の料理人、一名の通譯者、數名の工夫補助監督を率ゐて、八月の初旬シツキムに向つて出發した。一行にはヒヤーラン・クラブより特に Lt.-Col. H. W. Tobin 氏が參加した。八月九日には愈々カンチエンチュンガ東面の Zemu 氷河の下流に入り、數日後には第一キャンプ(三三六〇米)、第二キャンプ(三八四〇米)を経て第三キャンプ(四三七〇米)に達し此處をベースキャンプと定め八月十八日に探検を開始した。

Bauer, Brenner の兩氏は、偵察に赴き、三日後には山の直下まで至り、フレツシュフィールド氏の著書中に望遠寫眞として掲げられたカンチエンチュンガの北東山稜(山稜と言ふよりは寧ろ岩壁面)が登れさうである事を確めた。別にカンチエンチュンガ東方に聳ゆる Shivu (六七〇八米)とカンチエンチュンガとの鞍部からの登攀が可能かどうかを調べたがこれは不可能な事が分つた。八月二十六日には愈々ベースキャンプを出發し、二日後には第一隊(Bauer, Kraus, Leypold 及び六名の工夫)は海拔約五二〇〇米の地點に第六キャンプを定め得た。第二隊

が此處に到着した時には第一隊は北東山稜に向つて急峻なる傾斜をなす山壁直下に第七キャンプを張る事が出来た。此れから數日は、悪場を攀ちて目指す山稜に到達する事に全力が注がれたが、九月二日には Bauer, Kraus の兩名は山稜直下百米の地點まで達しながら空しく退却し、三日には Allwein, Aufschneider, Thoenes の三名が前日兩名が達した點より僅か數米上で異常なる困難に遭遇し、又其の後も Allwein, Thoenes の兩名は山稜から六十米足らずの地點まで達しながら引歸すの止むを得ざるに至つた。然かし、非常に危険なクールアールを探る事に依つて、兩名は遂に北東山稜に達する事が出来た。然かし、此れより先きは一步も進む事が不可能の様に見え、九月六日には死物狂ひの登攀を試みたが尙且つ一步も進む事が出来なかつた。然かし此の日、遂に此の難關を突破すべき鍵を握る事が出来たのだつた。その鍵と言ふのは、今まで見た事もない様な變つた状態にある氷の斜面を登攀するには全然新しいアイヌ・テクニクが必要であつて、此のテクニクを用ふれば、人夫と雖も通過する事が可能であるといふ事なのだ。斯くして、山稜を行く事は可能となつたが、猛烈な暴風となつたので、第六キャンプに一旦引返へし、九月九日には第七キャンプに再び登つたが、多量の降雪があり、雪崩がキャンプの傍を襲ひ、大急ぎでキャンプを移さねばならぬ始末だつた。斯くして、第七キャンプは雪崩の危険なき、海拔五七〇〇米の地點にと移動せられ

數日間に亘つて困難なる、ステツプカットイングに従事せる後、Pauer, Beigel, 及び Kraus の三名は九月十六日尾根に達し、更に二日間を山稜上の氷の尖峰を攀ぶべく全力を盡し、十九日には愈々此處から、最後の登攀が行はれると言ふ地點にまで達した。二十日には Pauer, Aufschneider, Beigel, Kraus の四名が人夫三名と共に百五十米ばかり登つたが適當の露營地を見出し得ず大いに困難した。二十一日には Pauer と Beigel は更に幾多の障壁を突破して第八キャンプを海拔六三〇〇米の地點に定める事を得た。同日 Allwein, Kraus, Thoenes 及び人夫二名が來り合した。Pauer は二十三日に一旦第四キャンプまで降り、二十六日に Pauer, Brenner, Fentl の三名は第八キャンプまで至つた處、此のキャンプに残つて居た Allwein, Beigel, Kraus, Thoenes 等は此の日まで登攀する事が出来なかつた六十米のヂアングルムに打克つ事が出来て、其の上方に第九キャンプ(六六〇〇米)を張る事が出来た。もう此れから先きは通過不可能の悪場はなく、前途に對して確かな見込みがついた。食糧を補給し、十月二日には第一先發隊たる Allwein, Aufschneider, Kraus, Thoenes の四名は人夫二名と共に登り、巾の廣い吹き曝らしの山稜上に第十キャンプ(七一〇〇米)を張る事が出来、翌三日には Pauer, Beigel の兩名も更に二名の人夫を伴つて、第十キャンプへ移つた。此の十月三日の日に Allwein, Kraus の兩名は此れが最後の登攀だとは思ひも掛け

ず、午前十一時まで前進し、七四〇〇米の地點にまで達して引反へした（午後十一時半には山稜は暗くなり、六時には気温は已でに零下十二度乃至十六度に低下するので、午後五時までにキャンプ地に引返へすものとすれば、到底目的の第一峰（八〇〇〇米）までは達する事が出来ない）。斯くして三日の夜は隊員六名と人夫四名とが充分なる食糧と周到なる準備との許に愈々明日こそ、八〇〇〇米の地點にまで達するのだと満を持して寢に就いたのであつたが、形勢は此處に俄然一轉したのだ。

夜半より猛烈な吹雪となり、四日は終日止まなかつた。こうなつては登攀の日程が遅れる事は必定なので、キャンプの数を減じて、其食糧を出来るだけ上に送る様にせねばならなくなつた。C. P. Kines と Thoenes は二名の入夫と共に降つて行つた。

五日になつても雪は休みなく激しく降り續き、Baigal と Aufsa Hunter も六日にはキャンプを引拂つた。然かし天氣はよくなつたので Bauer と Allwein とは二名の入夫と共にキャンプをもつと高い所に移すべく前進した。然しクラストは非常に薄く、且つ破れ易く、雪は股まで達し、二時間に八十米を進んだに過ぎなかつた。更に勇を鼓して一時間半ばかり前進せんと試みたが駄目で、クラストの少しく堅くなるのを待つて、キャンプに歸つた。夕方から再び降雪し初め、一晝夜の中に新雪が少くとも二米は積つて、前日にはまだ前進の事を考へて居たのに、歸途が危ぶまれて來た。八日には Bauer と Allwein 及び二

名の入夫は異常なる困難を冒して下山の途に就き、十日に第七キャンプに辿り着いて、他の隊員と合した。下の方の第三キャンプから第四キャンプに達しようとなつた入夫達は三日やつて見ても、三分の一の行程も捗らず、遂にあきらめて引返へすの餘儀なきに至つた始末だつた。第七キャンプからは第六キャンプの方からも道をつけて戻れたので一日で第六キャンプに達する事が出来た。此れから下に降ると、救援隊と出會つたので共に下山の途に就き、第三キャンプに歸着し得た。氷河の出口まで降つて來ると、更に三日間断無しの大吹雪、大暴風雨となり、ダージリングでは一行の安否に就いて一方ならぬ心配をしたさうだが十月二十七日にはダージリングに無事歸着する事を得た。（渡邊漸）

西部チベット探検——Indian Civil Service E. B. Wakefie

Ed. 氏は一九二九年六月より十一月に掛けて、西部チベットに探検旅行を行つた。氏の行路は Satalj 川に沿ひて廻り、Pooh より Gartok に達する通常の貿易路と異なつて Bahauri 人の交易路を探つたものである。Gartok に到着後 Tukhatok を經 Gurin Mandhak (25,355 f.) の西腹を過ぎ、Mansarovar 湖に達し、一九〇四年に Ryder 及び Hawking の兩氏の探つた道に従つて Gartok に歸着し、Jongchung Ia, Shirung Ia 等を越えて Satalj の流域に出て、Simla に歸還した。（渡邊漸）

天山、アルタイ探検——Colonel Reginald Schomburg 氏は

一九二七年より二九年に掛けての天山地方の探検を終へて最近印度に歸つたが、今まで知らるる事がほんの僅かであつた同地方に就いての收獲は大いに期待すべきものがある。同氏は一九二七年秋 *Gilgit* より *Kashgar* に至り、九月同地を出發、一年中にて最悪の氣候を冒して、一九二八年二月 *Urumchi* に到着した。然かし、山岳地方に於ける状態は尙、面白くないので更に *Hami* に至つた。その歸途に於いては幾分か寒さも薄らいだのや *Barkul* 山脈を越えて *Tuga Dawan* に降り、それより *Urumchi* に歸着した。四月に此處を出發し *Mamus* より、砂漠を越えて、アルタイ山脈に赴き、五月には此の地方で充分なる活動を試みた。然かしアルタイ山脈は天山山脈より北方に位し、且つシベリアの寒冷なる氣候に支配されるにも拘らず、積雪は殆ど之れを見る事なく、登山の見地から見てその期待に背くものが多かつた。それより *Kanus* 湖を訪れ、*Uria Saryk* を經て、*Uii* に七月到着した。 *Kush* 川より天山に達し、それより *Monus* に出でんとしたが、思ふに任せず *Mamus* よりずつと西方に出づるを得た。天山地方にては冬の來る事早く、その去る事甚だ遅く、探検旅行の可能なる期間が甚だ短かく高山に於ける旅行が可能なるは、六月より九月中旬までの三ヶ月ばかりである。一九二八年には冬が早く來て、秋がないと言ふ狀況であつた。 *Mamus* より *Urumchi* に到り、*Kuruk Tugh* を越えてヤルカンドに達したのは一九二九年の一月の事であつて、此

の冬は全世界に亘つて寒氣が殊に著しかつた年であつたから、*Shon* 地方の探検を果す事が出来なかつた。

三月にカシニガルを再び出發し *Muzant* 峠を越え *Uii* に至り、四月二十三日同地を出發、*Kunges* 河を廻り、*Kush* 及び *Kunges* 河源流地方を完全に探検する事が出来た。此れより *Dunde Kalde* 峠を越え、*Urumchi* に赴かうとしたが失敗し *Tolsan* に辿りつき、これより *Urumchi* に到つた。それより *Tungri* 峠に依つて、再び天山山脈を越え、其他數多くの峠を上下して、八月 *Kuchur* に達し、九月にはカシニガルに歸着し得た。(渡邊漸)

イタリー、カラコラム探検隊——一九二九年五月中旬、バルトロ水河の終端より十七哩廻つた、一三九〇〇呎の高度にある *Orlokas* にヘースキャンプを張つた。 *East Mustagh* 峠に向つて、偵察を試みた處、其の通過可能な事が分つたのや、*Umberto Balestrevi* 氏をリーダーとし、*Arديو Desso*, *Vittorio Ponti* の兩氏及び一名のガイドが之れに加はり、一九〇三〇呎の地點に於て此れを越し *Sharpo Inago* 水河に降り、*Middle Shaksagan* 谷に達し得た。此れより此の谷に沿ひて廻り、*Kyngar* 氷河の左岸にまで到達した。詳細は不明であるが、*Gasherbrum* 氷河の終端は *Shader m* 川に達し、ヤングハズバンド氏が四十年前に通過せる時と略々同様であると。 *Ponti* 氏のみは *Urak* に達する以前に一行と別れてヘースキャンプ

に歸つたが、他の一行は、Kyagar 水河の東側の山稜に一九二六年、印度測量隊に依つて殘された積石の地點にまで達した。

此の間に他の一隊は Spoleto 侯自身がリーダーとなつて、バルトロ水河の本流を Godwin Austen 水河と、Gasherbrum と Golden Throne との中間より来る水河との合流點まで遡つた

此れより Spoleto 侯及び二名の登山家は二萬二千呎の地點まで登攀した。そして一八九二年の探檢に於て Conway 氏が恐らく鞍部なるべしと指摘せるものを明瞭に確認する事が出来、Drake 水河へ、バルトロ水河の本幹から容易に達し得べき確信を得た。七月に一行はバルトロ水河を去り、Dasio 氏の一隊は同水河の終端より下流に當り其の右岸に注ぐ Trhlonge 水河を探つた。然かし之れより Surjo Taggo 水河に降らうと、ふ企ては果されなかつた。又、同氏等はは一八六一年に Godwin Austen に依つて初めて探檢せられたる、Punmah 水河の地形的踏査を行つた。以上の主要なる目的以外に、諸種の科學的實驗が行はれた。(渡邊漸)

フィツサー探檢隊——Visser 氏夫妻の第三回カラコラム探

檢隊は夫妻以外に、Dr. Rudolf Wyss, 印度測量部の Khan Sahib Khan Afriz Gul Khan 氏及び S. ガイドの Franz Loommatter より成り、一九二九年四月三十日スリナガールを出發し、Tah より、Khardung 峠を越え、Nubra 河の流域 Panamik に六月九日ベースキャンプを張つた。一行はこれよ

り Zhanen 水河に入り、其終端から五哩遡つた左岸に、廣汎なる一大水河系を發見し、此れが探檢を行つた。從來の地圖には此地點に於ては長さ僅か四哩の小さい水河しか示されて居らず、Shichen 水河の終端より下流に於て、Nubra 河と Shyok

河との分水嶺から降下する二つの大水河が合流する様に記されてある。然かし此れは全然架空的存在であつて最近の印度測量部の地圖には賢明にも「未測量」と示されてある。今度フィツサー氏が發見した水河系に就いては已でにロングスタッフ氏等が以前よりその存在を想像して居たのであつた。その屈曲せる爲、本流との合流點より二哩遡つて初めて其の水河系を望む事を得るのであつて、其の水河終端までは更に尙三哩を遡らねばならぬ。水河の全長は十六哩に達し、その支流には十二哩もの及び十三哩のものがある。此の水河系の探檢を終へたる後、Nubra 河の小支流を探り、更に七月二十六日には Saser 峠を越えて Shyok 河の流域に入り、Saser Brangsa を中心として探檢を爲したる後、カラコラム峠に近き Dawaik-Beg-yati に至り、Chiy-dhap の流域及び原流地、九月には國境を越え、更に北方の Karstagh 地方、及び Kushkumaihan 地方の探檢を行つた。其の後、フィツサー氏一行は Sugat に於てヤルカンド行きの便を待ちつゝありとふ。(渡邊漸)

Mont Mandit——一九二九年八月四日 Amilane Creher, 他二氏により南南西側の初登攀が行はれた。(渡邊漸)

雜 報 ○北アルプス地形圖の發行

Altschhorn——一九二九年八月二十九日、E. F. Blanchet 氏はミツテルアレッツチユグレッツチアより直接に此の困難なる登攀に成功した。(渡邊漸)

Schidegg Weterhorn——一九二九年九月十日、N. S.

Finzi 氏は西北壁より登攀した。此登攀はアルプスに於ける殘された一つの問題に解決を與へた點に於て大いに意義あるものである。(渡邊漸)

エヴェレストの高さ——二九〇〇二呎といふ高さは一八四九年から五〇年に掛けての測量の結果を一八五二年に公表したもので、不正確の憂ひも決して少くない。一九〇七年に Sir Sydney Burnard が計算した處は二九一四一呎、亦 Dr. de Graaf Hunter が計算した處に依ると、二九一四九呎である。更に一九二一年及び二二年のエヴェレスト探検の時に Morsland が測量し計算した處に依ると二九一四六呎(八八八八米)であつて前二つの數字と略々一致して居る。此れから推すとエヴェレストの高さは二九一四一呎乃至二九一四九呎の範圍にあるものと見做して差支へあるまい。(渡邊漸)

北米合衆國の最高峯——アラスカを除いての合衆國領域に於ける最高峯たる Mount Whitney の高さは最近の發表に依れば一四四九五・八呎である。(渡邊漸)

北アルプス地形圖の發行——陸地測量部では登山者の便宜を計つて、昭和四年部分修正を施したる五萬分一地形圖數葉を第

め、北「アルプス」地方一帯を収めたるもの二葉を發行した。其の一つは「白馬岳及立山近傍圖」と名付けられ、五萬分一地形圖「黒部」「立山」圖幅の全部、「白馬岳」「大町」圖幅の左半部、「小瀧」「泊」「魚津」「五百石」「鹿間」「槍ヶ岳」「池田」圖幅の一部を含むもの、他は「槍ヶ岳及乗鞍岳近傍圖」と稱せられ五萬分一地形圖「燒岳」圖幅の全部、「槍ヶ岳」「乗鞍岳」圖幅の大部分、「池田」「松本」「鹽尻」圖幅の左半部、「鹿間」「船津」「高山」圖幅の一部を含んで居る。兩圖とも横二尺三寸、縦三尺の大きさを有し、之れを三十折として表紙裏表紙を付して携帶に便であり、尙地形圖の一隅に百萬分の一の「一般圖」を記載してある。三色版地形圖の如く登高線は褐色、水線は青色で、甚だ読み易い。之れに加ふるに、主要なる登山路を赤色の太い線(その比較的交通少きものは赤色の點線)で示してあるのは一般登山者に取つて甚だ便利であり、測量部が其處まで親切を示して呉れたのは大いに感謝に耐へない處である。更に眞北と磁北とを示しその偏差が昭和五年にありては五度四十五秒なるを付記したのも結構な事である。その修正は部分的で、まだ「吾人をして満足せしむる程度には達して居ないが、鋭意、誤謬の訂正、補入に努めて居る事は窺ふに足るものがある。將來、吾々登山者と協力して尙一層完全なものに作りあげたいものである。五色版と表紙に記してあるが、どうも四色版の誤りらしく思はれる。地形圖欄外の餘白に各々六葉づつの山岳、勝地等の寫眞版が挿入して

あるが、これはなくもがんである。こんな下手なそして印刷の拙劣な寫眞版は却つて登山者をして北「アルプス」とはこんなつまらない所かとの懸念を生ぜしめ、或ひは亦此の地形圖を見る度に不愉快なる印象を残させるに過ぎない。これだけの親切氣があるなら、その代りに「地形圖の讀み方」とかいふ様なもので實際登山者の利便になるものを、此の餘白に記して貰ひたかつた。折角の立派な地形圖を此の一世紀も前の様な寫眞版の爲に少しく其の價値を減殺せしめたかの憾みあるは測量部の爲に惜しむ所である。尙亦、表紙も、測量部としては随分凝つた積ではあらうが、何となく輕薄な感じがして、地形圖の權威を之れが爲に輕ろからしめて居る。スイスのジークフリートマップの集解圖の表紙の如き、以て其の範となすに足るものではあるまいか。表紙はもつと厚手の紙にして、頻繁なる使用に耐へる様にして欲しい。賣價は兩圖とも四十五錢で、非常に低廉であると考へられる。以下、兩圖に就いて、詳しく其の内容を調べて見よう。

○白馬嶽及立山近傍圖

小瀧圖幅(に該當する部分)

1、八丁坂の道が新道に修正されてある。

泊圖幅

1、軌道が記入さる。

黒部圖幅

雜 報 ○北アルプス地形圖の發行

1、ウド谷の少し南方まで「黒部電氣鐵道」と記された、日電の軌道が記入さる。「ねこまた」「あとびき」「もりいし」「やなぎばし」等の驛名が記されて居るが、最後の者は「やながはら」の誤りであらう。

2、黒龍川の支流「ゼンマイ谷」を復寫に際して「イ」の字を脱落して居る。

3、東鐘釣山の南に錦繡温泉(新鐘釣温泉)を記入す。

4、白馬朝日岳の個所に從來山名がなかつたのに「旭岳」と記入された。

5、不歸岳の東方に「避難小屋」記入さる。

6、奥鐘山直下の黒部川に「下廊下」と記入されたが、此れは劍澤河口附近を中心として記入さるべきものであらう。

7、白馬岳より清水岳不歸岳の尾根を経て祖母谷温泉に至る道、鐘ヶ岳より中春山を経て同じく祖母谷温泉に至る道、白馬岳より赤男山を経て朝日岳に至る道が何れも新らしく記入された。

8、祖父谷の支流、硫黃澤、清水谷、中谷等の測圖上の周知の誤りが訂正せられないのであるのは製版の都合上致し方がないのかも知れないが、一日も早く訂正して貰ひ度い。

9、大黒銅山が大黒銅山跡と書き改められた。

白馬圖幅

1、特記すべきは、乗鞍岳の東方に「天狗原」が新たに記

入され、該部分に於ける測圖の誤謬を潔よく訂正し、事實通りの濕原に書き改め、同時に鴨峯直下に「神ノ田圃」と記し、同様に濕原に變更した事は、從來此の登山路を採れる人々に抱かされた幾多の疑惑を一掃した意味に於いて、大いに測量部の雅量を賞讃すべきであらう。嘗に此れに止まらず、我々登山者の忠告を容れて誤れる部分をどしどしと改めて貰ひ度いものだ。

2、北股の支流「中山澤」が記入せられ、その走向が從來誤つて居たのが訂正され、小日向山西方の隆起も此れに従つて訂正された。

3、北股の支流「赤倉澤」が記入された。

4、南股の奥にまで水線が入り、「白馬温泉」が記入された。

5、二股(發電所)猿倉休憩所、白馬尻小屋、村替小屋、白馬小屋及び唐松小屋が記された。

6、唐松岳の北方に「不歸嶮」と記入されたが此れは、二八二〇米の三角點附近に「奥不歸岳」と記入さるべきであつた。

7、蓮華温泉より雪倉岳への道の、蓮華温泉より朝日岳への道の、蓮華温泉より雪倉岳への道の一部の變更、大池より松澤への道、大池より松澤の道の途中より分れて岩葦山の西側を迂回して北股に至る道、白馬岳頂上より大池に至る道、白馬岳頂上より鉢ヶ岳雪倉岳に至る道、白馬岳より脊梁を南走して杓子岳、鐘ヶ岳、唐松岳を経て大黒岳以南に至る道、二股より南股に入り白馬温泉を経て鐘ヶ岳に至る道、猿倉より小日向山の西を経て、白馬

温泉に至る道が夫々新しく記入され細野より岩小屋澤を経て大黒岳より大黒嶺山跡に至る舊道が、八方山の南方に於て削除され唐松小屋より大黒嶺山跡への道が記された。

立山圖幅

1、仙人山が從來「池ノ平山」と記されてあつたのを「仙人山」と改めたのはいゝが、その「池ノ平山」を從來「仙人山」と記されてあつた小窓の頭に移したのは感心しない。

2、「小窓雪溪」「三ノ窓雪溪」なる特殊な言葉さへも記入された。それを考へると、前記の「池ノ平山」は尙更、理由が分らない。

3、「池ノ平」「仙人池」なる名稱が記された。

4、「長次郎谷」「平藏谷」なる名稱が記されたのはいゝが、肝心の劍澤が、今尙「劍川」では恐れ入る。

5、「十字峽」とは記されたが、棒小屋澤の落口が劍澤と十字をなして落ち込む様に測圖が訂正されて居ないのは皮肉だ。

6、「劍小屋」が舊位置に記されてあるが、此れは突發的の事件の結果で止むを得まいが、初心者を誤まる虞れも無きにしてもあらずである。「小屋」は現在再築せられつゝあり。

7、「雷鳥澤」「松尾峠」が新たに記入された。

8、「追分小屋」が記入されて、「弘法小屋」が見當らないのは如何？

9、「大汝山」が富士の折立で、「大汝」はその記された位置よ

り南に在るのは周知の事實なのに訂正がないのは遺憾である。

10、「御前澤」「タンボ澤」「南澤」等が記入されたにも拘らず

「ヌクイ谷」が相變らず「ヌイク谷」と誤記されて居る。

11、「五色小屋」「刈安峠」が記入された。

12、「越中澤山」が新たに記入せられたが、大鷲と奥大鷲とが

舊態の儘、夫々「鷲嶽」「嵩山」となつて居る。

13、「冷ノ池」「新越乗越」「大澤小屋」が記入せられた。「新越乗

越」は「新越」又は「新乗越」とする方が正しい。

14、「北葛嶽」と蓮華岳の南方、二五五〇米に記されたが、「北

葛ノ頭」の方が一般に通用し、或ひは亦、「七倉岳」と言つた方

が尙妥當であつたかも知れぬ。餘り大した山でもないのに、「嶽」

の字等を使用されると、何だか、變な氣がする。

15、更に其の西に「船窪嶽」と記入されたが、此の記された地

點は實は東澤の頭であつて其の西に當る船窪乗越の鞍部を隔て

た西にある隆起が「船窪ノ頭」である筈だ。どうも「船窪嶽」では

感じが出ない。

16、小黒部出合より尾根傳ひに池ノ平に出る道、池ノ平から

劍澤に至り、別山に達する道、池ノ平から大窓ノ頭を經て劍岳に

至る道（これはどうかと思ふ）、劍岳から、別山乗越を經て別山

に至る道、長次郎谷及び平藏谷の道、雷鳥澤から室堂に至る道、

常願寺川（湯川）右岸を經て立山温泉に至る道、立山温泉から、

松尾峠を經て追分に至る道等が記入されたる上、更に天狗平か

ら室堂に達する道、淨土山からザラ峠を經て五色ヶ原に至る道、

刈安峠より尾根傳ひに五色ヶ原に出る道、五色ヶ原から越中澤

山を經て薬師岳に至る道、鹿島槍ヶ岳より後立山脈を縦走して

針ノ木峠に至り、更に蓮華岳、北葛ノ頭、船窪ノ頭等を經て南

走する道が記された。

大町圖幅

1、鐵道が大町から「神城」まで延長されて居るが築場、神城

間は本年十月開通の見込みでまだ完成したのではない。

2、五龍岳、大遠見山が記入せられ、從來單に遠見山とあつ

たのが小遠見山と改められた。祖父岳に假名が附せられた。

3、鹿島川の支流「大冷澤」「小冷澤」「西澤」「大北澤」「大川澤」

「アラ澤」「大澤」等が加へられたのは甚だ結構だが澤の名前に

「カタネ里」とは何の積か？「カクネ里」と言ふのは、澤の名でな

しに源流地の岩壁重層倒立せる邊りを漠然と指すものである。

4、大黒岳より南走して、祖父岳に至る道、鹿島の村から大

冷澤を經て祖父岳に至る道が、新たに記された。

5、大町から、高瀬川傳ひに東信軌道が「會社用電車」と記載

せられ、發電所のある「笹平」が記された。

「鎗ヶ嶽」圖幅

1、高瀬川の東信電氣の軌道が記載されてある。

2、「鳥帽子小屋」が記された。

3、「上廊下」なる地名が、東澤の落口より稍々上手に記され

たが、これももつと上流に移して貰ひ度い。

4、越中澤山方面から薬師岳に至る道、船窪ノ頭方面から南走して鳥帽子岳より更に南に向ふ道が記された。

○槍ヶ嶽及乗鞍岳近傍圖

槍ヶ嶽圖幅

1、黒部五郎嶽、黒岳が新たに記入せられ、従来記入せられた、中ノ俣嶽、水晶山、が夫々括弧の中に收められた。序いでに、北ノ俣岳を括弧に入れ、上ノ岳を括弧から取除いて呉ればよかつた。

2、三俣蓮華岳と双六岳との取違ひが正しくなつた。

3、鷲羽岳、祖父岳、樺澤岳が新しく記入された。

4、五郎岳が野口五郎岳に改められた。

5、奥ノ平が括弧に入れられ、雲ノ平と記入され、薬師澤の名稱が記された。

6、太郎山が太郎兵衛平と改められた。

7、北鎌尾根が記入せられたのに、東鎌尾根、西鎌尾根が記されないのは一寸變だ。

8、高瀬川に、東信電氣第五発電所と記入ある以外に、貯水池、軌道等が記されてある。

9、横通嶽(二七六七米)が記された。

10、喜作新道の名稱が記された。

11、上ノ岳小屋、黒部五郎小屋、三ツ俣蓮華小屋、肩ノ小屋、

殺生小屋、燕山莊、合戦小屋、湯俣温泉が記入せられた。

12、双六池が記入され、名稱は附記されていないが、双六小屋笠岳小屋が記された。

13、太郎兵衛平より黒部五郎岳、三俣蓮華岳を経て双六池に至る道、三ツ岳より鷲羽岳を経て、双六池に至る道、三ツ俣蓮華小屋より黒部五郎小屋に向へる道、双六池より笠岳へと向へる道、双六池より槍ヶ岳肩ノ小屋に至る道、肩ノ小屋より西岳小屋に至る道、其の途中より大槍小屋に降る道、其の少し先に、天上澤を降り、湯俣温泉に達する道、湯俣温泉より高瀬川を降る道、その途中より燕嶽に達する道、更に其の下流より燕岳及び中房温泉に達する道、西岳小屋より大天井嶽に通ずる喜作新道、中房温泉より燕岳に至る道(従来は合戦澤の左岸の尾根だつたのが右岸の尾根になつた)東天井岳より常念岳に至る道が夫々記入せられた。

松本圖幅

1、筑摩電氣軌道及び、鳥々谷の林業用手押軌道の記入

2、鳥々谷の支流ヤタケ澤の記入

3、鳥川本澤に於ける常念岳登山路、小倉より銅冠山を経て大瀧山への登山路の記入

燒岳圖幅

1、穂高連峯を中心とせる位置に穂高嶽と記された。

2、穂高諸峯の名稱が正しく記された。即ち南穂高岳とあつ

たものが、西穂高岳となり、穂高岳が前穂高岳となり、奥穂高岳とありしものが唐澤岳となり、奥穂高岳はその南に移り、唐澤岳の北には北穂高岳が来り、従来、北穂高岳と記されたものが南岳となり、その北のものが中岳となつた。

3、前穂高北尾根に北尾と記されたが、これは北尾根とし、且つ、其の記された位置をもつと前穂高寄りに近づけて欲しい。

4、大キレットに當る所に大切戸と記され、唐谷とあつたのが唐澤と改められたが、岳川に岳澤と記されたのはどんなものであらうか？

5、硫黄ヶ岳とあつたのが焼岳となり、舊焼岳の位置には何も記されない。

6、宮川池が明神池となり、河童橋にその名稱が附せられ、大正池が池らしく幅廣く記された。

7、上高地より梓川傳ひの新道に、釜隧道、清水谷隧道、山吹隧道等の隧道の名稱が附せられた。

8、大槍小屋、西岳小屋、槍澤小屋、常念小屋、一ノ俣小屋、大瀧小屋、穂高小屋が記入せられた。

9、其の名稱は附せられて居ないが、蒲田川兩俣下流の穂高温泉、兩股の小屋、焼峠の小屋、徳本峠の茶屋、徳本峠下營林署の小屋、吉城屋、五千尺、徳澤小屋等が記された。槍平室堂は記されていない。

10、蒲田温泉より笠ヶ岳を経て双六池方面に至る登山路、蒲

田川右俣谷を廻り肩ノ小屋に達する道、右俣谷と左俣谷との中間の尾根を登りて西鎌尾根に至る道、右俣谷の支流白出澤を廻り穂高小屋に達し、此れより唐澤を降り、横尾谷を経て梓川に至る道、肩ノ小屋より穂高連峯を経て前穂高岳より上高地に達する穂高縦走路、安房峠より中ノ湯を経て上高地に至る道、上高地より、梓川に沿ひて下降する道、上高地より鉾ヶ岳への登山道、一俣谷より西岳小屋への道、烏川本澤より常念小屋に至りそれより一ノ俣小屋へ降る道、常念小屋より蝶ヶ岳、大瀧山を経て徳本峠に至る道、鍋冠山より大瀧山を経て徳澤より梓川へ降る道が記入された。

乗鞍岳圖幅

1、烏帽子岳、大丹生岳、富士見岳なる名稱が記入せられた。

2、鶴ヶ池の西方に龜池、西南方に不消池がそれ、測圖記入せられた。

3、桔梗ヶ原、位ヶ原の記入、

4、悲峠、三本港大龍の記入、

5、前川渡の記入、澤人が澤ノ渡に改められた。

6、頂上小屋、肩ノ小屋、冷泉小屋の記入、

7、番所原より冷泉小屋を経て肩ノ小屋への道、白骨温泉より冷泉小屋への道、肩ノ小屋より北海道への道、肩ノ小屋より大丹生岳を経て平湯への道、番所原より槍峠への道が夫々記入された。(渡邊漸)

雜 報

○登山案内人の資格に對する希望條件及び案内人心得

本會に於いては曾つて登山案内人の向上發展の爲に、山岳誌

上「登山案内人」の欄を設け、或ひは案内人手帖の議に就いてサジェストしたが、何分にも當時は時機尙早に失して未だ具體的の效果を得るに至らなかつた。然るに今回、「山日記」發刊に際して、各方面より寄せられたる好意の著るしいのは寧ろ意外な位であつて、近來、異常なる登山の發達と共に種々なる弊害を耳にする際、此の機を逸せず、吾々の先行者が時代に先だちて唱へられた其の叫びを新らたにしたいといふ考への下に、藤島幹事の主唱で、冠、渡邊兩幹事が原案起草し、此れを幹事會に於て、二回に亘つて審議し、略々成案を得るに至つたので、此れを左記の手紙と共に、各案内人組合、當該官署、其他關係各方面に發送する運びになつた。尙、之れと同時に「山日記」中に掲げられた、國際遭難信號をも併せて配布する事にした。

(渡邊漸)

最近刊行の運びに至つた「山日記」編輯に際して、各地登山案内組合並びに地方有志の方々にも一方ならぬ御盡力を願つたのを機として、本會に於ては今後も各地方との接觸をなるべく密接に保つてゆきたいと考へてゐる次第です。

登山に際し最も重要な役目をもつてゐる案内及び人夫に就ては從來統一された檢定方法もなく、ために登山者の激増と共に未熟な案内人及人夫も多くなつて、それ等に對する非難苦情

一元

をきくことも少くないのであります。

案内人の資格試験に就ては追々之を統一したいものと思ふのであります。先づ今年はその準備として別紙のやうな「希望條件」と「心得」とを起稿して見ました。

登山案内組合或は案内人の試験をせらるゝ官署に於て案内人夫の養成指導等を行はれる上の御參考にもとお送り致します。別紙記載事項御參照の上、案内内、人夫の向上に御盡力下さらば一般登山者を益すること大なるものがあらうと信じます。尙別紙に就いて御心付の點もあらば御遠慮なく御申越下さるやう希望致します。

昭和五年六月

日本山岳會

登山案内人の資格に對する希望條件

登山案内人

- 一、案内人は單に登山技術及經驗に豊富なるを以て足れりとせず、その人格に於ても缺點なき者たることを要す。
- 二、案内人は過去に於て、人夫として該地方に於ける高峯を中心とする登山旅行に隨伴し、五ヶ年以上の經驗を有する者たることを要す。

但し假令人夫としての經驗を有せざる者にても、該地方に於て多年登山の經驗を有する者はこの限りにあらず。

積雪期の登山案内人

一、前記の登山案内人たる資格を具備せる者にして、嚴冬に於ける該地方の高峯を中心とせる、登山經驗の豊富なる者。

二、スキー術を修得すべし。

人 夫

一、人夫は自身の荷物以外に、五貫目以上の負荷に堪へ、且つ炊事其他の雑務に従事し得らるゝ者。

二、將來案内人としての必要な技術及知識を修得し、その人格の向上に注意を拂ふべきこと。

附 記

案内人たるに必要な事項―年齢、負荷量、經驗―等に就ては、當該登山案内人組合に於て其地方の状況を參酌し、適當なる規格を定むることを要す。たとへば同じ五ヶ年の經驗に於ても、その内容は必ずしも一樣ならず、従つて同一行程を知悉せるのみならず、更に他の種々なる行程に對する經驗を有し、或は非常時に於ける處置を誤らざる能力を有する者たることを要す。

案内人心得

一般的の注意

一、自然を愛せよ、山を傷つけるな。

二、動植物を保護すること。

三、山小屋、露營地等を汚さず、後仕末をよくすること。

四、火の用心

五、他の登山者に對して不愉快を感じしめず、又不慮の危険を及ぼさぬやう注意すること。

六、目標、泊場等を大切にすること。

其他の心得

一、登山者を安全に、そして愉快に、その山旅を完ふせしめるやうに努めること。

二、登山者の意に従ふこと。

但し案内人として、それが適當でないと思つたときには充分説明の上適宜の方法をとること。

三、登山者の傍を離れないやうにすること。濃霧や暴風雨のときは、特にその心掛けが肝要である。

四、登山者がその豫定を變更しやうとする場合には、出来るだけその意に従ふこと。

五、案内人は毎夜一行の食糧を精細に調べ、豫定の量を保つてゐるか、又その後幾日間の餘裕を存するかを登山者に報告し

萬一不足を生ずる懸念あるときは、適當の箇所にてその補充を圖ること。

六、案内人は經驗淺き人夫を指導し、且つ人夫の行動、殊に登山者に對する行動に就ては、自分が監督の位置にあると云ふ責任を常に忘れないこと。

七、登山者に對する批評を慎み、饒舌を控へること、これは他の登山者に對しても同様である。

雜 報

○登山案内人の資格に對する希望條件及び案内人心得

一三九

八、登山者が途中で發病したり、登行に堪へ難くなつた場合には、適宜の手段を講じ無事下山を爲し得られるやうに努めること。

九、案内人、人夫中に傷病者或はその他の事故を生じた場合には、登山者と相談して前進中止、歸還、滞在等の手段をとること。

一〇、他の登山者の遭難に出會つた場合には、雇主の同意を得て救援に赴くこと。

一一、登山旅行中他の登山者に遇つたときには相當敬意を表し質問を受けた場合には丁寧に答へること。

一二、小屋等に同宿するときは他の登山者に隨伴する案内人及び人夫等に對しても禮儀を失はぬこと。

一三、經驗の淺い登山者に對しては、山旅に必要なことは遠慮なく打明けて話すこと。

一四、登山者に對して規定以上の賃銀或は報酬を要求してはならない。

一五、自分の技術を信じ過ぎるな、努めてその限度を知れ。

一六、自分の信用がやがて組合及びその地方の信用を高めると云ふことを忘れてはならない。

遭難信號

一分間に亘つて六回、十秒の間隔をおいて、信號を繰返す然る後

一分の休止。後

再び前に同じ信號を一分六回、十秒の間隔を以て繰返す。再び一分の休止。再び信號。

適當と認むる間、同じ事を繰返し續ける。

信號は時により、場所により、おのづから異なる。晝間であれば布片様の物を高く振ること（背後の地物の色彩との對照に注意すること）、夜間であれば燈火を利用する事。又眺望のきかない場所であれば、笛或は叫子の音響に訴へなければならぬ。

信號を受取つたものは直ちに之に答へる。

答へは求救信號と同じく、たい信號と信號との間隔が二十秒であり、一分間の回数が三回である。即ち、二十秒の間隔をおいて、一分間三回の割合の信號。一分間の休止再び信號再び休止といふ具合である。

此の遭難信號は一八九二年アルパイン・クラブの指名せるデントを議長とする委員會によつて考案せられ一八九四年に報告せられ採用せられたものである。今日では此の信號は登山者の間には國際的に通用しつゝある。

日本山岳會配付

劍澤遭難記念出版——東京帝大スキー山岳部では同部前常務委員たりし窪田他吉郎、田部正太郎兩氏の追悼と、事件の真相の發表とを目的として、記念出版をなすべく先頃豫約を募集して居たが、六月上旬に至つて、闕らずも、窪田、田部兩氏の手

帖が劍澤小屋跡から發見せられ、今まで知られなかつた事實も分つて來たので、六月二十日頃出版の豫定の所を一先づ延期して可及的新しい材料を集録して、真相を餘す處なく發表したい意向であるから、遺書未發表に對する吾々の臆測もそれに依つて氷解するであらう。吾々はその發表に依つて更に次號に於て其れに對する批判、考察の機會の與へられるであらう事を確信するものである。(渡邊漸)

山岳圖書の出版——最近出版せられたものには本會幹事冠松次郎氏の「黒部」會員藤木九三氏の「雪、岩、アルプス」會員矢澤米三郎氏の「白馬岳」會員高畑棟材氏の「山を行く」會員熊澤正夫氏の「上高地」等があり、近く冠氏の「双六谷」も出版の運びになる筈。尙、山岳専門雜誌「山と溪谷」の創刊號(五月號)が山と溪谷社から發刊された。同誌は一部五十錢で隔月發行の由、本會は同誌の健全なる發達を希望して止まない。(渡邊漸)

四高旅行部醫王山に於ける遭難真相につきて

先般我部々員能登秀雄君が醫王山に於て遭難死去された事につき新聞紙上なり或は他に於て御承知の事と思ひますが、何分誤報の點は免れませんから死者の慰靈の意味に於て遅ればせ乍ら茲に簡単に真相を述べようと思ひます。

豫定(第一班) 昭和五年一月十一日金澤—二俣十二日二俣—

白兀頂上にて第二班と會す。(第二班)十一日金澤—湯谷原

十二日湯谷原—白兀頂上にて第一班と會す。兩班共に糸谷

新に下りて金澤歸着

人員 第一班 能登秀雄、林清、筒木豪夫、第二班、吉田邦男、

岩橋清次郎、守谷浩、安原一郎(後の二名部員外)

遭難地點 富山縣西礪波郡西太美村小又奥

行動 一月十一日、第一班 十一日(土曜)曇。午後二時金澤

出發、午後五時四十五分二俣宿泊。異狀無し。

第二班 十一日土曜曇。午後二時半金澤出發。

但し部員外の安原を除く三名。午後五時半湯谷原着宿泊。

一月十二日

第一班、十二日(日曜) 午前七時五十分二俣發、快晴、好調に進む。積雪狀況例年に比し少量で、藪の爲スキーの取扱ひが稍困難であつて午前九時半尾根に出る。十時頃霧かゝり全く視界を奪ふ。尾根を取違へ引き返へして正道を見出す迄約一時間を費す。吹雪稍加はり十二時食事す。此時迄能登は元氣で何等の異狀をも認めなかつた。十二時五十分前山にて第二班に合す。第二班は、十二日(日曜)午前七時十分、金澤を四時に出發して參加した部員外の安原を加へ、八時十五分湯谷原出發。十時頃第一班の「エーホー」が聞えた。十一時半桔梗ヶ原で素食をする。第一班と同じく前山にかゝる頃より、吹雪となり十二時半に前山頂上着。待つ事廿分で第一班と合す。それより共に白兀頂上上に進む。

各人のスキーは安原のリリエントフェルト式を除く外はフイ

ワトフェルト式である。海豹皮シールは安原のみ縫製のものを用ひる外他は皆之を携行した。各人につき一言すれば、第一班の林は中學時代よりスキートの経験があり特に始終醫王山には登つて居り、金澤側は相當精通し、スキー年數五年、スキー登山の経験は昭和四年三月の白山別山釋迦岳スキーを始め、數回ある。又鍋木はスキーは二年目でスキー登山経験は二月の立山を始め數回ある。能登は昭和四年暮十二月末一週間關温泉に於て練習し始め特に一年生で進歩早く、岩橋と共にスキー登山は初めてであつた。第二班吉田はスキー二年目で、三月の越後三國清水方面のスキー登山、二月の嶽崎山スキー登山を始め數回に及んで居る。岩橋は能登と同じく關温泉にて一週間練習し能登と略同程度。部員外の守谷、安原は中學時代よりスキーを始めたが、スキー登山は経験淺く初めてか或は二三回である。又冬の醫王山には、林三回、鍋木一回、吉田一回、外の季節には林十數回、鍋木、吉田は二回位で以上の三名は當時二年生、能登、岩橋は一年生の冬であつた。又醫王山よりの福光越えは冬に鍋木一回、春に林一回の経験がある。

頂上では寒風はさして強くないけれども、濃霧の爲展望は許されぬ。併し一同皆元氣で、かゝる天候に對して林鍋木吉田合議の結果豫定通り、福光越を決行する事となり、午後一時廿分頂上を出發した。白兀頂上よりは地圖とコムパスを唯一の頼りとして尾根を進んだが、後から考ふればこゝで既に糸谷新への下

降の目標になるピークを取違へてゐたのである。取違へて下つた尾根は猛烈な數密生しスキーの操縦甚だ敏活を缺き加ふるに急傾斜の爲め進行鈍り、多大の時間を之に浪費した。谷には雪崩の出た跡があつたが結局谷へ下る。尾根附近殊に金澤側に面せる所は吹雪の爲め顔面の感覺は殆どなく加ふるに又霧が深かつたが一旦谷へ下れば案外に風もなく數丁位は展望が許された、時に四時頃であつた。この頃能登は相變らず元氣で初心者としては感心する位に、奇麗に半制動をかいて下つて行つた。又オーダーは嚴重に整へて漸次谷に沿つて下つた。雪は段々小降りとなつて來たが時間は経過して薄暗くなつて來た。始めは糸谷新に出る豫定で又時刻も大して遅くないので越中側へ下りたのであつたが、積雪状態の異状とパーティーの多人數の爲め、案外時間を食つたのである。この頃二三疲勞を訴へる者が出て來た。周圍は次第に暗くなりランタンを點して進む中に、輪標の跡を發見し、一同之に勇を得て進む中に道極り見失つて、少し引返した。この間二三回スキーのまま徒渉をなした。午後八時頃休憩して正道を探すと路は左の尾根に登つてゐる様子である。こゝに於て吉田は先づ道を探しつゝ展望しようとして獨り先へ登る。つゞいて残りの六名はオーダーを整へて進んだが、突然此の頃より、能登は坂道のため二三歩進むと後滑りして轉倒を始めた。それ迄能登は何の苦痛も訴へず、又元氣さうに見えるのであつた。早速ルツクザツクを脱してスキーも脱がせ、林

と鑄木之を分擔して進むことにした。この邊は雪は相當凍つて靴が没する程度にしか沈まなかつた。坂道は尾根の最高地點に達し、此處より又尾根に沿うて下つてゐた。こゝで普通なら平野や下の村々が見える筈であるが、雪の間断なき妨げと丁度その夜の村々の停電のため、展望は全くきかなかつた。それで路を下ると、田に出た。そこで又道が消えてゐる。谷川に下る際能登は急傾斜な個所で、數間程落ちた。でも此の際負傷等は全然なかつた。吉田は對岸の尾根に登つて見たが道は分らぬ。こゝからも又村の燈火が見られるが生憎停電のため駄目であつた。田を下つてゆく中に稻叢を見つけ取出して火をつけて見たがよく燃えなかつた。それまで能登他の二三の者は割合疲勞してバタリ／＼轉げた。續けて谷通り下つたが、一夜を徹しても歩く積りであつた。時に夜の十一時頃であつた。然しこの頃より一般的に一同の疲勞は漸く甚しく前進は意の如く捗らず、遂ひに谷に沿ふ行手は狭つて、廊下の如き形で、又尾根は藪がひどい爲め進み得ず、進退谷つて遂に露骨と決した。時に午前一時近くであつた。空腹と長時間の勞働の疲勞困憊とは、藪が薪の積み重ねを農家だと口に出させる程パーティーの一二の者を錯覺に陥れた。行きつまつた場所は少しく岩のオーバーハンゲした所で狭い所へ七人入ることにした。始め四人程が立ち他はルツクサツクを下にして坐つてゐたが、お互ひに睡らぬ様に注意し合ひ、聲を勵し肩をたゞいて起したりした。その邊は積雪三・

四尺濕潤したもので暗い空からは綿雪がぼた／＼降つてゐる。頭上の雪の滴が間断なく落ちる。朝の四時頃か能登が雪の上で轉んで寢てゐるのに驚き、早速抱き上げ座らしてお互ひに抱き合つてひたすら夜の明けるのを待つた。然し雪の上に轉んでゐた事等能登は此の頃より意識不明になつて來た様である。言ふ言葉は明瞭を缺き物を與へても進んで食はず、一方皆空腹と寒氣のため疲勞し切つてゐる。寒氣といつても温度は左程低くない。樹々は皆濕つた雪を被つて燃えず、又樹を切る道具も持合せがなかつた。安原は足に少し凍傷を起したらしい。待ちに待つた夜が到頭明けた。六時半早速一同共に下らんとしたが能登は立つて歩くだけの力はなく、物さへ碌々に云へないし聞きわけることも出来ない状態となつた。止むなく林、鑄木に村まで下りて貰ふことゝなりスキーをつけて行つたが道を探すこと二時間にして無爲、遂に谷を渡渉して下る事にして能登等の居る直ぐ下の谷間に出了。一方四人は降りかゝる雪を掃つて能登を擁してゐた。七時半頃僅かあつた砂糖水を無理矢理に口に注いで名前を呼ぶと返事をする位である。全く死なんでものを豫感せずには大丈夫と寢かしたまゝにしておく。能登の體の下には、農家に前夜泊る爲めに携帶してゐたシュラーフサツク二つを敷き、體を自由にしてやつたが何分前夜から勞働の上に、能登の體にはずみ分濕つた雪の滴も落ちてきて濡れてゐる。然しどうすることもならず一尺程位置をかへてやつた。八時過ぎ道を

求めに行つた二人は來そうにない。周囲の地勢を地圖で判断してゐる時に能登が今までの普通の息づかひが少しく苦しい様子に成出し眼の様子が少し變なで吃驚し慌てゝ人工呼吸をやり出した。この時始めて「死」といふものが四人に異常な恐怖と緊張を與へた。能登の體は人工呼吸で決して好くなりさうでなかつた。遂に八時五十分脈搏が彼の手を取る四人の誰にも感ぜられなくなつた。(時刻は能登の時計である。)能登の容態急と聞いて林、鍋木は谷を渡渉して十時廿分漸く小二又村に着き村人が直に急行して呉れた時(十一時)には一時間餘の四人の人工呼吸と彼に對する祈りも無残にも裏切られて己に萬事諦らめねばならぬ様になつてゐたのである。

斯くして一同十二日富山縣西礪波郡西太美村宇小二又の高倉氏方に能登の體と共に到着したのである。特に小二又の村の方々及び西太美村の方々の心からなる御盡力と御同情とを如何に感謝していかその術を知らない。それから能登の體が他の誰かが微塵だに豫期し豫感しなかつた悲しき死の前に倒れて、再びこの余澤に歸つたかは述べるに及ばないことである。

以上で當旅行部の醫王山遭難の概要は盡しました。原因とも目すべき點は多々ありませうが、班として尾根の下り口を濃霧と夜陰のため取違へ、又パーテイーの人数が少々多きに過ぎたこと。醫王山(標高九三九・二米)を餘りに部として過去の歴史から輕視し過ぎたこと。又一方では積雪狀況が例年に比して少

なく當時の天候の悪化したこと等が原因とせられませう。又能登の年齢(大正二年一月生)の若かりし事。雪の登山に不馴の上雪の上のアルバイトの過剰なりしこと。又當時の彼の體のコンデイションの良くなかつたこと。(遭難前夜に食すべき飯盒の分量が三分の一も残つてゐた事。)又直接メリヤスの肌着をきて體を極度に冷やした事、他の者と較べて前夜八時頃餘分の襦袢等を着てしまつて、露營地點では最早や着更への無かつたこと。

又遭難地やその附近で火をたいて暖をとる事が出来なかつたこと。又全員に亘つて凍死及その豫防法に對する知識や用意がなく又經驗のなかつた事。又能登が可憐にも苦痛の場合之を明らかに他の者に訴へず、他の人の苦痛を訴へるのに氣を取られてゐた様な様子のあつたこと。直接凍死の原因は濕つた雪の滴が落ちて冷えて濡れた能登の體に衣服を通してより打撃を與へたこと。又當夜悪天候と村の電氣の消えてゐた等のため折角見つけ得られる進路を全く失つた事等は天の災とする所實に遺憾の餘りであります。

何れ該遭難記は精細に亘つて今秋發行の豫定のベルグハイル第六號に發表される事になつてゐます。簡單の點はそれの方で補つて戴けば結構であります。

で私達はこの小文を手をせられる方々の忌憚なき御批評と御高見を心して迎へ又一方今後のスキー登山の一端にも資する所あれば幸甚であります。(第四高等學校旅行部)

片貝川南又に於ける三高山岳部員の遭難 今回遭難せる一行は上林盛二をリーダーとし川村潔、長谷川作郎の三名にして上林の日記及當部の推定を基礎としたる遭難に至る迄の事實は次の如し。

上林は四月二十八日迄日記を記載せり。それによれば一行は二十七日魚津驛着、自動車にて第二發電所に至り、それより取入口を経て、南又を溯り四時二十分露營地に達したる事は日記により明かなり。又たま／＼當夜上林一行と同じ場所にて露營したる富山高校の阿部、牧野君等の言によれば其露營地は南又と坂様谷との出合より稍上流なる地點なり。

翌朝二十八日。快晴。一行は七時露營地を引拂ひ、九時釜谷との出合を通過し、午後三時半には既に猫又附近のコルに到達せり。然るに上林の記録に「四・一〇露營地」とあるを見れば、此間を利用して一行は或は猫又の頂上を極めたるものかとも想像し得。かくて上述の四時十分に彼等は附近の雪上に露營したるものならん。上林の記録はこゝにて終りをれば以下一切は當部の推定によるものなり。

翌二十九日及三十日は共に終日降雨なりき。雨天の爲滞在の日は記録等記せざる事往々あるを以つて、記録の絶えたる二十九日に遭難せりとは必らずしも斷言すべきにあらず。且かゝる降雨中、食糧の缺乏も來さず、何條急ぎ下山すべき理由もなきに、敢て下山の暴舉を行ひたるも考へ得ざる所なり。かくて

二十九日、三十日を雨中にとちこめられたる一行は、五月一日朝來の快晴に際してききに登り來たれる道を引き返したるなるべし。此尾根の露營地より發電所取入口迄は悠に一日の行程なれば一行は露營地より一氣に取入口まで進まんとせしならん。而して途中遂に此の遭難を引き起したるなり。遭難時刻は長谷川の所持せし時計の十一時三十二分にて止れるより見るに大體五月一日午前十一時より十二時の間なりと推測せらる。

而して場所は土倉谷出合より稍上流左岸の岩壁附近なりと考へらる。此處に於て道は上下に二分し、一行は上方のものに氣付かずして其の下方のものを採りたるもの如し。此の下方のものは上方のものに比して其の通過に際して困難を感じる事多く、一行は萬一を慮りてアンザイレンなせるもの如く、先頭に進める一人がスリッパせる際、此れを確保せる他の二者も此れを支ふる事を得ず、相續いで川中に轉落し、遂に死に至れるもの如し。

救授及搜索方法

五月四日。午後十時頃富山縣魚津警察署より一行中上林盛二のルツクサツク片貝川に漂着せりとの打電に接し同日午後十一時五十八分直ちに搜索第一隊を派せり。

五月五日。午前十時四十分魚津に到着したる第一隊は部署配置を定め片貝谷村民及警察當局の應援を得て搜索を開始せり。

此時に於ける搜索の目的は、一行三人共に不慮の死をとげた

りとは想像せざりしを以つて山に残れる友を一刻も早く一人なりとも授ひ出さんとのものなりき。

午後二時十分。奥、藤田は巡查と共に出來得る限り谷を奥に溯り、土倉谷出會まで進みしが遂に何等得る所なく空しく取入口に引き返せり。

一方今西及遠山は片貝谷村役場及第二發電所を訪ひ、應接其他の交渉を終へ、午後三時五十分取入口に到着す。

尙此日午後九時三十四分京都發列車にて搜索第二隊を派す。

五月六日。昨五日の陰鬱なりし天候は遂に強雨となり河水は濁流と變じ、著しく増水せり。第一隊はいよいよ第二回の搜索を開始せり。

午前六時五十五分、藤田、巡查一名、人夫二名、奥、巡查一名、人夫一名は猫又山にむけ南又を溯る。

2、午前七時十分、人夫六名、川筋を搜索。

3、午前七時十五分、今西は聯絡員二名と共に先發隊の後を追うて出發。

かくて午前九時土倉谷の出合よりやゝ下流の川の真中の淺瀬に上林の死體を發見す。同じく十時二十二分上記の地點より約三百米下流に長谷川の死體を發見す。

一方此頃搜索第二隊が取入口に到着し、直ちに現場に赴けり（第二隊中一名は魚津に、他の一名を第二發電所に配置せり。）

尙同日上林、長谷川の死體を第二發電所に送り父兄に引渡し

魚津町にて火葬に附す。

五月七日。連日の降雨による増水益々烈しく本日川村を發見し得ずんば一旦搜索を打切り、減水を待つより外に方法なき狀態なり。

次の如き配置を以つて午前六時四十分より搜索開始。

第一班 指搦遠山他十四名、遭難地より小澤の間を搜索。

第二班 指揮四手井他十二名、小澤、土倉澤間を搜索。

第三班 富山藥學專門學校の應接隊他八名、取入口より小澤間を搜索。

第四班 人夫九名、取入口より下流。

午前八時三十分小澤の出合よりやゝ下流に川村の死體を發見父兄に引渡したる後火葬に附す。かくて全員は此日夜八時三十分、三つの遺骨に従つて歸途につく。（三高山岳部）

東京商科大學一橋山岳部

劔、針ノ木 浦松佐美太郎、中島嘉一郎、磯野計藏

四月十三日（晴） 室堂より劔岳往復往きは別山乗越から一旦劔澤に下つて小屋跡から鶴ヶ御前と軍隊劔との鞍部に出、復路は平藏谷を下る。四月十四日（晴後曇） 室堂より一の越御山澤を経て平日電出張所、板屋峠の少し上から實に素晴らしい雪崩が出て、雄山澤を一里近く流れた痕があつた。谷はかなり下まで雪で埋め、徒渉は二回。四月十六日（晴）。平より針ノ木峠を経て大澤小屋十四日の夜からの雨は上の方では雪だつた。峠では

新雪七・八寸、既に小さな表層雪崩を起して、その危険を感じた。

武尊山 吹原不二雄、花吹より武尊山に登り、藤原に下る。

去年よりも残雪量は少ない。

駒ヶ岳、仙丈岳 高瀬進三、岡山徳三郎。五月三日(晴) 屏

風小屋―七丈小屋―駒ヶ岳頂上―北澤小屋 七丈小屋から石鳥居の處までは一面の残雪、それから上は大して雪はない。北澤

小屋附近には殆ど雪なし、五月四日(晴) 小屋より仙丈岳へ往復。

鹽見岳 増山清太郎、清水達雄、田中秀三郎。五月二十三日

(晴) 三伏峠小屋―本谷山―鹽見岳―鹽見澤落合―三伏小屋。

権右衛門岳の森林中は残雪數尺、鹽見澤は中俣の谷の合流點の半分位まで雪があつた。大鳥から大河原への久原のトロは廢止された。

一 高旅行部

八海山、中ノ岳 小林、小泉、三月十五日、曇、清水ヶ瀬―

三國川落合小屋、道踏及び架橋をなす。十六日、曇、中ノ岳行

(所要時間十二時間)。十七日、晴、小舎―清水ヶ瀬。十八日、

晴後吹雪、八海山行(十二時間)。

乗鞍岳 長谷部、鹽川、桑田、外三名。三月十六日(晴)冷泉

小屋より大スロープ迄練習に赴きし處、筒井負傷せし爲め、一先づ小屋に引上げる、十七日、筒井、長谷部下山す。尙、當時

冷泉小屋にみられた廣島君外三名の早稻田の方々が一方向ならぬ御手傳ひをして下さつた上聯絡等の爲め即日下山して下さつた事は何とも御禮の申し様もありません。此處に記して厚く感謝の意を表します。

谷川岳 小林、三月二十日曇、土合より茂倉澤を上る。二十

一日、晴、マチガ澤より谷川岳に上り、西黒澤を下る。二十二

日、晴。一ノ倉澤尾根を志す。夕方谷川へ。二十三日、晴。谷川本谷を上る。夕方歸る。

鹽見岳、板屋岳 鹽川兄弟、増田、桑田、四月一日、晴。三

伏小屋より鹽見岳往復(十一時間)三日(晴)板屋岳行(十二時間)

赤石岳、惡澤岳、聖岳 鹽川兄弟、四月六日、大河原―廣河

原。七日、雨、滞在。八日 赤石岳行(九時間)。九日、(晴)惡

澤岳往復(十二時間)。十日、晴、聖岳(十三時間)。

穗高岳 小林、四月六日、一ノ俣より奥穗高岳、濁澤岳往復

(十三時間)。六日、(曇)槍肩(七時間)。九日、(晴)一ノ俣往復

十日(晴)、上高地より西穂行(八時間)。十二日(晴)岳川往復。

青山學校山岳部

淺間山 リーダー、立花勝郎。三月二十六日(晴) 香掛峰ノ

茶屋―頂上―峰ノ茶屋―歸京雪は峰ノ茶屋附近からあつたが、量は少く其處よりスキーを穿く。頂上よりの滑降は雪が腐つて

したので不愉快だつた。

大源太山、仙ノ倉山 リーダー、小島集太郎。三月三十日(晴)

後閑―猿ヶ京―法師温泉 後閑から猿ヶ京までは自動車があるがその先は五月末でないと通はぬ由。三月三十一日(曇)法師温泉―三國峠―淺貝今年の春の積雪量は昨年比して少ない。峠のお宮は去年の今頃雪に埋つて鳥居がほんの少し出てゐただけであつたが本年はお宮の中にはいれる位であつた。お宮の近所でスキ―の練習をする。

四月四日(快晴) 淺貝―イワキ澤―イワキ澤の頭―ヤカイ―大源太山―仙の倉山―イワキ澤ノ頭―淺貝、イワキ澤の炭焼小屋までスキ―で登り後はアイゼンでとほす。雪はかなり「クラスト」してゐるので割合に樂であつた。長いスキ―より寧ろ「ゾンメルシー」を使用した方が種々の點で優れてゐる位の雪の状態であつた。

鳳凰山 リーダー、松尾敏夫。四月八日(雨) 甲府より源村まで乗合自動車あり。源村より芦安まで雪全然なし。

四月九日(晴) 芦安―夜叉神峠(刈合)―杖立―五葉尾根小屋 鮎差へ行く道と分れて清水横手を通り夜叉神峠に出ず刈合に出る。清水横手にはかなり雪が見られるが刈合に出るとスキ―をかつかねばならぬ。唐松尾根でスキ―を穿く。道は辻山より材木を下すため大きな階段状をなし不愉快なり。杖立附近は雪が五尺ほど積つてゐる。これより五葉尾根まではすばらしく氣持のよい滑走が出来る。

四月十日(曇後小雨) 小屋―大根場―辻山―南小屋―薬師岳―

南小屋、朝から氣持の悪い天氣だ。風強く時々氣味の悪い雪崩の音が谷間に響く。大根場に小屋を建てるそうだ。雪深く枝が兩側より道を掩ひ通行に困難する。辻山より南小屋まで氣持よく滑る。南小屋は屋根棟が僅かに現れ、スコツプで入口を開くこゝをスキ―デボーとしてアイゼンをつけ一時間餘りで頂上着展望きかず南小屋に下る。

十一日(雨) 唐松尾根でスキ―を脱し芦安まで歩く。芦安より鳳凰への道は割合に樂だが小屋の不完全と道を枝が立塞いで居るので意外な苦心をする。三日程の休みを利用して行ける樂な面白い春山だ。雪崩の心配が少しも無いのだから。

神戸商大山岳部

五嶺岳

田中伸三、富川清太郎、藤井隆藏、四月二十六日、午前三時三十分細野發、岩小屋澤より二本松尾根を経て大黒澤から大黒の鞍部(此處にて雪庇をきる)に出てそれより頂上に達し、歸りは遠見の尾根を降つた。細野着、午後七時四十五分、終日快晴。

鹿島槍岳、祖父岳

前記三氏、五月三日、鹿島發午前四時五分、大冷澤より鎌尾根を経て本尾根に出づ。その取付く地點で雪庇を切るのに一時間近く費す。頂上十時三十五分、祖父岳午後一時半、小冷澤を降り鹿島着午後五時二十五分、終日快晴。

早大山岳部

笹ヶ峰

橋本寛治、永田、野口、藤井、上田。

三月十一日 山口より京大ヒユツテに。

十三日 濃霧、雪、雨。ヒユツテ(八、二〇)——潤澤を登リグルワ岳に立つ——ヒユツテ(一二、五〇)濕雪で面白くない。

十四日 濃霧。ガスのため焼山偵察の豫定を變へ黒澤野池へ行く。

十五日 霧、雪。今日もガスが行ける所まで行つてみよう。

ヒユツテ(七、二〇)——瀧澤(八、四〇)——鎧岩(九、二〇)——鎧岩の附近に雪崩の危険絶大なり。——ヌルイ澤と地嶽谷の

合(一一、一〇)——時間とガスに阻まれてこゝから引返す。ヒユツテ着(三、一五)。

十六日 霧、ヒユツテ(七、〇五)——黒澤池(一〇、〇)尾根通り行く——肩をデボーとする。——火打岳(一二、一〇)——デボ

ー(一二、四五)——黒澤岳——黒澤を下リヒユツテ(三、四五)十七日 グルワ岳まで遊びにゆく。

十八日 晴後霧、雨。ヒユツテ(四、五〇)——鍋倉谷出合(六、〇)——瀧谷(六、二〇)——鎧岩(七、一五)鎧岩の直ぐ手前から

尾根にとつづく。——肩(九、四〇)デボーとしてアイゼンを穿く。——頂(一一、四〇)火打を越えて黒澤に出る豫定なりし

もガスのため放棄して登路を逆にたどることとする。——ヒユツテ(二、四五)樺の林の中の滑走はボートレースの様だ。

槍ヶ岳 長島春雄、和田一男、金子、古川

三月十一日 松本——前川渡——中の湯

十二日 晴 中の湯(八、五〇)——水電小屋(一一、二五)——五千尺(一二、五〇)——二、五〇)——徳澤牧場小屋(四、四五)小屋には松高の人が二人居られた。

十三日 雪後曇。小屋——一ノ俣小屋。

十四日 雪、一ノ俣小屋から槍澤小屋往復。

十五日 暴風雪、午前中は止むなく小屋の中でおとなしくしてゐる。午後は次第に晴れて夜は月が、長い木影を雪の上に落してゐた。

十六日 雪後晴 滞在。

十七日 晴、身體の調子を整へるために一日休養。

十八日 晴 小屋(二、四〇)——大槍小屋(六、一五)肩小屋(八、一〇)——九、二五)この頃から吹雪となる。——穂先を少し登り始めたが餘り吹雪が強いのので残念ながら引返すの餘儀なきに至つた。身體の調子からとは云へ昨日の天氣を掴まなかつたのは

大失敗だ。二時三〇分一ノ俣小屋着。

十九日 晴 今日には晴れてゐるが用のある人があつて一ノ俣を去らねばならない。徳澤小屋へ。

穂高岳 横尾直行、今井、出牛、森
三月十一日 晴後曇 松本奈川渡爲自動車——前川渡——澤渡
つるや泊(三、三〇)

十二日 晴後曇 澤渡(八、〇〇)——中ノ湯(三、〇〇)——上高地梓川水電合宿所(六、〇)荷が多いので各人公平に九貫匁分擔

したが餘り苦しいので中ノ湯に六貫程預けた。

十三日 雪後雨 水電(一〇、〇〇)——五千尺(一一、〇〇)途中から雨となり濡れ鼠なので五千尺に入ることにした。三時頃、一日遅れて東京を出た森がやつて来た。

十四日 曇 五千尺(一〇、〇〇)——牧場小屋(一二、〇〇)

十五日 吹雪 二人は横尾岩小屋へ荷を選び二人は五千尺へ荷を取りに行く。然し岩小屋には松高の方が居られるので使用を見合せ牧場小屋を根據にすることとした。

十六日 静養。夕刻から気温も降つたので明日の登高に備へ萬事の準備をした。

十七日 快晴 奥穂高岳

小屋(四、一〇)——横尾岩小屋(五、一〇)——潤澤岳から潤谷

へ派生された側尾根の最後の隆起、こゝをデポーとする(九、二〇)——穂高小屋(一〇、五五)——先行の松高の人の進行を鞍部

で待つ間、今井は潤澤岳頂上往復——奥穂高岳頂上(一二、二〇)——

鞍部(一二、三五)——三、〇〇)——シーデポー(三、一〇)——三、

三〇)——横尾岩小屋(五、〇〇)——牧場小屋(六、〇〇)

ザイルは鞍部から使つた。雪は殆ど完全に岩を包んでゐた。潤谷の滑降を楽しみに登つたのだが一日中の日射で、夕方には全くクラストして愉快な滑降は煙と消えた。

十八日 曇 滞在、薪をつくつたり食糧の整理に日を暮す。

十九日 晴後吹雪、本谷から北穂高岳へ。

牧場小屋(三、五〇)——本谷と潤谷出合(六、一五)——國境尾根(一〇、〇)——尾根を登り出す。然し先刻から悪化した天候は頑強に前進を阻むので残念ながら引返すことにする。——尾根を離れて再び本谷へ(一一、一〇)——潤谷との出合(一、〇)——牧場小屋(三、二五)

本谷へ入り、カール状地の下端まで達した頃はひどい吹雪で行手は見えぬ。磁石を頼りにキレットの最低部へ入る澤を登つた然しこれは結果からみて、も一つ南岳寄りの澤であつた。兎に角主稜までは出たが強風とひどい雪とは前進の希望を絶つたので下山と決めた。

二十日 晴、足を痛めた今井を残し中ノ湯へ荷物取りを兼ねて湯治と洒落れた。

二十一日 晴 夕刻牧場小屋へ

二十二日 晴 前穂高北尾根へ。

牧場小屋(二、一〇)——本谷出合(四、四〇)——池ノ平(六、〇〇)——五峰から出てゐる尾根末端にシーイを置く(七、一〇

——三〇)——五、六峰の鞍部(八、〇)——二五)——忠實にリツ

ヂを追つて五峰(一〇、〇〇)——四、五峰鞍部(一〇、四五)——

五峰の登りに豫想以上の時間を費やしたのと仲間の一人のコンデイオンが悪くなつたので前進を中止、四、五峰の鞍部から潤谷へ下る(一一、〇〇)——急傾斜と深い軟雪とで非常に困難し

た、シーデポー(三、〇〇)——三、三〇)本谷出合(四、五〇)——

五、〇〇——牧場小屋(六、〇〇)

連日の晴天に拘らず又白側は全然粉雪で、とても搦めないの
止むなくリツヂ通りに行かねばならず、従つて非常に時間を喰
つた。然しロープを使ふ程でもない。潤谷への下りは少からず
骨を折つた。あの澤は眞直には一寸下れないので四峰の腹を搦
みつゝ下らねばならなかつた。捨繩の用意がなかつたので最後
の横尾は綱をビレイから外すのに一寸頭を使つた。

二十三日 晴 滞在、森は峠を越えて歸京。

二十四日 晴 休養。

二十五日 晴 休養。

二十六日 晴 前穂高北尾根へ

牧場小屋(一、五〇)——横尾岩小屋(三、〇〇)雪がとても固いの
で岩小屋からアイゼンを穿きシイはトラীগンする。——池
ノ平にシイを置く(五、三〇)——五〇)——三、四峰鞍部(七、
四〇)——八、一五)——三峰を少し登り始め、ザイルを結ぶ。

——三峰(〇、四五)——、五五)——二峰(一、三〇)——前穂頂
上、ザイルを解く(二、三五)——三、三〇)奥穂との鞍部(三、五〇)
——夏道通り潤谷へ降りる、こゝでザイルを結ぶ。——ザイル
を解く(六、一〇)——デポー(六、四五)——切角こゝまで擠ぎ上
げたシイも矢張り滑れない。——出合(八、〇〇)——横尾岩

小屋(九、四〇)——舟田氏達の仲間の心盡しの夕食をいたゞく、
——岩小屋發(一、一〇、〇〇)——牧場小屋(〇、一五)

三峰は登り始めると直ぐ岩の割れ目に手を入れて岩を抱く様
にして登る所がある。夏ならば何でも無いが、氷が張つてゐて
如何とも登れないので、危げな氣な足場でザイルを結び合ひ少
し又白側へ搦んだ。カミンには粒狀の軽い雪が深々とつまつて
ゐた。

前穂鞍部から潤谷への下りは前日の四、五峰の鞍部からの下
りより樂だつた。

池ノ平附近が滑れたらもつと早く歸れたらう。今井、出牛は
岩小屋に泊り込んで了つた。

二十八日 滞在。

二十九日 滞在

三十日 曇後晴 午後日大の初見君等、松高の内山君等が來た
翌日の準備を濟ませて早寢をする。然し又お客様があつて、初
見君と横尾は其世話で一睡も出來ず。

三十一日 曇後雪 北穂高岳へ

牧場小屋(一、五五)——岩小屋(四、〇〇)アイゼンを穿きシイ
は引いてゆく。——本谷出合(五、一〇)——潤谷へ入り、夏
道が雪谿へ移る附近の左岸をデポーとする(六、〇〇)——、二〇)
——所謂北穂高澤を登る何の變哲もなし。遂に岩を求めて、右
手へ搦み側尾根へとつづく。細心の注意を拂ひつゝムステツプを
切つて登る。——頂上(一〇、三〇)——下りは直接北穂高澤へ
入る——デポー(一、三〇)——牧場小屋(三、三〇)二十六日に潤

谷に入った際は穂高小屋の下から出たテブリだけだったが此の日は谷がデブリで一杯だった。殊に北穂高澤の夫れは最大でシイデポの附近まで押し出してゐた。

頂上につかぬ中から暗雲が垂れ込めたので潤澤岳への縦走は放棄した。

四月一日 晴 滞在。

二日 曇 長い間御厄介になつた牧場の小屋ともお別れをして徳本の峠を越へて里へ出た。

x x

三十日の夜、来られ、小屋にゐた者の中二人が一睡もせずにお世話したお客様は、三十一日に吾々が発後、雪を融かして作つて置いた水を一滴も残さず、薪も燃し盡くして其儘、何處かへ出て了はれた。山から疲れきつて歸つた吾々はそれから水をとかしたり、薪を切つたりしなければならなかつた。處が又其晩おそく、そのお客様が来られたが、水を一滴融かすでもなく、薪を切るでもない。こんなことは極めて些細なことでもあらうが、僅かのコンデイションの變化さへその登高の成否を決定する、冬期登山では、少しは他人の迷惑といふことを考へなくてはなるまいと思ふ。敢へて貴重な紙面に、一文を報ずるのも他意はない。

北穂高岳 舟田三郎、宇野澤、有田。

三月二十二日 晴 鳥々(四、一〇)——鑑止(九、一〇)——力

水(二、三〇)——徳本峠(二、〇〇)——徳澤牧場(五、〇〇)

二十三日 晴 一時雪 後三時から横尾岩小屋まで行く。

二十四日 晴 北穂高へ 岩小屋(四、一〇)——出合——カール

ルの底(六、七、一〇)——國境山稜、キレットより少し北稜寄りに

出てシイデポとす(九、三〇)——一〇、一〇)——北穂へ向

つて山稜を辿つたが、強烈な風に吹き返へされた(二、二、〇〇)

——デポ(一、〇〇)——出合——岩小屋(四、〇〇)

烈風は身體をグラ／＼させるし、氷の個所が多く、メムバールのコンデイションも揃はなかつたので止むなく引返へした。

二十五日 晴 一日休養。

二十六日 晴 屏風岩の下へ行つて滑つて遊び、午後牧場小屋

へ歸る。

二十七日 晴 峠を越えて鳥々へ。

北澤小屋生活。河合亭。上村篤、小林高行、岩田喜芳。人夫

深澤松五郎、竹澤藤太郎。

三月十三日 曇 黒河内——戸臺

十四日 曇後小雪 戸臺(七、三〇)——赤河原(一〇、四五)

一一、五〇)——峠(三、二〇)——北澤小屋(三、四五)

峠まで夏道の通り。北澤峠、白檜の密林に護られた扉を排して雪の南アルプスに。小屋は完全に埋れてゐた。

十五日 雪 滞在。準備は出来たので人夫二名は下山。

十六日 晴後吹雪 小屋(七、〇〇)——錫杖峯と駒津峯のコル

をシイデポーとす(一〇、〇五)——駒津峯(一一、一五)——
小屋(一、三〇)

十七日 晴天無風 小屋(七、一五)——春吉澤を登る——小仙
丈(一二、三〇)シイデポーとす——仙丈岳(一、三〇)——一、五
〇〇——小仙丈(二、二〇)——北澤河原(四、〇〇)——小屋(四、
四〇)

春の雪崩の通路と聞いてゐた春吉澤も今日は危険を認められ
ない。仙丈岳の抱くカールには一つのデブリも見出されない。
水の面の様な處だ。

十八日 晴強風 小屋(七、四五)——仙水峠(八、四五)——シイ
デポー(九、四〇)——二七〇〇米突の峯(一〇、二〇)——アサ
ヨ峯(一二、〇〇)——デポー(一、三五)——小屋(二、一五)。
仙水峠の一寸手前、帯の様に樹の拂はれた所を選び、暫し登つ
てから左へ搦みリツチに出た。

十九日 晴、強風 小屋(七、〇五)——駒津峯のガラ(七、五〇)
デポーとする——駒津峯(九、二五)——六方石(一〇、二〇)——
駒ヶ岳(一一、三〇)——一二、〇〇)——六方石——駒津峯(二、
〇〇)——小屋(三、〇五)

仙水峠の一寸手前の岩の押し出しをアイゼンで登つた。之は
成功だった。嶺への登りは麻利支天側を搦みながら進んだ。雪
は極めて僅少で、堅いクラスと形成をしてゐた。

二十日 曇 小雨(九、三〇)——北澤峠——赤河原(一二、一〇)

戸臺——辰野。
滞在中に雪は二尺も融けた。又滞在中に一度も雪崩の音を耳
にしなかつた。

七ツ小屋岳より谷川岳 吉田伍郎、山田、渡邊、福田、河津

四月二十五日 曇小雨。水上驛より建設列車にて土合まで——
眞鹿澤、釣橋上流約五〇米の左岸の小屋(一二、二五)天候悪化
と眞鹿澤幕營を顧慮しこの小屋を根據とす。偵察の結果此澤を
廻行する豫定を變更す。

二十六日 小雨。武能へ。小屋(一〇、〇八)——土合——一ノ
倉(一、〇五)——武能小倉跡(二、一八)——一ノ倉に入る澤へ入
る澤(二、三〇)幕營。

越後と上州を連ねる清水越えの舊道、命短く棄てられた舊
道。此日暮、荒廢の路を一人の失業者があへぎながら登つてき
た。復興祭以後職を失つた彼は今、生れた里、越後へ敗殘の身
を運ぶつもりでやつてきた。——東京以來四日間米粒は一つも
咽に通らない。夜の宿は橋の下。廢路と敗者とは人生の旅を印
象せしめる。食事と宿を共にする。

二十七日 快晴。キャンプ(七、〇〇)——蓬峠(九、一五)失業者
に別れる。——七ツ小屋岳(一〇、三五)——一二、一五)——蓬峠
——キャンプ(二、二五)

笠に行く豫定も、失業者同伴で時間を喰つて放棄した。

二十八日 晴 キャンプ(六、二〇)——白樺小屋跡——一ノ倉

北方の肩——ノ倉岳(九、一〇)——茂倉岳(一一、五〇)——谷川富士(〇、三〇)——谷川岳(一、五三——二、一五)——天神峠——谷川温泉(五、三五)

谷川岳の特長は斷崖にあつて山頂にはない。七、八百米直下する數本のクローアールは斷然物凄い。

甲斐駒ヶ岳 今井友之助、高橋、中村、野口、今井

四月二十六日 日野春(三、五五)——臺ヶ原(五、三五)——竹字前宮(八、〇〇)——不動瀧(九、三五——九、五〇)

尾白川増水にて渡渉不能のため附近に幕營し明日舊道に合して七丈小屋へ行くこととする。幸に十一時半頃右岸に岩小屋を發見し一夜の宿をとる。

二十七日 岩小屋(一〇、〇〇)——舊道に合す(一、四五)——屏風小屋(三、二〇)——四、一〇)——七丈小屋

屏風の上の小屋には雪の吹込なし。下の小屋は土間の半分も残雪がある。七丈小屋は半ば雪に埋ねてゐた。小屋の中はうづ高い雪や融水でひどい。

二十八日 小屋(七、五五)——鳥居(八、三七)——頂上(一〇、二五)——一一、二〇)——鳥居——七丈小屋(一一、四五)——一、四五)——屏風小屋(二、三五)

アイゼンは小屋から穿いた。夕方少し降雪あり、夜になつて雨となつた。

二十九日 屏風小屋(二、二〇)——竹字前宮(五、一五)——臺ヶ

原(七、〇五)

八ヶ岳 今井友之助、下條、木村、鈴木

五月十六日 茅野(五、〇〇)——小屋場の社(七、三二)——柳川出合(一〇、〇〇)——一〇、三五)——下の行者小屋(一二、四五)——一、三〇)——上の行者小屋(二、四五)——横岳に取つき、

オーバーハンクの岩に行當り引返す——行者小屋(六、〇〇)——

十七日 行者小屋(七、三〇)——阿彌陀中岳鞍岳(九、三〇)——一〇、一五)中岳(一〇、二〇)——一〇、三〇)——赤岳(一二、〇〇)赤岳小舎(一二、一五)——一、一三)——硫黄岳(二、四五)——

夏澤峠(三、三五)——夏澤温泉(四、二〇)——

十八日 二隊に別れ、一隊は直接茅野へ、一隊は夏澤峠、天狗岳等を経て佐久の方へ。

四ツ家案内組合員スキー講習會

關東學生登山聯盟より派遣せる者。手塚晴雄(商大山岳部)江口新造(早大山岳部)。關東學生登山聯盟結成後の具體的行動の一つとして、案内組合よりの招聘を快諾して前記二名を送つた。冬季登山への大きな流れはいよゝゝ激しさを増す今日、案内人の訓練、系統づけられた訓練は必然的に要求せられる。

山へ行く者の等しく口にしたこのことを、今まで果たして誰がやつてくれたらう、誰が計畫したらう? こうしたことは線香花火式に、ある年のある日だけ、前後に超然と、ポツンと實行されたつて、それがどれだけの効果があるといふのか。正し

い教案、そして倦むことのない連続！ これこそ必要なのだ。然もそれは個人の力では殆どどうにもならないことなのだ。吾々のこの行動はたゞその運動への口火となるものである。大いなる力出でよ。更生の日本山岳會はこの方面にその足を向けて欲しい。

一月三十日 曇時々雪。大町——築場驛（九、三〇）——馬橋にて白馬館へ。組合長下川氏等とプログラムを練る。

三十一日 快晴、講習第一日。第一班（経験者）は江口。細野村へ。二時から萱場で練習。夕刻細野へ。第二班（初心者）は手塚約三十名位が蔵平で練習。

二月一日 快晴。第一班、猿倉の白馬シューヒュツテへ。参加者十二名。第二班、今日も蔵平で練習。参加者は昨日より少し減つた。

二日 晴後雪。第一班、午前中は小屋背後の尾根を登り切つて長走澤の「雪崩跡」にて練習す。午後小日向山へ向ひ通稱「二子」の右のカーン状態で練習す。一行十名。第二班、落倉に行き附近のスロープにて練習、夜は附近に散宿。

三日 晴、強風。第一班、雪崩跡にて練習。細野の連中は今晩節分の年取りのために下山、明日落倉で會ふことを約す。江口他二名は三時半小屋出發、阿彌陀山の北を越して落倉の鹽島秀吉方へ（七時）阿彌陀山の北「赤ヌケ」より落倉への長いスロープを滑る頃は鎌の様な月が西に出てゐた。第二班、千國の蔵平に

て練習。千國泊り。

四日 雪、第一班、水電小屋附近で第一班の人達と會し共に「赤ヌケ」附近まで行く。参加者十四名。第二班にも第一班に加はるべき技倆の者数名ある。家の事情で猿倉のヒュツテまで行けなかつたのである。

五日 曇、平塚、江口他六名は落倉から牧の瀨を経て萱場に至り練習。四時頃白馬館に歸る。夜は白馬館で懇親會。十七人が猛烈に騒いで寢たのは一時頃。

六日 雪、吹雪に包まれた嶺と別れて歸る。

後記

此等の山旅を通じて、吾々はいづこにか完全な山小屋を發見し得たか。冬季使用に備へた小屋を見出したか。答は簡明に「否」。

一回の使用、冬期數日の使用のために登山者は借入れに初まつて、高價なる運搬費を拂つた食糧の貯藏、封印に至るまで繁雜極りたい準備のため、夏のシーズン、秋の季に一回乃至數回旅行しなければならぬ。然も使用に當つては全然必要のない人夫の強制的雇入を要求される。之は營業專一の小屋所有主の間は當然の歸結である。

まるで冬に、春に、エクスペディションの連射である。吾々にとつて、若しくは限られた時間と費用で登り行く者にとつて僅か一年の中に二回、三回にわたつてかゝる大名行列を繰り返

雜 報 ○各學校通信

へすことは生やさしい苦勞ぢやない。

設備を完備せよ、所管を統一せよ、營利根性を排せ、あらゆる手續を簡略にせよ、今後の建設は系統的にせよ、etc、etc、etc。

山小屋に關する限りの問題でも解決を急ぐもの十指に餘るであらう。然も之等はたゞ山小舎問題なる、現状のたゞ一角を摘み上げたものにすぎない。

すべての登山者を包含し得る、而て全會員の意志、要求を忠實に反映、實踐すべき機關を有する登山團體こそが此解決の鍵を握るものと吾々は信じて疑はない。

そして日本山岳會こそ之等の鍵を握り得る唯一の團體である筈である。支持物のない空中樓閣や二、三人の骨董的愛惜感を満足させる様な團體は當然自然分解を起して消散し去るであらう。

新生の日本山岳會を待つ！ 大いなる力出でよ！

富山高等學校山岳部

早 月 入 り

大石碩、四月四日の快晴に早月尾根二四〇〇米附近まで登高す。二日、三日(曇天)は水上谷(吉澤氏によれば立山川支流にして早月尾根より出る最初のもの)やブナクラ谷のワンダリング。

人津谷より早乙女を経て三三〇〇米まで

一 異

扇田彦一。橘英雄。四月十三日 人津谷より尾根通しに早乙女頂上に至り、更らに二二〇〇Mまで往復。全部スキーを使用せり。

大 熊 山

阿部顯、牧野邦雄。四月十三日 大熊谷を登り大熊山に達す。ソンメルシーを時々用ひたり。

鷲 崎 山

大石碩、吉崎鎮三。四月二十日 四月二十日 調整池より杉谷を登り頂上に達す、途中瀧二三ヶ所あり。

立山劔の雪量

立山にては四月二十八日頃一の越より上殆んど雪なし、劔にても平藏より上は豫想外に雪もなくアイゼンを使用せざるもよき程度であつた。併し頂上の堂は埋もれて居た。

猫 又 岳

阿部顯、牧野邦雄。四月二十七日 ブナクラ谷を登り鞍部に於て直ちに猫又頂上に取付き、猫又谷を下り南又谷下流にて野營。三高生と同所にて會ひ共に野營す。その三人の三高生の遭難せられしは實に不幸なることであつた。

○山岳圖書紹介

北大山岳部々報 Ⅱ 一九二九年十一月發行重要記事
知床半島の山 原 鬼 平

幌尻岳スキー登山

日高山脈より新冠川を下る

トツタベツ川を入りカムイエクウチカウシ山に登る

日高山脈單獨行

十勝岳、十勝川、ニベツツ山

五月の若別夕張連峯

三月の利尻岳

國後島遊記

アレウシヤンの旅

日高山脈アイヌ語考

一昨年六月第一號を出した北海道帝國大學文武會山岳部々報

の第二號である。編輯後記にあるやうに、登山記録の集録を目的としてゐるだけに内容は前掲の諸項はもとよりその他の諸項

いづれも貴重なる記録である。

一二のものを除く外全部北海道の山岳に關する記録であつて

それ等のどれを讀んで見ても、北海道の山岳にはまだく多分の

原始的なにほひが残つてゐるのが窺はれる。また日本アルプ

スの開拓時代のやうに、毎年々々新しい山頂に、或は新らしい

方面から山々に攀ちてゆくといふよろこびも北海道ではまだ

之を味ひ得るやうに思はれる。北海道といふひろい大きな登山

舞臺を殆んど獨占して、四季を通じて思ふまゝに山登りをやつ

須藤宜之助

坂本正幸

山縣浩

伊藤秀五郎

山縣浩

山口健兒

井田清

島村光太郎

高橋喜久司

山口健兒

てゐる人達に一種の嫉しさをさへ感じさせられる。

「アレウシヤンの旅」は登山といふ點から見ればさして重要な

ものではないが、北方の島、一年の大部分を氷に閉されてゐる

やうな北方の島の風物、そこに住む人達の生活に對からず興味

を惹かれた。館脇氏の寫眞二葉も珍らしく、夏の眞中にも海近

くまで雪の残つてゐるやうな景色は、たゞわけもなく私の心を

強く誘惑した。山の高みの岩や雪を求めると、北の海の人煙

稀れた島に憧憬れる心とはいくらも隔りのない近いものゝやう

だ。私はこの旅日記を繰返しよむだ。

「國後島遊記」も面白く讀んだ。この文の筆者と殆んど時を同

じくして登山された岡田喜一君の話もきいたが、チャチャヌブ

リといふ山は實に不得要領な茫漠とした、登りにくい山らしい

それにまたひどくガスの深い日が多いやうだ。天幕の中で毎日

々々ガスの晴れるのを待つて退屈し切つてゐる呑氣さを想像す

るとおのづから微笑まれる。學校を出てから時間を切詰めた山

旅ばかりしてゐる私はちよつと昔が戀しいやうな氣がした。

寫眞はアレウシヤンの二葉、ニベツツ山、五月の十勝岳、暑

寒別岳、札内川上流より見たるカムイエクウチカウシ山、美生

岳より戸葛別岳及び幌尻岳を望むなど中々いゝ。(藤島敏男)

登高記 吉澤一郎氏著、一九三〇年三月、古今書院、四六版

二八九頁、貳圓貳拾錢。

會員吉澤氏及び會員長谷川孝一氏が從來「山岳」其他の雜誌

に發表せる文章を集めたものである。内容は上信國境のスキー登山、東北朝日岳、五月の針ノ木越え、劍岳池ノ谷等に關する紀行と、雜記と稱する感想文或は隨筆に類するものを含む。

登高記といふ登高行をもちつたらしい書名に敬意を拂つて一讀して見た。假名遣ひの誤りや、誤植が随分多い。そればかりではない、かなり亂暴な文章が所々に散見する。

例へば「窓岩からは一目散に小舎場まで轉倒を含んでの直滑降」。「赤岩山頂の眺めに又南方を遮るものがない今は秩父全部を我がものとすることが出来た。」「下を見ると分厚な流れが色も黒い藍に近く、グーとも云はず動いてゐる。」「これでは文章についてとやかく言ふ資格のない私でも少々ひどいと思はざるを得ない。物故した人の遺稿を上梓する場合でも、字句の誤りや文の續き工合のおかしい箇所は訂正することがある。まして自分が過去に書いたものを集録して刊行するやうな場合には出来るだけ過誤を訂正すべきであると思ふ。この點に於て本書は遺憾と思はれる所が尠くない。

紀行の中に全く年次の記入なきものが二三にして止まらぬのもやゝ不注意の識りを免れない。例へば冒頭の「岩菅山スキ―初登山」も三月二十四日とばかりで、何年の三月二十四日なのか全く不明である。かゝる場合には後世の史家のためにも何年何月と明記しておいて戴きたい。

ところで右のやうな枝葉の問題は別として、著者の自序に

「のぼ、んとして學生時代に登つた山々、私は今それを忘れ度くないと思つてゐる。其等を一纏めにして一つの本として殘して置くのも過去の自分を清算して置かふとする意味なのである。」とあるが、私にはどうもその意味がよく分らない。のぼ、んとして山に登るといふのは一體どういふ意味なのか。のぼ、んといふ言葉の眞意をよく知らない私は少々解釋に苦しむ次第である。山登りといふものに對する態度に就て未だ確固たるものを持つてゐない私ではあるが、少くとも山はのぼ、んと登るべきものではないと思ふ。

次に學生時代に登つた山々を忘れたくないのは至極同感であるが、それらの山々の紀行を何にもさういそいで一纏めにする必要はないのではあるまいか。自分の書いたものが或る分量に達したからといつて必ずしもそれを單行本にする必要はない。

況んや學生時代の登山は、いはゞ準備の時代であるに於てをや山登りといふものは僅か六七年の學生時代で一段落を告げるべきものでない。學窓を出て一二年にして、過去の自分を清算するのは稍尙早の嫌ひがありはしまいか。十年、二十年と山に登つてから、書いたものを一纏めにしても敢て遅くはないと思ふ。

本そのものゝ批評からやゝ脱線した傾がないでもないが、著者とは面識ある間でもあるし、また田中君の序にあるやうに著者は一山を知つてゐ事に於ては量からも質からも現代日本の登

山界で中堅の第一流と云ふ事が出来る一人であり、將來益々活躍される人であることを信じて疑はないが故に敢て苦言を呈したのである。(藤島敏男)

○山と雪の日記

板倉勝宣氏の遺稿(菊版一七二頁圖版六昭和五年東京
神田北甲賀町梓書房發行定價二圓)

板倉勝宣氏は、大正十二年一月十七日、立山の雪中登山で、不幸凍死せられた人である、當時同行の横有恒氏は、その顛末を、詳しく「山行」に載せられてゐる。「山行」の巻頭には、此の微いさき書を、板倉勝宣君の靈に捧ぐ」と、デケイトがしてある。

その板倉氏の遺稿が、今般楨氏の「追憶」と、松方三郎氏の「此本の由来について」の序詞を添えて、新らしく刊行せられた、尤も「由来」に依れば、板倉氏逝去後、「板倉勝宣遺稿」として、百五十部を限り、印刷に附して、三回忌前に、懇親の人々に配付したことがあるが、其後も希望者が多いところから、改めて出版することになったのださうだが、おかげで、私も始めて一本を手に出ることが出来た。

紺紙の綴卷のやうな、黒で潰した假表紙に、銀色のエーデルワイスが、一莖描かれてゐる、おもひなしか、常闇の冥路をさまよつて、血に叫ぶ蜀魂の姿のやうだ、一莖のエーデルワイスで、憶ひ出したが、亡友辻村伊助(生前呼び做らしたやうに、

氏を省く)の「スウイス日記」の表紙の脊中にも、同じく一莖のエーデルワイスが、たどたどしいペン畫で、描いてある、辻村の本は、生前に出版されたものだから、表紙も白く、頂には金を施してある、所謂天金仕立てであるが、板倉氏のは遺稿であるだけに(といふ意味か、どうかは、知らないが)紙も黒く、天も紺色に暗くなつてゐる、辻村は歐洲アルプスで、雪崩のために、殆ど生命を奪はれさうになり、歸朝後、大震災で、小田原の故山に、一家埋没した、板倉氏は立山の雪中で、岳友の手に抱かれて、最期を遂げられた、登山家として兩氏共、數寄の運命を荷つた人々であることに於て、一である、淋びしい一莖の深山薄雪草は、二人の靈魂の淨化を、象徴してゐる。

板倉氏の人と爲りは、楨氏の追憶で、木彫の座像に接する思ひがされる、松方氏のユーモラスな書き方も淡彩の人物スケッチを見るやうな趣が、備はつてゐる、それから本文に入ると、富士山湖の紀行「旅の一日」から始まる、編輯が年代順になつてゐるから、この一文が、山の文章としての、處女作でないまでも、最も早期の作の一つであるらしい、字句の末を云爲されるのは、素より作者の本意ではなからうが、旅籠屋での一節、
いづくともなく響いて來る太鼓の音は、雨をそよるやうに、
いつにない淋しい感じを與へた、障子を通して襲ふ濕つた空氣は、春とはいひながら、冷やりと感じた、日が落ちて行くに随つて、雨聲は益々加はるばかり、まゝよ、どうでもなれ

と、七時には早くも床についてゐた。

の如き、寥々たる短句の中に、時間の推移、天候の變化、障子一枚を隔て、内外の情景と、氣分の焦燥までが、巧みに描き分けられてゐる、スピード時代の文章ではないかも知れぬが、上田秋成が、現代語で書いたら、このやうなものが、出来やうかと思ふ、たゞし「板倉が生きてゐたならば、こんな本は出なかつたに相違ない……自分の書いた原稿さへも、碌に讀みかへしもせずに、渡してゐたのぢやあるまいかと思はれる、板倉が、自分の書いたものを、一冊の本に纏めて出すなどといふことは、殆んど思ひもよらないことである（「由來」）くらゐな人だから、文章の推敲などは、初めから念頭になかつたのかも知れないが、一卷を通じて、平談雑話式に、なだらかに書き流された文章には、山男らしい率直さがある、併し噛みしめると、決して無造作に、書きツ放しに、されたものでないことが解る。

「夏休みの日記より」には、上高地で嘉門次に遇つた話を書いてある、私が思つたよりも、板倉氏は早い時代の登山家であつた、私は、自分流の區切り方で、嘉門次時代の登山家を、早期時代の人々と呼びたい、上高地の墮落と類敗は、嘉門次逝去後に始まる、板倉氏が嘉門次黨であつたことを、私は上高地の過去と、板倉氏のスタートを顧みて、祝福する、この本には、五色温泉や、北海道山岳の記述もあるが、主體を構成してゐるのは、槍穂高、上河内、霞澤岳などの圏内に於てゐる。「奥穂高

と乗鞍」山と雪の日記」の多くの部分、「春の上河内」「春の槍から歸つて」などは、主としてこの土地に就いて書かれてゐるだけに、出色の文字と見受けられる、登山家又はスキー家としての間歴から言つても、「五色温泉スキー日記」は、スキーの始まり頃の、時代色も出てゐるし、「槍の北鎌尾根」は、恐らく作者が、この方面に、始めて足跡を印した人ではないかと思はれるに就けても、貴重なる山岳文獻であると推奨したい。

登山家としての思想方面では「登山法に就いての希望」で、言はれてゐることは、舊時代の人々にも、新時代の人々にも、傾づかれると思ふ、一方を揚げて他の一方を貶すやうな、偏倚なところがなく、ほんとうに、山といふものを味つた人の、言ふことである、作者は年が若くても、謂はゞ山の苦勞人の言葉として、傾聴される。

望蜀の言が許されるならば「遺稿」刊行當時の、書翰や論文をも、削らずに残されて欲しかつたこと、及び楨氏の「山行」にある「板倉勝宮君の死」なる一文を、卷末に収録して欲しかつたと（殊に「山行」が絶版の今日に於て）等である、それから巻頭にムイネシリ岳頂上に於ける、著者の登山装の寫眞はあるが、寫眞の出来はよくとも、一個の黒影と姿態にしか、見られないものであるから、著者の肖像を、別に挿まれたら、一般の讀者は更に親しみを感ずるであらう。（小島烏水）

○大島亮吉氏の

「山、研究と隨想」(昭和五年東京神田岩波書店發行四九二頁定價三圓)

大島亮吉氏の「山」は、實は本年出たばかりであるが、殆ど古典的の價値を、本邦山岳文學の間に、確立したと言つてよく、

楳氏の「山行」以來、稀に見る好著作だと言つていゝ、その一句一章は、若い人たちの間には、食ほるが如くに、玩味されてゐるらしい、著者は身を以て山に殉じた人で、その態度に、學者の良心と、殉教者の眞劍味を帶してゐる上に、可なりに豊富な涉獵を事として、視野を廓大にしてゐる點などが、本書を多角的に、且つ讀みごたへのあるものにしてゐる。

「山」に收められた文章は、之を四大別にすることが出来る(一)雪崩の學術的考察(二)北海道の山川に關するもの(三)穂高附近の述作(四)感想隨筆等である。

便宜上(一)から始めると、北海道の原始的風光は、恐らく著者にあつては、我より古を成す底の意氣込みを以て、登山もせられ書かれたかも知れない、著者に取つて、日本アルプスは聊か時代が遅れたために、初登山、草分け登山の餘地が無く、脾肉の嘆を洩らしてゐる人々に同感されると共に、一たび北海道に入れば、原始の曠野、大森林、山岳は、大手を開けて、我が多感多恨の著者を待つてゐたのである、かのツルゲネフが、露西亞森林の入神の敘述、故國木田獨歩が、空知川の森林に對す

る嘆息などは、孰れも原始風光に接觸した刹那に、拍たれた靈魂の燦火であつた、大島氏にあつて、北海道の自然は、必ずしも詩人口調の咏嘆を呼び出さなかつたが、やはり原始創造の示現を凝視して、後に生れたところの再現を、齎らし來つたのであつた。

(三)穂高附近の述作の中で「潤澤の岩小屋のある夜の三人」は、戰慄なしには、讀まれなかつた、山ともだちは山で果てるといふ運命を、岩小屋の中で、焚火を圍んで四人で論じ合つてゐる。一人は曰く「おい、一體山で死ぬつていふことを、君達はどうおもつてるい」一人がすぐ答へた「それは山へなんか、登らうて奴の、當然出つくはす運命さ」「ちやあ、その逢ふやうな奴つていふのは、どんな奴さ」「まあ言つてみりや、結局、ワNDERミみたいな奴さ」そしてマンメリーを引き合ひに出して「實際、ふたり(マンメリーとワンデイと)も出つくはしちやつたね」と、噓んで吐き出すやうに言つてゐる、そのワンデイといふのは、板倉勝宣氏の綽名であることを、私は今讀んだばかりの「山と雪の日記」から、憶ひ出して、ぞつとした、さういふ事を言ひ合つた夫子自身も、同一運命の、お仲間入りをしてしまつたのだ、さうだ、實際三人とも出つくわしちやつたね」と言ひ替へなけりや、ならなくなつた、怖ろしい偶然と言はうか、呪はれたる必然と言はうか、涙を溜めた眼で、ゲラ／＼笑ふ會話である、尤もこの一文は、事實そのまゝを、書いたのではな

いと、作者は斷はつてゐるが「事實そのまゝだよ」と岩影から運命の死神が、差し出て言ひ切つてしまつたのを、何とせう、「惡語識を成す」といふ實例を、面前に見せつけられるとは、氣味のわるい鬼語である。

(四)の感想隨筆の中で「山への想片」は、小題大做の作品である、表から見れば登山思想變遷史であつて、裏から見れば、一登山家としての懺悔録である(懺悔といふ語を、惡るい意味に取つて貰ひたくない)眞率にして勇氣ある作者にして、始めて立言し得る底の文字で、本巻を重からしめるもの一つである。

最後に(一)に戻つて、雪崩に關する考察は、殆ど二百頁に垂んとして、これだけでも、優に一書冊を成すに足る價値がある。

多少繙譯の交つたのは致し方ないとして、本邦の山岳文學は始めてチンダルの「アルプスの氷河」に匹敵するくらゐの雪の、科學的考察を得たと言へよう、殊に雪に關する本邦各地方の土民語を、廣搜博羅して、整然たる分類を作り、雪崩地方語彙を大成した勞力を、多としたい。

「本邦に於ける雪崩の方言」中、私が双六谷地方「雪氷に關する語」中の「アワ」に就いて、簡単に「雪のなだれ」と説明したことに就いて、著者は新たな見解を下し、懇切なる教を垂れてゐる(尤も私に向つて、言はれたのではないが)私はそれに依つて、啓發されたことの、少なくとも感謝する、素より私の拙文は、奇異に感じられた民語の二三を、掲出したに止まつて

雪氷の地方語義だけに、殊に多きを、置いて註解したわけではなかつた、め、至つて簡單無造作の、説明に止まつたから、今日となつて見れば、自身も不満を感じてゐるが、併しそれかと言つて、大島氏が定義を下されたやうに、「アワ」とは「表層濕潤新雪雪崩」であるといふことに同意を表しやうとも思はない。

故人は再び辯論するを得ざるが故に、私は言を慎しななければならぬが、問題は方言の學術化といふ汎義のものに屬するか、本文の批評から切り離して、獨語として、述べて置きたい。

方言だの土民語などは、類似的諸現象を概括的に言ひ做らしたものが多く、それを精細に分解類聚することも、必要であるが、方言が主で、分解が従である限り、方言の含む意味の、自由性は、先づ認めなければならない。本問題のアワの起つた時にしても、土民は一々、立ち會つてそれを觀察してみたわけでもなからうから、如何にしてそれが表層であり、濕潤であり新雪であることを知つてゐるやう、又それを知つて然る後に、アワなる名稱を下したと言へやう、現に大島氏も引用されてゐる通り、上賣地方(飛驒)では、乾燥新雪に對しても、アワなる方言を使つてゐるといふし、山岳地方の土民としても、その雪が表層のみなのか、濕潤か乾燥かといふやうなことで、辨別して、然る後に、アワなる語を使うとか使はぬとか、決定するのでは無い筈だ。假に大島氏定義の通りとして、寸分動きの取れぬものとすれば、表層乾燥新雪接觸の雪崩が起つたときに、

それを何と呼ぶであらうか、略ぼ同一又は類似状態の雪崩現象であれば、土民はやはり「アワ」と呼ぶであらうところの可能性の方が、之を「アワ」と呼ばざる可能性よりも、遙かに多いであらうと思ふ、さればアワに限らず民語の成立や分布に對してあまりに精確なる學術的分析を試み、その新定義を標準として自然を律しやうとする場合あらば、さすがに大島氏はその弊に陥つてゐないが、その源に溯つて、再考を要する。一例を舉げると、登山家が今日汎稱する万年雪なる語は、素と富士山の雪から起つたのであるが、その万年雪と呼べるゝ富士の雪は、存外に、高度は下の方の雪で、歐洲アルプスの所謂ネヴェヤ、フイルン狀の雪ではないが、故山崎直方博士が、ネヴェエ狀の雪に對して、万年雪なる古語を採用して以來、今日では、万年雪則ち「ネヴェエ」と考へらるゝに至つたが、先達などの稱呼するところの富士の万年雪は、全然別なものである。私は方言や土民語を採つて、學術的用語にすることに、あなたがち反對はしないがそれがために、土民語が先天に有する本來の自由性を、拘束しやうとは思はない、従つて方言や土民語に對して、あまりに精確なる、従つて又あまりに窮屈なる定義や註解を下してしまふことは、大體の參考としてならば格別、本義的、不動的のものとしてなら、避けたく思ふのである。(小島烏水)

Alpine Journal. (Vol. XLI No. 239. November. 1923)——
本號に掲載せられた題目を一覽すると、アルプス以外にパミール、ニュージーランド、スエーデン、カナダ、アメリカ、とその範圍が殆ど地球の全表面を包含して居る事に氣付かないわけには行かない。そしてまた其の時間的分類から言つても Miss Gertrude Bell の未發表の書簡「リスカム及びモンテローザ」の様には二十五年も前のものがあるかと思ふと、Hans Lauener のミツテルレギ登攀に關する記事の如き、或ひは L. Porter のニュージーランドアルプスに關する記事の如き、最近のものもあり、其の集録せる記事の廣汎、且つ權威あるは、流石に其の名を恥かしめぬ。

本號に於ける腰巻は蓋し巻頭に掲げられた、Täckner-Rickmers 氏の「Black Forest Mountain, Pamirs」ひなければならぬ。其の標題たる Black Forest Mountain とは著者が行を共にした Dr. Finsterwalder の名に基づき、五五〇〇米の高峯に對し Gara Tugai Tau (Black Jungle Peak) と命名したるに因る。本稿は一九二八年に於ける露獨聯合のアライ・パミール探險に關する記事にして、中央アジアの最高峯、最古の峠及最大の氷河を圍りての隨想が其の核心を爲す。(其の詳細なる記録的事項に就いては「Geographical Journal, September 1923」を参照するとすべし) Mr. Kaufmann の登攀に就いては Dr. Allwein の書簡を引用して居る。最後に Gara Tugai Tau の登攀に關して、此の登攀が著者の年齢に於て登り得る最大限度たる事をエヴェレスト探險に於ける Hingst の原則に基づい

て説明して居る。

次に W. N. Ling 氏の Technicalities と題する一文は一
個人を中心とし、其の人の嗜好に従つての技術其他に關する見
解にして、角張つた技術書とは異なつた趣きがあり、一讀の價
値が充分にあらう。(渡邊漸)

Alpine Journal May 1930 Vol. XVII. No. 240.

種々の個人的回想が此の雜誌を手にとつたときに呼び返され
た様に思つた。一九二四年の雨の多い夏にエンゲルヘルナーの
オクセンタール・ヒュツテに泊られた別宮氏は、背の高いドイ
ツ語の流暢なイギリス人を記憶して居られる筈だ。そのイギリ
スのドクターが第一の登場者である。永い間の懸案であつたウ
エツターホルンのシャイデツクよりの頂上のグロースシャイデ
ツクからの初登攀の記事がそのフィンジー氏自らの手によつて
書かれてゐるのである。一つの試みが達成せられるのにどれ程
の多くの試みとその計畫への精進が必要であるかを此の初登
攀程よく裏書するものはない。さうして此の點に就て、一番此
の北壁に深く心を打ちこんでゐたフィンジー氏の手によつて此
の成功が得られたことを氏を知る人は皆んな心から嬉んだこと
であらう。

秩父の宮があゝの邊りを登つて居られた一九二六年の夏私達は
フィンジー氏がローゼンラウイからシャイデツクに来てゐたこ
とを知つてゐたし、其翌年浦松とウエツターホルンの西山稜を

ねらつてゐた九月にも、私達はフンジー氏の姿をグリンデルワ
ルドの村に見た。其時氏はサンクト・ニコラウスのフランツ・ピ
ーネルとローマン・ラツケルの二人の大男をつれて居た。今でも
三人の大男が雨の中にあの村の道を下りて行く姿を見る様だ。

翌年浦松が西山稜を登つた時フィンジー氏はそれが自分達の計
畫のものであるかとビツクリしたといふ事は浦松にも直接云つ
た相であるが、此の記録の中にも書いてゐる。そして一九二九
年になつて、即ち初めてその壁にぶつかつて以來八年目に遂に
事が成就したのである。此の時はピーネルがリーダーとなり、
ワリス、シヤモニーと到る處を荒し廻つてゐるあの岩登りの勇
クヌーベル(クヌーベルは宮様のパーティーのフェニラーでも
あつたし、又彼の名はヤングの多くの有名な登攀によつてもよ
く知られてゐる。)がそれに力を併せて、クレツテルシュューで眞
向に上つてしまつたのである。此ウエツターホルンからシャイ
デツクにおける壁は餘りにも顯著であり、又エハガキなどにも
いつも出て来る所であるから、大概の人々は眼馴れた岩壁であ
らうが、それが今日まで残されてゐたことは此の岩壁が如何に
人をよせつけない相貌をもつてゐるかを物語ると思ふ。そして
此の三人のパーティーの腕の程度を物語るものと思ふ。そして
何人もフィンジー氏の不撓の執念に對して敬意をはらひ、此の
計畫のために氏のなした岩登りの上の精進に對して尊敬の意を
表せざるを得ないと思ふ。

次はフランシエーのアレツチホルンの登攀の記録である。續く同じ筆者のマツターホルンのフルゲン・グラートの下降の物語りは如何に綱があるとはいひ乍ら、讀む者を少からず氣をもさせる。一行が絶壁をおりきつてそれから頂上の下のクローアールを横切つてスウィス側の肩についた所まで來ると、思はず溜息をつかされる。

次の登場人物は先きの植民大臣エイメリーである。一九二六年に宮様がツエルマツトに居られた頃、氏は帝國會議を先に控へて、悠々とホテル・モンテ・ローザの前のペンキぬりの藤椅子によりかゝり乍らパイプをくわへて、しきりと何やかやと宮様に御講義をしたものである。その夏新雪の後のマツターホルンにツムツト側から上つてとうとう山の上で日が暮れてしまつた話は會つて此の雜誌に出たことがある。氏は此處で幾山か歩いた後國に歸つて英帝國の大會議の議長を相つとめ、それから領土巡察と出かけた。勿論ビツケルト山靴とはかゝへて行つたに相違ない。ニュージランドなどでは仕事の傍ら——か仕事そつちのけに——山登りをしたといふことである。そして内閣が代つて大臣をよすと早速又カナダに出直してゐる。勿論氏にとつて此の地方の山登りは今度が初めてではなく、既に一九〇九年のマウント・ロブソンの探検隊にも加つてゐるのであるが此の度は自分の名前をつけられて呼ばれた山そのマウント・エイメリーの初登攀が第一の目的であつたのである。カナダと大

陸との山即ちロツキーとアルプスとの國政の相違、從つてその心を惹くものの特色の比較は特に我々を感ぜしめる——といふと如何にもカナダに行つた様であるが、カナダの山が全くその「原始」の故に殊更に人の心を惹くのだといふことは私などにも想像せられるし、又實際行つた人々はさういつてゐる。兎に角イギリスの大臣様がどんな人間であるかといふ事、その人達がどんな事に心を打ちこんでゐるかといふ事は、此の一文と、卷末、新刊紹介欄にある、現勞働黨の農相バツクストン氏の著書紹介をよめばよくわかると思ふ。

大臣の次は若い醫者のラウバー氏である。ピーチホルンは氏にとつての年來の御秘藏である。一九二七年七月横氏と私とはバルチーデル・クラウゼの小屋に氏と泊り合せて暮れて行く夏の夕方に、眞赤な其ピーチホルンを一緒に眺めた事があつた。この時ラウバー氏は東山稜のトラヴァースを企て氷が多くて失敗したのであつたが、此の山稜は多分氏が初めて縦走したものである。此の記事はピーチホルンの南面の斜面登攀の記事であるが、勿論ピーチホルンの南側を遙か遠くからしか見たことのない私には、此の千米に垂々とする儘に今日まで四回しか成功したことのない高壁の登攀の記録が、ただ只管に多くの興味と感嘆とを以てよまれた。ラウバー氏は一九二五年に死んだクシヤルデーと此の面の登攀をしたのである。

雜誌はいつもこの他に多くの興味の多い記事を含んで

ゐる。

カナダのアルバータに行つた人々にとつては、若いハンス・コーラーガフィンシテラールホルンの東壁に登つたといふ報告は喜びを以て迎へられるであらう。之はガートルード・ベルがフリーレ兄弟とその勇敢な登攀に敗れ後アマツテル（何れも日本の人々にとつて初めての名前ではない筈だ）がハスラー氏のフューラーを勤めて初めて登り了せたルートよりやゝ南よりのストラウデルヨツホからいきなり登つたのである。

アルバイン・ノートの中には何時もの如くクラブの空氣がよく反映してゐる。例のバリユーのフィルムを頭ごなしにした所などもたゞの面白い皮肉などと軽く讀まるべきものではないと思はれる。富士山の標高に就いての最近のJ・A・Cの月誌上の記事に對しての日本山岳會唯一の名譽會員、老ウエストン師の訂正なども、河時も乍らの氏の日本の山々に對する愛着の現れとして、我々の心を打つものがある。（松方三郎）

○上高地

熊澤正夫著（昭和五年六月、東京刀江書院、四六版二九〇頁定價二圓二十錢）

上高地に就いて記された著書も今までに二三あつたが、その何れも登山者の立場より見ても、或ひは亦、自然科学者の眼よりしても遙かに吾人の期待から掛け離れて居たものであつた。餘りにも有名になり過ぎた上高地に就いて斯くまでも吾々の知

識がプランクに取殘されて、然かも誰も敢へて其れを不思議としなかつた事こそ却つて不思議な事實であつた。「あゝ上高地か」山へ登る程の者は百人が百人さう氣輕るに言ふ。然かし事實、吾々は上高地に就いて何も知つて居ないのだ。多くの登山者は徳本峠より河童橋へ、河童橋から大正池へと慌しく過ぎ去り、過ぎ行く。そして彼等は一步あの林道から離れて、落葉松の林の中にと靜かに歩み入つたならば、或ひは亦、梓川の淺瀬を越えて穂高の山肌近く佇んだなら、何が其處に見出されるか彼等は知りもしないし、亦知らうともしない。さう言ふ人々を吾々は嘲り笑う事が出来ようか？ その人達が林道以外の何物をも知らない様に吾々は上高地の表面だけしか知つて居ないのだ。自然科学者として、又、登山者としての資格を兼ね備へたる著者の眞面目な此の研究よりして教へられる事實は、吾々に取つてその一々が新しい事實である。同時に自然科学者が陥り勝ちの單なる自然科学の記載にのみ止まらず、一般登山者に對する上高地をセンターとする四季の登攀に就ても十有餘年、毎年缺さず上高地を訪れた著者の深い經驗を基として書かれたものであるだけ、吾々は單なるガイドブックに對すると異なつた氣持で親切な著者の心盡しに感謝しつゝ讀む事が出来た。卷頭に挿入せられた三十葉の寫眞は著者及び、其の友人の撮影する處で、そのデータが詳細に卷末に記され、更に附録とせられた地圖にその撮影位置の指示せられたのは新しい試みである。最

後に此れは單なる希望に過ぎないが、登攀に關して、参照せられたる文獻に關して、もう少し詳細な記述を加へられ、亦、登攀記録に對するその参照の範圍がもつと廣汎であつて欲しい。

(渡邊漸)

○雪・岩・アルプス

會員 藤木九三氏著

「屋上登攀者」の著者は今又此處に菊版四百頁に餘る新著「雪・岩・アルプス」を公にせられた。私は著者の山に於ける絶えざる努力を感ずると共に、此の筆の精進にも驚くものである。

此の書は研究と紀行とに別れてゐる。私は此の紀行の方を面白く讀んだ。外國語の誤りや、無理と思はるゝ言葉遣ひ等の缺點を除けば、事實紀行の部分の方が研究の部分より遙かに優れてゐる。

著者は序文に於て山の紀行の價値に就て意見を述べられてゐるが、私も此の意見には賛成である。立派な登攀に關する純眞な紀行の發表こそ、登山の進歩に最も役立つものだとは私は信じてゐる。登山の技術に關する本なら代表的なものが一つあればそれで十分である。又登山の態度といふ様な事を理論的研究といふならば、それは此の紀行の中に十分讀みとれもすれば、又此處に最もよく表明されてゐると思ふ。それを批判するのは勿論各自の隨意である、何か理論めいた事を一通り述べなければ山岳人でない様に思ふ人もある様だから、此の序に一言述べさして戴いたわけであるが、實行に於て徹底され得ない生半端な

理論が一番有害だと私は思つてゐる。殊に日本の様に氷とか岩とかに關する經驗を得る範圍が、極く限られてゐる所では、理論がやゝもすると體驗を經ず從つて獨斷論に陥り易い弊害がある。その結果は所謂室内登山の惡弊のみ残る事となりはしないか。私はそれを恐れてゐるのである。暢々と發達さすべき登山が、之等の偏狹な見解に禍せられて窮屈に縮こまつてしまふことを恐れるのである。

漸く眞鍮に登山といふ事を考へ様とし始めると同時に、他方にはかうした室内登山に陥り易い傾向が現はれかけてゐる時であるから、之等の點に就て議論する時は相當注意しなければいけないと思ふ。此點から考へる時藤木氏の著書の研究の部分は一般の讀者に對しその點の注意が稍々欠けてゐる憾がある。それは説明の足りない爲藤木氏の立場が判然しない所が多いからである。私は此の論文を讀んで深く考慮する所なく所謂室内登山の弊に陥る人がありはしないかと恐れるのである。歐洲のアルプスに行はるゝ理論を日本に移し直す時、私は日本アルプスが既にそれ等の理論の適用に一定の限度を與へてゐる事を、此の著者に明示して欲しかつたと望むのである。

個々の點に就て氣付いた事を挙げれば、六九頁のスキーが登山に使用せらるゝ様になつた爲にクランボンが博物館へ飾られる運命になつたといふのは、著者の何かの感違ひであらうと思ふ。兩者の用途を知つてゐる人ならば直ぐ氣付く誤謬であるか

ら。又六一頁の靴底と一枚岩との關係も、バランスクライミングを主張する著者の立場からすれば、フリクションホルドとしてではなくバランスの支持點として考ふべきだと思ふ。

アルプスの近代色の例としてノルマンネルダの言が引用されてゐるが、ノルマンネルダは十九世紀に屬する人であり、二十世紀も三十年経つた今、彼の言を何等の説明なしに近代色の例として用ひる事は穩當でないと思ふ。

それからスキー登山といふ言葉が使用されてゐるが、之は可笑しい言葉遣ひと思ふ。藤木氏は徒歩登山と云ふ言葉も用ひられてゐるが、之もスキー登山といふ無理な言葉を用ひられた結果だと思はれる。今日スキー登山と云はれてゐる中にはこの意味が入つてゐると思ふ。之はつきり別けて置かないと議論が混亂する事とならう。その意味からもスキー登山といふ言葉はいけないと思ふ。即ち冬季登山、積雪期登山とアルバインスキーイングと此二つに分つべきだと思ふ。前者に於てはスキーを穿かふが穿くまいが問題は別になるが、後者に於てはスキーそのものが問題になるのである、藤木氏がスキー登山の章に於て類と問題にせられたのは、此のアルバインスキーイングの事だと思ふ。それがスキー登山といふ兩者を混交した言葉を使用した爲め言葉に禍せられてアルバインスキーイングを論じながら前者即ち積雪期登山までが混入して來て議論が徹底しなくなつてしまつたのだと考へられる。之等の事から考へてもスキー登山

等といふ曖昧な言葉は、使用しない方がいゝと思ふ。日本も之から積雪期の登山が盛になると思ふが、それ等を全部スキー登山と呼ぶと、恐らくは飛んでもない議論が今に飛び出して來さうに思はれるので餘計な事だが、序に一言述べさせて戴いた次第である。

重版の折には是非地名の讀み方の不統一や誤り等を直して戴く様お願ひしたい。動かふとする日本の現在の登山界にあつて著者も大部苦しんでゐられる様に感じる。私は尙更に著者の自重を祈つて筆を擱く。(浦松佐美太郎)

○陸地測量部新刊地圖

陸地測量部にて四月中に發行新刊した地圖目錄は左の通りである。

◎新版之部

尺 度 及 總 圖 名	圖 名
五萬分一地形圖 大分號	古 江
二萬五千分一地形圖 佐倉近傍	龍 ヶ 崎
同 山口近傍	阿 知 須
同 岩國柳井近傍	津 田
同 岩國柳井近傍	大 竹
同 岩國柳井近傍	由 宇
同 同	大 島
同 同	柳 井

◎修正改版之部

尺度及總圖名	圖名
一萬分一地形圖 神戸近傍	御影
二萬分一地形圖 濱田近傍	都野津
同 同	濱田
二萬五千分一地形圖 横濱近傍	荏田
同 同	八日市
同 同	月寒
二萬五千分一地形圖 徳島近傍	板東
同 同	宇部
同 同	尾道
五萬分一地形圖 山口號	仙崎
同 同	廿木
同 同	福岡
五萬分一地形圖 中津號	鶴川
同 同	鬼鹿
同 同	美幌
同 同	斜里號
同 同	同
同 同	澁別號
同 同	帯廣號
同 同	枝幸號
同 同	釧路號

五萬分一地形圖 釧路號

同 天鹽號 雄信内

同 室蘭號 西紋鱈

同 石巻號 松島

同 宮津號 宮津町

同 高知號 須崎

同 山口號 徳佐中

二十萬分帝國圖 名古屋

五萬分一朝鮮地形圖 尙洲號 尙洲

○會員登山報

北俣岳 寺地山(大見ノ辻)及び笠ヶ岳

昭和五年四月上野夜行、十日神通川支流跡津川合流點土より跡津本流に沿ひ、山之村下之本泊、十一日雨滞在、十二日跡津川を溯り、その上流センノ澤より、ヒラソ谷(北俣川上流)に乗越し、平尾根を上りゴランジ平を経て大見ノ辻(寺地山)に登り北俣岳(上ノ岳)に向つたが時間が遅く雪が深い爲、眞川源流に下り、眞川の小屋に一泊、十三日美晴眞川の小屋より雪上をのみ國境山稜に上り、北俣岳西面の大スロープを攀ちて上の岳の小屋に着く、小屋の内部積雪四五尺、シャベルで中を四角にかき取り陣取り、春負ひ上げた炭火で燄をとる、十四日同じく美晴、寺地山に戻り、更に飛越國境を有峰の東谷乗越に下り、反

對側の打保谷を下之本に歸着、北俣山、寺地山の旅を了る。

四月十五日大雨、下之本より、岩井谷、森茂及び牧場より山吹峠を経て山吹の部落へ下り、双六谷の沿道を見座に出て一泊十六日美晴を見座より高原川を細越まで上り族に下佐谷の沿道を下佐谷の部落に出て、上流の二俣(本流と弓折谷との合流點)

の營林署の宿舎に泊り、十七日同じく麗日の下を弓折谷とヒコハチ谷との間尾根を上りつめてヒコハチの頭に出て、それより雪稜を上り、金木戸川支流コグラ谷に下り、コグラの岩小屋泊翌十八日未明發烈風の中を大笠の頂上に立ち、クリヤ谷を下つて蒲田温泉に泊り、十九日未明蒲田温泉發、安房峠を踰え奈川渡に出て自動車にて松本着、二十日朝歸京。(冠松次郎)

次高山北尾根及び其の東面

會員沼井鐵太郎、ウオルトン兩氏及びブロス氏は昭和五年五月初旬より中旬に掛け、左記の登攀旅行を試みられた。

五月九日、臺北出發—羅東—土場泊。

十日、土場—ビヤナン駐在所(海拔約四〇〇〇尺)泊。

十一日、ビヤナン—ビヤナン鞍部駐在所(六三五〇尺)平岩山駐在所手前より直接シカヤウ駐在所(五二〇〇尺)に至り泊。

十四日、警官二名、警丁四名、蕃人十九名と共に出發—シカヤウ大山(蕃稱バポー・ルコワツサウ。シルビヤ山圖幅、次高山南東尾根中最も端にある一萬一千百尺の圈の峯)次高山避難所小屋(一萬一千尺、昨年八月竣工、間口九間奥行四間)泊。

十五日、小屋—次高山(蕃稱バポー・ハガイ)主峯(南角)—北角(此れより未踏地)—岩尾根、隆起を幾度となく越す—一萬二千三百尺の地點(蕃地形圖が怪しく正確には分らないがシルビヤ山圖幅で次高山(シルビヤ山)の北々東尾根三つ目の隆起を過ぎし邊り)にて露營。

十六日、露營地—シルビヤ山圖幅の一、二、三〇尺の峯(ビヤナス社、蕃稱バポー・ハバノラウ?) (一九二七年大淵尖山より望みて以來、問題となつて居た山)—東側の谷に下る—キヤワシ溪流に野營。

一、二、三〇尺の峯は正面から見ると登れさうもなかつたが、西北側より比較的樂に登れた。この峯に攀ちて前途を窺ふと尾根は此處にてぐつと降り、次に困難らしい小岩峯があり、その東に豫て一番問題にして居たヤボラン(ガオガン蕃稱呼ビヤナン蕃人はバポーバアコンとか呼ぶ)の凄絶極まる一大岩峯が聳立し、その尾根の北側は荒涼とした岩壁とギヤリ—とより成つて居て、最も勇敢な蕃人もこれを通過する事は不可能と言ふので、蕃人の事情も考慮して之を割愛した。

十七日、露營地—ビヤナン鞍部—ビヤナン蕃人の逡巡、食糧の不足等の爲、桃山に登りビヤナン社に出る豫定を變更してビヤナンに直接歸る。

十八日、沼井氏はシキタン社に至り翌十九日臺北へ、ウオルトン、ガロス兩氏は新來の井上一男氏と共に南湖大山に向ふ。

會 報

○第四十六回小集會記事

昭和五年五月八日午後六時三十分、赤坂溜池三會堂に於て、岩永幹事司會の下に、本會第四十六回小集會を開催し、左記の講演があつた。

一、兩神山

會員 神谷 恭氏

一、十勝温泉附近

幹事 岩永 信雄氏

講演に先立ちて司會者から、會員は圖書室を利用されたきことを述べ、次で今回の小集會及び雜誌發行の少しく遅延したることに就て辨明する所があつた。

神谷氏は、前回試みて果さなかつた尾ノ内澤から直接龍頭神社に至る登攀を本年正月決行、成功された。

此登路は急峻を以て知られ、夏は左程のことなしとするも、冬は岩盤に氷が張り雪が積るので、甚しく困難となるのである。講演の要点は、先づ兩神山の山名の由來から説き起し、交通、宿泊地、登路等に就て述べら

れ、續て本年正月の登攀に及ぼされた。正月元日河原澤に着いて龍頭神社の里宮に參詣し、翌朝友人と八夫一名を伴ひて、冬は土地の人も登つたことがないといふので進まぬ人夫を勵まして、尾ノ内澤を登り、油瀧地獄谷等を経て、キンサ、ゲの峻急な瘠尾根では、纔に二町許の距離に二時間半を費しなどして漸く龍頭神社の奥ノ院の小祠に達し、神酒を献じて後、本山の頂上を極め、歸途は南側の金山澤の源頭を横に搦みて八町峠に出で、十數時間の苦闘を續け夜半無事に歸宿されたのである。十數葉の美事な寫眞は大に聽者の感興を喚ぶものがあつた。孰れ本誌上に遠からず發表されることと思ふ。

次に岩永幹事の講演は、同氏が昨冬北海道に遊ばれた一節で、最初に北海道とても東京に居て考へて居る程時間的に隔つて居るものでないことから説明し、次に同氏が會員佐々保雄氏に勧められて急に同地へ行くことになり、札幌附近の雪に親しんでから、一月四日に十勝温泉に至り、素晴らしい粉雪や美しい黒木の森や其森の中の出湯、白銀に輝く高峯等、本道に於ける最も勝れた特徴を目にした後、一月九日に北大山岳部員

の通り紹介する。

と共に富良野岳に登攀し、途中は吹雪に悩まされたが頂上では晴れ渡つた眺望を恣にし、始めて見た北海道の山岳から受けた強い印象、下山の途中に於けるスキートの快哉味、夕陽に燃ゆる連峯や森林のアーベントグリユン、及びその翌日に於ける佐々君等との十勝岳登山等に説き及ぼし天候も思はしくなくなつたので温泉を下り、最後に鏡函附近とヘルベチャ小屋附近とでスキーを楽しまれた話で講演を終へられ、廿數葉の寫眞を示して説明された。

尙ほ當日の來會者は、小倉志郎、大村郡次郎、大橋進一、木村久太郎、木村庸夫、大熊保夫、山田多市、吉田竹志、飛川維之、飯塚篤之助、岡田喜一、鹿野忠雄、黒田孝雄、大賀智、本多友司、神谷恭、何英吉、野口末延、高橋良之助、宮本元夫、田邊義雄、高頭仁兵衛、冠松次郎、鳥山悌成、別宮貞俊、山村孝三、伊藤朝太郎、渡邊漸、岩永信雄の二十九氏にして、他に會員外來會者十七名であつた。

○新入會員紹介

本誌第二十五年第一號に發表せし以後の入會者を左

○會務報告

昭和五年四月十日午後五時三十分より本會圖書室に於て評議員會開催左記事項につき協議せり。

一、會員章副章制定に關する件

一、法人組織に關する件

一、入會申込者詮衡

出席幹事 別宮、藤島、松方、高頭、鳥山。

出席評議員 小島、田部、高野、三枝。

委任 岩永、冠、木暮三幹事、武田評議員。

昭和五年五月二十三日午後六時三十分より本會圖書室に於て幹事會開催左記事項につき協議せり。

一、幹事増員の件

一、入會申込者詮衡

一、圖書室に關する件

一、山岳バックナムバー賣出しの件

一、案内人の資格、心得等の標準に關する件

出席幹事 別宮、藤島、岩永、冠、木暮、松方、鳥山、渡邊。

昭和五年六月五日、別宮幹事の送別會を終りたる後銀座グリルに於て定例幹事會を開き左の件を協議す。

一、山案内及人夫に關する件

一、山岳二十五年三號を記念號とする件

出席幹事、別宮、藤島、岩永、冠、木暮、松方、島山、

渡邊、高頭。

小島、武田、三枝の三評議員も列席す。

定例幹事會は、毎月の第一木曜日を期して開くことに相談一決した結果、今回その第一回目を開いたのである。

○雨潤會寄附金に據る購入圖書

前號所載の雨潤會寄附金を以て左記の圖書及地圖を
購入し本會圖書室に備付けたり。

富士の研究 五冊 古今書院發行

一、富士の歴史 井野邊茂雄著

二、淺間神社の歴史 宮地直一著

三、富士の信仰 廣野三郎著

五、富士の地理と地質 井野邊茂雄著

六、富士の動物 石原初太郎著

伊能忠敬 岸田久吉著
帝國學士院 矢部吉禎著

千山萬岳 志村鳥嶺著

火山 小林房太郎著

地形學 辻村太郎著

日本地形誌 同氏著

大日本地誌大系 十二冊 蘆田伊人篇

氣象學講話 岡田武松著

雲 藤原咲平著

陸地測量部五萬分一圖 二八三枚

同 二十萬分一圖 八十九枚

○英國山岳會誌の寄贈

本年四月十日付を以て本會發起人小島久太氏より本會に左記の通り英國山岳會誌を寄贈せられた。

Alpine Journal.

從第一卷第一號(一八六三年三月號)

至第三十七卷第二三一號(一九二五年十一月號)

但し左記缺號四冊を除く。

第七〇號、第二二二號、第二二三號、第二二九號

各國山岳會中最も舊き歴史を有し全世界の登山界の最高權威と目せらるゝ英國山岳會の會誌は近代登山の

推移を知るに缺くべからざるものであるが、今日に於ては稀觀本となり容易に入手し難いものとなつてゐるこの貴重なる文獻を寄贈せられたる小島氏に深く感謝する次第である。

缺號並びに近刊を補充し、初卷以來今日まで不變の古雅なる装幀を英國より取寄せ完裝したる後本會圖書室に搬入することとなつてゐる。

○交換及寄贈圖書

關東震災地復舊測量記事

陸地測量部

奥丹後半島復舊三等三角測量記事

同

丹後地方震災地復舊一等水準測量記事

同

ツーリスト

第十八卷第四、五號

ジヤパン・ツーリスト・ビュロー

山水巡禮

第七年四、五月號

リュックサック俱樂部

RC年報

一九三〇年

同

北大山岳部々報

二號

北大文武會山岳部

きりのたび

第十一年三十三號

霧の旅會

三角點

第二輯

フアガス・クラブ

會報

○交換及寄贈圖書

會報

第五年四、五號 昭和マウント俱樂部

雪嶺

第二年四月號 東京スキー山岳會

臺灣山岳彙報

第二年四、五號 臺灣山岳會

管見錄

第六年二、三、四號 大阪管見社

山懷

第三號 東京醫專山岳部

旅

第十年四、五、六號 東京アルカウ會

山嶺

第九年三、四、五、六號 東京野歩路會

アルカウ趣味

第十七年五、六號 日本アルカウ會

旅

第七卷四、五、六號 日本旅行協會

會報

第七年四、五號 關東山岳會

雷鳥

II 岐阜高等農林學校山岳部

旅行

第五年四、五、六號 東京旅行クラブ

上高地、登山と研究

熊澤正夫著 著者

旅と傳説

(五月特大號) 三元社

山研究と隨想

大島亮吉著 岩波書店

山と雪の日記

板倉勝宣著 梓書房

雪・岩・アルプス

藤本九三著 梓書房

黒部

冠松次郎著 第一書房

Alpine Journal, Vol XLII No. 240, May 1930.
La Montagne, 3^e Série, No 7, 8.

Rivista del Club Alpino Italiano, Vol XLVIII

Rocky Mountain Letters, 1869.

Num 11—12,

Bulletin du Club Alpin Belge, Tome VII, No 18.

Natural History, March—April, 1930. Vol XXX

No. 2.

○既刊書及バツクナンバーの寄贈

Sierra Club Bulletin, Vol XIV, No. 5, Vol XV

No. 1.

左記の各書店及各山岳部よりは、既刊書及多數のバツクナンバーをそれぞれ寄贈された。こゝに記して謝意を表する。

The Geographical Journal, Vol LXXXV.

No. 3, 4, 5.

Revue Alpine, Vol. 30, No 4.

高山研究 河野齡藏 岩波書店
雷 鳥 矢澤米三郎 同

Appalachian Mountain Club Bulletin, Vol XXXIII.

No. 8, 9.

上 高地 同 同
日本北アルプス 鐵道省 博文館

The Prairie Club Bulletin, 1930, No. 194, 195, 196.

日本南アルプス 平賀文男 静光社

The Mountaineer, 1930, Vol XXII No. 4,

日本地理大系 改造社

5, 6.

近畿篇、關東篇、北海道樺太篇

Butleti Excursionista de Catalunya, 1930, Vol

一橋山岳部。慶應義塾體育會山岳部。早稲田大學山

XL No. 417, 418.

岳部。山とスキーの會

Trail and Timberline, No. 137, 138, 139.

Die Alpen les Alpes, VI—No. 3, 4, 5.

○「山日記」發刊に就て

The Scottish Mountaineering Club Journal, Vol.

此の雜誌が會員諸兄の手に配られる頃には問題の

19, No. 103.

『山日記』はもう市場に出ていることであらう。『山日

記』は下記の内容の説明に依て知らるゝ通り、登山者の携行すべき手帳として造られ、曆、日記の他に、必要な幾つかの事項を載録したものである。かゝる計畫がなされたのは決して今日が初めてではない。併し、いつも機が充分に熟せずして計畫が僅かの人々の間で希望の交換位の程度に止り、實現せらるゝに至らないで來た。今年に於ても年の始め頃からかゝる計畫があり、特に同じ問題が去る二月の大會の席上に於て會員西岡氏の提起せらるゝ所となつたりして遂に此の『日記』編纂を日本山岳會の名に於てするといふことが大會後幹事會に於て決定せられた。而して三月一日

には大體の方針を決定するため横、藤島、渡邊、浦松の四氏並に松方會合し、出版書肆との交渉も整つた。早速『日記』所載事項中の重點たるべき山小屋、山案内に關する問合せにとりかゝり、三月二十五日及び翌二十六日の兩日に互り、印刷せられたる問合せ回紙を各地に發送した。問合せに對する回答率は期待せるよりも遙に高く、編輯者等を鼓舞激勵するに充分なるものであつた。併し山と積み上げられた材料を見て、之を實際にこなす段になると、甚だ自信が少かつた。此の

點に於て、廣く山を歩き、かゝる材料の料理にもなれ而も幸にして、時間の餘裕のある會員角田氏の勞を煩はすことの出來たのは非常な幸福であつた。角田氏の仕事は四月九日以來後二週間續いて一段落をつけた。そして出來たところから印刷にとりかゝつた。その他の部分は關係者協議して分擔執筆した。

當會から發送した質問に對する回答率は殆んど九割に近かつたが、最初の試みであつたので狙ひ撃ちも餘りきかず、可なり重複もあつた。積雪季のため回答の著しく遅れたものもあり、丁度諸學校の休暇であつたのでその方の回答が來なかつたりした。特に後から／＼氣のつくまゝに問合せを追加發送した爲に此の二項に關する材料は殆んど印刷の出來上る二週間前までも續いて到着しつゝあつた。折角の回答を掲載し得ざるの嘆をしのおことが出來ないで、又よりよきものたらしめんと欲も手つだい、此の部分は殆んど校正毎に増補訂正が加へられ、角田氏は事實上最後まで仕事に携はられることになつた。遭難は山ばかりにあるのではないとは知り乍ら、全く恐縮の至りである。平地に在る間の方が危険であるといふ理論は夙に『スウイ

『山日記』の著者の證明せる所であるが、山をだしに使ふ詐欺師が横行したりする當世では、此の仕事のために白羽の矢をたてられるなどといふ方はまだいいのかも知れないと。——勝手な申分ではあるが——我慢して戴きたい。何れにしても『山日記』を手にされた方々は

その『山日記』の重心をなしてゐるその部分が如何に角田氏の勞に負ふ所大なるかを知られることと思ふ。

盲蛇に恐ぢず、山がかうも高いと知つて居たならば自分などは初から驚から眺めてゐたことであつたらうに、山にかゝつてから今更らの如く大仕事なのに驚いたといふなどは全く我乍ら間の抜けた話であつたのはあるが、兎に角以上の如き色々の方面からの心厚い援助を辱うせることによつて『山日記』は遂に世の中に出ることになつた。最初の試みであるが故に、色々の點に於て意にみたざる所あり、又多くの缺點をもつてゐることは編輯者自らも現に認めてゐるのであるが、かゝる物が少からぬ人々に有用なる可きは之を信じ、それに費されたる努力の決して徒勞ならざりしことを喜ばしく思ふものである。

『山日記』はその性質上年々更新せられ、書き改めら

れるであらう。それ故、如何に些細なる事柄であつても將來のために助言と叱正とを惜まれざらん事を切に希望してやまない。特に山小屋、山案内の二項に關しては、我々の全力を盡したにも拘らず、なほ且つ地方的に記述の厚薄の差あり、誤謬などもなきを保し得ない。又必要と知り乍らも、問合せ方法の發見せられざりするために、みす／＼記述を除外せざるを得ざるものもあつた。之は當然に將來に於て補訂せられなければならぬ。

出來上つたものについてはたゞに編纂そのものに就てのみならず、特に又印刷の技術的方面に於て不滿の點が多かつた。之は第一に限られた時間と能力の範圍内に盛ることの難しい程の内容を容れんとした編輯者の淺はかな貪慾に歸因する。將來此の點についても、印刷の技術的方面に於ても又印刷者の選擇に於ても今日の失敗を繰り返すことはないであらう。併し兎にも角にも今回の企劃が曲りなりにも實現せられ、少くとも『山日記』の主要なる内容その物に於ては重大なる過誤もなく編纂することを得、日本山岳會の一つの仕事として相應しいかゝる仕事の前途に口火を切ることの出

來たことは、一に全く編輯に當初から關係せられ又執筆の勞をとられた諸氏、少からぬ犠牲を喜んで提供して下さつた角田氏、『語彙』の部に於いて『高度表』に於てそれ／＼援助をして下さつた早大山岳部の中島博美氏、商大山岳部の諸氏、並にその他の多くの當會よりの問合せに對して回答をよせられし諸團體及び有志諸氏、その他會の内外の廣い範圍に互つての特志家の心厚き後援によるのであつて、此の點に於ては、終始編輯事務を擔當し來つた者の感謝おく能はざる所である。

『日記』は將來何人の手に編輯せらるるを問はず日本山岳會の名に於てなざるゝ限り、年々何等かの新しき生命を與へられ、何等かの意味に於てその年々の登山界の水準と廣さとを反映せしめることであらう。此の點に於いて『日記』の前途は誠に多望なりと謂はなければならぬ。而して此の前途の希望の下に將來の編輯者の上に幸運と成功とを祈り、『日記』その物の向上を祈つて止まない次第である。松方は計畫の當初より編輯事務を委任せられ、約二ヶ月に互つて此の仕事の中心に置かれた關係上當然、『日記』の編纂上の手落ち、

又印刷その他の首尾についての手落ちは、一切その責任を負ふものである。終りに殆んど商品としての成功不成功の見當のつかないかゝるものゝ出版を引受けられた梓書房の厚意を謝し、此の『日記』が廣く利用せられ、従つて、將來の充分なる改善のための道が拓けることを念ずる。

『山日記』内容目次

- 一、曆、自昭和五年六月至昭和六年五月
- 二、自由日記
- 三、登山の注意 I (藤島敏男)
- 四、登山の注意 II 【冬期】 (松方三郎)
- 五、服裝と用具 (浦松佐美太郎)
- 六、登山用品表 (同)
- 七、應急手當及登山衛生
- 八、遭難信號
- 九、本邦主要山岳高度表【二五〇〇米以上のもの】
- 十、山小屋【南北、中央アルプス、白山、八ヶ岳、富士山、秩父、上信越國境、東北、北海道、近畿九州を通じての山小屋に關する名稱・位置、所有者氏名、住所、管理人の有無、滞在期間、收容人

員數、宿泊料、冬期使用の適不適等】(角田吉夫)

十一、山案内【前同様の地域に於ける案内人組合所

屬又はそれ以外の獨立案内人の氏名、住所、年齢

經驗の多少】(角田吉夫)

十二、高山植物採取規定

十三、山岳語彙

十四、山岳文献抄

十五、氣象に關する表

十六、寒暖計、度量衡

十七、郵便、鐵道規定

定價 一・三〇圓

合計約四八〇頁

補 正

前號目次桑原武夫氏の上に「會員」の二字、一八六頁一九行

木村鐵吉氏の下に(二口)の二字を加ふ。

希望者は出版書店、東京市神田區西甲賀町四番地、梓書房(振替東京七八六四番)へ申込まれたい。時間の餘裕なく、ために會員中より豫約の募集をすることが出来なかつたりしたために會員のための特價制度なども思ひの儘に實行することの出来なかつたことは非常に不本意ではあつたが之亦將來は何とか策を講ずることが出来やうと思ふ。以上編纂經過報告。

(松方三郎記)

校正者

本文 木暮理太郎
寫眞 渡邊 信雄
岩永

昭和五年六月二十八日印刷
昭和五年六月三十日發行

【定價金貳圓】

編輯兼發行者
新潟縣三島郡深才村深澤
高頭仁兵衛

發行者
東京市芝區高輪南町三十番地
日本山岳會
振替口座東京四八二九番

印刷者
東京市麴町區飯田町二丁目六十七番地
益枝寅三郎

印刷所
東京市麴町區飯田町二丁目六十七番地
文雅堂印刷所

東京市神田區表神保町

發賣所

東京堂

登山案内

本 目 アルパス

矢澤米三郎 著

登山愛好者の間に本書は歐洲アルプスに於けるメンツァアの西萊因記と共に積極的進歩的な貢獻を傳へ、爾後登山界の物風に年々改訂増補に依り新たな研究資料を供して來た。然るに著者の熱心なる學術良心は姑息なる増補にては濟する能はず竟に舊稿全部に亘りて殘餘なき大改訂を敢て買取版は大部分を斬新なるものに取替へると共に枚数を増加し、新に登山日程と車路及其の所要時間とを加へ、更に登山地圖は最近の現狀に合せて最新のものに物合せしめ、登山心得には近年登山事故の頻發に鑑み地形の研究氣象調査 車路車手當等の事項を詳説し、以て研究と案内との兩方面を通じての完璧を期した。

三六三〇頁 別刷版九圓 定價四圓 送料郵單六錢

信賴の出来る

最も新しい案内書

山 研究と隨想

大島亮吉著 湖版五〇頁 定價三圓 送料郵單廿七錢

横 有恒氏の序文も

大島亮吉君は山に生き山に遊んだ。その悲しむべき出来事は昭和三年の早春三月であつた。あれ程に熱愛した標高の峻に峰を前の青春を果敢くも戦り失せた。最もよく山を知るものとして文藝界の敬愛を集めた君が然として逝いた時は全く茫然自失するばかりであつた。

(中絶)
恐ろ無き儘に何時も道新なる努力を以て、語なき山嶽の靈氣を激眼に映する山には生命があつた。そしてその生命を恣意的な力で把握して彫刻した。而もある時には纏綿難なる情懷を以て擁護するやうな橋は或は君の内に在りしものゝ内容を本すには足らないかも知れない。君の眞の力の置を絶つ爲めにはより長き生命を必要としたかも知れない。併し等の片々の想は以てまた君の通り跡を知るに足らぬであらう。

上 高地 矢澤米三郎 著 2.20 18

高山研究 河野 鮎藏 著 2.80 27

岩波書店

東京神田一ツ橋通町 振替東京二六二四〇番
電話九段 1022・1281・2108・2109・2626

上高地

登山と研究

日本山岳會員

理學士熊澤正夫著

本文二七〇頁
挿圖五〇葉

定價二・二〇
送料一・二〇

最新刊

山を愛し山を慕ふ者にとつて、上高地は一大巡禮地だ。國立公園の候補地と云ふばかりでなく、その大自然に抱かれた四季様々の生きた全景観ほど、總ての自然科學者にとつて魅力と示唆に富んだ地域は稀である。本書の著者は、有数の山岳家であり、而かも新進の自然科學者として、前後八年餘りも上高地並びに槍、穂高などを踏破し研究して來た。その體驗を經とし、その觀察を緯として生れたものがこの書である。登山にキャンブに、凡そ上高地を志す人士の爲めには、これ以上精確な「道しるべ」はなく、同時にこれ程友情の溢れ懇切を極めた自然科學への手引は尠ない。

目次

地勢と交通—上高地の境界と地勢・交通 上高地の四季—夏・春・秋・冬 温泉旅舎牧場その他—登山小屋・梓川・池 登山とテント生活—普通の登山・登山と夏スキー・冬季登山 テント生活 上高地の地質と地形 上高地の生物—動物・植物 寫眞の説明 等

東京 刀江 神田 駿河 臺
振替 東京 三七一八
院書

武蔵高校教授
理學士 山川 默著

原色貝類圖

最新刊
四六判美裝・圖版 四八頁
解説 四八頁・和各科名索引附
定價 壹圓七拾錢 送料六錢

海へ！
シーズンに來た。潮風のしたしさに魅せられる夏は來た。生けるがまゝの貝の姿がこゝに美しくおさめられてゐる。科學と藝術の二重奏はここにみごとく完成された。まづ一冊を友とされよ。

岡田一彌郎校閱
加藤正世著

趣味の昆蟲採集

最新刊
四六判美裝・二〇〇餘頁
寫眞・カット多数挿入索引附
定價 壹圓五拾錢 送料六錢

野へ！
青草のみちた野へ、昆蟲採集に行きたまへ。生物研究の面白さは、夏にこそ最も濺瀾とする。本書は採集に就て必要なあらゆる知識を一冊の中にまとめてある。本書を携へて行け。興味津々、しかも科學的な知識充滿。

武蔵高校教授
理學士 山川 默著

原色高山植物

四六判美裝・圖版 八八頁
解説及索引 五八頁
定價 貳圓 送料六錢

山へ！
登山者を魅める唯一のもの、高山植物の美しさは、まことにこれよ。百パーセントの藝術味と、學究的參考を供するものだ。

武蔵高校教授
理學士 山川 默撰

原色高山植物

繪はがき

第一輯より第五輯まで
各八葉づゝ・袋入り
定價 各一組貳拾錢 送料三錢

これはまたとない、よい贈物、また贈られてこの上なくうれしいもの。美しい糸はがき。

日本天文學會編

星座早見

堅牢紙製・取扱至便
並製 壹圓貳拾錢 送料十二錢

空を！
仰ぎ見よ。夏の夜の空に星をあふぐ伴侶として、これに越したものはない。月日と時間とを合せて廻しきへすれば、その夜の、その時の星座の位置がすぐわかる。

三省堂旅行案内部編

東海道沿線旅行案内圖

新刊
天地六寸 左右三寸二分
折疊式・全長七尺餘
定價 參拾錢 送料四錢

旅に一冊！
お忘れなく。これは飛切りあたらしい旅行案内圖である。この上もなく正確で詳密で、一目瞭然たる鳥瞰圖風の新天地圖、市街圖・名所寫眞鐵道自動車發着時間・料金・回数等が一覽のもとにわかるやうに入つてゐる。而も疊めばたゞ一握り。

三省堂旅行案内部編

新鐵道地圖

天地八寸七分・左右三寸二分
折疊式・全長一丈餘
定價 四拾五錢 送料四錢

これは日本で始めて出來た新型の旅行地圖、海へ、山への旅行には是非一冊、この地圖がどんなに役に立つかをお試し下さい。詳しい登山圖も入つてゐる。内容のよさは、重寶な體裁と相俟つて好評噴々。

東京神田駿河臺下・振替東京三一五五五

株式會社 三省堂

大阪南區順慶町通振替大阪八一三〇〇



三越の商品券

贈るに御便利・受けて御重寶

……七月一日より開催
中元大賣出し◆◆
……七月一日より開催
◆三越東京本店 (日本橋区日本橋)
◆三越銀座支店 (銀座区四丁目角)
◆三越新宿支店 (新宿区御前)

御中元御贈答の季節がまわりました。三越の商品券は御贈答用として、最も理想的で御座います。東京本店、銀座、新宿の兩支店を初め、大阪、神戸、大連、京城等の各支店にも共通いたします。何卒御用命を願ひ上げます

東京市

三越

日本橋

1940

藤木九三著

(定價 參圓八拾錢
送料 拾八錢)

屋上登攀者

『ザイル・テクニクと氷斧の變遷』『單獨登攀考想』および創作『ある日のウキムバー』などは、すべて著者最近の傑作であることを斷言する。従つてこの點だけでも、本書は慥に類書中の一異彩であることを信じて疑はぬ。

三木高峯著

(定價 貳圓七拾錢
送料 拾八錢)

山岳征服

れたのは當を得てをり、中にもマツターホーンの初登頂を叙したあたりがこの書のクライマックスであらう。又地上の最高峰であり、唯一の遺された未征服の峰であるエヴェレスト遠征に至つては人と山の惡戰苦闘を詳述してゐる。(中略)。山に登る程の者で、アルプスを口にしヒマラヤを説かないものはない。しかしその内の何人が果してエヴェレストやモンブランの登攀史實を知つてゐるに當らうか? この意味で本書こそは登山家の参考書であり好資料である。しかもどうかすると無味乾燥に陥り易い内容に對し、かくまで熱と力をもつて書かれたと云ふ事はやがて登山家でなくとも山に關心を持つ總ての人々にとつて好個の讀みものである(東京朝日新聞評)。

菊版・用紙舶來コツトシラフ三百十三頁・寫真板約四十葉。

ゴライグライト氷河写真

標高三一三六米の頂上ホテルより眺めた一大氷河のパノラマ。マツターホルン、ワイスホルン、モンテローザの諸峰を一望に收めた八枚連続のコロタイプ周廻寫眞。

定價四十錢 送料貳錢。

大坂市南區谷町六番
大阪市東區仲町六番
中之島三番
町六番
三番
九番

黑百合社

大坂市南區
大善・阪
賣株福
所會
捌式
普

日本山岳會編 一九三〇版

山日記

編輯委員

榎 有 恒
藤 島 敏 男
渡 邊 漸
浦 松 佐 美 太 郎
角 田 吉 夫
松 方 三 郎

內容要目

自昭和五年六月
至昭和六年五月
本邦主要山岳高度表
山岳行程表
山岳文獻抄
高山植物採取規定
山岳注意
登山の注意
登山用具
登山用品目錄
登山衛生
緊急手當及登山難
山小案
山屋號
山屋便
山道規
山岳採規
山岳文獻
山岳行程
山岳文獻抄
高山植物採取規定
高山注意
登山用具
登山用品目錄
登山衛生
緊急手當及登山難
山小案
山屋號
山屋便
山道規

菊半裁判約四八〇頁表紙尺度銀押
鉛筆差 表紙裏袋付 携帶至便

價一・三〇 送料〇・〇六

山と雪の日記

板倉勝宜遺稿 四六判 コロタイプ六
榎 有 恒 序
松 方 三 郎 跋
價二・〇〇 送〇・〇八

氷と雪

加納一郎著 藤木九三跋 (目次)
四六判三二〇頁 價二・五〇
コロタイプ十二 挿畫四十二
用紙上質雅裝 送料・一二

日山岳會本 藤木九三著 再刷出來



菊判四一〇頁
寫真四十四枚
用紙上質純裝
白カシバ

定價三・五〇
送料〇・二七
(目次進呈)

小島鳥水氏評の一節(大阪朝日新聞所載)
『藤木氏は、モンブランやマターホルンの如き最高峰を踏破して先人の遂げざる所を成就せられたのみならず、アルピニズムの近代色は、本書において、彼の筆端から小氣味よく述べて、新しい時代の創造へと躍進する』

近刊豫告

武田久吉著 尾瀬と鬼怒沼 八月初旬刊
新村出著 南國巡禮 八月初旬刊
柳田國男著 秋風帖 八月初旬刊

辻村伊助遺稿 九月一日刊

スウイス日記

序(遺情の人伊助憶) 武田久吉
跋(純情の日記) 高野鷹藏
由來 小島鳥水

辻村伊助遺稿

九月一日刊
序 辻村太郎
跋 小島鳥水

ハイランド

序 辻村太郎
跋 小島鳥水

東北 京甲 神賀 田町 區四 梓 あづき 書 房

電話 七二七 東京 七四六 番 七五五 番

山岳在庫表

割引規定

一、割引は一割五分引◎印に限り手持数二十冊になりたる時は打切申候
 二、御送金は振替貯金口座拂込又は振替にて御注文願上候
 三、他の書店經由御注文は割引致さず候

年次	冊数	金額	割引	金額	送料	金額
四年一、二、三	各二	圓	◎十六ノ三	二圓五十錢	各六錢	八錢
五年一	三	圓	◎十七ノ一、二、三	各一圓五十錢	十錢	六錢
◎二、三	各一圓五十錢		◎十八ノ一、二、三	各一圓五十錢	八錢	六錢
◎六年一、二、三	各一圓五十錢		◎十九ノ二、三	各一圓二十錢	八錢	六錢
◎七年一、二、三	各一圓五十錢		◎二十ノ二	一圓二十錢	八錢	六錢
◎八年一、二、三	各一圓五十錢		◎二十一ノ二(黒部號)	二圓五十錢	八錢	八錢
◎九年一、二、三	各一圓五十錢		◎二十一ノ三	一圓二十錢	八錢	六錢
十年一	三	圓	◎二十二ノ一(第二奥羽號)	二圓五十錢	十錢	八錢
◎十年二號	一圓五十錢		◎二十二ノ二	一圓二十錢	八錢	六錢
◎十年三號	一圓五十錢		◎二十二ノ三	一圓二十錢	八錢	六錢
◎十一年二號	一圓五十錢		◎二十三ノ二	二圓	八錢	八錢
◎十一年三號	二	圓	◎二十三ノ三(臺灣號)	二圓五十錢	八錢	八錢
十二年二、三	三	圓	◎二十四ノ一	二	八錢	八錢
十四ノ一、二、三	各一圓五十錢		◎二十四ノ二	二圓五十錢	八錢	八錢
十五ノ一、二、三	各一圓五十錢		◎二十四ノ三	一圓五十錢	六錢	六錢
十六ノ一、二	各一圓五十錢				六錢	六錢

東東市芝區高輪南町三〇

(此表に記載なきものは賣切)

健全社書店

振替東京三二〇五二番

The Journal of the Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. XXV

1930

No. 2